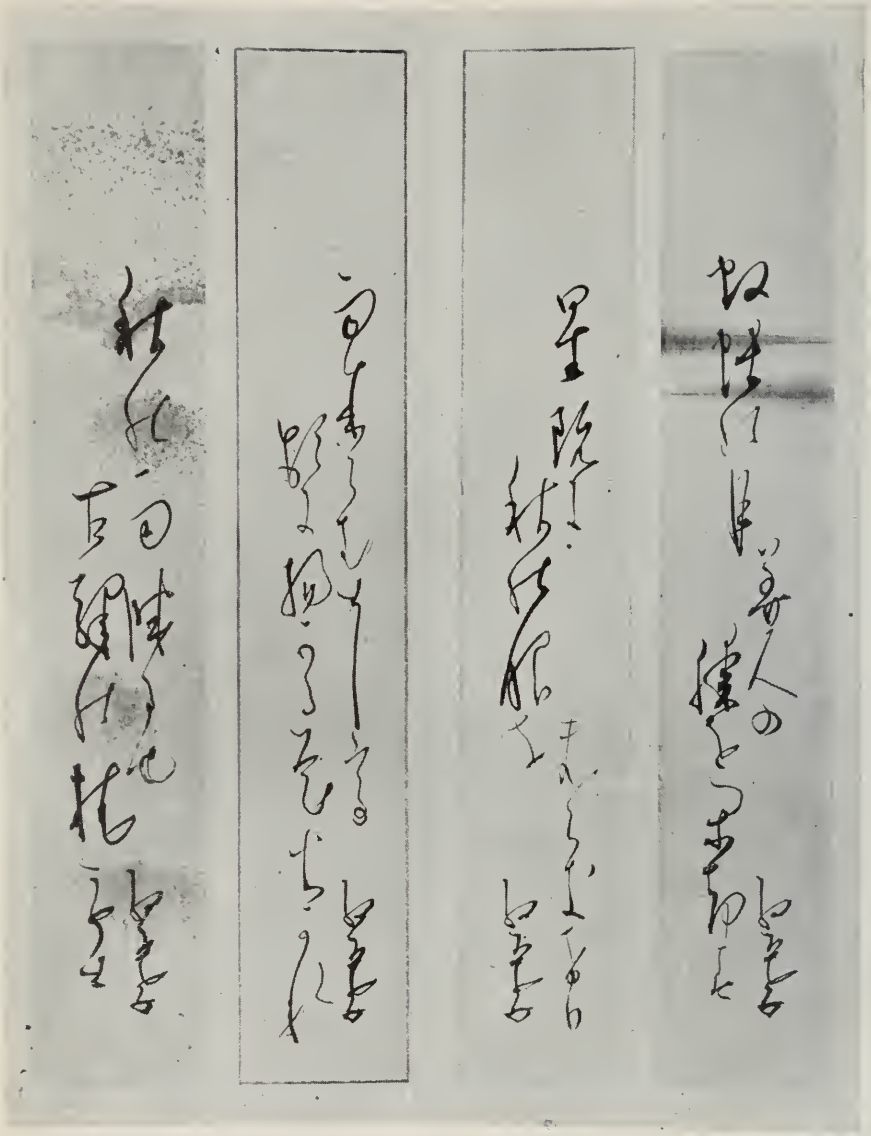
尾崎紅葉讀本

德田秋聲編著



晩年の紅葉山人



紅葉遺墨

表の短册は現在尾崎家に藏されて居る内の一部である。

蚊帳の日
　美人の膝を閑却す

星既に
　秋の眼を開きけり

雨來らむとして
　頻りに揚がる花火かな

秋の雨
　洩るや古驛の枕もと



紅葉遺愛の品

紅葉の愛措した、遺品の一部
で、同じ尾崎家に藏されてゐ
る。上より紙入、莨入、眞中
が水差、硯、筆。

目次

尾崎紅葉讀本

この讀本を編むに當つて

一、紅葉先生の作品を、私はこの五六年前必要があつて、大體讀んだのであるが、未讀のものや、昔し讀んでも忘れてしまつたものもあつた。しかし讀んで内容のわかつてゐるものでも、いざ一々に解說をつけるとか批評を加へるとかいふことになると、是非とも更めて綿密に内容を調べなければならぬ。筋の絡(こぐら)かつたもの、結構の複雜なものになればなるほど、それが必要で、私は今病褥にあるために、多少健康上の不安もあつて、相當の時日を要したのは勿論、時には亢進する心臟を冷しながら讀んだこともあるが、幸ひに六月に入つてからは少しづつ讀む分には、ひどい疲勞を感ずるといふほどでもなかつた。しかし讀みのこしたものも多少はある。

二、さて何の作を擇んだものか、又た作の撰擇はできるにしても、何ういふ標準で、何處を拔

いたらいいかといふことは、隨分困難な問題である。たとへばこれは好い作品だし、讀者にも與味のあるものだと思つても、それが類型的であるのは面白くないし、それだけが飛び離れて特色のあるものであつても、何處といつて山(やま)のない、平面的描寫の作品は拔萃するのが困難若しくは不可能である。「このぬし」とか、「夏痩」とか、「不言不語」、「おぼろ舟」、「むき玉子」といつたやうな作柄(さくがら)の相似通つた、中編ものの作品がそれで、孰れも夫々の意味で紅葉先生の作家的手腕の優れたことを語るもので、文章も流麗であり、所謂る家庭小說として申分のないものであるが、その一角を削つて、全體を暗示するのは困難なやうな種類のものである。梗概を語つたところで、作者の妙文と巧みな話術とで面白く讀ませる種類のものだけに、作品の面白味を傳へることはできないのである。載せるなら全部載せたいやうな筋のものである。それでさういふ作品は、一つだけ取つて、爾餘は遺憾ながら割愛することにした。一つ一つ場面を切出さずに、又會話も挿入せずに、擬古體の文章で、だらだらと書き流した物語風の作品は特に拔くのが困難である。勿論藝術品となれば何んな作品にしても全部が綜合的に織り成されたもので、各の部分は有機的な全體に脈絡をもつてゐる。決して或る部分だけで其自身の意義をもつてゐるものではないが、それにしても拔萃の方法によつては、全部を讀まなくても、或る部分だけで十分全貌をトすることのできるものもある。短い生涯に書いた先生の作品は、全部が六卷に收められてゐるくらゐだから、

讀むのが困難といふ譯ではないが、素と文章の地が漢文であるのと、字句の彫琢に苦心したものだけに、今となつてみると一般に讀みづらいやうなものも多い。嚴密にいへば、今において現代語に書き換へておく必要があるのではないかとさへ思はれるのである。殊に硯友社畑の人でもないと、ちよつと意味のわからないやうな先生獨特の通語や洒落などもあつて、註釋を要するやうなものも多い。一例を擧げると、この讀本にはその全文を掲げることはできなかつたが、「三人妻」のなかで、お才お艶といふ二人の圍ひものの美形が歌舞伎座を見に行くところがある。本文をぬいてみると、

　歌舞伎座の夜芝居、團十郎の高慢なる勤王論が呼物となりて、開場以來の大入と、かゝることまで八重葎の中へ知るゝは新聞の德なり。團洲の藝は女子には面白からねど、澁がりは解る顏して、次手に三好屋をも好いといはねば、可愧き事に思ふ雌酢豆腐も多し。

といふのである。その時代の團十郎の活歴風の藝は先生も好かなかつたらしい。それは可いとして、雌酢豆腐といふのはちよつと變な言葉で、今は「酢豆腐」といふ諷刺的な落語を面白く聞かせる噺家のないのは無論、聞いてもその洒落が一般の聽衆にわかる筈もないと思ふが、腐つた豆腐を「おつでげす」と言つて、ぐつと通がつて食べる氣障な似而非通人のことを落語に作つたものである。こゝでは女の通がりを雌酢豆腐と言つて罵倒したものだらうと思ふが、これは何も

藝術を鑑賞するうへに役立つ譯ではない。寧ろ何うでもいゝ第二義的のことではあるが、紅葉先生の作品も既に現代には讀みづらいものになつてゐることの例に出したまでゝある。かうした例は尤も新らしい「金色夜叉」などにも相當あるのである。風俗、習慣、言語、人情總て大なり小なり現代の人にはぴつたり來ないものが多い。現代人が現代の感じで、古いことを書くのとも、無論大した相違である。

さういふことは別としても、拔萃の目的で作品を讀んでみると、こゝも棄てがたい、彼處もぬいでおきたいといふ風で、餘程冷靜にならないと、截取りは困難だが、この讀本の目的が、頭腦の忙しい現代人のために、讀書慾の能率をあげさせ、要約的な讀本を作つて、全作品を讀んだと同じ要領を得せしめると同時に、作品を味解するやうリイドするのが目的だから、その趣旨に添ふやうにするには、成るべく纒まつた短篇を幾つも並べるか、長い代表的な作品から精粹と思はれる部分を拔くより外はない。私はその中庸を採つて、年代順に從つて、形式內容共に極簡短なものから、次第に複雜なものへと進み、其時代と作品の型において、各異なつた意味をもつた「三人妻」、「多情多恨」、「金色夜叉」の代表的作品に迨び、出來るだけ作品全體の內容を知らしめると同時に、それだけでも十分讀む興味と作品の價値判斷に便宜を得るやうな部分を拔萃した積りである。排列の順序によつて、作家としての紅葉先生の藝術的素質と、年とともに何んな風

に生長發展を遂げて行つたかといふことも、略々解るかと思ふし、時代が如何に作品に投影してゐるかといふことも明かになるであらうと思ふ。

三、紅葉先生の生涯が短かいものであつただけに、仕事も明治二十二年の頃から始まつて、三十五年で終りを告げてゐる。ほんの十二三年間のことである。最後の「金色夜叉」はその歸趨もちよつと想像のつかないやうなもので、遂に完成を見ることを得なかつた譯である。しかし設計が可なり野望的で、仕組みの大いものであるだけに、形體が整然としてゐるといふ譯にいかない。出來ばえからいふと、いくらかむらのあるものである。その頃先生も自身の藝術について、時代的な惱みをも懷いてゐた迹が見えて、それ以前の作のやうに、さう好い氣になつて怡しんで書いてはゐない。主題（テイマ）を取扱つてゐるといふことも、今迄にはなかつたことだし、眞劍味や深刻味も加はつて來てゐる。作品それ自體からいへば、深刻な人生の姿は寧ろ「三人妻」などの方に、渾然と自然に出てゐるともいへるけれど、熱意と覇氣は比べものにならない。しかし三十五年頃には、既に健康が十分でなかつたのと、發展させて來た作の歸趨について、焦慮したことも爭はれないことで、從つて較々收拾に苦しんだ迹もないことはない。癌に罹つたのは、體質的な運命であつたかも知れないが、不規則な作家的生活と過勞が、それを速めたことは勿論であらう。つま

り作家生活が如何に精神と肉體を苦しめるものであるかを證明してゐるやうなものである。私は其の當時、先生の作品には或點では感服し、或點では感服しないことも多かつたが、年取つて讀んでみると、先生の作品は小說中の小說ともいふべきもので、小說を書く場合の參考になるものが非常に多いし、年の割りにその時代においての驚くべき世間通であり、大人であつたことも解るのである。だら〳〵と、これといふ仕事も爲ずに、長い生命を徒らに崩し濟しに生きて來た私などに比べると、實に緊縮された生涯である。今これを編むに當つて、病床にあつて、先生晩年の痛ましい病苦を憶ふことといとゞ切なるものがある。敢て無用の感傷に溺れてゐる譯ではない。しかし文學道へ入つた以上、賢愚鋭鈍は仕方がないから、生きられるだけ生きて書く外はあるまい。

四、終りに、私はまだ躰が十分でないので、解說は全部書くといふ譯に行かなかつた。山川さんに口述筆記してもらつて、更に加筆したものが多いが、自身ペンを執つた部分もある。又、筋の面白いものは解說のなかで、要約的な筋の說明をしておいたし、批評も自然に其のなかに含まつたことになつてゐるものも多いが、大體鑒賞的である。

序でに俳句紀行文をも載せたく思つたが、それは先生の作家生活に取つては、寧ろ餘伎に屬す

るものであり、苦吟に耽けるのが日常の道樂ではあつたものゝ、生命は全部小説にあるので、わざと取らないことにした。

昭和十一年六月初旬

病床にて

徳田秋聲

新桃花扇

最初紅葉山人作中の最も形式の簡單なものをあげることにした。これは小說といふ程の形態を供へてゐない。內容もほんの一寸したものである。併し順序として最も單純なものから、だん〳〵複雜なものへ入つてゆかうと思ふ。

桃花扇といふのは支那の有名な劇曲の名で、淸朝の孔尙任號は云亭山人の作曲する所で、人の口に膾炙してゐる。云亭は孔夫子の遠裔である。勿論非常に結構の大きなもので氣品の高い作品である。筆者はその劇曲を讀んだことがないからなんとも云へないけれども、好色的なテーマを取り扱つたものらしいから、それに因んで新桃花扇としたものであらう。一寸かういふ主題は下手に書くと色氣も素氣もないものになつて了ふのだが、紅葉山人の艷つぽい筆に載ると、それが氣のきいた面白いものに讀まれるし、話も生きて來る。

それは又明治二十三年十二月、その頃の小說雜誌、新著百種號外に揭載した「江戶紫」といふ作品の中の一つで、いま一つは「巴波川」である。作品の順序からいふと「縮屛風」「風流京人形」「色懺悔」などから見て、少し後のものだが、併し初期の作品である。別にこゝで解說するほどの內容のものでもないし、文章も極平易なものである。唯この時代としては一寸ハイカラなテーマを取り扱つてゐるし、それにもう一つはこの作者は常識的ではあるが非常にモラルを重じ、女の唇の跡をつけた卷物を子孫に

毒を殘すといふので、隅田川の水底へ沈めたといふやうなことがある。かういふ風な道德觀念がこの短い作品にも現はれてゐる。これはまた古い勸善懲惡主義から來たものでもある。

新桃花扇

過ぎにし昔語、今はかゝる馬鹿ものなし。わが祖父一歳京都一見の折から、東山の月に浮れての歸路、四條通を過ぐれば、古道具の露店夜燭の星を列ねたるに、此所は名にし負ふ九重の帝都、場所がらとて小町が草紙洗の匜もや、耳など缺けて雨晒の木地のまゝに疎まれ、其所等の隅へ投遣りてあらむも知れずと、そゞろに掘出心出でゝ、木彫の羅漢めける老夫が店に佇みて鵜目を睜れど、何所にもあるものは錢もらひと敏捷漢にて、かうとひねりたる物も見當らざりき。書畫は好みて少しは眼も開きたれば、古手本反古の卷物の中に交れる袖珍の帖一折引出して視れば、媚かしめ友染縮緬の表裝、角は磨れて裏面は剝きたるごとく破れたるを、馬鹿々々しきものとは思ひながら異りたるものと披けば、地は白綸子に小さく扇の地紙形に截りたる奉書を、一折毎に全面一面に貼付け、それに畫もなく字もなく、地紙一葉に七つ八つほどづゝ大小打交ぜ、桃の花瓣を散らせるごとく、形も大略それほどなる胭脂？の痕あり。一瓣毎に十四、廿五、三十、四

十六、十九、二十一などゝ小書をしたり。異なものと思ふばかりにて更に解せず、數へて見れば地紙兩面にして一百枚あり。奥に年號月日もなければ、持主の姓氏も見えず。いかにしても會得かざれば何ぞと老夫に尋ねけるに、渠も一向に知らざるよし。由來は不解ねど餘りの不思議さに買取りて江戸に持還り、目出度歸國の祝賀にと、知音五七名を招きて小酒盛の席に、知恩院の鐘、祇園の花、銀閣寺の庭、加茂の社の噂よりも、先づかうした珍しきものこそあれ。諸君の内にて正鵠といふ所を極めたまはむ御方には、羅生門通にて拾うて戻りし鬼の小指の生爪を進じ申すべしと、柱に掛けたりし頭陀袋をとりおろせば、座中にて雜學博覽通の俳師柴門坊柳五、腰なる紙袋留の竹如意を抽きて斜に構へ、見ぬ前なればいかな珍品奇物かは知らねど、かくいふ柳五が座にあるからは迂濶なる放言なしたまひそ。あて事もない鬼の爪の恩賞は望まねど、御祕藏の宗祇が髯の拂子が欲しうござると居丈高になれば、祖父は恐るゝ色なく、何も御所望次第、さりながらもし御鑑定疎忽ならむには？　此杯洗にて三盃戴き、卽座に獨吟五十韻お目に懸くべし。是は一段の餘興。お蔭を以て飮めますると、一同崩れし膝を正して危坐る中へ彼の帖を差出せば、額をあつめて之を披き、孰も呆れて面をぞ見合はせける。柳五一人澁面裝り、仔細らしく拱手して控ふるを、所望といひし拂子を持來り、疾々お持歸りをと目前に衝着くれば、閉口して頭を叩き、われいまだ嘗て學ばざるなりといふがまゝに、杯洗を執つてたてつゞけに漾々三杯傾くれば、太

息をも吐かせず紙硯をおしつけ、題は何帖。發句は何と？　五十韻々々々と疊を拍つて迫れば、柳五仆れて海鼠のごとくなりけり。

此事名高くなりて一見所望の人士多かりけれど、詮判する人なくて久しく其まゝに過ぎぬ。

その後或席にてまた此事を發言しけるに、つまといふ其家のお針の老女(ばゞ)が襖越に聞着け、拜見願ひたきものと切に請うてやまざるは奇(あや)なり、詮議の端緒ともなりなむかと、即座に取寄せて見せけるに、つく〴〵表裝を吟味の上、繰披きて半過ぐる頃にあつといふを聞咎め、何事ぞと訊へば、はづかしながら是が私のでござりますと、一つの花瓣を指して答へぬ。其が其方のとは？　されば、この持主は下嵯峨の豐樣。これは其人の契鑑(ちぎりかゞみ)とて常に懷中せられし品なるが、かく數ある紅きものは、豐樣が一度にても契を籠められし女人の唇朱(くちべに)にて、側に小書の數は銘々の年齡なり。豐樣は有德なる木綿店の二男に生れ、將來多病とて下嵯峨の閑寂なる寮に若隱居の、容姿優れて麗しく、しかも實意深く散財(きれはなれ)よく、諸藝にも暗からぬといふに、京の女人といふ女人は黑白の差別なく先方より泥みて、雨とふる濡文(ぬれぶみ)は日毎新しく、紙衣にして着らるゝほどの男冥利は、とても此後の世にはない事。好き月日の下に生れつきたる、わが一生の思出に、千人の女人に契を籠め、死しては戀の諸願成就の明神ともなりたやと、やがて此帖をつくりたまひしに、第一は島原の汐路太夫十九とあるぞかし。太夫これを冥加に思ひて、その夕被たりし裲襠(うちかけ)の袂を裂きて、

この表装の勸進につきたまひたりしとかや。これを始めとしてあるとあらゆる女人の品々に逢うては、かならず唇朱を移させ、其を數取にしたまひて樂みけるに、行年三十二歳を一期として本願成就に及ばず、其數はたしかに九百九十一人、殘る九人に思を遺して身歿りたまひきと語りぬ。
まことに唇朱の數つまが言葉のごとし。扨は其方も訂契の一人か。どれ何所に？　こゝに十四と書いたるが私のなり。一生忘られぬ男子よなと背を搏てば、あゝこの老女をお手暴な、咳氣がおこりますとは色も香もなき挨拶。それもその理か、四十餘年前に男子はお先へ往かれたるものをと大笑して、やがて老女が言葉のまゝに契鑑と題して、久しく長持の底に祕めたまひたりしが、祖母は堅人にてかゝるものゝ子孫に毒を遺さむことを氣遣ひ、祖父卒去の後石をつけて墨田の川底に沈めぬ。彼を啖ひたらむ魚は鯡ごひにやなりつらむと、これ親父が一代の秀句。

拈華微笑（ねんげみせう）

これは二十三年の一月とあるから新桃花扇よりも一寸前のことになる。筆者は田舍の中學校にゐる時分その頃の「國民の友」新年附錄でこの作品を讀んだ記憶がある。「國民の友」はその頃その時代の流行作家の短篇を幾つかづつ、掲載したもので、勃興的な明治の文運に寄與する所が多かつた。鷗外博士のたしか處女作などもこの誌にのつたものであらう。逍遙博士の短篇もこの「國民の友」といふ雜誌で讀んだことを憶えてゐる。「拈華微笑」もそれらの作品の一つで、形式からいつても小說といふ程のものではない。一寸したスケッチに過ぎないが、筆者はその時代の氣分を思ひ出して懷しく思ふのである。一人の若い腰辨がお濠つ端で朝早く出勤の途中、每日行き會ふ車上の令孃との或微妙な心持ちの、或は表情の交換から來る淡い戀のやうなものを書いたものだが、別に各人の生活の內容に入らず、途上瞬間の現象だけで淡い果敢ない戀心といつたものを拈華微笑的に交換したといふ事實をスケッチしたものである。それが墓參の折、男は妹をつれてをり、女は兄か何かゞ附いてゐたので、双方の誤解から喰ひ違つてしまひ、後に車上の美人が或大家へお腰入れになるとみえて、今まで車でみた同じ定紋のついた油團の吊臺が途を通つてゆくのに出逢つた、それをつけてゆくと氷川町の立派な邸宅に荷物が着くのでがつかりする、といふだけの事實のものである。ここで一寸拈華微笑といふ題のことに就いていふが、これは靈山における釋尊が花のいつぱいある所で大勢の弟子を集めて說法してゐる時に、側の花を一つ摘

んで投げた。多くの弟子達はそれが何の意味か分らなかつたが、一人迦葉がはあといふ顔をして微笑した、といふ悟傳相入の意味である。そこから來てゐるのである。

初期の作品でも二つの系統があつて、一寸江戸文學から系統を引いたやうなものと、明治時代の色彩を帶びたものと二つある。例へば「色懺悔」だとか「大和訓」といつたやうなものが其である。古い系統のもので文章もお化粧が多い。拈華微笑などはそれからみるとレアレズムの初期の作で、勿論作者のことであるから、その文章には人の追從を許さぬ獨特の甘みがあつて、棘のやうたものがなく、感覺の滑なものであるが、文章にも誇張はない。かういふ作品がつまり「多情多恨」系統の初期のものであらう。

拈華微笑

不說說。不聞聞、口よりも眼はよく言ひ、耳よりも聞くこと聰し。市ケ谷御門外の御濠に、鴨の羽音朝の霜に冴えて、松の梢は靜なれど、身を斬る風吹さらしの大路を往來の土方ども、あいつをしめて、きうと熱いのをと、交番所の前をつぶやいて過ぐる後より、二十五六の判任づくりの男、手頭をポツケツトの底に暖め、兩臂をくの字形にして、腋の下に辨當包を挾み、何省へ勤むるか知らねど、南の方から來て、御門を入り左へ曲りて行きけり。降らでかなはぬものならば、雨もふれ、雪もふれ、難義らしき顔もせず、いつが日にも休むことなく、しかも徒行なり。客待

の車夫も此人は別物にして聲を懸けず。いかな朝も見えぬことなければ、烏官員と囁きちらし、帽子と外套の黒色までが、笑の種となりけり。それにしても此男は色白く、眼にいはれぬ可愛き處ありて、近來のばせし八字髭の形もよく、これで身のまはりさへよくば、車夫づれにとやかういはるゝ人品ならねど、世の中は錢が大明神！

今年の二月以來、毎朝同じ時刻——同じ場所にて行遇ふ車上の美人あり。召物のうつゝついは此が學校衣かと驚かれ、ぼつとりと萬事が上品粧。いつにも日本風の髪を結はれしことなく、鬢髱引つめて、ぐるりと左巻の無雜作結。薄紅の一輪花の簪に、琥珀色の束髪櫛。或時は洒落て舞踏結、俠なれど氣が替りて此もよし。肌理濃に地色の白さが上に、薄り刷かれしは可厭にあらず。地藏眉柔和にして眼元情らしく、左の眼下に一粒目立つ黑子のあるは、大いなる愛嬌になりて瑕ならず。車の走るに少し反身の姿はにくいほどよし。

此男偏屈にて同僚の交際を知らねば、譽むる人なく、第一馬鹿律義にていつこくにて、無口にて、ぼんやりにて、雪を畫けとあれば六角に畫き、花を詠めよといへばまじ〱見つめるほどの人物。女の噂が出れば、むかふ向になつて書見とは、若いものがあゝでも困る、世情に疎きもこれゆゑといはるゝ男が、擦違ひ——電光石火の姿に、何の目留る理はなく、留つてからが、なるほど美しいと見ても、其美しきが何でもなく、其美しきをどうといふ氣はなほなし。天の配劑妙

なり、戀なり。美しきあれば醜きあり。今のは美の部に生れ合せとばかり、手輕に思ひ消してあとには何も殘らず。いはゞ肉眼に光線の作用ありしばかりにして。物は幾度も見るにつけ、眼光次第に骨髓にいれば、其味自ら知れて、初はさも思はざりし物まで、其々其物の妙にありつけば、花は櫻のみかは、海は須磨にも限らざるべし。まして美しきを見て、勿體なくも美しと思はぬは、食はず嫌ひの妙處を曉りえせずして、女などは好かぬと言ひちぎり、人に惡くいはれし例なきを一つの賴みにして、嫌ひですましておけど、道理に二つはなし、これが學問ともいふならば、進まぬながらも大好物といふべし。好色、不德はよかるまじけれど、男として眉目麗しき女を見ながら、顏を顰むるなどは、僞聖人か、但しは食はず嫌ひか。僞聖人は濟度の沙汰に及ばず。食はず嫌ひだけは、いかにも慈悲を垂れて成佛させたきものなり。

　我から好んで見るにはあらねど、同じ時刻同じ場所に同じ現象。彼方は車上、此方は徒步、もとより一呼吸の見る口ながら、其も續けば自然眼につき、また今朝も……いつも遇ふ女、何處へ行くのやらと、何氣なく見過すに日數つもれば、ます〳〵目馴るゝにつけ、神以て戀にあらねど、此顏懷しくなり、其姿見ぬ朝は物足らぬやうに覺ゆるに、女も思はかはらず、男に睨まるゝはいやな物にて、顏を背くるか、傘を傾くるか。娘氣の一寸陰をすべきに、其をせず、我からも見るまでに知合ひぬ。半町距てゝも其車は目に入り、かの人と步行風を見知り、やがて近寄り――擦

違ふ時、彼此見合ふのみにて二月ばかりが間は、別の所作もなかりしが、いよ〳〵見知になれば、何時も希有な顏を合すもどうやら艶なく、また遇ひ惡くもなりしが、ある朝女よりまづ微笑をくれしに釣出されて、男も笑みかへせしより、例になりて、其後は微笑が挨拶となり、偏屈者も此は萬更わるい氣もせぬかして、行遇ふ時笑み、二三歩して※をむいて獨りまた笑みし事あり、此心中知り難し。

日曜の待詫しきは、自他ともにかはることなし。偏屈なりとも、六日勤めて一日の休業は、此日一刻千金、寸陰今日を惜みて餘りあり。なるほど今まではさもありしに、此日頃は、存外日曜も嬉しからず。思へば人間得手勝手にして、彼の笑顏を見られねば、餘所にては長かれと祈る大事の日を、つまらなく一間に籠り、早く暮れよと待明し、今日出勤の時刻平常とかはらぬに、悲しや見られねば、失望に氣を腐らし、其翌日はまた今日もかと、思の外なる首尾にて、嬉しや、無事なるお顏を見たり、此次の月曜も見えられぬに少し不審を立てしが、其かと思ひつく事ありて其次を試みしに、果して前の此日に變らず。扨は休日なりけり。今まで斯る事はなかりしゆゑ、あつたら苦勞をしたり。我する苦勞ならばいかほどでもあれかし、まづ其人の身に恙なきこそ幸ひなれ。

此秋の神嘗の祭日、所用ありて（山下）を行きしに、鹿鳴館に奏樂聞え、鐵柵よりのぞけば、

木陰に馬車人力車群集し、何ぞ催しありて今を最中と覺しき時刻なるに、門に懸る時、車一臺驅出し、車上の貴婦人は其人なり。此は變つた所で遇ひたり。互の不意に例の笑顔はなく、如何なるはずみか、馬手跳つて帽子に懸り、男が頭を下げて挨拶すれば、女はし後れしを詫ぶる思入にて、慇懃に會釋ありて其儘別れぬ。遇ふに定れる處にて、最初時宜しそゝくれては、中途から改るは異な物なれど、かうした思懸けぬ時には、かねての知己といふ氣になり、調子よく挨拶も爲得るものなり。此次の日からは、此迄の笑顔に稽首加はれば、大分親密の度も增し、人目には嘸や格別の交際と見ゆべし。思へば我らしきの分際にて、かゝる高貴のしかも美しき婦人と挨拶する事、過分の名譽といふべし。この人の車走らす時は、過ぐる人は振返り、來懸るものは見迎ひ、誰が目も遁さぬ容色なれば、彼の人の馴々しく時宜するはどんな奴かと、其顏を見しものゝ、また我顏を見ぬはなきに、此年齡にていふもをかしけれど、羞かしくなりて遁ぐる如く早足にすれど、また思ひかへせば、われ尊からずしてかく尊き知己あるは、何にしても肩身は廣し。さりながら、彼の人は心憂く思はるべし。なる事ならば先方の耻辱にもならぬやうにと、此が一つ、二つには其人の手前少しは繕ひたく、まづクラワツト（ネクタイのこと）も新形を好み、此冬の移替を機に、品はともかくもパンタルウン（ズボンのこと）を細くするなど、しをらしき心遣ひを覺え、今更色氣づきしかとの陰言はありながら、あれほどの偏屈これほどに和ぐも戀でこそあれ。良藥、毒藥、用法

一つ。裏から見れば雜巾もかはることなし。

此心づかひ自ら先方へも通じて、今迄はさもなかりしに、此頃女は三日にあげず、羽織——小袖、取替へ、引替へ、何を着てもうつらぬはなく、なほ寐覺間のなきお出懸なるべきに、髮の毛一筋亂さず、顏の化粧行屆きたるに、生やさしからぬ思の籠れるも知れて、嬉しさ身に染み、此分では萬更鰒の貝ではあるまじとはずみかけ、到底出來ぬ事なるべけれど、其處が縁にてどうぞなるものならば、是非この人をといふ一念目色にあらはれ、昨日に增して心を籠めたる微笑をつくれば、女も意味ありげなる笑顔を見するにいよ〳〵のぼせ、なほ其心を試すべき工夫を案ずれど、これといふ思つきなく、二三週は夢のやうに過ぎけり。

大雨夜を籠めて朝にやまず。傘は二重張なるに、面に霧を吹きかけ、袖も背もしぶきに濡れわたる往來の人を見て、母は乘れといへど車は榮耀と、古外套の惜からぬを引かけ、戶棚に棄てし古帽子を、禍も三年たてばと打冠りて出でしが、此雨ゆゑ彼の人は休なるべし。よし休まずとも母衣深ければ、中秋無月、不愉快！　元氣薄くして道はかどらず。いつも此處らは車の見える邊と、見るに見えず。車は大分見ゆれど其らしきはなし。もしや見過せしか、我思ふほどにもあらば、母衣の中よりのぞく位の實意はあるべきにと、一町餘ゆくに一つ車に出遇ひたり。此雨に母衣もかけず。不思議と見れば、その車夫！　其人！　車の上なは。今朝はいつよりにこやかに、

會釋も叮嚀に、此雨に定めて御難義なと、慰めたき風情たしかに見えたり。車には母衣のあるものを、かはつた物好と立留つて見返れば、五六間ゆくと車の中より、燃立つ色の襦袢の袖口にからまる手をさしのべ、母衣をふわとかけて車は急ぎぬ。扨は眞實我に劣らず、我顏見んとしよぼ濡れたまふか。さほどの心中とは知らず、我愧かしき此扮裝、吝嗇男などゝ愛想つかされなばと悔みしが、次の日少しもかはる事なかりし。

沖の石水に圓まり、鉞も磨ぎて針となる長の月日に、眞顏は笑み、笑顏は語るまでになれば、はや言葉を交さむと十日か廿日かの辛抱。言葉をかはす段にならば、何の苦もなくあとは此方の物。やれ宿願成就の緒、うれしや〳〵に胸逼り、世の中何となく愉快になり、課長の小言、愉快！　同僚の毀言、愉快！　母親の壁訴訟、愉快！　森羅萬象愉快に輝き、愉快に響き、夏暖かに、冬涼しく、茶漬甘く、空財布重く、ユウトピア！　今はユウトピアの王となりぬ。一時は苦しき事又は樂しからぬ事ありて、かくては此命捨つるに惜からずと、無法一徹に思つめし事もありしが、世間にて我よりも苦勞ありげにて、なほ生き長らへたく見ゆる人の數多くあるを、なぜ死にはせずして、一日長らへば、其だけのうい目を見ずにはおかれぬ物を、して見れば、他人は呼吸の通ふ限りは、苦勞に換へられぬものありてなるべきに、我には其物なければ、他人一倍命を麁略に思ひしなるべし。其物とは何ぞ。疑團の氷結。なるほど今解けたり。鈍しとや笑はれむ。

此ほどまでの女人の名をいまだ知らず。住所も知らず。手懸りとなるべきは、車に三蓋松の紋あり。車夫の背にも此あり。偏屈ものゝ悲しさには、かゝる事は打明けてかうといふべき友なく、獨り心を傷め、いつかは車に尾いて行先を突留めむと、思ひ立ちしことなきにあらねど、勤仕の身にして何條かゝる事ゆゑに一日休むべきや。良心に恥かしくて止みしが、何時まで待つとも知るゝにあらずと一念飜りて、ある朝小陰に忍びてその車をやり過し、七八間行くも待たず、辻車に飛乘をして逐かけしが、引添ひて行かば見咎めらるべし、見え隠れに逐へば、其車夫の健足韋駄天にて、とても始終うまき距離を保ち難く、見失ひてけり。此に懲りずまた試みしに、結果はかはらず。其上に、途にて同僚の某に行過ひ、南無三と見ぬふりしても先方にも眼あり、見露はされて役所に此沙汰ひろまり。今まで風一つ引かぬ男が一週に兩度の所勞屆。それのみならず、いつもの徒歩がしかも其日に限り、車に乘つてゆきしは何の用事か知らねど、此頃のそぶりと照合せて不審の條々、奇怪々々と目を欹てらるゝに、此はならぬ、露見せば一大事と、根が小心謹直の男なれば、おぞけを振つて恐れいり、すまじき事と其後を愼みけり。念願これゆゑに空となれば、又思直して我儘にはならぬが緣なり、時節なり、急いで仕損ぜばと氣を長くし、毎日顏の見らるゝものを、今の不足ありてと心を叱れば、其場は素直に鎭れど、またむら〳〵と不滿足萠出して、たしかに其とは思へど、話し合うて見ぬ上は黑白知れ難し。何をいふにも目顏でする仕

形話、此方は太陽の心にて丸い形をしても、先方は鏡と判ずるも知れず。もどかしや、戀か戀でないか、一刀兩斷にと思へど、車夫といふ邪魔あれば、卒爾に聲もかけられず。此方と彼方と首肯きあふことは彼も知らざるべし。なれど、日毎行過ふ我はよく知らむ。されば一度あやしめられては、其後車夫に目をつけられむかと是も心元なく、いかにもして車夫の手前あやしからぬ様に、言葉をかける方もあれかし。考ふれどなかりき。望むは、かの人に怪我もなく穩かに車倒れ、車にも損所なくして、車夫にも傷つかず、暫時氣絶するやうな事あらば、しめたり！　我駈寄りて介抱し、話しかけ、つい其わけをつけて退けむに、何の仔細もなし。其語氣にていよ〳〵我に御心なきに極らば其にてもよし。人知らねば恥にもならじ。是上策上分別。車倒れよ——靜に、轄ぬけよ、車夫躓けと、祈るに効なかりき。外に手段なければ、唯物いひたげなる風情を見すれば、女もまた應へたき様子、人目をかぬるそぶり、可愛き人の志のほど哉。さほどの眞實あらばなど一日は車の榮耀をやめて、徒歩ならば首尾はあり、日頃の思を霽らさしてはたまはらぬ。先頃母衣に見せたる心中あらば、これしきに思ひつかざる理はなし。して見れば此戀もどうやら覺束なく思へど、なほ未練をひくはその顏いよ〳〵情らしく、會釋のしぶり媚かしきに合點ゆかず、様々に思過せば、惡推かはしらねど。世間にはある例の、器量優れて不便や啞娘。それでこそ物が言はれぬか。車を下りて首尾してくれぬは、もしや跛者ではあるまじきや。跛者はしらねど、

啞者は様子にてそれと辨別るものなり。かの人にさせる様子はなければ、跛者か、疑はし。身分といひ、年頃といひ、器量といひ默つて人の置くべきものならぬに、あゝした野邊の花、娘姿は因緣なくてかなふまじと、其か、あらぬかに一夜迷ひあかして、朝飯一膳味なしにかつこみ、風でも引きしかと不興な顏を母親に詰られ、啞者だと答へて膽を潰させ、出勤の道々も此分別に苦しみ、人に怒られ、犬に吼えられ、また遇うて見れば、此日の扮裝一際まばゆく、花に露そひしたるゝ愛嬌に、今更に消え〳〵となり、何の多愛もなく根性昨日に返り、跛者でなし、啞者でなし、無垢清淨圓滿具足の美人。啞者でなし、跛者でなし、たしかに啞者ではないぞ。跛者でもないぞ。十一月の二日は亡父の命日。母と妹と此男三人連にて、谷中天王寺へ參り、南無阿彌陀佛と花を手向けて戻り道、入口の休茶屋を出づる五人の一組、內に老女は母親らしく、若夫婦の外に女二人は從者なり。此男路傍の新しき石碑に目留り、立懸けて墓誌を讀むに、母も妹も其所に待つ間に、五人連近く來れば、こそ〳〵と妹の母に囁くは、あんな帶が欲しいの、下着が好いのと出來ない事のねだりなるべし。何の某撰と讀了り、行くべしと踏出せば、さりとは思ひがけぬ、其娘は紛ひもなきかの人なれど、人目を憚れば笑顏も目禮もせず、ほんの他人にて行違ひぬ。ふりむけば、細腰しな〳〵と練りゆく風情、車にては此好き所を見せずにしまふものを。何はともあれ、跛者でなきこそ、わが身蘇生りしほど頼もしけれ。母に向ひて、あの娘は何か話して居た

りしかと尋ぬるに、母親いぶかり、顏を詠めて答へず、妹さしいで、御亭主と何やら話してといふ。啞でなきは好けれど、亭主の一句が口惜しくて顏を睨めぬ。今思へば、片輪にて獨身なるこそ望ましけれ。滿足なる上に主ありと知れては、玉を掘出し他人に奪はれ……其には力づくもあれど此は手出しもならず。奧齒に無念を噛み、熱涙を飲む辛さを、何ほど二人は知らぬとて、團子坂の菊盛、大人形がどうのかうのと、少しも我氣を知らず、餘に遠慮なさ過ぎるに腹立たしく、扨もぬしある身にして今までのしなしは、弄つて遊ぶ心か。女惡し。その男なほ惡し。

いちや／＼物語る亭主の顏目前にちらつき、無念いよ／＼骨髓に徹し、杖とりなほして、おのれ！　と横薙にすれば、びゆうといふ音に、あれと妹飛除くに、はつと心附き、呵々と高笑に紛らせば、母親は何も言はずまた顏を詠めけり。

落花重ねて梢にのぼらず。

またとは遇ふべき心なけれど、これが言葉をかはす自由あらば、百萬遍の恨つらみをならべ、存分腹を癒やしてくれる所なれど、物いひかはされぬ悲しさには、恨のいひやうなけれど、天地も照覽あれ、言はでやむべきか、と業を沸して來懸るに、轔々とかの車轟く音胸に響き、何とせむ――われ眞向になつて行過ぎなば、女は必ず曉りて、笑顏も念入にして媚ぶるを、此方はそしらぬ風にて、一昨日來いとすねて見せなば、張合ぬけて、萺なきしかたと恨めしき樣子を見する

を、見てやらず。ずつと行過ぐる――これにて萬分が一の念霽しと、側目もふらず反りかへつて行過ぎながら、女はいかにと流眄に偷めば、かの人も眞向になり、唾さへ吐きかけぬ様子に目算外れ、むしやくしやと面白からず。此方にて立腹する道理こそあれ。かの人のつんとする所謂はなきにと、其心中少しも合點ゆかず。扨は陰せし夫を知られ、とても契るまじきと思切り、どうでならぬものならば、なま中物を思はむよりとの下心ありて、今朝から改めて昔の他人となりしか、學問せる女の雄々しさ、氣强さと一度は呆れけり。

其より一週ほどは朝々かはらず遇ひしが、かはりしは互の心中にて、我もさうした女に阿らむも男らしからず、と氣まづくはなりしが、また折々は未練の目づかひすれど、女は人形の如く更に情はなかりき。

其後幾朝か續けて其車を見ず。疾ひでもせしかと、流石に他人のやうにも思へず。遇へば不興な顔をしあひながらも、其すねた顔も見ぬになれば懷しく、萬更心に懸らぬでもなく二週間を過しぬ。

或日役所にて同僚ども物語りけるは、課長の數年前亡せし娘に妹あり。此姉を氣に染まざりし人に推付けて嫁入らせしに、いやが高じて疾ひつき。それが原因にて身まかりたれば、此に懲りて、妹には好いたるものをと、今年廿歳まで氣に入るものなかりしに、日每學校の途に行遇ふ男

あり。物もいはず單の見知越ながら、此ならばとの御心ありて、名も所も知らねば、さま〴〵手をまはす內、兄につれられ母とゝもに寺參詣せしに、此男の妻と連立ちたるを見かけ、世に望なく思沈みしが、數月前ベルリンより歸りし、ドクトル丸山某は、課長の緣者にて、娘とは幼稚友だちの中にて、身分にも男振にもいひ分なければ、娘は左も右も此に得心して、結納は早や濟みたり。今年中には輿入と、外ながら聞くに胸躍り、あまり似た話と、此を寢言にまでいひ續けて過ぎしが、ある日退省の途より赤坂へまはりしに、三蓋松の紋つけたる油團かけし釣臺七つまで續きたり。紋に目留り、氣にかゝりて、其儘におかれず、用事を捨てゝ引添ひゆけば、氷川町の玄關いかめしき新宅にぞいりにける。何者かと門に立寄れば、無南三！ (MARUYAMA)

文ながし

これは明治二十四年春、江戸紫といふ雜誌に出たもので、江戸紫といふのは一寸今憶えがないけれど、やつぱりがらくた文庫のやうな雜誌であつたと思ふ。これも文體はやつぱり雅俗折衷體のもので言文一致にはなつてゐない。丁度この時代の雰圍氣――市民の生活雰圍氣を出したもので、物語は前の二篇からみると大分人間生活の中に入つてゐる。丁度封建時代と明治時代との交錯したやうな時代相である。或上流階級の一人の女の古風な戀愛が簡單に描寫されてゐるが、同時にこの匂ひのない老婆を世話してゐる都會の下層階級の生活氣分がリアリスチックに書かれてゐる。短い一篇の筋を云へば、昔相當の身分のあつた女がおちぶれて、それを或因緣で世話してゐる夫婦ものがある。老婆は非常にその親切を感謝して世話になつてゐる。彼女自身は自分の生活には事を缺かない小金を持つてゐる。處がこの老婆に何か非常に大切にしてゐる小匣がある。そして夜そつと人の寢靜つた時に大事さうに中のものを調べたりしてゐる。それでその夫婦の者がそれを金目の小判かなどのやうに思ふ。好い加減な老いぼれ故、死ねば夫婦のものになるといふ樂しみの望に引かれて老婆を大事にしてゐる。すると老婆が死んだあと匣を恭しく開いてみると、中から出たのは金錢ではなくて澤山の文殼がでゝ來た。その文殼によつて昔のこの老婆の戀愛がわかつた。そしてそれを川へ流して了ふ。それが老婆の書置きにあつたものである。

といふのがその筋で、その夫婦者がこの老婆やその手匣に對する好奇的な慾張りなどのことを非常に

面白く書いてある。同時に老婆が長く祕めてゐた戀と、その生涯の寂しい中にも怡しい祕密に生きてゐたといふ事實がこの一篇の中に纏められてゐる。一寸古風な面白いストーリーである。

この「文ながし」などをよんでゐると、西鶴の浮世双紙でも見る氣持で、作者があの頃いつも西鶴ものを愛讀してゐたことが思ひ出される。人情世態といふやうなものがまざ〳〵と出てゐる。多少夫婦もの丶生活を面白くするための誇張はあるけれども、大體からいつて自然にできてゐる。好いコントである。

文ながし

長局は世間無鹽色姿の尼寺、よく〳〵なればこそ一生奉公と諦めし心根は、武士が忠義に腹切るより一倍不便なる中に、不思議は藻鹽どの、年齢こそ寄りたれ、美しき皺隱れに花の香なほ殘りて、更に婆染みたる箇所なきにつけ、あはれ四十年の舊時が拜みたかりしと、藩士の青年會まれば、必ず談柄にして無念がりけるに、其頃より今に門番の六助といふ老漢、彼奴は生物の一代記、引捉へて吐かせよと、中にての好者が先達になりて四五人を唆かし、酒一升にてやう〳〵口走らせけり。聞けばなるほど、なるほど。祇王祇女が嵯峨野へ夜奔したも、、、、、、クレオパツラが蝮を懷

いたも、棄てたくて我から棄てし美色にあらず。藻鹽殿とても共通り、深い因緣とは承るも憎し。世は誰も戀なり。對手は同藩の要人殿、此間までお國元にて全命られし、後の名は定巳殿、年を重ねたればこそ之も老父なれ、青年には善美好の美男、これをや花に露そふ御風情、一目見し女人心の動かぬはなかりき。特別盡すが上の心盡しに、鹽様の物とはなりけるも、好事は魔多くして只夢の間の夢なれや。生命を捨てゝならばともかくもあらむ、生きては添はれぬ事情に泣別れけるより、初戀の一圖は此外世界に男子は無きものゝやうに、世を味氣無みて髪は共儘の比丘尼心、やがてお奥へ御奉公との噂立ちける時は、涅槃の圖をまざ〳〵と虎のやうな武士までが涙を灑しぬ。

可恐しきは思ひつめし女人の一念、これならば石にも蛇にもならばなるべし。十九の歳より五十何歳まで、戀に目逃がず、濡に膚撓ませず、身を愼みて忠節一三昧に仕へければ、御慮も勝れてめでたかりしが、廢藩の後は寄る齡に窮屈なる奉公も憂し、町家住居は兼てより希望の一つと、病氣を申立てゝ御暇を願ひ、麻布古川の邊に清四郎とて、骨肉の甥が小體に煙草營業せるを便り、其裏借屋に小奇麗なる一人暮し。長年の奉公中に貯へし衣類道具の置所なくて、或確正なる知音の土藏に預け、之を賣食にしても餘命短き一代は安樂に、なほ一周忌の法事も遺族に迷惑を懸け

ずして、見事に取賄はるべきに苦勞といふものなく、いつやらは保字小判を火鉢の陰にて勘定せられし所に行合せしが、大凡百枚もありけりと清四郎が語れば、女房口頭を尖らせ、此間土用干のお手傳に參りし節は、葛籠の底より帶錠前の手文庫出たりけるを、殊に秘藏がり給ひて人手に懸けさせられず、出すにも取入るゝにもまづ其から御自身にし給ふは、公債證書何十枚と、聞くより清四郎雀躍して、持つべきものは叔母御と、夫婦揃うていよ〳〵大事に懸くるは、是にも限らず現金なる人心、陰ながら御長命を恨み奉るはなほの事淺まし。

さりとは壯健に年齡を重ねたまひ、七十二とは勿體なけれど、生過ぎたる長の月日に、預けたりし器財は一つ殘さずちび〳〵と取戻して、炬燵の灰と消え、家賃米薪酢醬油と減り、時候の甘物食に盡して、四壁からりと寂しくなりけるに、夫婦は商賣を外にして、之にのみ心を傷め、氣を遣ひぬ。されど大願懸けたる手文庫には、有難やなほ手の附かざるを樂みけるに、其年の秋の初旬、差配が庭の柳散るを見て、無常の歌を何心なく詠出で、つひに覺えぬ秀歌と歡びしが前徵となりて、老體衰弱の床に仆れしまゝ足腰立たずなりて、霜夜の蟲の死期近きぬと我から曉りければ、藥劑よりは手馴の珠數を此上の依賴と、現にも阿彌陀佛を口不斷に念じけるが、今日明日といふ夕、夫婦を枕頭に呼寄せ、病中は格別厚き世話になりける禮などを述べ、葬式一切の料にとて金子若干の紙封を手渡し、衣類二三品の遺物分配まで濟せて、呻くも苦しき聲の下より、葛

箱の底にといふを、それと心得て清四郎、例の手文庫をうや〳〵しく取出して、是かと枕頭に押直せば、大義さうに頷きて、頼むは其中の物、未來までの懸念。とは御道理々々々。人は最期の一念に由つて生を引くとやら申せば、何事も清四郎奴にお委せなされまして、必ず麁略には致すまじければ、露ばかりも此世に思遺したまふ事なく、清しく成佛遊ばされよ。嬉しや〳〵、其中にはかねて一通を入置きたれば、呉々もその通り計らひくれよ。毛頭も違背かば執着の種ぞとあれば、夫婦膝行寄りて、御安心なされませ、何事も御遺言のまゝといふ返詞に首肯きて、其後は何の言葉もなく、目を塞ぎ呼吸重く、枕に縋りてすや〳〵と眠れば、夫婦相見す眼中に（臨終）と囁きぬ。其夜の三時頃病者の鼻息少時高まりけるが、ふつと吹斷れば、忽ち潮の退く如く、五體の血冷え徹りて、脆きもの！　あの世の人とぞなりける。

　葬式事なく果つれば、佛壇には白木の位牌、叔母様在すがごとく、うや〳〵しく燈明を供へ、線香を薫じて、夫婦はつと叩頭きぬ。清四郎は流石恩愛の涙留めあへぬ側に、女房例の手文庫を持來りて衝着け、開けて見たしといへば、清四合掌を解き、急かでも蛙にはなるまじきものを、さほど見たくば拜ましてくれう。鍵を渡せと、胸わく〳〵の動氣を蔽して、無理沈着に沈着くを、女房悋しと、おつしやる通り見たくて見たくてならねば、昨日から絕えずの催促。此方はどうや

らさまで見たくはないやうな、さる人に强ひて御覽なされとは勸めませぬほどに、此方は一人御回向をなされませ。其間に私は寸時見ますと、文庫に懸くる手を淸四捉へて、待て〳〵！　と示威きつくり眼を、女房くす〳〵と笑ひて、そのやうに可恐い顏をしたまうても、額に（見たい）と書いてあれば、瘦我慢は好加減にして早く開けて御覽なされと、錠を脫して帶革を放せば、待て〳〵！　おのれなどは身貧に育ち、靑錢五厘銅のざく〳〵錢か、背筋の透いた十錢二十錢の古紙幣の外には、御意得た事のない下司下賤ものゝ分在として、假初にも四五百圓の公債證書に手を觸れむなどは、福の神への畏懼ありとは心注かざるかと、文庫を奪取りて燧火(きりび)を打懸け、扠推戴きて、南無や大黑天、惠比須三郎殿と、蓋に懸けたる手首に女房遽てゝ縋り、開けたまふは善けれど、さる夜の約束を忘れはしたまふまじ。約束とは何？　えゝ！　此人は、氣を留めいでもの日每の小使帳は、風引いた夜も忘れず調査べながら、あれほど諄ういうた詞を、どの耳へ入れたまひしぞ。どの耳この耳と榮耀がましく、ひかへの耳を持つほどの淸四郎なら、腕も大方五六本ありて、日に三四千の莨を卷けば、かうした不自由はせぬ理(はず)なりと嘲笑ふ。女房赫となりて鼻息暴く迫寄り、なんぼう私がお多福面なればとて、あまり手暴く玩弄物(おもちや)にはして下されますな。忘れたなら忘れたと、男子らしういはしやんせ。百も承知して居ながら、今更惜うなつて遁げうとは、士族々々と日頃いはるゝ口舌(くち)にも似合はぬ卑怯なことゝ、口惜涙をほろ〳〵と滴せば、淸四

郎この見脈に易事ならずと駭き、聲を和らげて、何か知らねど仔細を語れとあれば、濡眼を蔽膝の陰より片目顯して恨ありげに淸四が顏をじつと眺め、此方はまだぬけ〳〵と何か知らねどなどゝ不知をきりたまふか。此事ばかりは死ぬとも忘られぬ一代の嬉しさ故、日に二三度づゝ復習うても覺えたるは、この文庫の內百圓以上のものならば、黑繻子の丸帯と縮緬の頭巾を買うてやるといはれたは、空言か戯言かと疊を拍つて問詰むれば、淸四郎呵々と笑ひ、其事か、今泣いたのは其事か。其事ならば泣かずとも笑へ〳〵、頤の外れるほど笑ふがよし。もし文庫の中二百圓以上ならば？　其外に鰻飯二つと、所望の演劇を土間にて見すべし。三百圓以上ならば？　景物として、かねての所願なれば流しもとの手入した上、改良竈を買ふべし。又四百圓以上、五百圓以上、百圓の一割づゝ現金にて小使に遣るほどに、衣類なり、髮飾なり、好むものを買ふがよし。此身にとりて其上の所願とてはなけれど、その所願にも勝して大事の〳〵、大切の所願がまだ一つ殘りたりといへば、もはや御免！　と文庫の蓋に手を懸けたり。驚破！　と飛着き今一言、一大事！　と喚けば、何だ〳〵？　縱令此金高百圓に足らずとも、千圓に餘るとも、祝などとて此方は必ず餘所にて酒を飲みたまふな。餘所にて酒を飲みたりとて何ほどの仔細あるべき。さらば飲むは可けれど醉うては下されな。茶さへ濃ければ浮かさるゝに、飲むで醉はぬといふのろまな酒があるか。さらば醉ふも可けれど……。何とした。醉うた紛れにはある例、浮かれて味な所へ

踏入りたまふな。馬鹿め！　伊豆屋の清四郎様はお世帯持だ。これを資本に一旗擧げて、京橋邊へ攻寄する覺悟、女房しかとやれ。乾元亨利！　そりやこそお寶と蓋を取れば、もとより金銀珠玉をつめたるものならねば、これはと驚くほどの光明を放たざるに張合なけれど、それ、この反古のやうな紙の尊さと、徐に手をさし入れて、七卷の書類を取出し、疊の上に置かむとするを、女房遽てゝあら勿體なやと、簞笥より蒔繪の古盆を出して、ともかくも此上へ。それお光來じやお光來じやと、大喜悅の四つの眸を細めて、莞爾の顏を見合せ、左右に飛退つて盆の上なる御寶に三拜をぞしたりける。清四おづ〳〵膝行寄りて、上なる一卷を取上ぐる側に、女房兩手を支へて尊敬の上眼づかひ、目退ぎもせで視てあれば、清四咳拂二つほど高らかに響かせて上封じを解けば、こは、こは、こは！　こはそも什麼？　むかし埋けたりし緡錢の蛙と化せし例もありしとかや、この一卷は奧の奧まで文殼なり！　清四血眼になりて外の卷の封を切れば、これも同樣文殼束。もしや奧にもと筍の皮を剝くごとく、心を目的に引裂き、引剝けど、いかな事！　文の外はなかりけり。女房堪らず半狂亂になりて手傳ひ、瞬間に殘る五卷をも一々引解いて見たれど、十錢札の截片だに飛出でざれば、夫婦呆れて、呆れて、呆れて、腰の拔けざるこそまだ〳〵不思議なれ。女房わつと泣出して、繻、繻、繻子帶……。えゝ、不吉な、泣くな。なほ、不吉な、帶の事などいふな。いはいでか、いはいでか。あの老女め……。何と？　否、何、あの、叔母樣め、

平常御殿の自慢いうて、お殿様が御大氣の、お奥様がおやさしいの、いろ〳〵の下賜物が、つもりつもつて、金子にすれば何千圓。それもこれも其方達夫婦が、やさしうしてくれる禮までに、わが歿後は二人の所有にならうぞなどゝ、屋敷あがりは皆赤田螺と思の外、甘い事ずくめの談話を、無根にしても十分が一の物はあらうと、親身の母親同様に世話したりしに、長命のしすごしから、持物をみな沽却して、紀念というてあれは何ぞ？　よくぞ恥かしくもなく出された羊羹色のぴり縮緬、大御所様時代の振袖か、茶番の外に何時誰が被るものぞ。平常の御大層なる口上に合せて、あれしきの紀念がはづかしければ、證文一つなき文反古を種にして、うま〳〵手品をつかうたは、悪さも悪き虚言吐婆！　えゝ、腹が立つ、業が沸える、此方は癪にも障らぬかいな？　死んだものでないならば、逐懸けて攫み着き、白髪を引拷りて咽喉に嚙着き……。えゝ、この馬鹿ものめ！　血迷うたか、よまひ言も節にせよ。あゝ、血迷うた、血迷うた、血迷うた。繻子の帯が口惜うござんすと、身悶して泣入れば、その勢に膽をぬかれて、清四はいよ〳〵惘となり、目瞬ぱちり〳〵と文殼を眺めながら、虹のやうなる息を吐きぬ。

猶未練ありて文庫の中を覗けば、底側にぺたりと密着たる一通あるを、もしやと取上ぐれば、叔母の手跡にて、書遺の事と認めたり。公債證書でなくば見たい事もなけれど、尋常事ならぬ遺書といふ字に、心牽れて之を披けば、

一筆申のこし候。此中の文がらは、お國元の定巳様と年來とりかはせしものに御座候。申すもはづかしき事には候へども、私御殿へ御奉公中、十八の年より定巳様に馴初め、末はかならずゝゝ女夫と、淺からず契りまゐらせ候ひしが、とても添ふことかなはぬ譯有之、死ぬよりつらき思にて緣切りは候ものゝ、貞女兩夫に見えずとの敎もあり、なほまたありし夜の契のほどを思ひ申候へば、只この人こそ戀しく懷しく候へ、外々の男に添ふ氣はさらゝゝござなく、それゆゑに一生奉公を思立ち申候。その後定巳様はさる方と御祝言なされ候へども、まへゝゝの約束にて、行末ともに此身を忘れぬ證據とて、月に二度づゝこまゞゝとの文を下され、私よりも返事をさし上げ、逢ふにかへてかくはかなき首尾をたのしみに暮しまゐらせ候。十九の年より一昨々年七月、定巳様あの世へ御先立なされ候ひしまで、月々おこたらず御音信有之、私は東京住居、定巳様は御國元にて郡役所の小使を勤めらるゝ御身とて、御出京の御暇もなく、私とても老年まで御屋敷に上りて自由ならぬ身なれば、御目に懸りにも參りかね候まゝ、五十年が間文通たえず、只々こがれ居りまゐらせ候へども、かはらぬ御志のほどは文にていつも嬉しく覺え參らせ候。いよゝゝ私事も此世は今日明日に御座候へども、定巳様未來にてさだめし御まちかねなされ候はむとぞんじ候へば、臨終いそがれ申まゐらせ候。扨とやこの文は戀しき人の筆の跡、心のまことにも候へば、火を懸け候はむも心苦しくて、かくとりおき申候ものゝ、

御前様方に見られむは、亡なりし後までの物笑と、まことに〱耻かしくぞんじ候へども、この文の始末頼みあげたきまゝ懺悔いたし候。此上は人目にかゝらぬやう、そつと川へ御流し被下度、くれ〲もねんじ上げまゐらせ候〲と。

猿枕

これも江戸紫に載つたもので二十四年初めごろの作品である。猿枕といふ題の中に小說が二つある。こゝに拔き出したのは其の中の「淺ましきもの」といふ一篇である。明治二十四五年頃の東京の風景を描いたものとして時代の世相が彷彿として眼に浮んで來る。つまり神田猿樂町邊に「英漢數學教授育々學館」一六風の筆意で書いたはり札をして「本月入學のものに限り無束修と認む」と書きだした看板が出てゐる私塾の如き內幕を描きだしたもので、その主事の生活とその妹に人の目に附く娘があつて、その二人の生活を寫してゐる。その英漢數の先生もまだ靑年でもあり學力も餘り充分でないらしい。そんな看板を出してから半年ばかりはひやかしに來る人もなかつた。近所でも「あれでよく立ちゆくものだ」と評判されてゐたが、最近になつて人が多く集り、朝は早くより夜遲くまで人々の立ち騷ぐのが聞え、大勢のときは五六十人もの書生が入れ替り立ち替り出入するやうになつた。近所では不思議に思つてゐた。

勿論これはインチキな學校なので、今も昔も同じことで、この娘が一寸綺麗なもので、教授は二の次でその娘にたかつて來たのである。兄はその妹を囮にして教授は表向き、實は厭がる妹を強いて靑年達にサービスをさせてゐたのである。そこへ金持息子が一人やつて來る、それを兄の指金で妹に特別サービスをさせる。妹は極無邪氣で「あんなことはもう厭だ」と兄に訴へる。兄は又それを壓制的ではないが旨くあやなしてゐるうちに終にその娘の指に黃金の指輪が二つもきらめいたり、兄は又兄で奉書の古羽

織が大名縞の糸織の羽織に化けたりして、二階の押入には絹布の夜具が一組、天鵞絨のくゝり枕が二つも仕舞つてあるといふ噂が傳はることになつた。丁度今でいへば喫茶店とかダンスホールとか享樂場もあるが、其の頃はそんな場所もなくまあ精々そば屋とか牛肉屋とかといふやうな所で飲み食ひして騒ぐ、そして寄席へでもゆくといふ位のものであつた。故にこの時代には妾といふものが相當婦人の職業になつてゐた。で、この兄は自分達の生活のために學校の形式を取り、實は妹を賣りものにしてゐた譯である。

これを讀んでゐると明治時代の神田邊の風景がよく浮んで來る。何かその時代でも生活には矢張り迫つてゐたものであらう。かういふやうなことも相當珍らしい現象であつたといふのは、今から考へるとまだ〳〵生活に餘裕があつたといつても可い。作者はこの二人の兄妹の事を描くのに、さう世相を深刻にみたといふやうな跡もなく、多少輕蔑的な意味があるのは「淺間しきもの」といふ表題でも分るけれど、併しその頃まだ二十代であつた作者にしては相當大人の態度で、何かほゝ笑ましい表情で、この材料を取扱つてゐるのである。これなども文體はやはり雅俗折衷體だけれども、文章は非常に平明で、語尾の何々したり、何しけりとかいふ點を除けば、殆ど言文一致に近いやうなものである。作品そのものが現代を取扱つた故もあらう。

猿枕といふのは、多分清少納言の枕の草紙から來たものであらう。詰り枕の草紙が本格的のものならば、これはほんの其を模倣した、猿の人眞似のやうなものだと、卑下して言つた洒落であらう。それは「猿枕」といふ表題の下に二つの短篇「すさまじきもの」と「あさましきもの」とがあつて、その題名が枕の草紙とそれと共通なのを見てもわかるであらう。ここには後の「あさましきもの」を載せること

にした。

「猿枕」のうち

「あさましきもの」

「猿枕」の表題にて「すさまじきもの」「あさましきもの」の二つの短篇あり、ここでは後の「あさましきもの」をとる。

（上）

入谷にて見し朝顔は輪大きく色濃かにして、我垣の物のたぐふべきにあらず。隣家のはいかにと覗きしに、我のと少しも變らず。主人を呼立てゝ、此花がかねてお噂の（狂獅子）かと問へば、頭を掻きて、種は正眞紛れなしの（狂獅子）、此地は土瘠せたるが上に培養もせねば、見らるゝ如く江北の枳殼と申す。なるほど〳〵、系圖の一巻とり出せば、たしかに先祖は八幡太郎義家公、其後胤でありながら、冠は戴けず、おこしの飯臺を頰冠の頭に載せて、母人に伴させ三味線ひかせ、われは太鼓打鳴らして、よか〳〵と子供をたらして、五厘六厘に頭を下げ、萬事さもしいづ

くめ、此等はまだ〳〵正しき營業なり。某藩の奥女中がなれの果、轆轤首の見世物の三味線ひくも心がらかはしらねど、さもしさ過ぎて哀なり。ゆすり、かたり、引剝、盗人は、男のやくざものが末路にきはまり、藝妓賣女はいたづら女の果に定めたり。氏も素性も何かすべき、食ひ兼ぬれば黑いものも白く見え、人の心自然と淺ましくなりて、我知らぬ間に所業不善不德に落ち、つひには共に染みて天晴不義の人間になりすます事、朝顏の種にはよらぬ如し。

しげきものは丸の內の靴音、猿樂町の私立學校。大路をそれて横町ごみ〳〵と狹く、菓子麵包屋と古道具屋の裏の奥に只一軒の貸家あり。此一月前引越せし人ありて、入口の木戶に杉板の看板かけて、英漢數學敎授郁々學館と一六流の筆意、紙札をさげて本月入學の者に限り無束修と認めたり。

半月ばかりはひやかしにも規則見にゆく人なく、あれにて能く立行くと近處にて怪みしが、此頃にてはいかな事! 朝は九時頃より人足ひきもきらず、夜は十二時過ぐる頃ぞろ〳〵と歸る樣子、大凡一日に五六十人は、いれ替り立替り出入ると覺しと、近處のもの不思議がりぬ。此あたり一面ともいふべき學舍の數の中、人出入の少し賑はしきは、一軒か二軒なるべし。夫さへ煉化のア、チ見事に構ふるか、ペンキ塗の大門いかめしくして、一週に兩三度も門口に掲示を新しく

張替へ、慇懃に教授す――月俸は何程――校費はなし――英人某などゝ、まねきをするが上に、新聞廣告も折々するやうに勉めねば、いつが日生徒の減るやら圖られず、幹事校長の心勞一通りならざるに、此はまた無爲にしてこれほど化すを見れば、名を匿す大先生にやあらむ、腕前ある人の錢金ずくならぬ仕事なるべしと、誰も彼も言合へりけり。

日を經るほどに入學者の數まして、此頃は入口にいつも手車一二輛づゝ待たぬことなし。身分ある人の令息などが高名を聞傳へ、かくは出入したまふか、われらも學者にならざりしことの今更悔しと、表の古金屋の老爺はいひき。

郁々館の建家廣からず、二階は四疊二間、下に講堂と名くるは六疊四疊二間打拔にして、教師の書齋と食堂と居間をかねて、三疊一間の外には物置もなければ玄關もなく、生徒の控所が二階なるもをかし。教師は三十四五の髭のある男にて、色淺黒く眼つき聰く、辯舌爽かに講義は滑稽まじりて上手なりといへり。床几形の長机を三側にならべ、生徒は坐りて席につき、教師は別に縦の机の前に、四方栗のブリキおとしの小火鉢を控へ、奉書紬の黒の一つ紋の古羽織を着て、貧乏ゆすりをしながら、講義の中に（さりながら）といふ口癖あり。生徒はいづれも不行儀にて、前の側に居ながら歴々と胡坐かき、方程式を教師に說明させて、我はマッチを摺りてカメオをく

ゆらせ、或は袂よりスコッチミキスチュアをとり出してぽつ〳〵と噛むもあり。後の側の隅に二人引附いて、りやん拳藤八、さすがに柳はつゝしむこそ殊勝なれ。教師は一向見ぬふりにて、熱心に自身だけは說明すれど、腹司ふくやかならぬかしていつも不說明の說明、それを生徒は解せしやら解さぬやら、問返すものは只の一人もなく、一時間もたゝぬにごちや〳〵と課業すめば、我勝に二階へかけあがりながら、(惚れて通へば)と小聲の茜句、入違つてどか〳〵とおりくる五六人の授業の模様、微塵前に變ることとなし。此通りにて朝より夜更まで追通し、通學の目的はいづれを見るも修業ならざる如し。

二階へあがれば萬事氷解、其四疊の間は造作小綺麗にして、壁には一面の月琴を掛けて、窓の外に二つ三つ鉢栽をならべ、片隅に化粧道具を置き、長火鉢の脇には勸工場仕入の茶箪笥、後には鼠いらずありて、德利皿小鉢を座敷にちらし、鮨、菓子の食殘しを片よせ、四五人車座になりて一同眼まで赤くし、妻楊枝を噛みながら、中に一人の娘をとりこめ、頬をつき、膝をつめり、果は同士打、同士惡口、美人が今の一語はたしかに一合を直打するぞ。武田一合買へと、寢そべりながら二十四五の蚊がすりの羽織きたる男がいへば、君はいま足でかれのひざをついたでないか。

その罰として酸餡を奢れといふ。賛成々々と皆罵るほどに、かの男起上り、魯西亞革の紙入よ

り、二十錢札を出して、これで半分といへば、哀な事をいふなとしかりつけ、又何程か集錢して、其中の無錢の男が奔走官を命ぜられ、いそ〳〵と二階を下りぬ。

その娘は十八九と思はるれど、小造の德には十七ばかりに見え、上品なる高島田に前髪ふつくりと取り、色菅糸(いろすがいと)を根懸(ねがけ)にして黑塗蒔繪(くろぬりまきゑ)の木櫛、簪(かんざし)は銀足に金水晶(きんすゐしやう)は誰かの遺物なるべし。黄八丈の小袖に羽織は空色(そらいろ)のきぬ縮、帶は黑繻子と友禪(いうぜん)の腹合せ、おやしき風につくり立て、立居、物ごし、優しく、顏は細手に色白く、鼻の形惜しい事には少しまづけれど、眼元しをらしく、强ひてするにあらねど性來の色眼づかひに、物を見る眸に千萬無量の情漂ひて、此にちらと見らるゝを（惱殺(なうさつ)）などゝやいふべき。

規則見に來る書生には、此娘應接(このむすめおうせつ)にまかり出で、三指(みつゆび)にてはぢらひながら返答しとやかに申せば、皆肉を蕩かし、わが骨を抓むで歸るとかや。授業まつ間には香煎湯を出して、口數きかぬ愛想を、virgin と喜悅の眸を引下げ、お顏見たさに我も〳〵と入學者引もきらず。

（下）

朝七時頃敎師は彼の少女と二階にて取膳の朝飯、箸とりながらの雜談聞けば、様子はさらりと知れたり。鷄(にはとり)の脂に玉子を半熟にいため、その鐵鍋を火鉢の脇にかけて少女に給仕させながら、

かの事はどうしたといへば、香の物につけし箸を休め、もうわたしはあんな事はいやでござりますといふ。いやならば此後はさせまじけれど、今度だけは甘く賴む。御承知遊ばして來週の日曜日までには、屹度屆けるとおつしやりました。よし〳〵お手柄〳〵。扨今一つの一條はと問へば、少女は顏を赧らめ、あの事ばかりは兄さん許して下さりまし。お言葉を背くではなけれど、餘りと申せば人外なり。今する事さへに心羞かしければ、一日も早くかゝる業はとも〳〵廢止にして下され、草葉の蔭にて父樣母樣が、定めし睨めてゐたまはむかと、夫を思へば情なくなりまする。ようこそ申したれ、我とて共始はかくさもしき事を働かむとは思も懸けざりしが、通學の書生どもが御身の色香に迷ひ、われ學問の未熟なるにも拘らず、此頃の生徒の數、みなこれを御身ゆゑなり。

かりそめにも學校の控所が、稽古所湯屋の二階めきて、酒を食ひ謡を唱ひ、あられもなき亂脈亂ちき、我何とて快かるべきや。されども此故に月々の實入多分にありて、下谷に住みし頃は米薪に今日を逐はれ、われら二人がどろ〳〵せし木綿物にくるまりし昔を思へば、店屋物に新獨活のつけ合せだに食殘し、飯が白いの黑いのと贅なことをいひながら、月々若干か郵便局にのこりゆく今の身の上、有難く勿體なきことなり。さればこそ心よからぬとは思ひながら、御身を囮にして若き男をたらし、情こそ賣らせね、人の玩弄物にさせること、みなこの兄の不所存不了簡な

り。

一昨日話せし如く、かの人は新華族某殿の長男、これも御身に焦れ、わけて心を砕くと見てとりしゆゑ、他日の榮華を目的に、昨日は靡(なび)けと勸めしは、いひ譯なけれど兒が誤と悟りぬ。もはや誰にも靡きたまふな。其内にはよき緣を求めて御身を片づけ、われも眞面目に教授するか、商社へなりと傭はるべし。それも今日明日とゆかねば今少時辛抱して、大勢に不興な顏見せてくれな。夫にしても今日に限りていかなればかうした事をいふぞ。されば、此事は今日思立ちしにあらず、茶をいれよ、酌せよと人のおもちやになるにつけ、貧すればとて淺ましやといつも思はぬにはあらねど、あなたの心を汲み、明日の活計(たつき)を慮ふれば、娼妓になり下り、萬人に肌身を汚さるゝ女もあるものをと、無念の涙をのみて、夢に兩親(りやうしん)ゐませし日の榮華(えいぐわ)を樂み、今日が日までは何も世渡りと忍びたれど、昨夜梅の湯にて裏長屋の人々に出遇はせ、われを矢場女の密賣のと、はづかしき噂をせられしに、いよ／＼我身が淺ましく、たとへ食べずに死ぬもよし、ふつ／＼此業がいやになりましたと、眞實の雫に可愛(かはゆ)き眼をぬらし、思ひいつて賴みたるを、兒もさこそとよきやうに慰めしが、その後二月たてど少女は奉公にも出ず、半歳になれど緣をさがす模樣もなく、小川町邊(をがはまちへん)のなんとやらいふ好男子が手にいれたなどいふ取沙汰もありて、此頃は其少女、黃金の指環二つはめて、兄人は奉書の古羽織を大名縞の絲織に着替へ、二階の押入に絹布の夜具が

一組、天鵞絨のくゝり枕を二つ見しと誰やらが話しき。

伽羅枕

伽羅枕は明治二十四年の末頃の作品である。其の頃は作者紅葉山人は旣に讀賣新聞に招聘されてゐた。尤も讀賣新聞に入つたのは事によると明治二十三年頃だつたかもしれない。年表によると讀賣新聞に掲載されたものはその二十三年の頃に「夏痩せ」があり、「新色懺悔」がある。併し「夏痩は」相當小說的な經緯の入組んだものではあるが、さう力作とは云へない。「新色懺悔」はどちらかといへば短篇に屬する。以上に比べると「伽羅枕」は時代物で、作柄から言へば講談趣味の大衆ものではあるが、一寸過渡期のもので、その主人公は現存の人間である。現存といふのはこの作者がこの物語を書いた時分に生きてゐたといふ意味で、明治も二十年頃までは、江戸の氣分も到るところに名殘を留めてゐたし、江戸の空氣に生きてゐた人物も澤山ゐたのである。尤もこれも筆者の假定で、この作の出來た時分に作中の主人公であるお花老婆が生きてゐたかどうかも分らない。實際さういふモデルがあつたのか、それとも空想で作り上げたものかそれも分らない。併し伽羅枕は山人生涯の仕事でも面白い物語りの一つで、系統から云ふと江戸文學の傳統を引いたやうな所があり、「三人妻」と好一對の濃艷な作であらうと思ふ。筆者は田舍の中學にゐた時分に、或同窓の數學の巧い人の家へ遊びにゆくと、其の靑年が「伽羅枕」の切拔きを卷物のやうにつぎ合せてもつてゐるのを見た。それで一寸其の場でその伽羅枕を讀んだことを覺えてゐる。筆者の鄕里は其頃至つて文學氣の乏しいところで、小說などに心を寄せるものは皆無であつた。さういふ町にも、しかも數學家の學生などの書齋にこの伽羅枕の切り拔きが大切にされてあつ

たのを見ると、この作品が當時いかに多くの讀者を惹き附けてゐたかといふことが分る。「三人妻」は柳橋の花柳界のことを書くと同時に時代の成金、つまり明治中葉時代の成功者の贅澤な生活ぶりと、成上りものの好色的な樣々の事件を取り扱ひ、主として柳橋あたりの花柳情緒と藝者を書いたのに對して、これはその頃盛(さか)つてゐた吉原の氣分と太夫の生活を書いたものである。勿論柳浪の「今戸心中」のやうにリアリスチックのものではない。隨分份飾の多いロマンチックな物語であるが、色道界のことを興味深く書いた點(てん)では、「伽羅枕」も「三人妻」も同一軌である。この作は紅葉山人の試みた殆ど最初の長篇であらうが、囘數は六十囘で新聞にすれば二ケ月の讀みものだからさう長いとは云へない。しかし今迄擧げて來た數篇に比べれば、規模は相當大いと云はなければならない。本當は全篇あげても讀者を退屈させないだけの興味的な讀みものであるが、小說としては、何と言つても內容のあるものとも言へないので、ここには女主人公が吉原へ身を投ずる動機を描いた場面の幾つかを、時代を囘顧する意味で揭げるに止めておいた。この動機が相當時代の社會制度といふやうなものに對する、反抗氣分を含んだものので、誕生と環境によつて運命づけられた自身の生存を、ねぢけたなりにも主張しようとする時代の典型的な女性の生涯が、それ丈でも充分窺はれると思ふ。それで最初の數囘は割愛することにして、中程から拔きだして見た。同時に吉原といふ不思議な世界へ身を投じてからも、この女に集つて來る色々の人物との交渉や、小說的事件も一切省略した。この主人公に通つて來る幾人かの男に對してこの女の發揮する意氣地だとか俠氣だとか、又は手練手管、嘘と眞の裏表、つまり其の時代のかういふ世界の裏面といふやうなものが、章を重ねるに從つて興味ふかく展開してくるのであるが、時代が時代だけに其の中には相當陰鬱なものもある。大體この佐太夫といふ女は大して美人ではない。唯非常に勝氣な負けじ

魂を持つてゐる。それは彼女が江戸の或る御大身の落胤だといふ所から來てゐるので、さういふ性格の現はれと、それに惹かされて通つて來る多くの男の様々の運命や生活が夫から夫へと繪卷物のやうに描寫されてゐる。この太夫は元來京都仕込みで、自分の容色に對しての自信を持つてゐないだけに、他の女が余り歡迎しさうもなささうな男を選んで大切に扱ふといふやうな、相當要領の好い所も出てゐるのは、今も昔しもこの社會の商賣意識にかはりはない。例へば第一九囘目に「年の頃五十四五の大男で色黑からず、目鼻立ち尋常なれど唯一目に氣の弱き女はわつと叫んで氣絶すべし、顏手足の嫌ひなく大小の疣すき間なく取りつけるは餅黴をつけたる如く、最初は惡戯に假面などかぶりて人を氣味惡がらすのかと思ふ位の男、それは疣大臣といへば吉原の裏田圃の蛙も鳴音を止る程の全盛」――さういふ大臣が突出しの第一夜から通つて來た、といふやうなことが書いてある。すべてこの調子である。中には天下のお尋ねものが、彼女の部屋へ來て、身分を明して、部屋に潛伏してゐるといふやうなお芝居風景もある。時には仲の町で今助六かと思ふやうな好い男も一人位は出て來るが、これは作者の皮肉でか、何かの間違ひで廓の外で斬り捨てられて了ふといふやうな場面もある。

ここに掲げた部分では、主人公のお花(佐太夫の本名)を京都の色街からぬいて江戸の自分の屋敷へ連れて來た新右衞門といふ年とつた侍と其の家庭、それからこの新右衞門が紫水晶の發明に沒頭して地位も財産もことごとく煙にして了つた所から、お花を持ちきれなくなつてひどく零落した果に死んで了ふ。それで殘されたお花は、途方にくれて或御大身の奧方に成つてゐる腹異ひの姉の屋敷を尋ねて見るといふ、お花が新生活の一轉機を説明したあたりを拔いたのである。それは意地の強いお花が復讐の意味で遊女佐太夫となつて突出されるまでの徑路で、この復讐は、側へ寄りつくことも許されなければ、

無論口を利くこともできないほど、高い處に時めいてゐる異腹の姉に對する箇人的なものではなくて、さうした世の中と自身の環境に對するものであることは本文にある通りである。これはやがて封建時代の民衆全體のもつてゐた反抗的氣分で、お花の如きは、單にそれが戯曲的（ドラマチカル）な動機によつて强調されたものに過ぎない。

作者の書く女性は、大抵は日本婦人の普通の型である――若しくはそれ以上の、柔順な性質と貞操觀念とをもつたものが多く、さうでないものは作者はこれを輕蔑し非難し、作中で筆刑をさへ加へてゐる。この道德はさう深みのある本質的なものではないが、何の作品を取つて見ても、それが必ず作者の强い主觀として現はれてゐるのは事實である。しかもそれは一般社會の道德の圈内におかれた場合の女性のことで、お花のやうな初めから數奇（さつき）な運命のもとに生れて、社會の暗面に自己を生かさうとするものに取つては、箇性がその環境によつて自から別の發展徑路を辿ることは無論で、世俗的人情を以て律することの無理であるのも當然である。市井人であつた紅葉山人の姿はそこにも見出されるのである。伽羅枕とは伽羅の香を焚（た）きこめた遊女の枕のことであらう。

伽羅枕

當時和蘭陀船來の色硝子を紫水晶と稱へて、世人大方ならず珍重せり。新右衞門元來武よりは文、文よりは理に長け、發明氣ある男なれば、之を見るより不圖思ひつきたる所ありとて、おも

はくの薬品小量を用て試みしに、結果案のごとく面白く、今一度の工夫あらば、ともかくも紫水晶成るべしと大勇みに勇みて、それより製造用の器具を造らせ、薬品は極はめて高料なりけるを、所持の金銀惜氣なく摑みて十分に買入れ、其身非番の日は一室に閉籠り、其所を細工場に定めて、深夜に「吹具」の呼吸荒まじく、大石榴の裂れたるごとく炭火を泥爐に溢らせ、坩の中よりは五色の烟たち昇り、鼻をもぐばかり得ならぬ惡臭充滿たる中に、新右赤裸になりて大胡座を組み、熱汗瀧を流し、湯氣雲を起し、溫氣に惣身充血して薄血を塗るがごとし。女房見るに淺ましく思ひ、我夫近頃天魔に見入られけるよ。京よりは女子を伴ひて、年齡にも愧ぢぬ好色の不所業。其が歇むかと思へば今度は此始末。同僚の見る目、殿樣への聞達を氣遣ひ、仕事の最中は夢中なる耳へ何も入まじと、食事の折から女房言出しけるは、此度紫水晶御工夫とはいかなる御量見か知らねど、頂戴の御扶持に今日の不足といふ事を覺えざるに、何を苦みての細工三昧、武士たるものゝ假初にもすまじき業ならずや。それも一興なむどゝいふならば、隨分苦しかるまじけれど、兩刀をも佩むお身にして下司のまね事、仲間どもが草鞋造るを、かれも武士の一片なるに、あのやうなるさもしき手業させては、その心までがおのづとさもしうなれば、外に美くしき內職のありたきものと、日常のお言葉にも似合はざる御自身の行狀、脇指も衣物もかなぐり捨て、丸裸になりたる容體は、見苦しとも淺ましとも申すべき樣なし。些細の利慾に性根を亂し、作法も身分

も忘れたる昨日今日、いかなる御所存か聞きたきものなり。いつか近所へ此一條知れ渡りて、胸苦しき評判耳に入る度に、もしや此の不埒殿樣の御耳に觸れなば、きつとお嚴刑あるべしと心も心ならず。餅屋は餅屋とやらにて、子飼よりのその道のものだに、工夫ならざる紫水晶が、不鍊ながら竹刀鐔の手業にて參るべきや。よしなき事に金銀を費せし揚句、御勘氣など蒙りなば內外の難澁、其時の苦艱を思ひたまはゞ、此志を立所に飜へしたまふべき方法となるべし、と顏を赧め、疊を拍て詰寄れば、新右立腹して食半ながらからりと箸を投出し、二度言はゞ離緣と言捨てゝぞ細工場に入りける。かほどの執心おそろしく、女房も我と手懲して胸のみ傷けるが、新右の一念募りに募れば、十金二十金といへる高料の藥品を、一滴の液半縷の烟となして少しも悔ゆる色なく、この事もし成就せずば一命不用の覺悟。ましてや一握の扶持米が何程のものぞと、果は病氣をいひ立にして參勤を怠り、日夜かの一室に入浸り「心」を堝の中に打込みて千萬苦慮すれど、最初の試驗我を欺き、更に思はしき物成らむともせざれば、今は死物狂になりて、百金二百金と有金を盡し、これはと思ふ藥品の數を取寄せ、忽ち火上に載すれば、何の驗もなくとろとろと皆無になりけり。此條藩主に聞えたるよしなれば、今にして悔悟せずば好事あるまじ、と上役など親切に言へど新右取合はず。扨は此家遠からず斷絶と、女房獨り氣を揉むのみ、意見はいうても聽かれず、さればとて女の手に濟ふべき力はなし。思ひ詰め、案じ詰め、苦勞に苦勞を重

ね、心配に心配積みて、可愛や精神亂れ、泥爐の前に手を拱きて眉を顰むる新右の傍に、女房一日二夜泣き續け、遺書もなく裏なる井水に身を投げて淺ましく果てけり。かくても新右ひるまず、さりとて到今小判の封紙だに殘らざれば、近所の目を忍び〱に衣裳道具を賣拂ひ、これも亦火上の烟となしぬ。武士にあるまじき不埒の段々お咎となりて、終に扶持離れの素浪人、賣餘しの家財を皮財布に小さくゝるみ、箕輪のお花が家に一所になりける時に、一草に「がらくた」を積みたり。何ぞと知る者に尋ぬれば、あれが水晶細工の道具！　まだ思ひ切れぬかしてあの始末、いづれ紫水晶は前田氏の死神。

新右衛門落魄して箕輪に轉込みしは、お花二十の歳暮なり。僅小なれど餘財のあるに任せて、以前ほどの大懸にはあらねど、なほ紫水晶に斷念しかねて、一日一度は炭火に面を炙らねば心濟まず。目に見えて小判焚えて形なきにお花も心を傷め、此樣子にては多くもあらぬ身代、今にも灰となりて我等路頭にうろつくべければ、是ばかりは思ひ留りたまひて、そのやうに捨る錢の十分一なりとも、奥樣の佛事に喜捨したまへと折々口說きけるに、新右も長の月日、莫大の金銀双ながら徒事に費えて、今に露ばかりの驗なきにあぐめど、又思ひかへして藥甑弄は歇まざりき。かくては所詮覺束なき夫婦の行末、分別しやうなら少しなりと餘裕ある今の間と、お花がしきり

なる取越苦勞を、さらば休て遣むと、吉原の廓内に、中萬字半藏松葉二間の家主の株を買て、お花が安心の種にぞしける。此歳暮れてお花二十一の夏、一人の男子を設けしが、新右此時六十二歳の老翁なり、かくてお花の心落付きたるを見るより、新右また〳〵泥爐の中に、なけなしの金子をはたき込み始めしに、此度は少し見所ある結果にはずみて、此期を外さじと心のみは逸れど、藥品の料といふものなく、賣る可き品とても殘らざるに、新右の悶ゆること、此處に二三十金もあらば　大願成就せむずる想にて、千日の茅をこの一日に燒くことを悲しみ、えゝ！　物はなし、引取人だにあらば此命を賣てなりとゝまで窮せしが、月の末とて地借の金子手元にありけるを、此許あらば事足る可きがと、抽斗より取出せしが、いや〳〵これ我物ならず、今は廓の家主なれど、舊を糺せば淺野家の前田新右衞門、武士なりと、其金子紙に引包て投込み、外に分別はとつく〳〵思案するに、我此金を盜むといふにはあらで、時借するなり。紫水晶だに我手に成らば、十千萬兩にしても返濟すべし、唐に尾生といへる男、女との逢引をある橋杭の下に約して其所に待ちけるに、女子來ぬ間に汐滿ちて身體を浸せど、杭に縋りて動かず、一旦此處と約せし所は變へ難しとて其まゝ溺れぬとぞ云る。これは尾生の信とて臨機の所置を知らざるものと、後々までの笑草としけり。我此金を盜むとにはあらで、君子も貧しうしてはすべからざるにあらぬ時借なり。不正中の正、憚る所なしとその金にて藥品を調へ、また見事に仕損じけるより、千挫不

撓の新右もこれには精神ぽつきと折れ、その失望の一瞬後より、心急に弱くなりて、まことに六十二歳、さもあるべき老人氣となれば、今までの所業を省みるにつけ、四五年來の後悔波の寄するごとく一度に胸に逼りて、前田家の沒落、女房の枉死、大金の消耗、今は身代の不如意、地借金の消費、幼子あり少妻あり、我は老體の不自由なるにと行末の配慮など、無い物のやうに忘果てたりし萬感湧上りて身の所措なく、これを氣病にぶら〳〵と煩ひつき、其冬の初霰笹葉に玉走る夕、此まゝ一人寐るも年齡なれば惜しまねど、わが一旦の不了簡より二人のものを乞丐兒にさすか。其ばかりが冥土の障と呻きて、歸らぬ所へ赴きぬれば、お花は泣く可き力だになく、野邊の葬禮も貧の身は式ばかりの哀れなることいふべくもあらず。家財は賣盡して空家のごとき座敷に、只殘るは戸棚一杯の藥袋、堝と泥爐との遺物に無念と追懷の涙やまず。

お花江戸に出し翌歳、父子の名乘すべき心にて水野の邸を尋ねたりしが、九千九百石の檮造嚴肅なるに怯え、且は其身尋常なる町人娘の風躰にて、此所の殿樣は實父よといはむも口幅たく、其人の恥辱にもなるべきかと、幾度か門前を往來して本意なく戻りしが、思切れずして其後二三度行きたれど、行きしばかりにて門內へは入らず、唯うろ〳〵して歸りぬ。新右死亡なりて一人に殘され、地を匐ふ朝顏の何にもあれ、蔓の所倚を求むる折からなれば、いまはいつまでか遠慮

すべき、今日はと決心してすつと通用門を入れば、門番の老人希有なる眼をして視るに小腰を屈め、子細なく通りて玄關に着けば、其處に肩衣突張らせて幾人も詰めたる若侍、一齊にお花の姿に衆目を注ぎ、怪がりて希らしがりて好もしがりて見えけり。京のものにて殿様に御謁見を願ひたく、御苦勞ながらお取次を頼みまするといへば、侍衆いよ〳〵驚き、目授して囁相ふは胡亂、亂心の二者にお花を疑うてなり。取次役威儀を繕ひ、たゞ京のものとばかりにては取次なり難し、姓名住所はいふに及ばず、御謁見願ひたき用事まで明瞭に申せと、肩臂怒かせて切口上の仔細らしく述る。後には剛らしき武士ども額を鳩め、お花の顔を見ては否味たらしき微笑の目元。婦女と侮りて不禮なる侍衆かな。此家の御息女様と知ざるかと、心中勃然とせしが色には出ださず、一言毎に恭々しく頭を下げ、京は下加茂中澤十兵衞の娘鶴と申す女のなりと、母小鶴の實家はもと伊丹に名だたる造酒家なりければ、其主人——小鶴の父——の名をいひ、又鶴といはゞ御合點の機轉の挨拶。して用事は？　二十餘年前此方の殿様御在京の砌、親父十兵圍碁のお敵手を申上けるより、格別に難有き御言葉を蒙きけるが、家に秘藏の短刀ありけるを、特別御懇望遊ばしたれど、重代の寶とて此ばかりは御斷り申し上けるが、先年臨終の際に、かね〳〵の御執心なれば御手許に献ぜよの遺言により、私はる〳〵持參いたしましたと、袋入の護身刀を注意がしに持替ふれば、少し控へよと奥へ入りて、やがて出で來りて此方へと書院に案內しけり。前栽の築山、

泉水、立木、町家の造法とは姿かはりて、何所やらか嚴粛にして幽遠しく、閑寂なる間々に鳥の音聞え、氣澄みて水を打つが如し。座敷の結構はいかさま第宅なり。お花微賤の身にあらねば、幼少の折には高家の館へも出入し、成長りては揚屋の大坐敷に、随分善美の造作は目馴たれど、江戸の武家造の館の樣はまた格別と、京の太夫も此所に來ては田舍女なり。跫足しづしづと響き、襖開くと見れば顯はれたる、白髮交りの上品なる武士は用人なり。挨拶高ぶらず大樣にして威あり。取次より聞及ぶ條いかにも殊勝なりとの言葉に、お花若武士の風采を見るに、惡人とも思はれざりければ、慇懃に會釋して、只今お取次を以て申上げましたは、他聞を憚りての空言にて、かゝる事を申上げなば、殿樣のお身に拘らむかと差控ゆべきなれど、つひ直々に御謁見もかなひ難ければ、其方樣まで申上ぐべし。私今の名は花幼名仙とて、殿樣御在京の折お情を蒙りし、祇園の藝子東井筒の小鶴と申すものゝ一女と、子細を洩なく語りて、其時たまはりたる御紀念はこれにと、護身刀を出して見すれば、用人首肯きながら點撿め、お花を視ていかにも氣毒なる面色、京の藝子に一子を宿せしよしは、内密にお物語りもありてかねて承知せるが、扨は此方樣にてありけるかと、坐を進めてお花の顔をなほつれ〴〵と見護り、御懐かしや！　大殿の御面影、そのまゝ眼邊額邊に殘れるは、爭はれざる證據。さりながら聞かせともなき凶報、はる〴〵尋ねられたる効もなや……。大殿には十七年前に御逝去なしたまひしぞ！　あつとお花は膝なる手を

すべり落し、見開く眼に用人の顔を凝視て、少時は瞬なかりき。驚駭はさる事なり、愁傷の程はさぞやと察し入れど、とさま〴〵丁寧にお花を慰め、當代の殿に此の次第を言上すれば、本意なかる可し不便の事なりとて、私に御謁見を許され、數々の下賜もありて、此事は家臣の手前あれば表沙汰にはしがたし。我とは同胞に相違なけれど、其地にて縁切りたるからは他人と思へ、此後は音信不通たるべし。我に一人の姉あり、今は柳生某守に縁組みたるが、其方の事を詳知りて、女子の同胞なき身は其子懷かし。一度は名乘りあひたきものと日常おほせ給へば、姉君喜びたまふべきに内密に對面せよかし。我より添手紙せむとの御意をかの用人取次ぎたれど、お花は思ひに思ひし實父亡なりたるに氣脱して、もはや窮屈なる思ひして、姉などに遭はでもと思ひけれど、賴なき身の杖になる事もやと、難有く御禮申して、御手紙と下賜物を戴きて歸りぬ。四五日經ちて柳生の邸を尋ね、水野よりの手紙を奥様の御手許へと差出せしに、返事早速に、なつかしく逢たかりし思をくりかへせし文言は、やさしき言葉を直々に聞くがごとし。この二十一日は上野へ佛參の例日なれば、其日他事ながら對面の首尾すべし。三枚橋の左に立ちて待つならば、此方は駕籠の窓を開きて、通らん折の一目を見外さしたまふな、時刻は何時と書たり。

其日約束の刻限早めに、三枚橋指命の所に佇みて待間程なく、上野山より行列見えて美々しき

事なり。眞中なる鋲打の乘物此中にこそと、お花首を延べて覗へど、駕籠脇には徒士女中附添ひ、其影を月に障りの雲と怨めば、同じ思ひなる柳生の奥方、駕籠の中より女中に聲を掛け、見る物ありとて片寄らせ、窓近く顏を現し、橋の上なるお花を見て目禮したまふ、毛髮は黑漆のごとく艶かにして束あるを片はづしに梳げ、年齡三十路に及ばざれば、花枝頭に在りて風に一つ〳〵散初むる色姿。細面にして色白く、髮際火塔口に揃ひ、眉痕青々として遠山を横へ、眼は凛として涼しく、才氣其中に溢れたり。丹花の唇に烏羽玉の染齒少し見せたる、得なむいふべくもあらざりける。金銀色まぜに縫摸樣せる裲襠の肩頭窓より見えて、胸のあたりに銀地の扇を半開きにあてがひ、おツとりとしたる體度、持て生れたる上品はわざとにあらで、花の香、玉の溫にや似たる可き。お花我にもあらで體搖き足進み、ずる〳〵と乘物脇に近寄れば、奥方扇を擧げて忍びやかに制したまふに心注き、身を退かむとする時遲し、徒士の叱る聲に驚かされながら、見飽かぬ慕はしさに行列を離れ難くて、二町餘も駕籠に添ひて、せはしく本意なき對面なりけり。奥方もお花に目を離さず、もの言ひたげに顏を傾むけ、はふり落つる涙に目瞬などして、心に無量の思ひあるを知らしむ。何所まで追ふとも際限なしと、好程にして立留まり、小腰を屈めて訣別の會釋すれば、彼方にても頭を下げたまふ間に、乘物は行過ぎぬ。お花なほ立留りて目送れど、女中籠駕に遮られて物足らざる心地なり。お花思ひけるは、此身は運か不運か、あのやうなる姉を

持ちて、……持ちながら妹はこの有樣。彼方は乘物にて三四十人の同勢。此方は隨行にも旦那にも只一人、小紋の重に煤竹茶の帶して、塵埃の中にしよんぼり立てる姿の、姉樣のお目にはさぞや淺しく見えしなるべし。胤はかはらぬ石見守の女ながら、彼方は玉簾の御息女に生れ、我はかくし子の日蔭ものとて、下賤の土に根を持てば、そのまゝ草花と開ける此身上！　羨ましさは姉樣なり。婦人の身にして、兩刀横へてゐかめし造りの胸毛男を、幾人も隨行に引連れて凄まじき勢力。其も一つ血系にあらざりせば、よき月日の下に生れたる女と眺めて、さまで羨望も起るまじけれど、我も石見守の娘ならずや、姉樣も石見守の娘ならずや。然に我は町外れの茅屋に、乳臭兒を抱へて木綿布子の胸をはだけ、亂髮に埃を沐びて白く、薪脂を爪紅にして勝手業に手足見ともなく太り、煤けに煤けて苦勞に苦勞し、この後に是と賴もしき希望もなく、男女明日のお米を氣遣ふやうになりては末なり。苦界ながら里花と言囃されし頃は、後々かくぞとは思ひも懸けず、鳥水の隱居に連れられ、名所見物に贅澤いひ盡くせし駕籠の中にては、旅百般の可哀を芝居狂言のごとくに見過し、此分にては綾錦の手玉をとり、伽羅の羽子板に眞珠の羽子をつき、珊瑚のきしやご彈も飽きて、長き一日の樂に苦しみ、貧富平等娯樂といふ戀は、對手老父にしてをかしからず。其人に嫉妬だになくば、業平の樣なる男に添してもゝらひ度を、只一つの不足にして、此身獨立にならむ日の來るを思はざりしが、尾羽枯せば枯るゝものかなと、姉といふ石見

の長女が容躰を見しより、お花いとゞ世のはかなき恨骨に染みわたり、鬱々として我家に戻れば、隣家に預けし幼兒餓ゑきりて、乳房にしがみつきて離れず。折から米屋の手代來りて、間もくさ〳〵する例の催促、小癪に障りてけんもほろろなる挨拶すれば、立腹して歸りぬ。其翌日姉よりの使者反物五六匹に目錄に添て、われ如きをも妹と思せばこそ、難有き事と涙ながらに請取りけるが、また思へば、人に惠みを受けむよりは、我から人を惠むべき身上にならむこそと、これも亦世を恨み身を敢果なみの種となりて、とかく涙雨は人の身の秋にふるものなりけり。

お花糊口の道を知らず、また活計を助くる人とてなければ、一日々々と貧は身に迫るばかりなれば、さるにても情深き柳生の姉より、月に必らず一度の心添はありながら、其にては凌ぐべくもあらず。凌がるゝにしても意地强きお花なれば、姉の世話にわが身を疎み、かくては何の思出ありて長命ふにや、心に問はれて愧かしき事なり。我二十二歲これよりを盛ともいふべき身にしてと、百計盡くれば、まゝよと女子の分別はいつも是に極まれる分別して、花が咲くか、果はならぬか、其は急場の今にしていふ所にあらずと、どうありても其事に臍を固めぬ。

亡父新右圍碁を好みて初段を打ちければ、箕輪の浪宅に碁友三四人入魂に出入ける中に、源七

といへる女衒あり。新右も日常褒めける如く、此男業躰に似合ぬ善玉にて實意人なりけるが、新右死亡なりし時も緣者同樣に世話して、其後も折々訪問れ、心細きお花を慰めて、及ばぬながらお力にもなるべしとの言葉を憶ひ、ある夕暮幼兒を抱へて源七の住居を尋ねぬ。土手ちかき山谷の裏借屋に獨身のいぶせく、今夕飯とて鍋皿小鉢を散亂し、ぐび〳〵と獨酌の門戸を叩けば、誰だ〳〵。あの子の母親か、其樣に心配せずともといひながら破戸を引開け、此は思懸けなき前田の奧樣、お珍らしや、まづ〳〵と膳椀を無雜作に片寄せ、御覽の如き汚穢家へようこそといへば、御飯中にいかい失禮、お相談は後にてゆるゆるすべきに、さあ〳〵遠慮なくといへば、否丁度只今濟みました處、坊樣は早お寢か、さぞや重かるべきに少時此へなりとお橫になされませと、我坐蒲團の埃を拂ひて其所に直し、お枕にと有し風呂敷包を出せば、お花會釋して幼兒を臥し、はだけたる襟を搔合せ、扨源七殿といひ懸けしが、此の男は夫の顏も知り、我も心易くし、この子ある事も知りたるに、我子を賣りたしとは流石に愧かしく、さればとて言はでは濟まぬ事なれば、勿論言出すべけれど、羞しからぬやう其となくほのめかして、先方の合點ゆくやうにと思ひつくまゝ、淨瑠璃の累が身賣をその儘と、後にて思へば、馬鹿らしくも愧しかりし。其時はさる氣もなく、源七心中に嘸かし笑ひたるなるべし。今夜參りし用事といふは、外ならぬ人の頼まれ事、女を一人吉原へ勤に出したきとの事なるが、今というて今相談のなるものにや、明日明後日に金

子入用なればといへば、なるほど、此方は商賣なれば、何時なりとも御相談なるべし。して其女といふは。年齢少し更けたれど……まづ我に似たものと思ひたまへ。姿色優れたるにあらねど、色白なるは百人の中に入れて際立つ可し。夫もなく其外の緣者もなければ、年長くとも仔細あらじといふなり。此はいかにといへば、其女人は生娘か但しは女房上りか。御近所の人か。直近所のものにて生娘……女房緣付きし事もあれど、今は娘なり。なるほど、姿色優れたるにあらざれば、多分の身代金は出し難けれど、色の滅法白きと云は相場のし所なり。惣じて遊女の身は、數百人の數の中なれば、姿色の好は至極なるに相違なけれど、第一は目立て見えねば客を引惡し。されば色白といふがまづ頂上なり。其は耳よりの事なるが、年齢は廿一二、姿色は十人並、色は其やうに白きとして、八十兩ほど借りたしといふに年季は何年なるべきやと尋ぬれば、源七額に手を當て、様子の大略は其にて知れたれど、代物を見ぬ內に相場は定め難し。速急との事ならば、今宵此より御同道申して、その女を見し上卽座の御相談すべく、今宵に限らずとあれば、明早朝、お宅まで伺ふべければ、其旨を先樣へお知らせ下され。いづれとも御都合次第といふ。お花行詰まりて無言なりしが、かくては當人我といふ事を曉られむ、曉られじと、推して何氣なき躰を見せむとて、俯けし顔を擧ぐれば、源七の眼の中に笑ふ色浮かむ如く、南無三と思へば汗湧きて背を流れ、頰熱して胸騷ぎ、いよ〳〵仕損じたりと思ふほど平氣を粧ほひ難くて、わくつく中にも

思案すれば、明日に延ばしたりとて、いつまで我といふ事を裹むべき。明日になればとて不能言事はいひ難ければ、端緒の解け序に今こそと、此一時を一生懸命、其人は我と言放てば、源七大方はかくぞと前に察したれど、わざと驚き、其は奥様か。淺ましや何故にさまでの御分別はしたまひしぞ。我其道にしていふは可笑けれど、遊女の身の地獄の苛責、鬼の心になりて罪業を作らねば立行かざる渡世。願はくばその御分別を仕替へたまへ。尙又このお世話申しては、亡くなられし新右衛門様へ源七が一分立ちませぬと辭めど、最早此所までに乘懸けてはお花の氣強く、遊女の身の苦艱は我とても知れば、醉興遊戲の身賣にはあらず、了簡も分別も仕盡しての上なり。新右殿亡くなられてより一倍の不如意に苦しみ、諸方に借財出來て足搔ならざる始末。其も好けれどこの兒を抱へて女人の身は稼ぎの業なければ、眞實の話は、いふもさもしけれど明日の食事も覺束なく、とても餓ゑて果つ可き身の、世間の何の恥辱あるべきや。新右殿が遺紀念の此子を干死にせむは、我萬人に情を汚されんより、數十倍も亡夫に謝罪なき仕誼なれば、我奉公して此子は里に遣り、見事に成人させて細くとも前田の家名を繼がせたき了簡なれば、偏にこの世話を頼み入ります。斷然亡夫に義理立して否みたまはゞ、外の手に懸りて身を賣らむに、賣れまじき事はあらじ。知らぬものゝ惡黨によい事されて、不便の目にもし遇ば、新右殿は其時誰を恨むと思ひたまふぞ。とても賣る身なり、源七どの骨折て下されと、お花の決心動かざるに所爲なく、

新右衛門様には相濟まざれど、奥様のお言葉にも一理あれば、源七お世話を申すべし。さしあたりては龜和泉といへる樓に口あれば、此に話を附く可けれど、吁！ 身を賣らむといふ女にいづれ可哀ならぬはなけれど、以前を知りて今を存じたる此方様のお身上、餘りのお可傷に何とも申上ぐべき言葉なし。只此上は情ある大身に根引かれたまひ、御全盛に廓を出たまふ、お見送りの同勢の尾について、我も皺枯ながら性一杯わめきて、御祝義申上ぐ可き御運のほどを待ちまする。錦の裏なる廓の內幕、血池鍼山地獄道の苦艱に、お身體を損はぬやう隨分お大事に遊ばしませと、實意より滴る言葉に、覺悟の上なるお花も女氣の脆く、飜るゝ涙を亡夫の位牌に、名殘の水盃と手向けて、いよ〱奉公の年季三年八月の證文にて金八十兩。

廓奉公の身に用なしと、錢高のものとてあらざれど、賣餘しの家具なきにあらねば、見倒屋を呼びて骨折障子、破壞火鉢、夜衣薄團、破襖、鍋、釜、膳、椀、鼠不入、火消壺、一つ竈、洗濯盥、手水鉢まで、座敷口に押並べて評價をさせけるに、呆るゝばかり無情なる事をいひて、强ては引取りたくもあらねど、折角此まで參りたるものなればと、足下を見てぞ二束三文の相場を附けゝる。此方にてはこの雜物不用なれば賣もすべきに、鐚一文にも引取人なくば其までの事なり、邪魔臭ければ賴むでも持て行て欲きほどなるに、とかく女子心は未練にして、法外なる見

倒しを口惜しく、其ならば賣るまでもなし、合壁へ紀念分配にせんが優しなりとも思へど、此貧の中なれば多少かの補欠にはなるべきと、しぶ〳〵ながらいふなりの價値にて得心すれば、見倒屋の老人麻財布の中より緡錢を四つ五つ取出し、たしかにお改め下されと其所に列べて、小跨走に門口へ出て荷車置て待てる男を連れ來り、攫うて行かるゝものは、箸一筋も馴染の品なれば、其物に心なきも、名殘は惜まれて快心地はせず。男が引擔ぐ四布蒲團は、垢に汚れ肌に擦れ、亡夫の溫度冷わたれる夕より、夜毎に泣明せし中形の磯千鳥も朧氣にて、今は聲をも得立てぬ想なり。襖障子がたぴしと持出す所へ、かねて頼みたれば隣家の女房、三河島の小百姓ながら困らぬ家と推擧して、其里親を同道して、御新造樣此女がと紹介すに、其女人は三十一二の見かけから土氣女房、可笑き圓髷に黄楊の木櫛を挿て、色黒々ときよろり眼、唇厚く鐵漿の際立て濃きは、今日江戸行とての修飾なるべし。律義らしき顏色にその心情も頼もしく思はれ、これはお世話樣な。其方も御苦勞で御座りました。見らるゝ通りの混雜にてお茶も上られませず。お頼み申しまするは此子の事、何分面倒見てやつて下され。さして虫氣はなけれど、咳氣が持病なれば寢冷を氣を注けて、すこし強く咳いたる時などは、お醫者に見せてやつて下されや。其始末は此方にていたします。此二三日乳を吐すやうなれば、その妙藥二三貼此子の懷中にいれたれば、日に三度に一包を飮ましたまへと幼兒を手渡し、帶の間より財布を取出し、小判一枚紙に捻りて、これほ

ど里扶持に渡しておきます。追而衣類は新らしく拵えて此方より屆けますまで、少しなれども小包を出し、襁褓を四つ五つ、持馴れし玩具も此中に入れたり、と又若干か捻りて、輕少なれど家へ土産を買うて行て下され。外にはいふべき事も頼むべき事もなし。唯東西知らぬ乳臭兒を手放す親の心にもなりたまひ、其も不便此子はなほ不便と、くれ／＼もいとしがつて面倒見て下され。この身上の敢果なさは、隣家のお萬殿よりも聞かれてならむが、可憂が上に可憂重なりて、いとし子に別るゝ此心はいかばかりぞと聲曇れば、里親欲眠る子を搖りながら、私とても子を亡くせしにてよく知れり。其子生替はりての此子と思ひ、假初にも疎略にはすまじければ、安心したまひて御奉公大事に遊ばしませ。凡そ里子取るといふは、なか／＼慾徳づくにてなるまじき事にて、夫は非凡の子煩惱、育てむといふ私はいふにも及ばず……吁！　江戸生は格別の御容姿、早く歸つて夫にも見せて喜ばしたさに心急げば、早お暇を申しまするといへば、お花急遽涙を拭ひ、少時待て！　今一度篤と顏見ての上とまた抱取らむとすれば、幼兒夢動きて少し聲を立て、さし延す紅葉のごとき手をお花口に含み、頰に頰を押付け、見る目は鬼も數瞬でかや。時刻々々と源七迎駕籠を釣らせて來り、落着ましたらば參るべし。餘り遲はりてはよろしからずと急立つるに、此名殘盡きじと、そつと懷の子を里親に渡して、諄いほど頼みましたを繰返し、やう／＼駕籠に乘れば、源七外より垂障を下ろし、それと舁出す時、中にわつといふ聲に里親唇を嚙み、源七眼

を塞ぐに、勇ましきは昇夫の懸聲。

歸咲のお花麗はしく、店名を佐太夫と呼びてその突出しの道中姿は、萬客の心を一攫に捞りしと聞こゆ。然も ある可し、此女には着眼ありとて樓主大奮發に奮發み、此一夜を女一代の大事と、入費の莫大なるは此樓前後に又なき例なり。お花はまた思ひけるは、姉の大名の奥方とて、見たりや、行列の威勢は飛鳥も翼を歛めむに、我その妹として味噌漉携て腐らむは、神ぞ、神ぞ、神ぞ口惜からずや。さりながら運拙くして夫を持てば皆死なれ、これまでの萬事末凶ならざるはなく、末々の辻占悪ければ、正路の立身出世は覺束なき事なり。凡そ人間に生れながら、良かれ悪かれ其名を唱はれずして土に返るは、蝿の夏に生れて秋果つるがごとし。芳名を傳へずばあられぬ名にてもあれ世に知られ、其れにて姉に楯つかむも面白かるべし。われ最初の一歩を踏違ひ、女人は貞操にあるべきものを、白銀に甜められ黄金に抱かれ、大事の〳〵戀と情を散々に玩弄ばれ、砂糖の甘味なく、茶の香氣なく、魚にしては脂膏ぬけたる三月比目魚、形はあれど其性なきは、其物にして其物ならず。女にして女にあらず、女ならざれど男にもあらず。外貌全備の不具なるこそ淺ましけれ。いでや! 不治の不具となれるからは、大不具となりて世間を氣味悪がらすべきぞ。

江戸の傾城がどれほどの事あらむ。島原に鬘から仕立られ、やがて里花と全盛極し京女郎が手管と色姿に、見よや、この吉原の天を地にし、何百人の女郎があり來りの古手練を性なしにして、山ほどなる大臼茶を碾かせ、揚句は江戸中の甍高なる家宅土藏を一揉に推潰し、勘當帳に反古の價を下げばや。その着手の今宵なればと、思ひを凝らし、心を籠めての色粧、鏡に我と微笑をくれて思はず顧視りぬ。

五月半の夕暮やゝおもしろく、嫖客一時出盛る五丁町一圓に人波打て、どろ〳〵と待合辻に馳集る大勢の足音に、何かと見れば、突出し佐太夫が道中！　白絽の目を一面銀絲にて拾ひ、背筋は四寸巾に紅絲にて拾ひ、此に違鷹羽の定紋を金絲に盛上にしたるは、御簾に裲襠なり。領には小形銀鉤を附け、五色の下絲は地を曳くばかりなる眞藥玉を釣下げたれば、八文字の高足のツしいりと踏下す毎に、此玉背に搖めけば、中に仕込みたる蘭麝四方に薫ずるやうに巧みぬ。突出しには垂結帶ならざる制なれば、目も綾なる大和錦を總角に引結び、その餘れるを兩肩にはねかけたり。前驅には花新造二人、いづれも愛々しき美色を選び、藥玉を色染にせる白絽の對衣裳、後に引添ひては小才覺あるらしき壯俊、花には露をいとふさしかけ傘、その後に藥玉の對衣裳なる二人禿、太夫の左右には番新佐山春日野おの〳〵姿を粧りて据腰に練行く、後詰は遣手若者、その後は魂魄脫殼の士農工商ぞろ〳〵と群集して解けず。警護の鐵杖清爽に霞み、箱提灯の火影美麗

に輝りて、遠く之れを眺むに下界の仙女天上夜遊の宴に赴く風情あり。えヱ！ 黄金が欲しいと喚くは誰ぢや？

おぼろ舟

「おぼろ舟」。これも亦二十五年頃の作品で、代表的な短篇である。淺草第六天の裏門に、律義な雇人御請宿と見せて、實は田舍行きの娼妓出稼き、其の他月ぎめの妾の周旋などする家があつて、そこへ二人のサラリイマンが冷かし半分女を見に行くと、かねて示し合せてあつたので、樣々の女が多勢顏を並べてゐる。いづれ劣らぬ糸瓜(へちま)や唐茄子(たうなす)ばかりである。その中に唯獨りお品のいゝ、幼(うぶ)な娘があつて、紳士の一人がそれを月決め(つきぎめ)の約束で月に何囘か、堅氣な母と二人きりの彼女の家へ通つてゐるうちに、次第に女の純情に引かされて行く。果は彼女の思慕が慕つて、男の出張中に病み窶れて死んでしまふといふ、哀れな物語である。上半の首實檢のところなど、相變らず洒落れた筆で興味ふかく描かれてあり、時代の姿もはつきり出てゐるが、ここでは後半だけを出すことにする。

おぼろ舟といふのは梱おぼろ富士といふやうなもので、純情な少女の戀を形容したものであらう。

おぼろ舟

松本は紙幣(さつ)一葉取出して母親に渡し、お手數ながら御酒を。肴(さかな)には所望なし、何なりと見繕う

てといへば、承知して、お藤、私は横町へ行けば、其間此處にてお相手をと立上れば、あれ！私が參ります。其には及ばぬ。直に行て參りますれば、少時お待ち遊ばしてと、母親は階子を下りてゆく。お藤は一人殘されて、片隅に小さくなりて、袖を搔合はせ俯向きて、針の蓆に坐る想ひなり。男は「ふらぐらんど」を卷きながら、お藤さんと呼べば、顔を一寸擡げながら屈みて、小聲にはいと答へ、居たゝまれぬばかり羞かしがる風情を見るに、如此處に――目には見えねど――情兒が舞狂ふなるべし。お藤さんとまた呼べば、前の如き擧動をして、はいと返事も果てぬに、一寸此處へと輕く疊を打ば、其を見ぬやうに見て、會釋して俯向きぬ。この時のお藤の思は、夢に惡鬼に攫らはれ、盜人に白刃揮りて逐はるゝなり。二度まで呼ぶに、石のやうになりて動かねば、松本も察して强ては言はず。卷きし煙草をふかしきりて、茶を注いで一杯にてしたみたれば、急須を取上、何氣なき顔して、これにお湯をさして來てたまはらぬかといへば、お藤も何氣なく立上り、急須を持て下りける間に、松本は前に在りし茶盆を我右側に移せしは、難なくお藤を引寄せむ詭計なり。しと〳〵とお藤は上りて見るに、茶盆の位置可笑處に替りたれど、さ程の事ありとも心付かねば、羞かしと思ひながら、急須持つを好機にすつと行きて茶盆の前に跪けば、電光石火！　男の手は、はつとの間にお藤の左の手首に懸り、ぐつと牽れて無理やりに膝を並ばされ、遁むにも女の力の敵ひ難く、顔ばかりけ他所を向けど、暖鳥の所爲なし。あれほど呼

ぶに、聞えながら何恨みありて來てはたまはらぬ。此處に唯二人さへ心細きに、遠く離れて居て、話一つせぬにいよ〳〵寂しく、長居せば鼠に喰はるるも知らず。其内にまたゆるりと書參るべし。今夜はさらばと、お藤の手を放して歸支度を見すれば、お藤は可愛や當惑顔して、只今お歸しまをしては私が母に叱られます。少時、せめては母の歸るまで、何卒々々と詫れば、松本は微笑を含み、折角おつしやれば歸る事は見合すべし、其代りお前も此處を遁て下さるなと座れば、お藤は男の心を解せしか、につと笑ひながら顔を背け、母に叱られますと、朱唇を袂に裹めば、叱られなば詫びて進ずべしと、傍に在りし火鉢を二人の前に直し、この寒いにと、引こむるお藤の手を執り、いかなる戀をしてかくは細りたまふか、少しは聞かせたまへと指を撫づれば、存じませぬと手を袖口に引入れけり。格子の明く音にお藤は惶てゝ飛退き、もとの席に復らむとすれば、男は手招きして、聲を低め、まだ酒の燗やら膳立やらに暇取るほどに、其間此處へ〳〵といへば、お藤は階子の昇降口をのぞき込み、拔足して男の傍へまた寄りけり。何がそれほど母親が恐いかと聞けば、何も言はずに笑む顔より、愛嬌液體ならば滴るべし。

肴來るまでまづ一杯と炙海苔にて勸め、軈て椀と二三品おし列べ、お藤がわなゝく手の酌を、其味何ともいへぬ佳肴にして、男は二三杯對なしに傾け、盃洗なければ此まゝ御免と母親に進ば、

戴きますと受けて、獨語のやうな、家暮にて成らぬ口なればといへば、お藤は合點して擬似ほどに注けり。男は如在なく、お肴をと皿に手を懸れば、惶てゝ壓へ、甜めるほどの口にお肴はいりませぬ。まづ貴下と其猪口を戻せば、お藤に注せながら、眞實成りませぬかと尋ぬるに、母親は首肯き、亡夫は少々成りましたれど私しは一向不重寶なれば、對手なきゆゑ甘く飲めぬと、不斷獨語きましたと笑ふ。男も笑ひて、性來の嗜好でなくては、獨酌は味のなきものなり。お藤さんは？　一つさしましやうと飲乾しぬ。進れてお藤は手をも出さず、私はといひ懸けて會釋すれば、折角あなたのお進遊ばしたを、受けぬは失禮なり。失禮の不禮のといふほどにはあらねど、少しは成るならば對手を頼みたし。やあ！　見事々々といひながら母親を見向けば、母親は娘の顏を見て笑み、親父に似て娘は少しは頂く方なれど、妙齡女の飲むは憎しとて、親父も許さゞりしが、

　我等の及ぶことでは御座りませぬ。座興にいひしを、辱しめられしかとお藤はしよげたり。松本はまた盡して、御母樣に進る所なれど、汁粉の方ならば無理强は御迷惑なるべし。また一ツお藤さんの見事なお手元が見たしと進せど、前に懲りて手出しをせず、貴下まづと徳利を持てど、男は肯ずして頻に勸むるを母親見かねて、お藤、私に替りてお對手をせよ。苦しくならぬほどは戴けとあれば、それ御母親の御許容と盈々注げば、殘少なになりけるを見て、母親はその徳利を持ちて座を立ちぬ。お藤はまた殘されて、其人の傍の可厭にはあらねど、初見の馴染薄きにおの

づから座敷のしらくるを、紛すべき接應もならずして、ゆかしきながらも可恐は男子なり。何を言はれ、何をさるゝか知れぬと思へば、此處に其身の在る空はなかりき。下にて藤やと呼聲すれば、やれ嬉しや血路を得て、いそ〳〵と男に會釋して下けり、長くは待たせず昇來るを見れば、お藤に熱燗の銚子を持たせて自身は出て來ず、物堅くとも年齡だけに母親は粋なりと男は感じぬ。お藤は返盃してお熱いのとも言はず、酌せむとせしに、德利の熱に持ちこらへず、はつと落せしごとく下に置き、麁想を紛らし笑の身を捻りて、「はんけち」をあてがひ德利を持たむとせしが、きたなしとや思ひけむ、袂を持添へての酌は、處女なる機轉なり。此も珍らしき肴の一つに松本は快く傾け、御母樣はと聞けば、呼で參りましやうかと立懸るを、月に松は風情な時あり、邪魔な時あり。御母樣居ては、酒を過さば小言をいはれむかと、氣がつまりて飲めど身に染みず、それよりは二人して中好く。其處に居ては遠くて話が通ぜず、此處へとまた傍に引寄せ、飲めぬといふは助てやり、其恩返へしに助けさせ、此銚子も雫殘さず虛たれば、取に下りむといふを引留め、時計を出して見れば十時なり。長いは御母樣も御迷惑、もはや寐まんと傳へたまへといへば、海棠雨に頷きぬ。

戀は阿片の如し。其味を知らねば知らでも濟むべきに、唯一時の一口より心亂れて、二月も

花も何でもない事戀の道に、世界廣けれども萬物多けれども、是に換ふ可きものなく、此一念驕るほどにおもしろき世も氣味なく、果敢なく、愁く、恨し。男、女、智、鈍、何れにしても初戀の對手の懷かしさは、死しての曉白骨に其人の名を記せし處は、灰の中にも焚殘るべし。我より戀ひしにもあらず、或は好ましからぬにしても、情愛を教へられし人は、朝夕の思ひに戀慕の面影去らず、まして初見より幽しきには、其後の熱着一層深きの理なり。お藤は十八年の今まで、一々知らざりし事を覺えて、二十四時夢と現に責められ、眼に其顔ちらつき、耳に呼聲聞えて、あるまじき事ながら、母親にそれとなく松本の噂をしかけて、來ぬ時の消悶にぞしける。多くも度重らねど、雄物なる男の打解けたるうれしがらせに、つひ笑ふ事あり打つ事あり、叩く事あり抓る事あり、雜作なく他人行儀を崩され、肉身にも憚るべき、我儘氣儘をいへどいふなりに通され、甘ゆればあまやかされ、父母のとは別物の慈愛に甜られて、憂は此人に語り、愁は此人に慰められ、おもしろき手管にかゝりて、命はいらぬ主さま參る。

　早おふぢの馴染めるを見て、母親は松本の對遇に出ることとなければ、水不入の小酒盛、少し醉がまはれば男は其處に倒れ、お藤の膝枕して、頭が痒し、五分に摘ばやといへば、短くはしたまふなと、鬢梳の油を拭きて、雲脂を取るやら梳くやら、其後は耳垢の掃除して、男の眉を撫でながら、此眉毛が欲しやといへば、お前の眼と取替へて、世界の男を南極から殺して見たいと、卒

のなき挨拶に返しかねて默れば、松本はお藤の膝を叩き、此間一處に連し男が……。三谷樣か。はや名を覺えてか、其はいよ〳〵油斷がならぬ。三谷が心底お前に焦れ、是非今一度伴へといひしを、誰の思も斷腸ものと、粹を通して此次には連むとまで約せしが、おまへもどうやら最上の稻舟、迂濶とは伴れ難し。平常堅い口上に氣をゆるさせ、露顯の上は其日の出來心とぬけるつもりかと、お藤の手を握れば、痕跡もない濡衣、此方よりまづ心の知れぬは誰樣かなり。此前夜はどうなされし事ぞ。御酒も澤山はあがらず、平常のやうなる機嫌にもなく、物思はしき風情にて、ふいと夜更ての御歸宅。たゞ用事があるとのみにて、仔細をおほせられねば、必定此身に落度ありて御氣を損ねしと、どれほど母に叱られましたか知れず。其に引替へ貴郎はさぞかしの御愉快。其は棚に上げて、此身になき名を立てゝ困らせ、澤山お慰さみになさりませ。さりがたき用事のあればこそ、夜深に歸る不愉快を察せぬか何ぞのやうに、とやかくいひ囃すは、扨は今夜も早く歸れとの謎なるべし。明朝までゆるりとせむと、樂みにして來たりし身の歸りともなけれど、三谷の奧樣が折角のお言葉なれば、箒の立たぬ間に參るべし。此方ばかり惜き離別の名殘に、お可厭でもあるべきが一服つけて下されと、露西亞革の卷莨入をお藤の面前へさし付ければ、拂除てそしらぬ顏の外見なり。松本は莨をとり出し、是れをつけてたまはらぬか。返事のないはお否か。三谷樣の外は誰のいふ事もきかぬといふ約束ありしと見えたり。無理に賴まば怒る男あらむ。こ

ころざしの煙草ならでは喫むも味なし。早く返りて獨寐の肌寒く、風を引く夢など見るべしと起上れど、お藤は手強く、見向もせざれば、立上りて帶しめ正し、窓下に疊みてありし羽織を索せど見えねば、羽織を知らぬかといへども答へず。お藤の後方へまはりて見れば、袂の下に隱したるを心付かぬ風して、なるほど思へば羽織は衣ては來ざりしと、帽子を冠りて梯子の口までづかづかと行けば、物をも言はずお藤は走付き、其手に縋りてぐつと引戻すまゝに引かれ、三谷様への御傳言か。何なりと賴るべしと立懸りていへば、お藤は其裾にとりつき、俯首ける様子を怪しと見れば、袖を嚙みてすゝり上げ、どうぞしたのかと尋ぬる言葉に、啼聲立むとすれば、松本は後方より抱上げ、脇の下へ手をやり、それ！ それ！ 今啼た烏がもう出て笑ふ。

此夜の寢物語に、五六日は煩忙て顔を見られねば、眼に染入ほど思入見置をせむなどゝ戯れて、其朝は休日にもあらぬに、長寐せし上午後まで遊び、美味をとり寄せて母子を喜ばせ、お藤が長らく芝居を見ぬといふを不敏がりて、いつか一日は好む劇場へ連れむと思ひしが、人寄場は觀る目ありて、會社のものに出遭はむも知れねば伴ひがたし。是れにて二人して見物したまへと、外に小費まで添へて母親に手渡し、今日は是にて歸るべしといへば、母親は、男子といふを持ちし事なく、また良夫に別れてよりは、世間に賴む處なき女人ばかりの心細さに、いつもいつもやさ

しくする松本を、婿か我子のやうに懐しがり、今日も今日とて嬉涙を浮べて、さらば御用の濟み次第、一日も早くお顏見るのを母子に樂みにお待申して居ります。此頃のやうに夜毎の火事沙汰に、この家內なれば其が苦になりて夢さへおち〳〵結ばぬに、貴下のお出の晚が此の身の極樂、氣丈夫にて朝までぐつすりと、よい保養を致しますと、それより離別の挨拶濟めば、お藤は一寸と呼留め、一散に二階へ昇れば、用ありげなりと松本も尾て昇り「遠方御苦勞」などをいはば肯かぬぞといへば、お藤は兩眼に涙を浮べ、松本の手に縋りて、何とも言はでつれ〳〵と顏を見護るに、男は心得難く、怪しからぬ樣子かな。心元なし、用とは何事なるか、早く聞かせよとあれば、お藤は袖にて眼を拭ひ、貴郎の今日の樣子こそ一々合點なり難けれ。もしや此まゝの御訣別にと、縋る手に力を籠めてはら〳〵と涙を滴せば、松本は呆れ顏にて、思ひも寄らぬ！　何を見當にさる事を考へつきしや。長くて一週間とは待たせじといふに、それまでに芝居へ行て、とつくりと見物せし上、狂言の筋を面白く話して聞かせたまへ、其を今度來る日の樂みにして居るぞと、袂より白絹のはんけちを取出し、涙を拭けといへば、お藤は袂より對のはんけちを出して眼を拭ひ、さうおつしやるを疑ふではなけれど、きつと見捨てゝたまはるな。天成愚鈍は悔ゆともせんなし。唯此女不敏と覺召して、必ず見捨たまふな。もし五六日の中にお入來がなくば、神々樣かけてお恨み申ますする。心には思ふ事積りて山を成せど、口不重寶にはあり、よしや言うて言

はれぬ事なくとも、女の口からとやかうと羞かしい。勤の身のする事と、萬分の一を得申さず、何事も差控へて居ります。其心中はよく了解て居ると、かねぐ〵おほせらるゝお言葉が、何よりの依賴なり。いふまでもなき事なり。約束せし日より必ず早く來るのを見て、今更のやうに此男の信實に喫驚すなと、肩を打いて別れぬ。

指折りて待つ日は長く、母もともぐ〵にいひ暮して、遲くともいひし日限來れば、今宵こそと化粧に心を凝らし、二階は晝より塵埃を拂ひし毛氈を敷き、火鉢の灰をふるひ、暮れかゝるより洋燈を點して、氣もわくわくといつもの時刻過ぐるに見えず。お藤は二階へ昇るやら降りるやら。母親は格子明けたり立たり。果ては火鉢の前に顏を見合せ、推測の數々を語盡し、今宵はとても賴みなし。十二時過ぎたればお藤は母親を寢かして、我は二時まで床に入らざりしが。此上は明日を賴むの外なしと、うとぐ〵寢入りても、鼠に目覺まし風に驚き、夢にはそれが格子の明く音なり。翠日も其翠日も剩啄なくて、離別てより十日は無雜作に過ぎぬ。此間に約定の一月經ちければ、かの請宿より人來りて、先の旦那樣御出がなくば、また外に許多もお客樣あれば目見に參らるべしと再々の使なり。是を聞に、外妾の置こと一月を一期として、男其女が氣に入らば、末々長く通ふは勿論の事なれど、心にいらぬか、または外に事情ありて、廢止にせむとするには、

その女に仔細を語るに及ばず、給金拂ひし月だけ通ひて、次月より足を止むれば、それにてさつぱりと關繫絕ゆる事默約なりといふ。受宿は我周旋せし旦那の通ふ間は、月々女の家へ口錢とりに行くなり。其序に松本の來ぬと聞きて、目見に來よと頻に勸むれど、お藤は一天下松本に見替ふる男なければ、是に心を傷め、其人の事氣に懸れど、もしいひ出して母親が、此身に飽きたらむ人を待つとて再び來たまはんとも覺えず。今日の活路に逐はるゝ身上なれば、了簡せよといはれなば、とても逃るべき道なし。我が身一人ならばともかくもすべけれど、大事なる親を干死にはなし難く、つまる所は外の男の玩弄物にならねばならず。其上に、外の男を定めてから、萬が一松本樣が思ひ出されて尋ねてくださらば、とりかへしのならぬ遺恨は、死ぬるにも替へ難く、今想ふさへくやし涙を催せり。御母樣も常任おつしやるごとく、あの方に限りては、嘘無根をいふ事なく、眞實あり餘りて外面に顯れ、誰にもやさしくて深切なること、今のわかき人に似合ずと譽めたまへり。あれほどまでに見捨ぬといはれしものを、よもや見捨はしたまはじ。お出あり度もいろ〳〵御用に取紛れ、それに相違あるまじ。さりながら其ならばお手紙の一通は下されて——この身の苦勞性なを御存じありながら——安心させてたまはるべきに、それさへなきはもしやと思ひながら、また種々と身勝手よき樣に思ひ直せど、いや〳〵男の心と、狹き胸は亂麻のごとく、斷然此判斷は御母親にと、口頭まで走りかゝるを呑込みけり。母親の思ひとても變らず。

あれほどの方はまた有まじく、お藤のいとしく思うて居るものを、今更心に染まぬ人に冊かせ、氣弱き子なれば病氣など煩はれて、……さりながら此儘誰を待つともなしに、二人面を並べて營業なしには暮しかねれど、此度旦那を取らせしさへ、お藤の手前恥かしくもあり、氣の毒にもあるを、また新らしき男持てとは、どの口にていふべき。賣女の母親根性になりしかと娘の思はくもいかゞと、これも思案に屈しぬ。其月の十五日近くになれどそよとの音信あらざれど、母親は外に旦那取せよと壁訴訟にもいはず。日毎に竈の烟糸のごとく痩すれば、近所の人に賴みて、此程より鼻緒の前緒を撚る事を始めて、麻に手の皮剝きながら、千も撚りて十錢不足の內職。お藤は見るに勿躰なく、母の手業を見傚に、私も手傳ひましよといへば、妙齡女の遊戲にもする事にあらず。手掌革のやうになり、指は太りて節立ち、これより出世すべき姿の損するほどにといへば、かゝるさもしげなる事したまはずとも、賃仕事をなぜしたまはぬ。それならば針の運動鈍きながら、稽古がてらに私も手傳ひ、其上に此にはましたる賃錢も得らるべきに。其をお前に敎へてもらはうか。かく貧窮に暮しても昔時に變らぬお前の世間不見。縫仕事あらば馴れたる事とて樂にもあればいかで爲すに置くべき。今は世上一般不景氣に寂れて、其職のものが安値に仕事をとれば、なか〳〵素人の手には渡らず。この鼻緒すら望み手多く、知らぬものが行たとて、問屋にて仕事はくれぬほどなれば、塗師屋の女房のを分て貰うた仕誼と語れば、お藤は聞に身も世も

あられぬ切なさ。身を顫せて、お母様！　えゝ喫驚した。私は外の旦那を取ましよと涙を浮ぶれば、母親は心快く笑ひて、此の世にも一人松本様のやうな人物あらば、お前が可厭でも旦那にさすべし。さもなくば此母が不承知と、お藤が心にもなき言葉も我ゆえにと、其心中思ひやりて、顔を背けて目をしばたゝけば、娘は聲を立て泣入りぬ。見るに不敏や、おのれ！　其男、引捕らへて逢せてやりたし。

お藤の母は子を思ひの闇に、煠けたる小提灯照らして、上野花園町にやうやう松本の住家を尋ねあて、格子戸の戸外に佇み、もしや遠慮すべき人ありてはと、戸内の様子を窺ふに、火影ありながら人氣なきやうにて沓脱に老女の穿くかと思はるゝ、古びたる桐の後齒脱捨てたり。家が違ひしかと、また提灯を擧げて見れば、表札の番地姓名、これに紛れなしと、小聲に案内すれば、誰方様といふは、靑年女の聲にあらで、出て來しは果して五十餘の老女、衣類麁末にしてしかも前垂懸なり。人品も下賤なるに、扨心付きたり、庸婆と二人の家内と、松本様のいはれしに違はず、是ならば多く憚る事なしと胸を落付け、旦那様御在宅ならば一寸お目もじ願ひたく、夜中不躾ながら參じました。それはお生憎な、旦那様は御留守でござりますといへば、お藤の母は老女の顔をじつと眺め、殘念らしき面色なるを、氣の毒に思ひて、折角のお出の處を……、まづおかけな

されて一服遊ばしまし。して貴孃は何方樣。はい西黒門町よりと、お歸りの上は御傳へ下されまし。此はいかいお邪魔を致しましたと、此家探し當し時の元氣に引替へ、しほ〳〵と行く姿、枯柳霜に惱む池の端を過ぐるに、水禽の鳴音身に染みながら、風に惱へず寸白も起さず、子を思ふ一念これにつけても難有し。明日の夕暮また尋ねて行けば、昨夜の婆がまた出て、まだ御歸宅はなしといふに先方を疑ふやうにて惡けれどと思ひながら、何處へお越し遊ばしましたのやら、お聞せ下さりませといへば、會社の御用にて北海道の函館とやらへお越しなされました。えゝ口惜や、偖は今朝お立になりましたのか。いへ〳〵、先月の二十九日の御出立、來月の半過には御歸京のよし、申遺されましたと手もなく言放ちぬ。餘りとや思ひ設ぬ事なれば、お藤の母は得心せず、これはまさしく留守をつかひたまふと覺えたり。お藤が生娘にておもしろき對手成ぬに興を薄がり、外に外妾をお拵へなされたを我等が聞きつけ、面倒なる事をいひに來たとお覺召されてお逢なされぬのか。なか〳〵去事にはあらぬを、地獄には慈悲の鬼なし、さもしき事をする娘の親なればと、邪推なされて隱れたまふかや。身貧にはならぬものぞと、無念の涙を呑むでぞ歸りける。かくまで賢き了簡つきながら、一日置てまた花園町を尋ねぬ。何事かよく〳〵深き仔細ありてなる可し。衣飾のよからぬを自ら耻ぢもし、また松本が家内のものゝ手前いかゞと斟酌して、晝間は避けて行かざりしが、いつも夕暮ときまれば、其人時刻を量りて不在すべければ、今日こ

そは一か八、身にも人にも替へ難き一大事。會社よりの退社を窺ひ、否應なしにお目に懸りてと、三時過に、老女がいやな顏を承知にてまた尋ねしに、其口上いかにも眞實らしく、坐敷まで見せてもらひしに、主人不在の有樣に極まれば、お藤の母は面目を失ひ、此までの不禮をひたすら詫ぶる言葉に、動作に、面色に、心の愁見ゆるを、老女はいぶかしみて、この間より見馴れぬ貴孃が度々のお尋ね、お名を窺へば唯だ西黑門町よりとばかりにて、何の事やら仔細わからず。今旦那樣が御遠方にありと聞かれて、遽に氣落を遊ばす御樣子、一圓合點が參り難し。いかなる仔細やらお話なされて惡からずば、委細をお聞せなされませぬかと、情籠れる言葉に、お藤の母はほろりと落して鼻をつまらせ、如此事は貴孃にお話し申して、よいやら惡いやら存じませねど、折角のお言葉に甘えて何もおつゝみ申しませぬ。先月より一女の藤がお世話になりまして、今月は旦那樣のお出なきほどに、母の口より申惡くけれど、一女の樣子を見るに、旦那樣をお慕ひ申すの餘り、食事はいたさず、夜は寐まず、ぶら〲と煩ひの床に倒れ、日ましに瘠細るを見につけ、お察し下さいまし、私は氣も半亂、此身は長く生きて望みなけれど、壽命長き娘は、可愛や十八ばかりを一期にして、殺しともなけれど、其良藥は旦那樣、もう廿日と待たずして花は散るべき景色、くちをしや！　無念や！　助くる手術あらば敎へたまへかし。

お藤が母の物語に儕婆も貰泣して、なるほど旦那様にお逢せ申したけれど、函館へ御巡視の役目にてお越しなされ、一處に足を留められねば、お手紙をさへ上げ難し。是は私等の思案に及びかぬれど、今お話にお同伴がありしよしなるが、旦那様が無二の御別懇といふは、瀬戸物町の三谷様といふ御人ならではなし。思ふに其時のお同伴は是なるべし。應、三谷様とおほせらるゝからは其人なり。參りてお願ひ申すも苦しかるまじきや。よい段では御座りませぬ。番地はしかじか。鐵道馬車にて何處まで行き、どの角をどう曲り、三目の右の横町の中頃と、懇に教へられし通りを其翌朝辿りて折よく三谷に遇けり。

男は流石に心强き所ありて、儕婆のやうに迂濶とは淚を滴さず、たとひ處女にもせよ、今時戀病ひとは時代過て合點がならぬと、心中にはこれを狂言のやうに思ひなして動ぜぬ景色なれば、母親は頼の綱を切られて、いふべき言葉につまりしが、其よ！ 至誠には水中の鐘にも聲あり、此一念などか通らざる可きと、目色變りて膝は進み、旦那様に逢ひたしとは、またお世話になりたき心かとのお覺召はさる事ながら、神も佛も照覽あれ、子に替ふ可き寶はなきものを、其命助けたきばかりの此苦勞、長くとは申さず、只一目にて滿足すべし。此事もし協はずば、無殘や、娘は思死に死して永劫輪廻に迷ひ、私とても前途の樂みをなくなし、生効なき身の何日まであるべき。母子二人の命を助るも殺すも、貴下お一人の御了簡にある事、二人見殺しにして不敏とも

何ともお覺召さぬかと、あとはしやくり上げて袖を濡らしぬ。三谷は默然と手を拱きて下俯くは、投懸けて頼む色なる藤に、松も捨難き思ひなり。母親は曇聲にて、老て此苦勞をするも、誰をとてわが身の外に恨むべき方なし。娘に淺ましき事させしが我畢生の落度なり。それも當人心に染まざりし男に逢ひしなば、可厭といふを無理往生に得心さするに、かほど胸は傷めまじきに、なまなかやさしき男に逢初めしばかりに、かうした事になりましたと、哀れに搔口說ば、三谷もさらぬ躰に鼻かみて涙を紛らし、一々至極なる言葉なれど、其はかうなりたる今になりては、いふても詮なき事なり。まことお藤殿がさほどまで思ひつめし事ならば、いかにもして逢はせ申可し。なれどもお藤殿がたしかに戀病にきはまり、自身の口よりも逢ひたきよしをいはるゝか。乙女心の萬事に羞らひ、なほ又内端なる氣質なれば、親にも思ふ事をつゝみ、獨りくよ〳〵と物案じする性分なれば、旦那様に逢ひたし、逢はせてくれとは得申さねば、最初の程はそれぞとも心付かざりしに、旦那様のお出があるやうに申せし日二日三日過るより、私に向ひて、旦那様は如何遊ばされたやら、もはやお出はなき事かと、日に四五度も尋ねしが、お音信なき日數の積るにつけ、一時間に何度といふ數を知らず。たゞ其のみをいひ續けて案じ煩ふを、明日は必ず明後日は必ずと、よきやうに挨拶しながらも、若やと容躰に心を付て見れば、朝起るより柱に凭れ火鉢に倚り、座れば其まゝ動くことなく、半日一口も物言はずに何やら思ひつめながら、間がな隙がな、

旦那様はどう遊ばされたのやら、もはやお出ではなき事かと、是ばかりは聞くにうるさきほど尋ぬる上、古き新聞など取出して、少し讀みては深く考へ、心細げなる溜息つきて其も打遣、袂より絹のはんけちの疊みたるを出して、膝の上に置き手にとりあげ、顏におしあて懷中に入れ、片時もこれを放さず、夜は枕頭におきて寢つくまで眺むるは、せめてもの思出草か、忘られぬ餘か。これ旦那様が下されしものなり。親の口からあるまじき、娘が失徳の段々、必ずおさげすみ下されますなと、細やかに語るに虛言なく、また此女虛言をいふ可き人にあらず。世はさまざまや、お藤が因果、松本が果報。

お藤の事心に懸りながら、三谷は商用の繁忙まゝに、母親が尋ねし日より二日打捨て置きしが、其日の夕暮母親また來りて、旦那様のお音信はあらぬか、お歸京のほどは知れぬか。お藤の容躰日増に覺束なく、霜に畫ける花や、見る間にじめじめと衰へゆくにと、血眼になりていふことも後や前なるに、三谷も驚きて、其明朝不取敢西黑門町に行けば、母親は轉び出て之を喜び、三谷へ挨拶かたがたお藤お藤と呼ば、枕屏風の陰より返事もなく差出す顏は、見るも無殘や、戀に削られ思ひに枯れて、明朝までとは見えざりき。かほどまでとは三谷も思ひ懸けねば、唯呆れて見護るに、色は褪め艷は失せ、頰は皮を殘して眼は深く落入り、小鼻高くなりて凄かりき。されど

哀れなるは、油濃く島田に結ひて、髪に毫に一筋の亂毛なく、薄化粧して唇に嚥脂をさしたり。憫然ともいぢらしともいふべき様なく、戀なればこそと、三谷は此一事にお藤が心中を見貫き、心底より此一命助くる所存になりぬ。當住松本の話に、三谷は兄弟同様なりと聞き、伴合ふて酒飲に來りし事もあれば、お藤は三谷の顔を見るより、其人に思寄せて飛立つばかり懐かしがり、世に嬉れしげなる面色して、床の上にかしこまりて挨拶すれば、母親は傍に此躰を見て、はらはらと涙を流すは、幾日ぶりのお藤の笑顔に、嬉しさ餘りてなるべし。お藤様御心持はといひながら、三谷は枕近く膝行寄り、お見舞のしるしにと風月堂の菓子折を出して、此の中は松本が大好物なれば、お前様のお口にも屹度合ふつもりにて持參せりと、憎いほど物馴れたる口上。つまらぬ物も是ゆゑに良藥、お藤は莞爾と笑顔を袖に陰し、嬉さは之に見はれぬ。母親はなほ喜び、手のない中を炭をつぎ、湯を沸らせ、何卒御ゆるりとゝ幾度か繰かへしぬ。三谷は言葉をあらため、今日何よりのお土産といふは、お藤様、今朝函館から手紙が來て……といひ懸れば、お藤はえゝと乘出し、母親は茶椀を持て走り寄るを、三谷は眼語せすれば、母親は呑込みて、まあ〳〵共は結構な事で御座りました。何も異狀なうお暮し遊ばすかと調子を合はせて、火鉢の傍に戻れば、三谷は其方を顧みてまたお藤に向ひ、今月末には遲くとも歸京るべければ、其旨を此方へ通知してくれよ。この寒氣に母親は病氣もおこらぬか。お藤は壯健でゐるか。定めて此頃は人が惡くな

りて、殺文句など覺えしなるべし。我歸るまでは浮氣せぬやう、時々行きて異見してくれと、四五尺もあるべき手紙に、眞面目な所は最初五六行、あとは殘らず愚にもつかぬことを、長々とお前の惚話ばかり、今日は是非とも御馳走うけに罷越したと、仇口いひて高笑すれば、お藤は眞にうけて、眞實旦那様からお手紙で御座りましたか。勿論！　虚言いひに此處まで何しに來るべきや。さりながら今のお話は虚言なるべし。其惚話の一條かといへば、返事なしに笑むを曉りて、それほど疑ふと知らば、持參して見すべかりしを、我癖としていつも手紙は見ると鼻かみて棄つるゆゑ、無證據となりて御馳走の嘎はぐれをしたり。殘念至極と拳にて膝を叩きぬ。

花ぐもり

「花ぐもり」は「紙きぬた」のなかの一篇である。面白いストリイである。多分飜案であらうとおもふ。とすればモウパッサンの短篇から採つたものかとも思はれる。紅葉流の巧妙な話術と、流麗な文章で書けば優に數百枚の作品となるべき筋のものである。しかし此の作品では表現は極めて荒削りで、文章も他の作品に比べては、さうひどく練つたものとも思はれない。紅葉先生の一代の仕事のなかには、外國種が相當多い。「隣の女」などもゾラの作品だといはれてゐる。眞僞はわからないが、「隣の女」が飜案であるのは事實であらう。「寒牡丹」なども無論それである。「八重襷」がモリエルものであることは、世間周知のことであらう。

花ぐもり

人間一生の春は今ぞかし。咲匂ふ花嫁を座右の觀にして、窓外箱根蘆湖の風景一望の旅店の奥に、初契日をかねて避暑とは旨い事。

新郎は工學士今泉耕造二十八歲、新婦鳥子は十八歲、實家は東京麴町區四番町に隱れもなき金

滿家菅谷某の愛女。貴族女學校に通學中何所やらにて耕造を見染め、此玉を人に奪れじと大學修業中に結婚を申入れ、この六月の卒業遲しと式を擧げて、明日より此所に桃源の別天地を構へ、わざと扈從の婢女を還へし、不自由を忍びて唯二人といふ所に申分あり。凡そ嬉しくて又切なきものは、衆中にゐて馴染なき夫婦といふを、初契月に遁れて世間に憚りなく、新妻の名を呼捨にするもよし、浴後の濡髮を梳きまゐらすもよし、鏡の中に笑顏をならべて樂むもよし、障子明放しても見渡は一面の水誰に愧づべきにあらず。

孖山に懸る雲折から雨を催ほして輕羅につゝみたらんやうなるに、彼絕頂に登りて見たらば、と鳥子が誰にいふでもなく口走れば、耕造は刻烟草を卷きながら、我が背負て後刻に登りて見るべしと笑へば、お潰れあそばすがお氣毒樣なればといふは、耕造は瘦方の華車男なるに、鳥子は眉目美麗上の慾には、少しく肥肉なるを氣にしたる言葉なり。

耕造は先刻取寄せたる麥酒の栓を拔き、下物は無きかと問へば、鳳梨の鑵詰ありといふ。其方が白酒飲むとは違ふ、最少し意氣な物をと笑へば、御好の品を誂へたまへと手を鳴すを制して、其は好もしからず、牛肉にても鷄子にても否はいはず、唯手づからの御料理、小鍋立がして見たい、と無妻中に大望の一ツに數へし忘想の實行を望めば、座敷に七輪など持出して、熱くとも御辛抱遊ばすならば。其はなか〳〵厭ふ所にあらず、願ふ〳〵と悅ぶ。お氣に入らむ事は覺束なけ

れど少しは見覺の西洋料理の眞似方にては？　大に善し。早くとの詞に下女を呼びて諸道具を取寄せ、むづかしき物は存じませぬ。「おむれツつ」か「びいふかつれツつ。」お手際拜見と熱いを厭はず、七輪の側に座を取り、鍋を覗きて中の物よりは蕩（とろ）けさうな耕造の顏色。素人料理の思ひの外なる巧者にて、二品手綺麗に出來上り、玉の額に眞珠（しんじゆ）のごとき汗をかゝせ、味は此にありと舌鼓を打てば、いかなる加減に出來ましたかといふを、富士見軒（ふじみけん）も及ばぬ手際。一口自身にも賞翫（しやうくわん）あるべし、と一臠肉叉（ひときれふおーく）の頭に懸けて出すを、あまり大きければ其半分を。このくらゐかとまた切て薦め、飮まぬ酒まで一口と勸めて、櫻色になりて額に手巾（はんかちいふ）をあてやかなる姿、之を下物に平素よりも過ごしぬ。

譯もなく一日は面白づくめに暮し、夕方には手を繫ぎて湖畔の散歩。行遇ふ人々の誰も羨（うらや）ましげに見て過ぐるも嬉しく、我物になりたての妻を、用も無きにつかふて見るも珍らしく、袂より手巾（はんかちいふ）を出し、汗ばみたれば其汀にて一濯してくれとあれば、心快く受取り、汀に爪立ち、袂を啣へて、玉のやうなる手して、我垢づける手巾を洗ふと思へば、我身ながら我艶福のかくばかりなるに驚かれけり。

戯れてくれんと鳥子が洗濯（せんたく）に餘念なきを見澄まし、後より帶際（おびぎは）に手を懸け、はつと突入るゝ眞似すれば、あれと聲立てゝ驚くを緊と抱とめ、見合はす女の顏色の變りたるに、兎してくれとい

へば、につと微笑を含みて何ともいはぬ處、勿體ないほど難有し。稍ありて、落ちたらば何と遊ばして下さる。我も同じく落つべしと答ふれば、巧言をといはぬばかりの顏色。

妻にして間もなければ、今までにかゝる感情の發表を見し事なければ、罪なれど之も變りて珍らしく、美女は顰みても笑ふても、それ〴〵の趣ありて可厭なる事一ツもなし。花は雨に看、風に看、露に看、朝に看、夕に看るなど、同じ花ながらもまたそれ〴〵に面白し。女を見るに此理を發明して、當分は玩弄になる新妻は不便のやうなれど、快樂は夫婦にもあるべし。

此次の日の朝お手紙とて下女が持來るを看るに、家元よりの音信かと思ひの外、大きなる封筒に今泉工學士、同令夫人と筆太に暴書し、裏面には本箱根何屋方工科學生有志と認めたり。

何事かと披見れば、當地に御滯在とは少しも存じ寄らざりしに、昨夕方令夫人御携帶にて御散步の睦まじさを拜し、一同羨望不斜候、乃ち今日麁酒麁肴の用意いたし置候へば、新婚御祝儀を兼ね、令夫人にも御目見えいたし度、午後三時より例の如くの三字に圈點して、御携帶御光來の程一同待入り申し候と認め、有志總代として可笑き匿名したるは某甲の手蹟と合點して、手紙を鳥子に示せば、讀下して微笑の面を合せぬ。

知らざりき彼奴等も此所に來りつるか。妻を同伴きしを早くも認めて、可憎可妬に譃弄々ら

む趣向とは知れたれど、果狀を附けられて遁げむは無念なり。とてもの事に反討にして一泡吹かせてくれむ、と鳥子に所思を語れば、酒など深く召上らで、日の暮れぬうちに早くお歸宿といふを腸に染ませて、時刻に學生等の宿をおとづるれば、挨拶もせぬ内から、女臭い奴が來たと喚くもあり、目凹頰瘦漢！之を座右に置きて嗜みたまへ、と髭鏡をさしつくるもあり。茶も一ツ出さでまづ十二分に弄殺し、やがて大鍋に牛肉を山ほど盛上げ、わざと茶呑茶碗に酒を勸めて、此快樂また得べけんやなどゝ、何言ふにも針を持ちて傷められぬ。

　足下の明きうち無理に暇乞ひして立出づれば、明早朝お邪魔ながら未明に鷄子一俵持て寢込に推參すと、同音に威されて遁出し、湖水の晩景を餘所に道を急げば、汀に一艘の輕舸横はりて、折から纜を解かむとするは、農民帽子を冠りたれど姿は媚く女子なり。

　夕暮に唯一人舟遊とは、何者かしほらしき志と立留りて看る時、女子は着座して、双櫂輕く一搔々かむとする手を遽に停めて、頻に此方を看てありしが、耕造が行かんとするを今泉樣かと聲を懸けぬ。

　はつと胸を轟かし、尊名はと進寄ればま、また今泉樣かといふ。此度の聲は顫ひて調子高く、砂礫に底を摩るほど舟を着けて、お懷しやと素足のまゝにて馳寄りて帽子を取れば、入日の影の微明に其顏は見忘れぬ絲川下枝なり。

思ひも寄らざるに耕造夢かと惑ひて、少時は言葉なし。是非に舟へといふがまゝに合乘して岸を離れつゝ、下枝三年往時の事を語出せば懷かしき事のみなり。

此女さる學校に在りし頃、耕造の思ひを懸けて、末々はといふまでに語合けるに、女の父親大野某といふ長官に懇望され、獨逸に遊學中なる子息に許しければ、倶々に修業させむとて伯林へ送らむ事まで定めたりしを、相談なかりければ下枝は知らで、耕造の情に心を浸され、一日餘所ながらも逢はでは物足らぬ思ひを不意に斷られて、伯林へ無理送りの遠流の身。行て見れば夫なる男はとくより其地の雜穀屋の娘に馴染め、邪魔物に遇はるゝほどなほ口惜く、此由巨細文に認め、一念恚もなく海上千里を渡りて耕造の手に入りしかど、不實を恨みて返事だにせざりければ逐懸け〳〵ての文も氣強く引裂かれ、下枝は世にある効の樂なく、せめてはと學事に心を凝らせしが、三年目に夫なる人は肺の患に身逝りければ、この六月の初歸朝して直に此地に來り、今は姥子にありと語り、伯林へ一言なしに行きし始末の、いさゝかも不實ならざる仔細を涙ながらに訴ふれば、耕造今は鳥子といふものあるを忘れ、昔ながらのやさしき言葉を懸しを、折からの月も少し前の事とて知らじ。下女一人なれば今宵は私宿へといふを、兩親の案ずればとて我宿近きあたりに漕ぎ還し、强て問へど住所を明かさず。明朝は早く此舟にて夕刻の所までお迎ひに參るべし。待つぞ、待ちたまへの離別の接吻蜜のごとし。

耕造胸の轟きはなほ已まずして、道々もこの再會の奇縁嬉しく思ひ續けて行けば、摩違ふ男が旦那様でござりますか、とさしつくる提灯に我宿の家名あり。奥様の御心配は大方ならず、お迎ひに參れとのおほせといふを劬りて同道して還れば、鳥子は梯子の口より覗きて、所天の姿を見る顔の喜ばしげなるが胸に痞へ、浮ぬ色にて室に入れば、片寄せたる膳の上に例の手料理らしき一皿まで添へて、自身も夫の歸りを待ちて食事の前と見えたり。

遅刻お歸りゆゑお案じ申しました。御朋友の謀計ありて御難儀などあそばされしか、其話聞かせたまへと膳を出せば、食事は濟みたり。別に話すべきほどの事もなしと背なく言拂ひ、氣分惡ければ下女を呼びて床を延らせむといへば、下女には及ばず、と親ら寐道具の用意すれば、耕造横になる枕頭に坐りて、尋常ならぬお顔色、御機嫌優れざる御様子は心懸りなり。お腹の疼痛ならば良藥ありといへば、頭痛なりといふ。少し揉て進ずべしと食事を捨置きての深切を、共には及ばぬとくるりと背後向けて音も立てず。鳥子は更に合點行かず。いかに病氣なりとて今朝の様子に變りたる鬼々しさ、と空腹に食も進まず、思案に暮れつゝ不絶耕造を扇ぎて十時も過ぎぬれば、戰々兢々蒲團の端に添臥も今宵は名のみ隔離の一布こそ恨めしけれ。

十二時鳴れば耕造むくと起きて椽なる椅子に凭り、月に朧なる湖水の彼方を眺遣りて、欄干に頬杖つきて物思はしげなるを、鳥子はなほ睡らで纖眼にこの體を覗ひ、様子ある事と所天が睡入

るまでは此方も睡入らざる覺悟にて見護りけるに、食事を濟ませしとは虚言かや、菓子を探し食麵包の餘れるまで引出して食盡し、溫みたる湯を二三杯飮みて寢床に還來るに、鳥子は前後も知らざる風してあれば、寒しといひ樣搔卷を引懸けて、横になりながら鳥子の寢顏を見入りて、これも不便のものと枕に轉げ、少時ありて鼾を立てぬ。明る朝は常にもなく耕造の早起したるを、いよ〳〵仔細あらむと想ひしに、朝飯そこ〳〵にしてまた本箱根の昨日の家へ行くとて出ければ、一足後れに鳥子も續きて蹤を跟くれば、まだ朝霧に遠くは霞める汀に一艘の船を繫ぎて、其中なる女？が手巾を揚げて麾けば、所天は帽子にて合圖しながら馳行き、舟に飛乘るを疾しや遲しと波を截つて遙かに漕出しぬ。霞隱れに見えず〳〵〳〵！

知らざりし〳〵、所天には隱妻ありて、初契月の中から首尾の淫樂、口惜涙に袖を絞りて宿に還り、夕方にも所天還り來たらばと悋氣の下組して、かく水臭き男をさへ待たるゝは、戀とはいひながら意地無き事と我心を叱れども、怨恨の半分は其女めに、含みて一入心傷ましく還家の待たるゝに、點燈頃より小雨降出しぬ。之が「やらずの雨」とやらになりて、もしや今宵は其所にと想へば、此方の一念の天に通じて、戀の闇を照らさむ月の影もがな、と立出でゝ空模樣を見るに、遽に晴るべき雲にあらず。

下女の來りてお迎ひに參るべきや、お傘の御用意もなくてといふを、濡るゝ身に何の傘がと、

外なる言葉も腹立しく、今日は昨日の所と違うて遠方へ行かれ、夜に入らば一泊せむと言遺れたれば、迎ひは無用にせよといふ心苦しさ。此夜は寢ずに明かせしに果して歸來らず。堪かねて一艘の舟を仕立。二挺櫓にして急ぐ。此湖の此方に人の逗留すべき所はと聞けば姥子なりといふ。さらば、其所まで行かむ、少し探す人あれば、輕舸見えたらば敎へよ、とおのれも四方に目を配りて油斷なかりけるに影とても見えざりけり。偖は今朝までも歸らぬ心か、と妬さ口惜さに舷に取着きて身を顫はせけるに、啣へし手巾を落して、舟の早さに手はとどかざれど、漕戻さばそれほどの遲刻、と水に映るわが姿を見れば、淺ましくも顏色尋常ならず、寢亂髪を未理なるにいとど面影の恐ろしく見えければ、櫛を水に浸して後毛を梳け、姥子近しといふ聲に先途を見ればなほ遠くしてしかとは見えねど、汀に白きものは有恨の輕舸、其ぞとはや所天にも逢ひたらむ想ひして、舟夫を急立つれど、舟の遲さに齒痒く、魂はぬけ殼の身を悶えて、やうやく漕寄せて上陸むとする所へ、脛深の夏草をあらけなく蹈みしだき、地響立て一散に馳來るは何者ぞと見るに、所天の耕造が顏色土の如くなりて、此舟を見るより早く飛乘り、横様に倒れながら早く早く舟を出せ、と人に逐れて後を怖るゝ風情、鳥子も驚き慌てゝ早く〳〵といへば、舟夫は根限りに漕ぎて二十間ばかりも乘出せし時、身丈高く頰髯生へたる外國人帽子も冠らで逐來り、舟を目懸けて拳銃を打懸けしに、彈丸は外れていづれも恙なかりき。

船頭も驚きて一生懸命に漕ぐほどに、盪すほどに、やう〳〵一町餘隔たりぬ。汀になほ立てる狼藉ものは、輕舸に乘りて逐懸けむ樣子もなく、唯此方を見入りてありけるを、鳥子は身を伏せながら覗ひ濟して、所天を見るに息も絶え〳〵なる姿して、仆れたるに又驚きて搔起せば眼を開きて鳥子の顏を覗めて其方はと驚きぬ。

目眩みて誰の舟とも知らざりしにと語るに、他人あれば此場にては樣子を聞かず、宿に還りて婦人との相乘舟を見し事より、迎ひに行きし概略を語れば、耕造も今は裹みかねて、むかし馴染の糸川に遇ひて、引かるるまゝに姥子の假宿といふに行きて一夜を明かせしに、所天は病死して獨身なりとは詐欺か、其朝橫濱より着したる獨逸人は、かれの所天か、旦那か。不義もの！と叫びて暴れかゝるに驚き、窓を蹴破りて竄出せしも、其方の舟なかりせば危かりし〳〵彈丸に貫かれたらむものを、と委細懺悔して不實を詫び、命の親と其日より大事にかけ、此沙汰內證內證唯二人。

三人妻

「三人妻」は明治二十五年の末、讀賣新聞に連載された長篇で、「金色夜叉」「多情多恨」などと共に、作者の短い生涯に於ける仕事のうちでも力作の部に屬する。系統からいふと「伽羅枕」などと同じ脈を引いたもので、舞臺は東京の柳橋から向島へかけて、其の時代の資本家階級の享樂場であり、時は明治二十年或は二十四五年頃のことで、その頃盛んに擡頭して來た資本主義の權化ともいふべき人物の生活であるが、重に淫靡な享樂方面のことを取扱つたものである。時代の風俗畫としても、極めて色彩の濃厚な、結構のがつちりした、規模の大きなものであるが、明治時代の富豪、つまり成功者又は成り上りものといつて可い人物の放縱な生活振りと、三人の女の性格と運命が、比類なくヴヰヴヰッドに出てゐる點で異彩を放つてゐる。勿論これは「多情多恨」のやうにリアリスチックなものではない。從つて描き出されてゐる事柄は、さう實感的のものではない。大凡そのモデルはあるかも知れないし、事件も作者の實際耳にした話から來たものもあるだらうと思ふが、大體は才藻の豐な作者のロマンチックな空想から造りあげられたものではないかと思ふ。

書いてある事實や人間は、三十前後の作者としては驚くべき程の智識で、花柳界や藝者の生活は勿論、明治時代の成り上りもののやつてゐる仕事、享樂場の雰圍氣といふやうなものが、實によく描かれてゐる。あの時代の劇場の描寫一つでも、典雅な文字のあひだに微細な感覺を盛りあげてゐる。

形式は物語り風で、凡て雅俗折衷の文章體であるが、根が漢文が地になつてゐる人なので、自笑其碩や西鶴などに比べると風格が一寸高くもあるし、文字も六ケ敷い。併し大體小説の體裁がさういふ所から來てゐるもので、今の讀者には一寸讀みづらいかも知れない、ただ書いてあることが一般民衆に分り易い市井の事なので、作者の文章の持味は分らなくとも、物語りの面白味は誰にも分ると思ふ。併しそれとても風俗人情が違ふので、其の時代に育つた私などには大抵見當はつくが、今の青年達にはどうかと思はれる。この物語りなどは充分映畫にする價値もあるし、新派の舞臺などに上せるには、打つてつけのものだと思ふ。尤もその時代のことだからサイコロヂカルなところはない。人生觀といつたやうなものも認められないが、貧富とか階級とかといふことに就ては、それ相當の意識もあるには違ひないし、かかる富豪の無軌道な生活に對する批判や反感も自然に出てゐる。別にそれとてもはつきりしたものではない。豪華なその社會の氣分を絢爛を極めた筆で份飾した點では、典型的なブルヂョア作品である。

三人妻といふのは柳橋藝者のお才といふ美妓と、雪村素六といふこれも請負師かなにかの成金である男が、得意筋の上流階級の遊び場所に造つた、向島か今戸あたりの別莊に飼はれてゐるお角といふ地の女、今一人は加賀の金澤の士族の零落れの、琴の師匠をしてゐるお艶といふ女、この三人の女性が、葛城餘五郎といふしたたかもののために、金で面を張られて屈服してゆく。そして彼のものになつて了ふ。それがつまり三人妻で、その女達を次から次へと手に入れてゆく手段やトリックが面白いのである。それから餘五郎のものになつて了つてからの名々(めい／＼)の性格や運命の歸趨が、餘五郎の豪奢な生活ぶりと共に、見事に書き分けられてある。藝者は藝者らしく、半商賣(はんくろうと)は又半商賣らしく、地女の堅氣は堅氣らしくそ

れ〴〵の性格を發揮すると共に、その性格から來た運命を辿つてゆくのである。

由來スタイルは紅葉山人の藝術的生命、評傳にも一寸書いておいた通りに、一作毎に何か新しいスタイルを考案するのが、作者の手前味噌である。今作品を讀んでみて「三人妻」あたりまでは一作毎にスタイルが變つてゐるといふほどのことは認められないが、晩年にはそれが相當分明(はつきり)してゐる。「三人妻」を多情多恨に比べてみれば、その文體が如何にその內容に伴つて變つてゐるかがよく分る。「多情多恨」はリアリズムの文學で、普通人の生活を書いたものであると同時に、文體も又原文一致であるが「伽羅枕」や「三人妻」は擬古體である。山人の才華が爛熟期に達したもので、文章も油がのつてゐる。珠を聯ねたやうな美しい文字が、至る所で見出されるのである。眞寶を云ふと、これは全篇を載せたいやうなもので、一部分だけ拔いて、後をすてるといふのは一寸惜い作品である。しかし相當に分量の多い物語なので、それは限りあるこの讀本では許されぬことである。それでここでは、お才を手に入れる件(くだり)だけを、揭げることにした。他との絡がりがないので、それだけでも立派に一つの物語りとして纏まつてゐるからである。それから妾になつてからのお才が最初の情夫菊住と、再び緣がもどつて燒木杭に火がつくといふ、最初の動機や成りゆきを本文で出し、他の二人の事件と三人の最後の運命は本文のあとに解說で梗概を述べることにしよう。

尙この作品は紙數でいふと、約四百枚位のもので、長篇とはいへない。「金色夜叉」に比べると仕組も單純である。テーマはない。これを「多情多恨」に比べると、事件もそこらに轉つてゐる平凡な日常を取扱つたものではないだけに、リアリズムの作品とはいへない。併し全體的に形式の完備してゐる點と、描寫の筆の大まかでクラシカルな藝術味に富んでゐることは、むしろ以上の二篇を凌いでゐる。人

世の姿を、如實に描き出したとか、人間の心理、又は倫理觀念といつたやうな細い所へ渡つていつた「多情多恨」や、不正だらけの社會へ對する不滿や、環境によつて虐げられた箇人の惱みと運命といふやうなものは出てゐないが、それ自身一つの樂しい藝術品であり、作者も亦生活の苦惱なしに、樂しんで書いてゐる點では、「三人妻」が尤も爛熟した才藻を發揮してゐる。形式も完備してゐる。「多情多恨」や、「金色夜叉」には、かういつた長閑な雰圍氣はでゝゐない。そこに又時代の反映がみられる譯である。

三人妻

一 錢の富士

あるやうで無いもの金錢とて、天下の人寐言にまで言うて欲しがらざるはなし、信に此金錢の獲難きことの不思議は、鐵を吸ふには奇妙、磁石といふ神通力あるに、是は又何したものと、金時計買ふ人の後に過難に立てる納豆賣の獨語尤也。此物羨みの男とて、母の胎内を苞入にて滾出し、臍の緒に絲を牽きしにもあらざるべく、二十四五の頃には隨分百兩包の顔も見て其重寶なる味をも知りけらし。羨まるゝ男とて身內に金脈のあるにはあらず、由來を聞けば孰か額の汗の

滴れて、粒々金色の御光を放つにあらざるべき。

失ひ易しと思ふ方の金錢は、皆獲難しと念ふ人の手に落ちて、あるやうで無いものとは謂ひながら、在る所には又腐るほど在るもの哉、今此日本に葛城餘五郎といふ名を知らざるものなし。これの持てる資産を、盡く一錢銅貨に換へて聯ぬる時は、恐るべし日本國を五卷半捲きて、其餘れる分を積重ねて見れば、富士山の高さの六層倍、と要らざる事を統計家の傳へ侍る。

これが一人の寳なり。惟へば裏借屋の奥に家內五人暮し、夕方になれば文久四つ残る日を、一年中の安樂日として、朝は芋の尾を粥に啜り、午餉は大方拔にして、晩が南京米の雜炊といへる輩の、天から授けられたる配當を、優勝劣敗の理にやられて、かかる人の弗箱に吸取られ、旨くした男は神か國王かの如く振舞ふに、下根弱肉の大勢動物館の山犬ほども食うた例無くて世を送るなりけり。

萬國何方にも無慾の人といふは無ければ、金錢の置場に當惑して、竹籌に懸け、箕に入れて、之を大道に捨つるもののあるべきやうはなきに、何處いかなる所に餘五郎はさほどの蔓を見出して儲けたるぞ、手を三つ鳴せば忽然として千圓札の降來る奇術を得たるものならむ、と餘りの訝しさに素生を糺せば、加州金澤在談義所といふ村に、鳴るは瀧の水、日は照れども絶えず陰のごとく微き土百姓の次男に生れけるが、天性の利發士なぶりを憂き事に思ひ、十七の年國元を逐電

して江戶にさまよひ、一二年は便る方なさに乞食の眞似もして、それからの出世の小口、湯屋の木拾に成りて、人の中なる溝鼠、此もおもしろからず。頓て蕎麥屋の擔夫に入込みて、暫く働ける中に、始めて眼孔の木眼ならぬ人に見出されぬ。それは大原富五郎とて流聲の鑛山師なり。
餘五郎其時二十四なりしが、機敏鬼神の再生、と大富も舌を卷きて手足の如く賴めば、餘五郎も此奴骨ありと服して勤めける程に、立身衆に越えて、一年の間に世智賢きものばかり聚めたる二三十人の上席にすわり、大原組の一番々頭餘五郎の下に樣の子を附けられ、會ふものゝ頭は先方から下りぬ。其中には四五年前には、附くな〳〵と袂を振りし旦那樣もあるべし。
餘五郎二十八の年、大富一生に唯一度の見込違ひより、見事に身代を叩き、借財忽ち山のごとく、之に心控けて勇しき了簡の失せけるを、芥子の膽と餘五郎心に可賴しからず、言を盡して勵せども肯かず。此蹉跌病の源となりて、間も無く大富は亡くなりけり。
其後は餘五郎鑛山に限らず、どかりと儲かるほどの事には、先鞭に首を入れて逸す事なかりしに折々の些細の損は、一度の大儲に埋合せて、次第に仕出しける上、明治維新の擾亂に紛れ、爲たい三昧の旨い事して、一網に五六萬の利益は、其折わづか十五兩で買置きたる地面の、泰平になりてから暴に二千圓になりけるなどさる類の多かりき。
明治の世となりて萬事に歐羅巴を寫す氣運に伴れ、舶來の儲口潮のごとく、滔々と寄せ來るを

此時と、世間は成らぬ事に念へる三千里の荒海を押渡り、日本にては一錢に十個するほどのものを、珍しがる毛唐人に五弗十弗に賣りて、又其國の下らぬ物を買集め、持還りて都人の心を動かし、之にても亦算盤の外の利益、唯奪つたも同じ様なる手易さに、金錢が金錢を招ぶとは此事なり。

それより類異れる商社を四つまで立てゝ、股肱の才物に預け、其外抜目なく八方に手を擴げて、四天王に魔を取らせ、自家は風流無慾の顏して、都外の閑靜なる處に、華族かと人にいはるる居宅を構へ、其四邊の地面は、目の及ぶ限り我垣の內にして、庭に追剝の出でしとも噂されけるなり。

利の事は一切手代委せにして、我は有金を我が一代に費ふべき工夫に屈托してゐる事と誰も想ひけるに、此身代になりても更に滿足する事なく、箸の上下にも錢儲に肝膽を碎き、之はと思ふ計畫浮べば、酒盃を投捨てゝ馬車を急がせ、腹心の手代に計を含め、唯二三日の內に、人間一匹二代は懷手しても樂に暮しのなるほどの商ひすれば、如何樣尤と、世間は餘五郎が大抵の贅澤に驚かず、東京間近の名所々々には葛城が別宅の瓦屋根を見ざる事なし。

ある夜の醉紛れに、泉水の月を觀めて、此景色の好さ、我は未だ須磨の秋といふものを知らず、人の話に詐なくば、いつぞは見たいものといへば。御相伴に跽りたる男、此御庭先より鐵道を布

き風呂場、料理場、お寢間、お座敷附の汽車を造らせ、お浴衣のまゝづいと御出は如何。餘人は知らず御前の力なれば、譯も無い事といひしは、追從なれども其ほどの金力は確にある身分にて、其もをかしからぬにあらぬど、今というても今の間には合ひ難し。早い所は須磨の寫眞を買はせ、此月の前にて見たらば、興は薄かるべきも亦變りて巧い分別ではあるまいかと笑ひぬ。かの男聞きて、あの心懸にては此身代當分は傾き難しと陰言いひしとぞ。其昔蕎麥屋の擔夫せし折は、容貌何處か狸のごとく、人は狸餘と言囃して、此行末を思ひ懸くるものは無かりしが、今は二頭立の馬車を軋らせ、獵虎の皮の膝懸、白鶴の羽織の敷物に、悠然として薫らす葉卷の灰の、風に飛ぶ一片が何錢といふ身にならば、狸のやうなる御顏も可笑氣無くなりて、顋髯、八字髭、倚叉縮れたる頭髮までが威儀の飾りとなりて、那は葛城といはるれば、知らぬ人も畏しがりて、いかさま尋常ならぬ面魂と皆見送りぬ。同車は束髮の白襟紋服の女なり。年の頃四十約なるが、瘦乾びたる容貌の中に、剛としたる處と凄じき氣色のあるは、柳の大木の秋に遇ひて、葉を振ひたらむ風情なり。而も下司なる處ありて、奥様の胴に遣手の首などすげかへたらば、かくやと想はれぬ。此女麻子とて餘五郎の妻なり。おぼろ氣に昔を知れるものの語るを聞きしに、湯島天神の境内に、其頃名代なりし矢場女のよし。

今は燒消して灸の痕のみなるが、始は左の腕に蜘蛛の肉繡ありて、蜘蛛のお重と異名とりし手

練ものゝ、綱にかゝる男は羽翼縛になりて血を吸はれざるはなかりけり。今の葛城大盡、その頃の狸の餘五郎、尻切半纏に馬のやうなる臑を露して、逢はで戻ればと通ひけるに、嚙みさしの小楊枝も吐懸けまじき素寒貧に先方から熱くなりて、行くたびごとに小使を拈り、上に引張るものから下帯までも仕送りぬ。

漂母の一飯立身の種となりて、今も餘五郎に捨てられず、奥様と崇められて協はざる望も無く、千兩役者の三四人も内に呼びて、地聲で世事いはるゝやうになりては、世の中もをかしからずと、悟りすまして浮きたる事を愼み、無法の華美を好まず、人に昔を知られぬやうに、夫の名を瀆さぬやうにと殊勝の志を起して、何處までも生れからの奥様に振舞ひ、萬般を大様にして、情を深く下を愍めば、誰もころりとやられて、此奥様なくては葛城の家は闇夜に月、光る目玉も怕がられず、出入の男女生神のごとく敬ひ奉るなりけり。

二　天邊の樂

衣食住は人の心を苦めて、此中一つの不足も煩ひの種となりて、三者具足の願ばかりに、大方の不性者も否々ながら手足を動かし、少し勉なるは身を粉に碎くぞかし。頓て此三者の足れるといふにあらでも、纔に餘裕のつく頃よりは、又外の慾出でて、骨休といふ事を念出し、無理なる

工面もして折々は命の洗濯。世の男心の天邊の樂、女包の外にあらざるごとし。連添ふ女天邊の苦勞も、亦我男の浮氣なるべし。

熟々惟るに、建國の初には民尙武の氣に富み、刀槍を野邊の白茅ほどに思ひ做し、生首を見ること西瓜のごとく。女までが人の血汐を唇に塗りて化粧せしほどのあらくれたる國も、數百年の間に驚くべく進化して、髯ある奴が白粉傅けて姿に氣を揉み、華車なる事の穿鑿を第一にして、千萬の遊戯に精を竭し、骨を休め氣を養ふ事のみを考へ、今世界に開化せるといふ國々の有様を見るに、どうやら大きなる玩具箱のごとし。その代りには太古より數百段賢くなりて、勤むる所は屹度勤めて、錢儲もおろかならず、おのれの一分は立てての後の洒落なれば、之を嗤ふものはあらざれど、可成は此性根にて祖先建國の始末をおもひ、黑木の柱、木葉衣、泉に飮み、獸を屠りて、神の則に順ふの無爲を忘れざらば、一段と好かるべきに、さうは行かぬ理のありてや、萬國何方も開化の國の贅澤、言語に盡し難く、我邦の人々曾て夢にも見ざる事多し。

一人の身の上も一國に異らず。壯年刻苦の善根より、美果纍々と實りて、衣食住に事缺かず、裏には土藏二十戸前、日本橋から眺めたやうな景色、他の物と見てさへ胸の淸くほど快い氣持なるを、悉皆貴下の物と耳端に囁く聲して、之ばかりにても十分なるに、まだ外に鑛山幾箇、地面何百箇所、繁昌なる商社を數持ちて、招かざるに來る金利ばかりが月々何萬圓。出來も出來たる

長者の心には、おのづから乞食の昔忘れて、分相應の榮耀は我からせずとも世間が許さず。爲て見るほど面白くなりて、金でなるほどの歡樂の數々、一順仕盡して見れば、兎角自由の利くは無理なる處ありて、興の薄きが本意無く、金力ではどうもならぬやうな遊はあるまいか、と髯を撚りて、麻子の横顔に新橋の酒の氣を吹懸くれば、打笑ひて、何事も苦き中のおもしろさ。湯島に在し頃、正月三日の雪の夜に、此方は地廻六七人に打撃かれ、命も危かりし中へ蜘蛛のお重が飛込み、私の大事の男をと泰平樂をならべし時、見物の中より狸の助六と聲懸けられしやうな面白き事此後またとはあるまじといへば、餘五郎額を撫でて、過去りし昔はいふな〳〵と寢床へ遁入りぬ。

山瀨といふ手代は聞ゆる粹者、之に思はくを話せば、當時柳橋に柳屋の才藏といふものあり。姿色萬人に秀でて心慧く、諸藝に堪能にして、應待の上手此上無し。年齡は二十四の由なれども、打見は二十歳を越えず。之を鈹段の上に置くならば、誰も（者）とは思ふまじき上品さ。水を向けて口を開かせなば、いやはや辯舌滔々として前なる河も逆に流るべし。此女を聘んでのおもしろさ、肉も骨も有つたものにあらず、大佛様も溶けて流れて柳屋の貨の泉、晝夜を舍てぬ座敷のせはしさ。美人品切れの當節柄、客はいづれも餓鬼のごとく、目色を變へて影隨ひ、我手に入れむと、金錢を惜まず、名を惜まず、顔を潰し、命を捨てて懸れど、木像の普賢菩薩か、繪にかけ

る小野の小町よりも、口頭の甘いだけ面憎く言ふ事聞かず。何の某といふ待合の女將軍も鹰を投げて、此子帶留の金具に珊瑚の瓢箪を附けたる間は、とても轉ばじと洒落たりな。

まことに浮氣ならぬ深間ありて、さる會社の卑き所を勤むる、菊住何とやらいふ男に情立て、古風の誓文お前一人の中と聞き及ぶ。人の噂に違はず、此女の手剛さ、我等も見事に彈かれたる一人なれど、委細を申さば色男の名折、概略はかくの通り。左にも右にも一鞍御試しあるべし。先は金轡にては行かぬ代物、近頃御徒然の折から變りたる御慰みと語る。葛城大盡勇み立ちて、これより直に案內せよと急かれ、用ある身なれど何も主命と是非なく、荒氣の大將一戰に仕損じて、同席に恥搔くも辛し、手際を見るもをかしかるべし、と後に尾きて立出づれば、白拍子などへ通はむに馬車は勿體臭くて風流ならず、綱引で中有を飛すと爲べし。

三　沈香亭

萬端山瀬が取計らひ、大盡は白檀の床柱に靠れて、大様に頤髯搔撫づる指の金剛石、座敷の前後十二疊を照らすを、番の婢が噪ぎて一同に注進すれば、板前の傳吉まで飛出して後學の爲、と隙見する人數隣座敷の襖の陰に山を成し、偷めども足音人聲の聞ゆるを、何かあるかと大盡に咎められて、御前に侍へる婢挨拶に困り、唯今彼方に參りし役者の歸る所と紛らせば、其方も見て

來いとの仰せになほ困りぬ。

一時間ばかり待てども才藏は見えず。長いの、と大盡酒(だいじんざけ)の旨うなささうな顏色。今一度見て參れの御意なき內、婢は心得て、他のお座敷を貰うて參るやう申遣(まをしつか)はしましたれば、少々暇取れまする理、おつつけ見えませうほどに、暫く御辛抱遊ばしまし。なほ迎を遣はしましよ、と銚子を持ちて立ちけるが、頓(やが)て還(もど)りて、やう〳〵只今(たゞいま)見えました。

强い勿體の待たせた罰には、座にも着かせず一嘲弄して、其舌戰の模樣を御前の御肴に、と山瀨は酒に舌を濕して待つ所へ、才藏晝間からの無理酒に傷みて、步行ふら〳〵と次第なき態度。海棠したゝか雨を帶びて、春色今を闌(たけなは)なる姿、沈香亭の圖を歌麿が畫いたらばこんなものなるべし。袖を牽かれて拂ひし人のありとは心着かず、二人を一樣に初對面の時誼して、風俗一目に位あるべき御方と、三指懸りに挨拶するを、山瀨は心に可笑く、才藏が面を擧ぐるを候ひ、其方は見忘れんも、此方は恨ありて忘られぬ御方へと盃させば、これは〳〵忘れては濟まざる御方を、此通りの體裁、何事も酒の上と御堪忍遊ばさるべしを發端に座敷浮出して、馴染無き大盡も頗る興に入りて、てんと堪らず、良十二時近くなれども歸るとは御意遊ばされず、折々目顏にての合圖、山瀨は確に其事と合點はしたれど、迚も成らぬ談と知れば、左右なくは打つて出でず、打つて出づれば取つて投げらるるは目に見えても、賴まれた因果(いんぐわ)には否もいへず。さらぬ氣色し

て冗談口を吐きてありけるが、折を見合せ下座敷へ呼出せば、山瀨樣皺樣への御傳言か。柳橋中に知らぬものなき戀中を、罪深くも隱立して、薄闇い處へ我を招込までも、天下晴れてかう〳〵と立派に傳言を賴んだがようござんす、とはや一義を言出させぬ仕掛なり。山瀨もさるもの、こんな古手には少しも騷がず。山瀨といふ男自分の戀に人を賴むは大嫌ひ。さればいつぞやも其ゆゑにこそ振られたれ。座敷にござるは此方の主人といへば、其で承知の理の葛城餘五郎。格別冗い事をいはずとも、此方に用とは知れきつた譯、と半分聞きて其だけはと早立ちかかる、引留めて、下に居やれと、何處かの三味線を合方にして染々口說けば、立聞く女もあらば其が第一靡くべき上手に、才藏も持餘して、遁るる路なく、申すは家暮なれど、男には一切肌觸れぬ心願ありてと、爲やう事なさに秘したき事を匂はすれば、其も知らぬにあらねど、心からの浮氣にあらぬ、勤めの餘義なさに其人も定めてゆるさるべし。今まで轉ばぬを看板に賣出したる名の、唯一夜にて折れむことを口惜く思はば、其回復のなるほどの事は、屹度山瀨が命に懸けてもすべし、と第一金第二金第三金第四金の奥の手で行けど、喉も鳴らさず。冥加に餘る御志は嬉しけれど、私に彼人あるを御存じなれば猶の事、貴下にも覺のある御身にて、他の戀ならば壞しても苦しからぬやうなお言は、近頃粹にも似合はぬお心意氣。一言唯といへば今の間に德の行く話、私とて慾を知らぬではなけれど、其に背中向けて思ふ人に心中立てるが、ちと當世に向かぬかは知らねど、

張とやら意氣地とやら、那様眞似して何になると、若い了簡を嗤うて下さんすな。對手は流聲の葛城様、紅襟の慾氣少い子達でも、此方から强賣する氣になるほどのお方を、醉興らしう振るといふも、申す通りの譯なれば、何卒お心に障られず、御前よしなに貴下から、と酒を醒ましての言譯に、此上はとて鶏を殺るやうな手暴もならず、請賃無しで澤山聞され、用も足りずに此きま手を退く器量の惡さ、と山瀨は苦笑して立上りぬ。

　取り殘されたる葛城大盡媌の酌に寂しき小飮して、相談の暇取るは事の難かしきか、但は聞ゆる悍强を山瀨が乘鎭めに懸れる故か、と然までは退屈もせず、半分は樂みにして待ちけるに裏階子より足音して山瀨はぬつと入來り、案の如くといふ冒頭に力落して、不成かと顏を差寄せれば、とても〳〵と首を掉りて、不肖の力には及ばず。此次には自身に御出馬ありて、一攻攻めて御覽あるべし。今宵は兎も角も此儘御歸りと勸むれば、大盡梓弓の張つめたる弦斷れて、くるりと撚れて復りたるやうに味に氣が拔けながら未練殘りて、才藏はいかがせし。唯今參りますするといへば、然かと落着拂ひて、更に御腰は動かず、今一目御覽じたき風情なり。

　山瀨は羽織の紐を結び懸け、はや御歸あるべし。此處でまた酒にしては、此方も照れれば女も照れ、殊の外場合の宜しからぬものなり。女の急に參らぬも、其邊を計らうての事なれば、此處はいざ〳〵御立と急かれて、大盡いよ〳〵本意なく、さればとて一騎殘りても功名の成難きを見

極め、しぶ〳〵歸支度する所へ、素知らぬ顔して才藏出來り、小取廻しに大盡の後より外套着せ懸け、帽子手袋を持ちて、離れがたなきやうに跡追ひまはし、近日に是非、今夜は飲過にて失禮のみ、と今方振つた顔もせぬ挨拶。愛嬌滴るるばかりの目元を大盡屹と視て、近日口説に來るぞ、と戯れの中に執念あるやうな言いへば、彈器仕掛の胴懸して屹度お待ち申しまするると、之は眞實の中に嘘あるやうな口上を、憎しと山瀬が側から、胴懸よりは此方の心が彈器仕掛、好具合に出來た藝妓めと肩をたたけば、才藏も一言なくて、とんと山瀬を式臺へ突落しぬ。

茶屋の女房始め七八人の婢ども見送りに居並びたるが、此體に嘈くを木の頭、御客樣車に乘移れば綱引提灯を振立てて、がら〳〵と引出す後に、御機嫌ようの聲々も鎭りて、門の燈火の幽なるを、車小橋を渡る時、大盡迥に眺め遣りて、思なほ殘る顔に川風吹きて、醉心涼しくなるまま交睫むと思ひける間に、我門近き道端の小石に車搖れて目は覺めけり。後を見れば續く車無し、如何せしと車夫に問へば、明朝用事あれば此所にて御別れ申すと申上げよとて、途中より出られましたと言ふ。

四　火上の氷

大盡臥戸に入る頃酒醒際にて、水二三盃に胸清き、睡氣は洗ふごとく滅れば、才藏の姿心に浮

びて此儘に捨難く、幾度の反側に思案しかへて、手に入るゝ工夫せしに、屈めし足を思はず踏伸し、扨あるわ。之を山瀬に聞かせなば、それぞ上策と雀躍すべき。とかく韓信は彼の事、此謀を授けて働かさば、萬に一つも仕損じはあるまじ、と獨り悦に入りて、安心からやう〳〵睡氣さし、枕頭に喚ぶ聲に驚されて、何ぞと半眼に四邊を眴せば、窓掛の紅色に日影麗々と、軒なる音呼の羽搏手に取る如く、何時と大煦すれば、妣畏りて、十一時でござりまする。唯今山瀬様が見えられました。お風呂が沸きましたれば直にお召し遊ばしまし。

さてと一風呂浴びて表座敷に出れば、山瀬は睡さうにもなき顔色にて、今朝二件許用足して参りたりとは、有難き心懸に對して、言ふも可愧しき次第なれど、昨夜は寝ずに妙計を案じたり。就いては又一働頼まねばならぬといへば、山瀬は呵々と高笑して、二度有る事は三度有る例。また失敗でござるかな。昨夜は隨分死物狂になりて力めたる苦戰の模様、御笑草までに御聽き下されたし。なるほど共を肴に一杯と、妣を呼びて用意申付くれば、大盞日頃の大短氣、何事も遠くなうては御不機嫌に懲りたる家内が技倆の凄き、左慈が松江の鱸魚を鉢から釣上げたほどゝ、始めての客は誰も驚入る酒肴の支度、珍膳五十人前も咄嗟の中に調ふは此家一の名物なりとや。美しき妣二人膳を運びて、一人は御酌に控へ、一人は通ひを勤めぬ。用あらば呼ぶべしと大盞人拂ひして、扨山瀬どうであつた。

聽きて興あるやう嘘も少々は加味して、下座敷の薄闇に才子佳人を說くの條を逐一辯ずれば、大盡膝の進むを覺えず。そんな事と知りなば立聽してくれたものをと切に無念がりて、共につけても才藏といふ女は謂はうやうなき怪物哉。我從來千百度も女に出會うて、曾て不覺を取りしといふ事無し。これ我威光か、金力か知らねど、兎に角目指せし女の自由にならざるは、主ある女か、人の娘か、是は然もあるべき理なれども、賣物ならば男嫌ひであれ、振自慢であれ、葛城餘五郎と名乘りかけてぐつと睨めば、ばたり〳〵と將棋倒しにして、花柳の街を行くこと、鐵の草鞋穿きて草原を驅廻るが如し。いかな粹でも、通でも、濡事師でも、我と聞く時は、黃金無垢の業平が來たわ、堪らぬ、と帶引緊めて遁ぐるほどの男なるに、小敵と侮りて此度の不覺。これ一代の名折なり。

されども此强がりは表向にて、內實あれほど心に稱へる女は、今に一人もあらず。一昨年京都めぐりせしに、彼地はいかさま美婦多く、いづれを見ても絹漉の肌、鴨河上水の寒晒、玉の如しとは蓋し彼等をいふなるべし。その藝子といふ奴、美の美天人の妹分かと想ふほどのにても、金次第にて踏んでも蹴ても可い事に定りたれば、餘り正札過ぎては、勸工場の買物同然にて趣無く、かくては天人でも菩薩でも心意氣が知れて、移香もどうやら錢の臭がするやうにて、嬉しからぬと念ひし所爲か、どれ見ても護謨製の女人形、腹を押せばぴいと啼くだけの器械にて、色が白う

て目鼻立ぱらりとして、姿と聲が優しいだけの沙汰にて、外に何もあるにあらず。

其とは事異りて江戸の女の好さ。しげしげ顏を視れば、面道具の揃うて、繪に畫きたしと思ふはなく、目の好きは鼻ひしやげ、眉が好ければ口狀しをらしからず。干潟の髮際あれば亂杭の齒行あり。第一色の黑さは我見ても氣の毒なるに、肌理の疎きことは柚の皮を張りたるごとく、鼻翼の邊面皰の跡の脂に埋れて黑きなど、故障あらざる顏とてはなけれど、出額は出額にて可愛く、垂眼は垂眼なりに愛嬌ありて、萬更捨てたもののあらざるは、心意氣に名物の旨い處があればなり。

かの才藏といふ奴、氣合に一節ありて容顏も凡ならず。見るほどの男の思ひ惱むべき骨格。柳橋の藝者でござる、と日本中引廻しても鼻の曲らぬ女なり。かほどの珍品を名も知れぬ瘦男の玩弄に爲せ置かむは、言效無さの限りといふべし。かくいふ餘五郎が土藏には、世界に又と無き寶の數は在りながら、此品一箇缺けて寢覺の心懸りとなりては、不自由せぬ爲の此富も所爲無き事なり、と箸を逆手に膳を拍ちて、執心面色に見はれたり。

山瀨もこれほどの奮み方に驚きて、さほどの御志ならば、高の知れたる猫一匹如何にともなるべし。まづ其妙計を御聞かせあれと言へば、大盡聲を潛め、頗る反間苦肉の謀なるが、足下の暱妓に雛助と云ふものあるよし、と眞顏に出られて山瀨は頭を搔き、暱妓といふにはあらねど、ち

とばかり。些ばかりにては計大いに妙ならず。遠慮無くいはれよ。其女に大事を頼みて氣遣あらざるほどの御中か、と念をおされて挨拶に當惑せしが、まづ此方の考量にては、いかなる大事か知らねども、大方の事は引請け申すべきかと答ふれば、なほ種々に念を推して、山瀨が言葉の中に、睨と深き中に相違なき處を見屆けたる上にて、詭計の段々を語り出せば、一々聞きてなるほどの頷き、或は首尾好く參るか知らねど、格別新手にもあらざれば、十全の上策とは申し難し。相手は金氣無き奴なれば、此方を片附けむに何の事はなかるべきも、本尊の女が那の代物ゆゑ、と頻に首を捻れど、大盡は適れ爲濟まし顏にて、才藏いかなる情知といへども、一方には男に退かれ、一方には金と義理とに逼られて、厚き氷も火上に解くべし。古來より此手にて行かぬ女無しと、獨斷にして勇立ち、手函の中より軍用金攫出して、當坐の入費、之持つて早く〱。大盡の計どうやら妙ならず思へど、いかに成行くか我も面白さに、然らばと請込みて直樣車を飛し、柳橋なる雛助方に來て見れば、昨夜の徹夜、酒と疲勞に虐まれ、朝湯に入りければ身は綿のごとくなりて、小座敷に火燵して正體なく寢入りたるを、旦那樣の御入來と母親の驅込みて、抱起せども現にて又手枕に仆るゝを、持餘して此始末といへば、構ふな構ふなと山瀨は其座敷に入りて、やう〱目を覺まさすれば、夢ではないか、珍しやと、嬉々手水つかひに行きしが、頓て着更へて入來り、火燵に蹲る男の帽子を引取り、半座を分けたるやうに寄添ひて、此頃の遠々しさを怨じか

くれば、まづ此方から言ひたき事あり、と葛城が才藏に執心の次第を語りて、此念は何ありとも霽らさではおかじとの决心にて、此方結ぶの神に頼まれたるが、爰に一つの詭計ありて、其には其方を味方に附けたさに來れる男なり。

詭計といふは究竟菊住との中を裂きて、金と義理との板挿みにせむとの殺生なるが、かの中を裂かむは容易のことにあらざれど、一人腕ある妓を見立て、萬事を明して宜しく之に含め、やいの〳〵で菊住へ持懸け、それから大熱々に上せて見せて、御楊枝で酡い顏して暮せるほど男に仕送らせる寸方。此金は葛城の手許より仕拂ふべし。

菊住今も才藏の情には預れど、あの氣性の女なれば金には緣無く、不自由勝は知れたる事なり。其虛に直入り、陽に實意を見せて金錢で隙なく裹打せば、男心の動き易く、鼻に着きたる才藏を捨てゝ、新出來の重寶なるに乘換ふる氣になるは目に見えたり。其時才藏の事なれば、心に男の不實を恨むとも、女々敷事はよも爲じ。面當の意地を張りて、男めに草履取らせて此仕返せむ事を念ふべし。所を大盡横鎗に仕留めむ手筈、甘く行けばお慰みなり。

扨此狂言の立お山には、菊住の色になる奴なるが、相應の心當りは無いかと問はれて、雛助は進まぬ顏色。あるには誂向の女あれど、此狂言は殺生過ぎたれば、外に最少し手柔かなる思附のありさうなもの。いふは可笑けれど、何處の誰が貴方と何屋にて睦しさうに話して居たなどゝ聞

く時は、しやくりと知りながら胸穩からず、顏見ると悔しくなるは惚れた中の情なるを、いかに御主人の賴なればとて、其樣な酷たらしい事はせぬものでござんす。別けて佛性のこの雛助、話を聞いたばかりでも癪が起る。今にも才藏樣に會うて此事を注進して、喜ぶ顏が見たいといへば、山瀨は冷笑ひ、言ふな〳〵。子まである身の山瀨を墮落して、我女房には罪とも殺生とも思はぬか。これしきの事が酷たらしうては、鰌汁も食へぬ理。隨分牛も豚も參る口から、しをらしい言を承はるものかな。其方も聞齧りに、錢に驚きて、氣味の惡い蟲が二百文ばかりと笑ひ草になる玉なり。一度や二度は人の男をも横取して、腕があるといはれし覺えの身に、これほどの事は朝飯前と見て取つての囑なり。首尾好くゆけば褒美の品でも現金でも望み次第。且は我の手柄にもなる事なれば、義理と思つてやつてくれ、と洒落らしからぬ樣子に女もやう〳〵納得して、肝心の立者に誂向とは誰と聞けば、此地に人の知れる升屋の小〆、菊住には疾からホの字。此女ならば身錢を切りても働くべし。

五　心配筋

葛城大盡は何も知らぬ顏にて才藏を揚詰に、あつさりと飲みて可厭な眼色もせず。山瀨に口說かせし事は一時の酒興と見せければ、かうした座敷の勸めよく、第一爲になる客筋と才藏も疎な

らず遇なせば、いよ〳〵御意に召して御側を離さず、願はざる品々まで纒頭の多さ、今晩はと十年來何萬人といふ客に會ひしに、これほどの旦那はなかりけり。

　但憂きことは、此座敷に囚はれの身は、菊住に逢瀨の儘ならず、二つ好き事は無きもの、と酒の中にも思出して、逢はむとならば何時でも首尾はなるべき自墮落の家業でありながら、苦界とは此處ぞ、と胸の有耶無耶は絕えざるに、一夜大盡話の中に、不圖熱海の湯治の事を言ひ出して、此頃の間を幸ひに四五日遊びに、明日から行て見る氣は無いかとあるに、湯治場は轉ばぬ藝者の伴れられ所、うるさき事を言はれて可厭なる思して御機嫌を損ふが極と見えてあれど、並ならぬ贔屓の旦那とおもへば、これほどの樂さは無いやうに勇みて、是非にお供を願へば、大盡至極の滿足。翌朝供二人に才藏を加へ、四人の同勢新橋の停車場に入れば、見る物無さに倦飽める待合の人々、これはと目の覺めたる心地して、瞬きもせで眺め入りけるとよ。

　此湯治二週間餘、其間に計略圖に中りて、小〆はもとが菊住に岡惚の下地あれば、賴まれてする事ながら賴みてもしてみたき役目、と先此方から熱くなりて謂ふにいはれぬ仕向に、菊住も才藏は才藏として小〆は小〆。彼も飽いたではなけれど此も捨て難く、傳聞く昔唐琴屋に丹次郎といふものありけり、と頤を撫でゝ之をさへ悅びけるに、氣味惡きほど仕送らるゝ金員は、我月給の二倍と計算して見れば、どうやら女で食へる氣になり、此帶まで買うてくれた小〆を麁末にし

ては、冥利に竭きむことを畏れて大事がるほど、女は上の空になりて世間を構はぬ大浮れ。謔るが面白しと菊住がどうのかうのと、座敷にて客が噂すれば、もう逢ひたくて耐らず、卒に腹痛み出して歸るなどの惡業高じて、今は家業も餘所に菊住との陰遊びにのみ念入り、あれほどの贅澤して、よくも兵糧の續く事を人の怪みけり。

小〆の分別には、一月にても二月にても才藏が彼の人の所有になるまでは、弗函に棄れたる氣の高を括りて、此方から思入れ夢中になりて男の心を蕩かし、才藏との中を遠ざくるほど手柄になる事と思へば、少時の間でも好いた男と好きな眞似して遊ぶだけが德、と度胸を据ゑ、浮氣するに金主ある事一世一代の法樂と、夜も晝もなくして思ふまゝに浮るゝ面白さ。かういふ事ならば明日が日死なうとも遺憾なし、と互ひに打込みて、どうもかうも成らぬ始末に、誰も手を着けかねて、沖の舟火事を見るやうに、あれよ〳〵と呆れて見物する人の噂となりて、今にも才藏の歸來らば、三日續きの新聞種、珍事持上るは定なれど、那の利口ものの才藏なれば、思ひも寄らぬ手を出して二人は泡を噴くべし。女も男も餘りの義理知らず、不便なは何も知らぬ才藏、といづれも此戀を心に憎めり。

才藏と大中善の金太郎といふ女見るに見兼ねて、この概略を躙り書の文して熱海へ知らせければ、讀むに一々虚のごとく、飛んでも歸りたさの胸躍り、卒に母の病氣と申立てゝ、獨り先に立

たむことを願へば、明日は俱にとあるに其夜は寢ずに明けて、一日がゝりの道中、身を拵らるゝほどの可悶さに、氣はいら〳〵と浮かぬ顏を、大盡横目に見遣りて、その事と心可笑しき外面を裝りて、あの達者なる母親の急病とは、いかさま賴み難きは老の身なり。隨分油斷なく看病せよ。二三日中には我も見舞に行かむ、と迷惑がる言をわざといへば、才藏は身を横に胸をおさへて、癪氣と物いはず。やう〳〵夜に入りて新橋に着きたる時の嬉しさ。大盡を振放して心も空に車を走らせ、內へは寄らず金太郎の門に入れば、今お歸りか。待兼ねた〳〵、と驅出づる金太郎は、座敷衣脫ぎかけて帶せぬ褄を摑み、足首に扱帶を懸けて引きずりながら、才藏の手を執りて奥の間に伴ひ、樣子は文にて知らせました通り、何ともかとも謂ふやうなき始末。腹が立つて〳〵と胸を塗れば、才藏は頭巾に亂れし髮の毛の頰にかゝるを拂ひて、夢やら何やら眞とは今に思はれぬ文の樣子。餘りの事に吃驚して氣が脫けたやうなといへば、虛も實も要らぬ、此處でくど〳〵話さうより確實な所を見せう、と支度するを何處へといへど、何も言はずにと獨合點して慌忙しく連出し、（磯馴）の奥に今夜もお定例の對坐、と聞くに胸轟き、足早に小路二つばかり過ぎて、地理屈竟なる裏町の新道に、九尺の千本格子、磨硝子の軒燈籠の御待合に入りて、客を待つものと帳場に挨拶して奥をと望めば、一間は塞りたりといふこそ例物の穴、と其座敷を一間置きたる隣房を見立て、酒は餘所に耳引立てゝ樣子を窺へば、話聲幽かに物の音無く、忍びの首尾に紛れ

なき氣勢。誰とも知るよしあらねば、那かと才藏の囁くを、金太郎は目授に應へて、前を庭なる障子を細目に啓くれば、此處と續の廊下を折廻したる行當りの軒に、數竿の竹に蔭になりて、微闇き鐵燈籠の隠れるは手水場なり。

出て來らばと目を放たで待ちけるに、繋絲織の羽織着たる男、此方に氣を置きつゝ野鼠々々と現はれて行くを透し見れば、帶から小袖まで我贈りしとは異れる風俗。これ皆小〆が仕着を悅びて、我見よがしに着飾れる菊住なり。滌ぎし手を拭ひ、空を仰ぎて、帶の間より取出でたる時計は、燈籠の火影に耀めく金側に、才藏も驚きて、小〆といふ女が然ほどの內證にてはあらざる理。さりとて菊住はあれほどの品を持つべき力はあらず。左に右小〆が旦那筋から奪取りたるを物したるなどにやあらん。今更飽かれた義理にはあるまじき我を棄てゝ、慾に目が眩れ、小〆に見換へたる腹の陋さ。見下げ果てた男め、と此から其面へ唾吐懸けたき心を鎭め、神妙にしてなほ窺へば、男と入替りに、何やら言捨てゝ出でたるは紛れも無き升屋の小〆なり。男よりは一倍醉うて亂したる態度。裾はほら〳〵と腰帶緩みて、あぶなき足元長繻袢を踏へがちに、椽の曲角なる段を辷りて、淺ましくも小氣味よき轉倒ざま。見るに可笑さを忍びていかにすらむと見てあれば、此物音に菊住の走出でゝ抱き起すを、見る人のあらじとや、女は甘えて、行けぬゆゑ負ぶ〳〵と舌怠い聲を出せば、其をも畏りて背を向くれば、どさりと肥肉を載せられて、華車男は蛙のごと

く潰れ、片手は柱に縋りつゝ、せり出しのやうに持上げ、ひよろ〳〵と歩めど凪にも仆るべき腰狀。腹も立つやら愛想も盡きるやら、此馬鹿もの、人に愧ぢぬか、と障子をどさ〳〵才藏の打鳴せば、此音に驚きて、遁入らむと、慌てゝ躓けば、椽も拔けむばかりに轟かして、澤庵壓に僵れてけり。

六　天の邪鬼

菊住の小〆に乘換へたるは慾に極れり。彼女と我とを較ぶるに數段の相違はあるものを。當時柳橋といへば藝者は才藏といふ人こそあれ、小〆といふものはあらじ。品の高下を一々いうて見ば、容色は凌雲閣の百美人に我は二番の女、藝にかけては憚りながら宇治の名取、これだけにても座敷は勤まるべき腕を持てるに、彼は淸元の地とはいへど、搔廻してお茶を濁し、得手は大方甚句なるべし。第一座持拙くして大客にうろつき、小勢に照れ、但空騷に騷ぐを藝にして其外を知らず、調子外れて、品格といふものなき、旅藝者の骨格と誰やらの穿たれき。とかういふにも及ばず、其位は客種を見て知るゝぞかし。

卑しき言分なれど、我は十年來曾て土器色の紅裏に肌觸れし事無く、小紋の置直しを引張りしこと無く、新しく染むる時は薄色にして、後を濃くして、二度の勤の襲を身に着けしこともあら

ず、此等は圓助應來の雪見藝者の苦し紛れの內證なり。些細の事なれど、雀の羽色は鶯に似るべくもあらず、鷹は穗を啄まざる理にして、彼等と一樣にはならぬ柳屋の才藏樣は、心から外貌まで自然と柳橋藝妓に出來たる正銘物。かゝる御方を色に持つこそ、男と生れたるものゝ此上無き冥加と三拜して、寢るにも此方へ足を向けず、我尊像を掛地にして、朝夕御酒に玉子酒、供物には鰻鱺の蒲燒を供へ、逢はぬ日も在ますがごとく事ふべきに、本戀といふ事を知らぬ男め、我を日本に幾人も散亂にある女か何ぞのやうに想ひ、鯛くひつけたる口に鰯の鮍の摘喰して旨がる天の邪鬼、冥利を知らぬ奴に才藏さまの難有味を知らせて遣るべし。腸樽に手足附けたやうなものに未練を殘し、取るに足らざる仂藝者を相手にして、外に男でも無いやうに騷ぎ立つるは、大人氣無きのみか、恥辱の上塗。あれしきの男に棄てられ、あれしきの女に奪られたと念へば腹も立てど、牛は牛侶、似合しき取組なり。あの男一匹戀に渴えたる乞食女に與れたと念はゞ、善功德したりと心淸しく、更に遺恨も未練も殘らず。但悔しきは、藝者の中の藝者と人にいはるゝ才藏が鑑違ひして、あのやうなる無能漢に熱せて、よしなき情立て、滌槽の下の骨を見よと突放されしを、思ふほどにも無かりし女、と世間の胡笑にならむは、鉛の熱湯飮まさるゝより一倍の辛さ。其とても今となりて他を恨むべきにあらず、身の不束ゆゑと諦むる外はなけれど、衆に負ける嫌ひの氣性には、我爲るほどの事は皆是と念ふ意地に、假にも不束と我を制むる事の無念さ。今ま

での情を捨て、義理を缺き、我を癡にしたる菊住の返す〳〵も憎さは、骨が舍利になるまでも思ひ知らせでは措かじ。

と思ひ定めて、金太郎の手前焦慮を見せて肚を洞察されむは淺まし、と隱せど有繫苛立つを酒に紛らし、彼外にまだ餘所行の情夫が二個ある、と平氣の顏で洒落のめせば、金太郎は獨り齒痒がりて、あれは不斷の色か知らねど、どうする了簡か、捨てゝ置いては顏が立つまじ。外の座敷に人の無きこそ幸ひなれ、二人して彼房へ飛込み、小〆の髻を取りて引まはし、泣顏を撲りつけて、詫證文の代りには、地黑を隱す厚化粧の頰に、こいつ助平と筆太に記し、三日が間共面にて座敷へ出させるやうに屹と談じ、男はこれから家へ伴還り、散々膏を搾りて一間へ押籠め三日の間斷食させてから、七日が間箱屋につかうて放してやりたし。畜生男めと切齒をするを、才藏は徐かに制して、畜生と思うたら腹の立つことはあるまじ。其樣な仂ない事して、いよ〳〵衆に嗤はれな。外に思はくもあれば、何も知らぬ顏して胸を塗り、此場は溫しく濟して、近い内になるほどゝ言はるゝ事して見せう。十郎の臺辭ならねど、じつと辛抱しやいのと立花屋の假聲。金太郎もこの暢氣に呆れて力を落し、いかなる仕返しの思はくか知らねど、餘りといへば張合なきお前の腑効なさ。長年兄弟同樣のお前の恥は私の恥。お前が構はぬとならば强つてとは言はぬほどに、私には私だけの一存あれば、必ず構うて下さるな、と立たむとする袂を捉へ、顏を背けて涙

を飲み、關係なき他人でさへ、それほどに思ふものを、虫の無きにもあらぬ我身が無念でなからうか。お前の腹の癒ゆるほどの仕返しは、屹として見せうほどに、此場は私に任せて、これから何處ぞへ行て一口、飲んだらば氣も霽れやう。

七　濡事師

才藏になほ心殘れるや測り難けれども、十が十まで菊住は手に入れたり、と小〆より雛助への報告を、山瀬が取次ぎて大盡まで言上すれば、妙くも爲たりとて、この褒美には寶石入の純金の指環を小〆へ遣はされ、此後こそ容易ならざる危所にして、才藏といふ强敵を敵手に持てば、聊かも油斷はなるべからず。必ず贓るまいぞの聲がゝりに、小〆は双手に鼻脂を引きて、(磯馴)の奥に才藏が此方の始終を見たりと知るほど、花が咲きかけたと勇み立ち、いつかは出會ふ所が贓の勝負、目に物見せうと心待ちに待ちかけて、先方の女に躁らせ、枝ある角を出させむには、菊住を片時も我側を離さゞるが何よりと、はや喧嘩買ふ氣になりて、此時を大事と、出所ある金錢に絲目を付けず、散るまゝに散らして、色と慾との二重繩に、男の體をぐる〳〵巻にすれば、才藏の歸りたりと聞くに、菊住も素が飽きて棄てたる譯ならねば、逢ひたさも逢ひたし、かの待合にて見られし浮氣から、悋氣の口說もして見たさに、隙を伺ひ脫出して、才藏の格子に聲も懸け

たしとは思へど、小〆の切なる心にも袢され、且は常浸りに引着けられて、身は網中の魚とは嬉くもあり、心は二つ身は一つ、と屈托顔を小〆に咎められ、それほど才藏樣が戀しくば、三十分ばかり此體を貸して進ぜますれば、逢うて積る話して、私の惡口を多度いうてござんせ。さりとて一人手放して遣りはせぬ。此方の帶に私の扱帶を結着け、彼所の格子の外から持つて居て、擾はれぬやうに番をする。其でも可くば行てござんせ。さあ〱と帶際取つて小突かれて、手暴な事をしまいぞ、我一人の體ではないものを、と事古りたる言草は、柔かき手でとんと一つ撲かれたさの下地。色男に成りすまして、どうもならぬと女の膝を枕に、夕飯の酒の醉にうと〱となれば、小〆は枕を爲替へさせ、小搔卷打懸けて樣子を窺ふに、鼾の聲微かに聞えて搖れども覺めず。此間に一風呂、と番は母親に頼みて横町の伊香保へ走る。

菊住はふと目覺めて四邊を見れば、次の間には下女が坐睡の鼾、母親は何地へ行きけむ見えざるに、小〆さへ在らざるは折好し。竊と起上りて衣類は其儘に、有合ふ袢引懸け、障子襖の開閉靜に、忍足して戸口まで出でたるに、我下駄の見えざれば、小〆の吾妻下駄を突懸け、格子を啓くる音に、奥より母親驅來れば、飛ぶがごとく竄れて才藏方へ闇を辿り行けば、前面より來る提灯に覺えの紋所、やう〱近くを火影に見れば、才藏が座敷への途なり。聲を懸けむとせしが、おのづから心怯れて息を呑めば、女は心着かで箱屋と談しつゝ行くに摩違ひながら、我見よがし

に女の顏を見込めば、才藏も菊住よと屹と一目見しのみにて、其儘背後向けて行くを、箱屋が其と識りて耳語せし體なりしが、又とは振向きもせず、前のごとく談し行く。

菊住は憎然と後影を見送りて呆れたる口狀。一目顏を見るならば、菊住樣と飛着き、座敷は斷りて直さま卿へこまれの道行、と想ひの外とも其の又外とも、謂はうやうなき大不出來に、才藏にはあらざりしか、我は又菊住にてはあらざるか。才藏と菊住との中は、かういふ約束ではない理なるに、今の樣子は、小〆に心通はするを腹立つの餘り、一鐵の氣性より我を見限りたるか。それこそ一大事、こゝが思案と拱手して、四辻をぶら〳〵と往きつ還りつ、なるほど一旦は腹も立つべき撮喰の浮氣は、重々我に罪あれど、かゝる社會には幾多もあり內の事とて、粹は寛大に見て、さまでに何を念ふべき。一時の出來心にして、胸づくしの一つも捉れば、共にてさらりと事の濟むべきに、合點の行かぬ仕打をしたものかな。讀めたわ。才藏ほどの女なれば、自家を高くし、假令餘所外にどれほどの浮氣するとも、石と玉との差別はおのづから辨きて、遂には我に復ると見込み、わざと難面く爲かくる中に敵の心を捻返す、これぞ色道四十八手に在りと聞く、風折といふ奥の手よな。面白し〳〵。

小〆は湯に入れども心急かれて、常は二人前の湯錢出して、留桶の湯の二十四五杯も用ひ、七道具を取擴げて、手足の指を十二分に琢く念入は今宵の事にあらず。烏の行水ほどにざつと濟ま

して、足袋穿く間も可悶く、歸途に迎への婢に出會へば、菊住様が何方へかお出掛けになりました、と聞くよりはつ、と一散に驅出し、石に躓き小指を傷めて、其には換へられぬ大事と、趁跛引き〱還れば、母親はうろ〱娘を見るに面目なき顏色。小〆は眼色を變へて、呼吸暴かに、菊住様が出掛けたとは、誰が許して、と顫聲になりて睨めつくれば、母親は火鉢の側に窘みて、誰も許しはせねど、何時の間にやらと皆まで言はせず。其爲の番しながら又持病の坐睡か。あれほど堅く頼みしに、さりとは言効無い、と足摩して無念がる氣色の尋常ならず可恐さに、母親は茶棚の陰に首を差入れ、心には仕妙法と念じても、なほ恐怖さの息まざるに、お宗旨の南無妙法蓮華經を念ずる間に、小〆は手拭包を紙門に打着け、簞笥より頭巾取出し、恐入りたる母親を尻目にかけて、倉皇と出でゝ行く。

先方が其手ならば、心得たり、色男の賢なるはこの柳流しに懸けてくれむ。これから才藏の留守へ押入り、例の裀の上に陣取りて歸來を待ち、おやと謂はせる、こいつ妙、と獨り頷きつゝ下向になりて行けば、曲角の出遇がしらに、此方はと女の聲して袂を捉られぬ。

誰かと見れば、追手に來たる小〆なり。百年目！　飛んだ處で捕まりの一言なしと思へど、ぬけ〱として、どうしたといへば、どうしたとは此方からいふ詞。此寒さに夜行は體の害、近頃

は惡い感冒が行るさうな、と男の手をむづと捉りて、四の五のいはせず引きずり行く一念の力の强さ。脈が止りて指が痺れる。免せ、放せ、と色男の苦しむを物の數ともせず、瘦腕を左の小腋に引抱き、遁げむ氣色も見えたらば、嚙着きても放すまじき身構へに、男も詮無く牽れゆく狀の見苦しさ。夜を幸ひと頭搔き〳〵、元來し道を返せば、遭ふ士女は皆立止りて見送るに閉口し、必ず遁げはせぬほどに此を放して、手を繫ぐにて堪忍してくれと只管賴めば、物はいはで脈所をぐつと緊められ、其も御聞屆は無いとの御意か、あゝ是非も無い。見たい人は御覽あれ。抑是は柳橋での濡事師、菊住といふは某事、と曝し物になりて歸れば、出し拔きし母親は傲然として、婢までが取合はぬ家內中の不興にまじ〳〵として、手近に睡れる猫の頭を撫づれば、畜生までが嫌ひて臺所に立つ。

寒い〳〵と奧の間へ飛込めば、小〆は格子に鎖して入來り、火の無き火燵を婢に罵り、わざと菊住に背後向けて、續けのみの煙草四五服、壁に煙の墨畫の龍を吐懸けて物思はしき顏を、菊住は手枕に轉げて横から瞻れば、眞白き顳顬の邊に癇癪筋うね〳〵と地圖の河の流るゝに、御心解かむと起きかへりて、一服くれぬかといへば、見向きもせで、持つたる煙管を菊住の目前へ投出しぬ。大人しく其を拾ひて、吸付けてもらひたいと、小〆の胸前へ差付くれば、それは人違ひ、と後は鼻が物言ふフ、ン。

總じて婦女は物に動じ易く、喜怒哀樂の情急にして、箸が轉けても笑へば、髮が毀れても泣くに出來て、男も及ばぬほど剛い所ある代りは、また弱い所ありて、其急所を行けば何の手も無く猿の一打、ころりと參ると常々菊住の廣言。それは才藏などゝ口說して經驗のあるより、女は誰もさういふものと侮りたるが憎し。此小〆は其手で行かぬ氣性もの、意地のある處を見せて其口を窘ませむ、と樣々に仕懸けて來るを皆撥付けて、此通りと力んで見れど少しも臆せず。成程これでこそ白金と人にいはるゝ才藏を溶したる腕の好さ、と我を張りし小〆もへた〳〵となりて、結極はどうやら此方から詫びてかゝらねばならぬやうな巧い所爲に、ぽんと遣られて中直りの小酒盛。夜更けぬれば好みの肴核も無し、蠅帳の小蓋物二つ三つ取出し、炙海苔鷄子に事を足して、雜物を火燵の上に推列べ、嬉しがらせ、戲言、怨言の相擲して、いつよりも酒の旨さに飮過ぎ、喋過ぎて朝寐の種とはなりぬ。

　火の出るほど憤りても、水を注くればかくの通り、と菊住は此手際に小〆の腹を識りて、餘熱の冷むるにも及ばず、隙を見次第また才藏へ押懸け、御釋迦が團子捏ねたる此手にて、彼をも難無く丸め、而るが上に、如何ともして双方を談じ、以後は此男を共和誓夫となして迭ひに妬ま

ず怨まず、君子のごとく譲りあひて、途中に夜が明けたりといへる古への貞女に愧ぢざる二人を、此男め果報にも兩の手に桃と櫻や梅見にも雪見舟にも鼎足の偕樂。二人の髮毛夢中に卷上り、諸蕷と鰻鱺のごとくなりて戯るべし。あら樂しさの浮世やな、と事業に成就ほどの悦に入りて、折あれかしと待てども、其後は用心嚴しく、眞に幽囚の身に異らず。極樂に牢もあらば恁やらむと想はれて、人の羨むほどにもなくて其身に切なかりき。

數ふれば明後日にて四週間、役所へ病氣屆の期限切るゝなり、此上の追願は、醫者と長官の印なくては協はじと詐れば、小〆は心元なく念へど、此事の虚にあらざれば、出るなとは言はねど好ましからず。然りとて代人にて事の辨ずべきにあらねば、いよ〱明日は出懸けるといふ前夜、睡いといふを寐かさず、襟を正し危坐して煙管を笏に把り、先度の手際を念へば、いかほど確をいうても明日の危さ、此身は泥船に乘せらるゝ狸なるべし。才藏樣に未練の段か、心の大在りは、誰が何といはうと此目で睨んで識つてゐる、と半分は廻氣から放す空銃なれど、覘は外れず共に相違なけれど、菊住の耳には皮厚のいるほど聽かされる、いつもの談義と半睡に聞流し、之で濟むかとおもへば、本文は其からにて、先私がこれほどまでに實を竭すを、何とも思うてはくれぬといふ事を口說き、中座には此間の脫出して逢ひに行きし事に就きて、その夜言遺せし所見及び愚痴を陳述し、明日行くは可けれども、役所の用は假托にて、內證は例の處へではあるまいか、

それが苦勞で〳〵ならぬ。知る通の病身なれば、かならず〳〵氣を揉まして下さるな。いつその事死んで執着いて彼世へ連行き、此苦勞をなくなしたい、と眞心の溢れてや、涙は襦袢の袖に初時雨ほどの濕。わつと泣かれては興が覺める、これ位の所が心細げに哀が見えて可笑い、と泣く心は酌まず、狂言に見てゐらるゝとも知らず、胸に在るほどのこと大方は言盡して、菊住樣忘れて下さるなと詞切るれば、十分膽に徹へてどうも耐らぬ顏色にて、一々尤なる言分。武士ならば金打、誓紙書く世なら血判して、此胸を見する處なれど、見せやうにも見せられぬ胸の中、誠を明す便は語なれど、何をいうても我言は皆疑はるゝ今なれば、悶ふるほどに思うても詮無い話。止どうするか目を開きて能く我仕打を見るべし。一度の氣紛に脫出したとて、其を根に持ち、毎日の愚痴責は、仕置が重過ぎていかい迷惑。何事もおほせの通り仕れば、向後はちと拷問をゆるめられ、寛大の御沙汰に預らば有難き仕合といへば、屹と此後を愼め、と膝にふつゝり紫の入墨、齒痕を戀の極印と近松は洒落たりけり。

白縮緬の頸卷から縞羅紗の外套まで、ぞつくり小メ仕着の身皮を飾りて、今日は長官の邸へと、巧く詐りて家は出たれど、附けらるゝ車夫は小メが恩顧の六といふ奴、この犬に嗅がれては何事も露顯すべし。さりとて金轡にては迚も行くまじければ、途にて還すは拙し、役所まで挽かせて、馬を捲く手の裏門から直迯を吃はせむ、と其通り仕了せて柳橋へ取つて回し、才藏の格子先に佇

めば、半玉の頓子が木綿布子のどろつきたるに寐衣帶して、白粉の斑に殘れる頸首を突出し、袖の下に何やら忍ばせて出で來にけるが、菊住を見るより、呀といひ捨てゝ奥へ驅入る。之を機會に格子を入れば、光といふ婢走出でゝ、今日は少々加減惡ければ、お目に懸ることはお斷り申しまする、と此間まで前垂の一つも遣れば、ちやほや吐せし奴が不知不識しき詞を、菊住は鼻頭に遇ひて、病氣と聞きたればわざ〳〵見舞に來れるものを、他人がましき言いふな、と推して行かむとすれば立塞がり、お通し申すなとは主人からの吩咐。今日はお歸り下さいと空嘯く。此奴小才なと菊住は怫然として、おのれの知つた事ではない、と拂ひ退けて通らむとすれば、成りませぬと袂を捉つて引戻し、お歸りなさいと菊住の胸を撞けば、此匹婦と熕桁一つ撲られて、這畜生、と昔取りける鍬柄の田舍力に突飛ばせば、菊住はよろ〳〵と土間に墮され、おのれと起上らむとするを、はたと障子を立切り、中より無圖と抑へて、歸れ〳〵と喚かれ、此上はと菊住も了簡して立出しが、さりとは餘りなる才藏の爲方、と隣の露地を入りて柳屋の裏窻の下に立寄れば、あのやうに手暴な事はせぬもの、と才藏の聲聞ゆるは、流石に心には我を可愛と思ふなるべし。窻の障子をほと〳〵と指頭に音づれ、難面き人の心かな。一目は逢ひたまへ、話したき事あるに、と小聲に言入るれば、家内は遽に鎭るなりけり。

菊住は切りに憤れて、答のなきは不得心か。逢うてやると唯一言いうてくれ。これ〳〵と忙し

く障子を敲けば、中より才藏の聲にて、何處のお方か知らねど、用がござんすなら表からお出なされまし。此處は裏口、豆腐買ふ窻でござんす。逢ひたいとおほせらるゝ貴方は、今表に見えられたお方ならば、お出は御無用に願ひまする。お客様ならば茶屋からでも待合からでも、口を懸けてお招き下されまし。此處は藝者の家にて、高貴のお方の御足を入れさせらるゝやうな處ではござりませぬ。それとも切て私に、逢ひたいとの思召ならば、茶屋から立派にお招き下されまし。お座敷とならば藝者は呼ばれてお酌を致しまするが商賣なれば、お客様は乞食でも、穢多でも、人非人でも、義理知らずでも、薄情ものでも、畜生でも、其には厭ひなくお對手を致しましよ。お話とやらがあるならば、何なりとも承はりましよ。人の裏口からこそ〳〵と物言ふは、錢貰か、紙屑買か、空瓶買。そんな眞似をなされては御人體に拘る事。但しはお門違ひか、升屋の小〆様のお宅ならば、此から東へ三つ先の横町、此は柳屋の才藏といふ未練のない藝者の住居。用無き門にうろ〳〵して巡査様に咎められぬ内、早く此處をお出でなされまし、と散々に辱しめられ、向ふ近き長屋の人の覗くに耐りかね、足早に表に出でゝ、腹立紛れとは言ひながら、此雜言男の辛抱なるべきにあらず。第一我を錢貰か紙屑買かとは言過ぎたり、乞食でも穢多でもとは何ぞ。

座敷ならば逢ふといふからは、例のから口を掛け、存分に言草いうて此仕返をせでは、今宵が寐られぬ、腹が立つ、と馴染の待合に飛入れば、女房罷出でゝ、此頃のきついお見限りは、世界

を變へて新出來と巣籠の御愉快ゆゑとかや。餘り然うなされたものでもござりますまい。旦那のやうに女縁とやらのあらつしやる殿方は、彼方からも此方からもやいのやいので、愚痴や怨言に慣れきつて、おのづと萬に心強く、私どものやうなものゝ怨言などは、蠅が甜めたほどにも思召すまい、其が善いのでござりますのさ。

　聒しき女房の喃々を懊惱がりて、（左も右も）に後を抑へ、我と言はずに才藏を呼べとあれば、不審立てつゝ畏りて退りぬ。

　彼奴來らばどうしてくれうと思案する内に、待て〳〵と大いに感ずる所ありて、いかにも我を散々に詈りけれど、此惡口の元を糺せば、我浮氣を恨む餘の鬱憤を霽さむ爲なり。我浮氣を恨むといふは畢竟我を身に替へていとしく思へばなるに、我過を棚に上げて、他を恨むは大きな了簡違ひ、是は此方から慍りかへす所にあらず。兩の手に桃と櫻の艶福を享けむには、此處等が辛抱大事の脈所なり。言うて見れば此方よりも、才藏の胸の中は幾許ぞや。長年世話せし男の恩を忘れて、心を外へ移したるは、泥を塗りし顔をなほ踏付けの仕打、と男ならば出刃を揮舞はして、其命を貰はむ、と阿修羅王とやらが暴れまはるほどの始末にも及ぶべきを、才藏なればこそ常談にて事は濟したれ。何も言はぬ、全く以て菊住の不了簡なれば、才藏が此處に見え次第、桃井若狹介に遇うて、何事も御唯々で直もの詫びなば、いかに氣丈の女でも、好いた男の一言は、十言

に向ふ嬉しさに、どうするものか、角も根から脫けて、火燄も忽ち消えぬべし。
此處で此方から强き言をいはゞ、先も意地になりて强き言を言募り、トヾ女房の仲裁から相睨で別れ、其より全く脈あがりて、此戀は死物なるべし。死なしてなるものか、大事の〳〵、それ御入來と見えた。女房へ御挨拶の御聲、いつも初音の心地こそすれ、と手爐の傍に待受けの衵を正して、來たらば矢庭に叩頭の十もする氣で、待兼山の杜鵑、雲間を出づる御姿、見るより聲を懸けて、いつも端麗々々。先此へといへば、才藏は入口にしやんと坐りて初見のやうなる挨拶。是は有難し、此方の思ふほどにも無く、疾より御心解けての御常談か。堅い〳〵、いつものやうに直と此へ來て、一掐願ひたきものと片膝突出せば、餘所に見て、今日の寒さはと話無氣に呟きぬ。
菊住悰へかねて飛蒐り、好うも先には恥を掻かせしよな、と執る手を拂ひ、屹となりて、恥掻かされし覺はあれど、掻かせし事は覺えませぬ。此方のやうな人非人の畜生には、物言うたとて解るまじければ、言はぬことに極めたれど、來られた義理ではなき家へ、のめ〳〵と面出して逢ひに來たとは、小〆に言付けられて、わざ〳〵緣切に來られたか。但しは自惚から此才藏に未練ありと見て、丸めに失せたか、愚なこと！ 緣は此方から疾に斷つた。未練は疾に捨てゝのけた。最早此方に逢ふ用なけれども、座敷でならば逢うてやるといひしは、あれほど散々に苛みければ、

愧ぢて又逢はむとは思ふまじとの了簡なりしに、さりとは馬鹿正直のお方もあるものかな。逢ふもなか〳〵汚らはしや。來るではなけれど、かくまでにして逢はむといふは、久米平内といふ士我貌を石に刻み、不善事せし罪滅の爲に（ふみつけ）よとの心に同じく、不實不義理を後悔して、何とでも叱つてくれとのしをらしき了簡から、呼びに來せしと思うたれば、可厭ながらも逢ひに來たは、今敵同士とはいふもの丶、廿日昔の淺からざりし馴染効ゆゑと有難く思ふべし。

今更女々しく抒べずとも、此方の胸に聞かば皆知るゝ事と何も言はねど、此方は見下げ果てたる根性かな。思へば思ふほど胸逼り、悔し涙の一滴に、千萬無量の怨言も愚言もありぞと見よ。此仕返には菊住様、十日と經たぬ中に此才藏が……否々其を言うたなら又未練が出て、小〆様の捨てらるゝが不便ゆゑ、此處ではいはねど、噂に聞きて様子が知れなば、女で食ふ氣が女で食はれ、今日を食ひかぬる身とならむ折、薦着てなりと遠慮無く尋ねてござんせ。損じ札の四五束は、面桶へ投げて進ぜましよ。この恥知らずの野良猫めと撞倒して、轉けかゝる菊住の横面を、三味線逆手にしたゝか撲てば、棹は半より折れて胴は摧けぬ。おのれ！無禮な、と立たせも遣らず、才藏は襖を蹴開き、飛ぶがごとく遁行くを、遁さじと逐懸くれば、女房に抱留められて、放せ放せと悶ふる間に、はや才藏は格子を出て、顳顬の邊に血入染む男の顔を見やりて、張臂に袖を拂ひて悠々と立去りけり。

以上は成金の葛城餘五郎が、柳橋のお才といふ藝者を、金で面を張つて無理往生させて、手に入れる段取りを書いたものだが、葛城の生立ちや成功の經路、つまりこの男の生涯が、短い敍述の中に實に鮮明に出てゐる。それから又較概念的ではあるが、其の時分はまだこんな女もあつたとみえて、金には靡かぬ江戸つ子肌の藝者の典型ともいふべきお才、その情夫の安全社員菊住、傍系の小〆といふ藝者の姿も實によく出てゐる。勿論これ等は、言つてみれば類型的の性格で、細い個性はないけれど、作品が古典的なものだけに、普通性の抽象化されてあるのは當然である。

以下お角、お艶といふ二人の女を順々に、自分のものにしてゆく經路や、三人が完全に葛城のものとなつてからの運命とを少し書いておくのも無用ではあるまい。

作者は第十一回に於て、更に雪村素六といふ富豪を點出してゐる。この男は隅田川の沿岸に一町四方もある大きな別業を構へて、それを朝野の貴顯紳士の遊び場所、つまり倶樂部のやうなものにしてゐる。そして各方面の人々を時々そこに招待して、現今の待合政策又は賄賂政策のやうなものを盛にやつてゐる。この雪村は信州の山の中に育つた男で、誕生日に敗れ鰯を二尾祝ふ外は、年中生臭いものは口にせず、米の飯は危篤の病人でなければ食べないといふやうた僻地で、松の焚火に燻ぼつてゐるやうな人間である。それが維新の際官軍の兵糧方に雇はれ、段々出世したのである。のちには諸官省の用達を務め、二重底の菓子折の下には黄金煎餅の贈り物、といつたやうな手を使つて、めきめきと金を作つたのである。一寸大倉喜八郎に似たやうな所もあるが、それは單にさういふ形を借りて來ただけで、大倉といふ人をモデルにしたわけではない。この別莊には美人を十人の餘も雇つておいて、茶屋待合へ出入することを憚るやうな身分の人を遊ばせるので、一度こゝへ來たものは、味を占めてつひ入浸るやうになる。

或時或貴顯が宴會を開くといふので、雪村にそのことを通知すると、彼は有難くお受け申上て僞に御祝儀の献上ものを用意する。

如意を織出したる西陣一巻、白熊の敷皮一枚、長六尺の油畫一面、少女水浴の圖にて、伊太利畫聖の摹寫なる裸體畫。此外當日席上の飾菓子に、有平細工の蓬萊の島、岨なる瀧には葡萄酒の絕えず流るゝやうに仕懸けたり。此入費合計千何百圓か知られず。目覺しき事と內見せるものゝ肝を潰せり。然れども此千幾百圓の、近き內には一位進みて戾ることを念へば、何萬圓掛けても損のゆかぬ商法なり。

と言つた調子である。葛城大霊もその席に列つてゐるのだが、御前がお才が見えぬと言つて不思議がると、あれは落籍されまして、御前へよろしくと申しましたと誰かゞ言ふので、葛城は腹のなかで可笑しがつてゐる。雪村はそつと葛城の膝を掐り䗶をひそめて、お才に憂き身をやつし今は白鬚に圍つてあることを語ると、此頃にお睦まじき所を拜見などゝ洒落れる。

「易いこと、一六三八は出張日なれば近日御入を待つ。とは謔にて、四九、二七、五十も會日なるべし」

とある。詰り一月中入浸りといふことになる。

「餘五郞杯を差して、他の事より足下こそ、近頃向島に美形を萃められ、貴顯への御馳走此上

無く、いづれも御意に稱ひて、世界に無い圖との噂耳に入りぬ。下賤の某には候へども、其道には志篤きに免じ、三千歳の壽を保つてふ仙桃を味はせたまへ。某の君の特に心を懸けたまふ如きは、比類希なる媚骨のよしにて、甘露口中に滿ちて齒牙三日香しとやら。さほどの名樹御手に入りたる果報、身を省みて羨ましき限なり。」

云々といふ美文もある。

お才を物にした葛城は雪村の別業にゐるお角といふ女を見てから、内の瓜核も古し、豐頰をぼと、お才を厭ではないが、今となりては格別珍重でもないので、そろ〳〵お角に手を延ばさうとする。本文を少し引かうなら、

唯今お酌申せしはお聞及びのもの、名を角とはいへど豐頰を怪まれな、と洒落に紛らして其と知らすれば、成程々々と言はれて、さつと顏を赧め、少し退りて俯きぬ。其可憐廿歳越えたる女とは見えず。此眞似ばかりは故として成らぬ事、と餘五郎一廉目利して、先お近附の證に一杯とあれば、おづ〳〵戴きて、酌する子に目授すれば、心得て雨滴ほど滴しぬ。返杯は餘五郎盈々と受けて、一同へ杯上げたけれど、迷惑なる人もあるべし。此方とても一々の返杯に預るは面倒なり。何事も手取早きが當世なれば、大きなる物にて一度に受けたし、皆も惣懸りにて一度に酌

したまへ。之にて受けむ、と有合ふ銀の杯洗の水を捨てゝ差出せば、素六手を拍ち、見事なる御手元拜見と、箸をおきて見物す。

此酒は十二人の酌なれば十二口に飮むべし、一口毎に下物無うては可笑からず、これも一同交る〳〵に箸取りて、我髭髯を推分けて口に投込まれよといへば、之はついに聞かざる葛城殿の一藝、所望々々の聲の下、それ飮むぞとがつぷりやれば、十五になる靜といふ子が、玉の如き手に燒肴を一口挾み、葎の中なる古井戸に、惴々墮して慌てゝ箸を退く。後の下物の用意は好きかと飮めば、十六になる宮といふが、振袖を左の手に抱きて、蕾のやうなる我口を開きながら生薑を入れぬ。

呼吸をも繼せず十二人下物を挾めば、約束通り一滴も殘さず飮乾して、墮せるやうに杯洗投出し、これが昔に在りしと聞く、鶯飮か、ほうとばかりに大息を吐きたりけり。

さて御前が歸つてから、葛城は別の小座敷で、お角と差しになり、小酒盛といふ云ふ段取になつて、半日ばかりお角が附添つてゐるうちに互に打釋け夜おそくまで飮む。

葛城夫人はお麻と言つて、蕎麥屋の出前などやつたこともある葛城の前身からの、謂はゞ糟糠の妻なのだが、折節は家へ歸ることもある。お麻は元は湯島邊の矢場女なのだが、葛城も家へ歸れば、

家事向の雑談一通り濟めば、金儲ける話、儉約の話、養生して長命せよの話。」といふ工合で、お麻は「全く女房氣になりて酒の席には置かれぬ代物に變り果てたり。」である。

「醉うて腕の刳青出して、木遣節唱ふ元氣は無きかと嘲れば、男は死ぬまでも其氣合にてよし。女は世帶持ちてからは、紙に澁を引きたるやうに、外見はよろしからでも、物の用に立ちて丈夫向なるを最上とするものなり。」

と言つた風の女である。こゝに作者の細君辨が長々と出てゐて、その果に

人の女房の其家に功ある事、金錢財寶の形こそ無けれ、其にも劣らざる重寶になりて、畜生の出來ぬ事を能く爲る人を、犬よりも酷たらしう取扱ふは、更に謂無きことなり。

と紅葉さんらしい婦人觀が窺へるが、長いから拔くのは止めて、「山神の靈驗はどれほどか知らぬが、これならば内に腎も落着かぬ道理」といふほど、今はお麻を相手に酒を呑む興味もなく、今朝も早く飛び出し、四箇所の商社を廻り、直ぐさま雪村の別莊へと馬車を飛ばせ、

逢ふ度毎にお角の風情に澤が出、心意氣は耐らぬほど面白く、どうやら本物の様に見えて、附

燒刄とも想はしからざる處あり。之では捨てゝ置かれぬ氣になりて、餘五郎の心はいとゞ闇になりぬ。

夏の日長けて風湘簾を弄し、疊に實梅の影重く、花稀なる蘭の床に仍香る小座敷に端居して、物思はしげに團扇の柄を嚙むお角の姿を熟く見入れば、身内よりとろ〳〵と脂出でゝ、此儘に肉も蕩けて、骨ばかりの餘五郎になるかと、氣も心も消々になりぬ。之を花に喩へたらば、日影を眩く、少し面を背けたる紅梅のごとし。お角とは下作なる名を呼びたるもの哉。紅梅といふ名にせよ、と商人も有繫雅の心を動かせり。

可厭がるものを無理に紅梅にして、名附親が引手物取らすべし、と檜垣を金蒔繪にして、紅梅の花には小粒の珊瑚、幹の蘚苔にはエメラルドを鏤めたる差櫛を造らせ、嬉しさうなる顏を見るが樂さに、行度毎の手土產の中には、お角の心に染まぬもあれど、高金を吝まざる品のみなれば、どれにしても可厭なるは無く、身のまはりの一切悉く餘五郎の心を籠めたる物ばかりなれば、之を着飾りて他の席へ出づるに、野中に一本の牡丹咲きたらむごとく、お角ばかりが優れて目立てば、客は眉を顰めて、我はと我馴染を棄てゝ此女の名を多く呼ぶことになりぬ。

このお角を强引に雪村から攫ひ取つてしまふ手段と徑路は割愛することにして、話はやがて三番目の

お艶のことに移る。

お艶は葛城が金澤へ歸省した時、初めて見た女で、身分も好く品位もある全くの素人である。取卷き連中の力添へで、これを巧く東京を釣出して、遂に暴力で征服してしまふのである。

三人の美形を手に入れた葛城は、或時陽春の花見時に假裝の園遊會を音羽の別莊に開くのであるが、その趣向がまた凝つたもので、勿論作者の工夫に成るものであらう。

衣香、帽影、簪の光、黄金の鏁、

マニラの烟、薔薇の風、女の顔は白く、男の髭は黒く、往來織るが如く、笑語の聲の中を、反古染の袖無羽織に淺黄頭巾打冠りて、白酒や白酒を賣行くは、第四商廛の番頭淸水某、これは御趣向と褒るものには格別の大茶碗にて振舞ひ、向鉢巻にて難波鮓と箱擔げ行くは第二商店の會計、考妓の島田ほどの鐸包を行遣ふ童女ごとに一つ宛くれて通りぬ。チヤリネの道化師様に裝束ぎたる男、首筋にその數二百許色々の風船球を結ひつけて、西洋唱歌を謳ひつゝ、道化女に裝りたる侶にヴイオリンを彈かせ、拍子をかしく舞いながら絲を斷れば、寳珠の玉の天上のごとく小氣球天に滿ちて、之も興になりけり。

この園遊會で三人の女が、本妻のお麻に紹介される。そして本宅へもちと遊びに來いといふお麻の聲

がゝりであるが、三人の中でもお才は少し骨のある方で、頭が高いので、さう本妻の御機嫌ばかり伺ふやうなことはしない。お艶は妾にしても別に面白いといふほどの女ではなく、毒にも藥にもならぬ莫迦正直なのが取柄なので、これもちやほやして本宅へ御機嫌伺ひにゆくといふやうな事がない。それに第二號のお角は、もと自分から進んで余五郎のものになつた位だから、そういふ點では最も狡猾に出來上つてゐる所から、連りに本妻のところへ出入りして御機嫌を取り、お艶とお才を遠けやうとする。殊にお艶が余五郎の胤を宿し、やがて男の子を設けるやうになつてからは、一層自身の地位を不安に思ふ所から、本妻とお艶の中を裂くことにあらゆる手段を講ずる。結局迂濶なお艶が自然と餘五郎から遠くなるやうな形になつて、餘五郎が遽かに病に罹つて寢てゐることも知らない位である。漸くそれが分つて、馳けつけた頃には、お角の陰謀にかゝつて、誤解に誤解を重ねた奥方の機嫌が悪いとみえて、誰一人取り次いで呉れるものもない。で、色々に手をまはして何うかかうか病室へ入ることを許され、餘五郎の一粒種の幼兒を抱いて行つた頃には、彼は既に此の世のものではなかつたのであるが、しかし葬禮の混雜や、引續いて各商社の後始末、財産の整理など、一と通り著いた時分になつて、お角の奸計と、お艶の人の好いことがお麻にも解つて來たので、お角は手斷金千圓で追拂はれ、お艶は七八千萬圓もある總財産の五分の一を頒けてもらつて、本妻の妹分として生涯を裕福に暮すことになる。

さてお才のことだが、この女は無論餘五郎存世の時に遡つてのことだが、久しく餘五郎の足も途絶えがちになつてゐたところから、或る動機で元の柳橋時代の情夫菊仕との關係が繋がれることになる。それはお才がお艶を誘つて、歌舞伎座の夜芝居を見に行つた時、向ふの高土間にゐた菊仕が見つけて、執拗く附纏ふところから、元來葛城のトリックにかゝつて、心ならず意氣張りで棄てた男なので、それ

から又人目を忍んで、ちよい〳〵母親の家の二階で逢ふことになる。この歌舞伎座における一場面の描寫が面白いから、少しぬいでみよう。

眞向の高土間に、黒絽の羽織、柳條數寄屋の古單衣、鼠色なる白縮緬の兵子帯に、金色の角繋の鏁を巻着けて、銀時計の金の龍頭ばかり見せかけたる男、水牛製の双眼鏡の筒口を、始終二人の方に差向けて、執心の事なりき。身分をおもふに、書生の風ありて書生ならざる處あり。多分は下宿の奥二階を二間借りて住ふあたりの官吏と覺し。肺病ありげに華車なる美男子、手などの白く繊く軟かきこと十八九の娘のごとし。鼻下に八字の薄髭ありて、前歯の端に黄金を貼けたり、格別嬌めける様子は無けれど、何處やらに我は色男といひたき風ありて、女子さへ見れば殺したがる了簡、恐るべき人のやうに見えたり。

幕間に二人の立つを見るより、男は衝と身を起し、疾足に跡を慕ひて茶屋を見屆け、軈て物案じ顔にて還りけるが、眼色も尋常ならず、心の落着かぬ輕躁に、火の着かぬ巻莨を啣へて、人無き鶉も可懷しく待つに程なく、どろ〳〵と雪颪の音凄く聞ゆる頃、二人は紺の中形の浴衣に、衣更へて、見るから涼しげな打扮ち、茶屋の女房を始め五六人の男女に送られて入來りぬ。彼男は幕の開きかゝるにも關はず、また升を飛出して、假花道の口より鶉の様子を窺ひて、霎時佇むを

制せられ、階子を昇りて三階の運動場に、酪酒賣る店の椅子に腰掛け、欲しくも無き葡萄酒を一盃取りて、巻紙硯箱を借り、四邊に人の在らぬを幸ひに、假名にて細く認め、引結びて手の中に藏るゝほどの文にして袂に入れ、此幕は見ぬ氣にて悠々酒を飲み、後は氷ラムネ、胸の清くはずの水も痞へて、半分にして立ちぬ。場所へは還らず、柝の音を餘所に聞きて、例の如く思ある方を望み折々は舞臺を覗きて、此幕の長さを待遠なる顏色。

彼の鶉に何尋ねに來にけるか、年輩にして鶯賓さうなる茶屋男の、禿げたる頭顱西日を承けて光るを見付け、途に歸來を待受けて呼止むれば、御用で、と解しかねたる樣子。小蔭に招きて、まづ五十錢の銀貨を摑ますれば、いよ〳〵理の解らぬ顏して、受取りながら禮は言はず、男の顏と銀貨とを可訝げに見較べぬ。男は小聲にて、今其方が行きし鶉の束髮の女に、人知れず此文を、伴の者にも曉られぬやうに、と袂なる用意の結び文を渡せば、老漢いよ〳〵以て合點ゆかず。あれは葛城樣の、と皆まで言はせず、それを其方に聞かうか。相識なれど伴の女に知られては、都合好からぬ仔細ありて、彼所へ顏は出されず、文にて呼出し、茶屋にて一寸會ひたき用あり。少しも懸念に及ばず、此の取次頼むといへば、胡散臭い文とは思ひながら、先方も承知の事ならば、骨折賃の出る仕事と、やう〳〵祝儀の禮を述べて、唯今直にと行懸くるを呼び、必ず他に曉られぬやう、外へ呼出してから頼むと呼けば、其邊に忽は無い顏で駈行くを、見えぬ處に身を忍ばせ

て、首尾は什麼と胸穏からず伺ふに、老漢は難無くお才を呼出し、頼まれし始末を語りて彼の文を出せば、容易に請取らず。內證にて恁る物を贈らるゝ覺無ければ、早々其人に戻すべし。名も書かず、譯ありげなる可厭らしき文、と目尻に掛けてついと內に入りけり。老漢は疎忽なる事して面目を失ひ、飛んだ目に遭ひました、と文を男に打付くるやうにして、半助の貰ひ德にして逃行く。

頼の綱は切れても、なほ未練ある女の方を眺めて、去りもやらぬ間に暮になりぬ。見物一度に立ちて、便所の路の混雜は忍ぶ便、首尾を見て素戻りの文を何卒握らせむ下心の男、思ふ鶉の後に立寄れば、折から茶屋の迎來りて、今客の出でむとする氣色なり。彼男今更心怯れて身を退けば、其處は風の路と隣に涼む男に除され、進むに進まれず退歩して土瓶を蹋仆し、小言吃ひながら、又進む時、眞先に出づるお才と端無面を合せけるに、吃驚せし女は忽ち然あらぬ方を見向き、草履つつかけて戸外に出でぬ。

取逃して殘念なる男、氣の拔けたる顏して伸上り、つく〴〵後影を見送るところを人に撞當られ、其心とも無く帶を探れば、今の奴にか、大事の時計を掏られて、洋銀の鏈子半程より斷れてぶらりと垂れたり。此男には無二の質草たるべきを、然しては惜さうな顏もせず、斷られたる鏈子を指頭の玩弄にして、何やら思案するも、女の事らしう見えけり。

これほどに思へども、一向他へは通ぜぬ樣子。出來さうも無き事を男は根で負す氣か、なほ其の邊を彷徨して歸るを待てば、やがて入來るお才は男の顏を見て、先のごとく驚く氣色は無く、召使の團扇の風に背後を吹かせ、霎時涼みて、婢どもを三階へ遊びにやりたる迹は、お艶と二人ゆるりと坐りて、更紗の筒より紫檀羅宇の金煙管を取出し、紙切に火皿を拭きて外へ捨つれば男は、四邊を眴し、足下に履みつけて二三間引擦りゆき、拾上げて人無き處に披き見れば、明日の午前十時頃淺草なる母の隱宅へ行きて待てとの文言、末に番地書あり。鼻紙に人目を忍ぶ禿筆の走書、神妙に書いても上手にはあらぬ手の、いとゞ不見事なる蚯蚓樣。男の身に取りては定家卿の色紙よりも尊く、喜悅膽に徹へて持つ手も自から戰くなり。

さりとは思ひ懸けぬ吉報に、讀違へではあるまいかと、躍る心を鎭めて、一字づゝ拾讀に讀みかへせど、其に相違無きに安堵して、肌の守と保存したきは山々なれど、もしもの事ありてはと引裂き、咬み丸めて窻の外へ遠く投げて、久しく空けし我場所に還れど、餘りの嬉しさに狂言はいよ〳〵身に染みず、遙に前面の鶉を眺めて、あれほどの女が己の、と小指を握緊めて、獨り笑まるゝ顏を俯け、時計は奪られても九圓六十錢の代物、鰕で鯨を噫釣つたる哉。

菊住との媾曳が度重なるにつれ、遂にそれが新聞の三面記事となつて、ぱつとしたところを、山瀨と

いふ餘五郎の輩下が間へ入つて、お才に謝罪させ、大腹の大盡の方はそれで一旦おさまつたが、それも暫くのことで、今度は性懲りもなく、知合ひのお花の師匠の二階で屢々二人は逢つてゐたので、終にそれが露見して、外の去る廢屋へ押し籠められ、身から出た錆で、さすがのお才も廢所の月を眺めることになつてしまつたが、餘五郎が病歿してから、舊の古巣の柳橋で、菊住と二人で待合を開業するといふところで、梟がついてゐる。

多情多恨

多情多恨は讀んで字の如しで、若くして病歿した愛妻に對する綿々切々の思慕に惱む或教授の寂しさと、悲哀とを山人獨得の巧緻の筆を以て描いたものである。年代の順序から言ふと最後の作品「金色夜叉」の一寸前に出來たものである。

この作品は紅葉山人が最も得意としたもので「我家の小說は米の飯なり」とまでに手前味噌にあげたほどである。それだけに小說の形體から云ふと分量は相當長いが、別に小說的な結構があるといふのでもなく、又どの部分を出して讀んでみても其の一點が特に目立つて高調されてゐるといふ所もない。つまり其の時代の智識階級の一人の日常生活を平々淡々たる筆を以て叙述したものである。

作品の由つて來る所、つまり作の動機といつたやうなものを想像してみると、丁度作者の結婚生活の幾年か後のことで、家庭生活といふものに就いて作者の頭に所謂世帶氣の出て來た時分のことである。この主人公の鷲見柳之助は一寸型の違つた變人で、世間不見で一面又學者肌でもある。この男が亡くなつた妻に對して殆ど想像も出來ないほど執拗な思慕の情を寄せるといふのが一篇の主題だが、それに絡ませるに葉山誠哉といふ主人公とは丸で性格、氣質、環境の異つた樂天的な通人肌の會社員を以つて爽てゐる。鷲見（すみ）が田舍出の學生上りの純粹な學究だとすると、副主人公の葉山は多分に市井の氣分をおびた洒脫な紳士なのである。この葉山は會社員であると共に又非常に圓滿な家庭人である。遊蕩の味も相

當身に沁みてゐるし、着物だとか食べ物のことなどに就いても如何にも明治中葉時代の都會つ兒らしい教養をもつてゐる。この男は中心は相當眞面目で世間の事にも通じてゐる。で非常に溫い感じのする人情家であり、友情の持ち主であつて、變人の柳之助を一面もてあまし乍らも何うかして其の悲しみと寂しさの中から救ひ出さうとして、出來るだけのことをしてやる。葉山の細君のお種といふ女も極平凡な世間並みの女性ではあるが、堅い善良な家庭に育つた女で、良人の誠哉が始終洒落や諧謔を飛ばしてゐるのを寧ろ輕蔑して、煩さがつてゐるやうな、餘り口數も利かない、それかといつてむつつりと云ふのでもなく、まあさう表面にはお愛想がない乍らも、氣持ちの好い親切氣のある女性なので、葉山と一種のコントラストを成してゐる。この細君が其の性格上鷲見のやうな、煮え切らない、男らしくないいつまでも死んだものに對して愚痴つぽい未練と執着にめそ〳〵してゐるやうな態度や氣分が氣に入らないのは勿論で、鷲見の方も又葉山は大變好きだが、細君のお種が側にゐると窮屈でならない。それでその葉山には非常に信頼もしてゐるし懷いてもゐるが、細君のお種とはどうも反があはない。併しそれも最初のことで、お種の方でも鷲見に對する同情と理解がだんだん深くなつてゆくと同時に、柳之助の方でもこの女の誠意が呑み込めて來る。で、良人に對する愛情、良人の父親に對するわざとらしからぬ孝養、つまり家庭の主婦として別にこれといつて常人にすぐれた點がないまでも、少しも非點のうち所のない圓滿な氣分を持つてゐる事が、側で見てゐても葉山の夫婦生活を非常に美しくしてゐるので、それが羨しい位である。從つて初め嫌つてゐた柳之助も、近くに從つて、次第に心を惹き附けられて、終には一寸もこのお種の側が離れられないといふ所までいつて了ふ。その時は鷲見は寂しい自分の家を疊んで葉山の親切で彼等夫婦の二階へ同居してゐたのである。そして柳之助とお種の氣持ちが、戀愛のそれとも又

違ふが、一寸他所目にはさう疑へば疑へないこともない、といふやうな際どい所までいつて了ふので、そこに一寸家庭の葛藤が生じる。その爲に鷲見は又葉山夫婦の家を出て近所の下宿に移ることになる。

筆者はこの讀本に納めた紅葉評傳といふ一文の中にも、屢々ふれておいたが、作者の作品は相當人世の暗面といふやうな所へも入つたものがある。前に掲げた「猿枕」とか又は時代的なものでは「伽羅枕」「三人妻」それから又後に掲げる「金色夜叉」などもさういつた人世に觸れてゐる。併しそれにしても其の見方は非常に常識的な道德と人情に終始したもので、殊に當時の讀賣新聞が家庭新聞であつた所から、掲載の小說もまた親が子供の前で讀んでゐても、少しも恥しくないといふやうなことをモットーとしてゐたので、作者も其の氣持ちを始終失はなかつたやうである。殊にこの「多情多恨」は作者が「伽羅枕」や「三人妻」のやうな絢爛の境を通過して、平坦の途へ出て來た時の作品で、何か觀念的なローマンチックな藝術境から、レアリズムの文學へ入つて來た時の作品でもあるし、前にも云つたやうに家庭人としての道德的な生活に落ち着いた時代でもあつたので、鷲見とお種との戀愛に似たやうな際どい境地を、其の危險から旨く救つてゐる。それを調節したものが通人肌の葉山の態度で、そこに作者尾崎紅葉の市人としての人格が遺憾なく具現されてゐるのである。勿論變人風の鷲見柳之助と作者の人格とは似ても似つかぬ、寧ろ反對の人物のやうに、一應は見えないこともないけれど、これとても作者の人格の中に全くないものではないので、唯それが誇張されてゐるまでのことである。つまりこの變人の野暮漢の木念仁の鷲見柳之助と、八面玲瓏ともいふべき、融通の利く苦勞人の葉山とを混合して、其の中庸をとつたやうなのが、作者紅葉山人の好みであるといへば、大した間違ひはあるまい。

以下全篇の數章を摘出することにする。これは鷲見が愛妻を失つてまだ間もない時分の彼の寂しい心

境を、至つてなだらかに叙述したもので、讀んでみても別に何の奇もなく、小說的な興味にも乏しいが、併し全篇を一貫してゐる柳之助といふ人物の姿が、其の平坦な叙述の間に入染みでゝゐるので、讀者には少し退屈かも知れないと思ふが、この作品の概念を作つて貰うために掲ることゝした。この中に葉山が見舞に來る所がある。すると彼は相當の身分なので、家庭も氣樂に暮してをり、俥に乘つてやつて來る。定紋附の萠黄色の絹の袱紗包みと重筥らしい包みとを持つて來る。入つて來ると、袱紗の包みを解いて、西洋林檎を一籠と蒸菓子が一折、それに鳩居堂の線香を一箱出すのである。かういふ所が作者の世帶氣をむき出しに出したもので、平常さういふ瑣末なことにも相當心を勞してゐたのである。それからかういふことがある。お重を女中の方へ押しやつて、「これはお菜です、何か旨いものを持つて來やうと思つたけれど、この際のことだから遠慮をして、椎茸、干瓢の類さ。尤も代物は精進だけれど少しは陰に如何樣がしてあるかも知れませんよ」といふ所がある。これも如何にも紅葉さんらしい口吻である。かうした心盡しのお供へ物や食べ物を持つて來ても、相手の柳之助は至つて野暮漢で、その心遣ひを受け取つたかどうかは疑問であるが、山人が、「我家の小說は米の飯なり」といつた意味が、かういふ所にもうかゞはれる。それに又其の時代の普通人の日常生活といふものが、現在のやうに社會的な壓迫とか、全人類の憂苦とかといふものゝ背景もまだ適切には感じられない頃のことで、各自が其の分に從つて日々の生活を樂んでゐたものである。

もう一つ筆者が讀んでゐて思はず微笑したのは、葉山の會話の中にかういふことがある、「細君旨くもないのに料理自慢だつけ…………細君得意の早吸物——魚煎餅に蕩汁昆布といふので、毎々窘らせたよ」といふ文句がある。これは普通の家庭によく使つた食べ物で、今でもあると思ふが、あの時代

それが流行りだしたものらしい。實に細いことを書いたものだと思ふ。尤も作者の寫實的の筆は斯くの如く微細なものであるが、葉山は兎に角、主人公の柳之助の學究としての氣分が全體的に、寫實的にでてゐるとは思へない點もある。どうかするとこれは馬鹿ぢやないかと思ふ程鈍感のわからずやである。其の點は幾分わざとらしく揑ちあげた形もあつて、筋や場面の興味をそへるために、人間が歪められてゐるのは仕方がない。つまりこの世間知らずの學者肌の青年が、內面的に人格的に今少し深く書けてゐたらばとも思ふが、寫實といつてもあの時代の寫實のことだから、これをこの作に求めるのは無理であらう。

多情多恨

前篇

鷲見柳之助は其妻を亡つてはや二七日になる。去る者は日に疎しであるが、彼は此十四日をば未だ昨日のやうに想つてゐる、時としては、今朝のやうに、唯の今のやうにも想ふ。餘り思ひ窮めては、未だ生きてゐるやうにも想つてゐる。なるほど病の爲に敢無くはなつた、氷のやうに冷えて、美しい目も固く瞑いだ、棺へも斂めたれば、葬送も出した、谷中の土に埋めて、椋の位牌になつて了つて、現在此に在るからは、假でもなければ、夢でもなく、確に死ぬだに極つてゐる。

如何にも其軀は葬られて、其形は滅したに疑ひは無いが、彼の胸には、その可愛い可愛い妻の類子は顯然と生きてゐるのである。

柳之助は多く人を好かぬ、代には又多く人に好かれぬ性で、男では朋友の葉山誠哉、女では妻の類子、此二人の外には世界に柳之助の好いたものは無い。彼は多くの人を好く代に、唯此二人を好いたのであるから、その情の篤いことは夥しいもので、實に見苦しいほど其妻には惚れてゐた。

一も妻、二も妻、三も四も五も類で無くては、柳之助の夜は明けなかつた。彼の同僚は（妻が）先生と仇名を付けたほどで、妻は彼の命であつたものを、彼は今その妻に死なれたのである。然までに可愛がられた、大事がられた彼の妻は、決して然までに夫を思はなかつた。謂はば通一遍であつたけれども、柳之助は少しも不足に思はぬのみか、それが女子の性と信じてゐたのである。

例の同僚は嗤つた、鷲見は全力を擧げて其妻に惚れてゐるのだと。其通り、（全力を擧げて）とは嘲弄でない、適評であつた、適評ではない、事實であつた。

彼は今其妻に死別れた。則ち彼は第二の生命を奪れたのである。一日生家へ行つて見えなくても、直に顏色を惡くして鬱ぐほどの愛著は、一週間經てど、十日經てど、乃至は一月、一箇年、

十年が百年經たうとも、到底二度とは其姿を見られぬに極つた失望を忍ぶには餘る。さては是非も前後も、分別も用捨も何も無く、一圖の悲歎に沈むで、泣くと悔むの外は殆ど世をも人をも身をも忘れた。我是ない子供のやうに、（お前は何故死んだ。死ぬことはならん。死ぬといふ法は無い。）と死顔の被を取つては、棺の前に坐つては、墓標を搖つては、位牌を眺めては、寫眞を取出しては、聲こそ立てぬが、心の中では悶え〱絶叫した。

悔むで復らぬ事、悲むで復らぬ事ぐらゐは、柳之助も知つてゐる。復らぬ事を復さう爲に泣きも悔みもするのではないが、或點まで泣き且悔むだらば、隨分復る事との信仰を以て、泣きも悔みもするのではあるまいか、と想はるゝほど柳之助は取亂したのである。

その狂哀も漸く失めて、今は眞摯に其死を悲む涙が催して來る。諦められぬ、諦められぬ、諦められぬが、定命と諦めねばならぬ——諦めて見た。諦めては見たものゝ、一旦生死の手を分つたからは、類は二度と再び此世には歸らぬ人、これから長い〱一生涯もう逢はれぬ、となつて見るとその心細さ、味氣無さは居ても起つても堪へられぬ。此二三日は全く生効の無い體になつて、唯二件の事を思窮めてばかりゐる。

一つは、可愛い可愛い妻の生前の事。二つには、此先何を樂に生きてゐやうと云ふ事、此の二件が渦になつて、間斷無しに柳之助の胸の內を回轉してゐる。甚麼に考へたところが、此先の樂

は無い、ばかりか、現在今日生きてゐる空も無いのである、と云つて、豈死なれもせぬ、と云つて、憖ひ生殘つて物を思ふも愁い。思ふまいとしても、忘れやうとしても、寢れば夢を見る、起きてゐれば、唯其事が紛々と胸に集る。

「吁、酒でも飲まう」

と柳之助は慣れたさうに目を瞑つて首を掉つたが、直に置火燵から身を伸して、床の間の喚鈴を鳴したまゝ、内向に手枕をして了ふ。徐に階子を踏むで、物柔さうな四十恰好の婢が昇つて來て、

「御用でございますか。」

と座敷の紙門を啓けると、柳之助は俯いたまゝで、

「酒を一つ買つて來てくれ。」

その力無げに仆れてゐる躰を老婢は怪むで、

「どうぞ爲さいましたか。」

と體を差入れる。

「可いから早く買つて來て。」と彼はなほ顏を擧げぬ。

「はい、はい、麥酒ならお内にございますが、やつぱり御酒の方が宜うございますか。」

「麥酒でも管はん、早く持つて來てくれ。」

老婢は慌忙しく下りて行く。その跫音と倶に一陣の風は颶と梢を鳴して、吹懸くる時雨に北窓の障子は氣立ましい音をして倐忽瀰々濡になるのを、柳之助は纔に首を擧げて見たが、又俯いて了ふ。

空は一面に微晦くなつて、雨は一時劇しく降出す。襟元から粛々と惡寒くなるのに、火燵の火さへ消えかゝるので、横になつてもゐられず、物臭さうに起上つて、急に黯くなつた家の內を、何と云ふ事は無しに惘然眴してゐる。爾時老婢は蠟色の圓盆に、鉢に鶏子を三つ容れて、醤油注に小皿、小蓋物に箸箱、コツプ等を載せて、片手には櫻田麥酒の栓を拔いたのを挈げて入つて來る。

「御火燵にお火はございますか。何だか又寒くなつて參りました。」

「あゝ、火を少し貰はうか。」

と其處に置いた盆を引寄せて、コツプを把ると、恐多さうに老婢の酌をするのを、何と思つたか一寸見て柳之助は直に横を向く。それを見付けると、老婢は忽ち點々と涙を零した。柳之助は又其を見るとコツプを持つたまゝ俯いて、滴々と涙を落す、老婢は壜を下に置くと、袂から鼻紙を出して頻に泣き始めた。

柳之助はコツプに半分ばかりを一息に嚼了けて、

「元、寂しいな。」と故と元氣好く言懸ければ、
「御尤でございます。」と元は益泣く。
此挨拶では不足らしく、
「あゝ、寂しいよ、寂しくて可かん。」
と重ねて訴へたが、急來る涙を防がう爲に、餘れる酒を又一息に呷と飲むで、
「もう一盃。」
此酌に就いて彼は考へたのである。お茶一つ上るのでも、奥樣の御手からでなくば御承知の無かつた旦那樣が、元のお酌で上るのみか、注げと有仰る。嗚呼御傷しい。例ならば（類さん）を呼べと有仰るのであるけれど、その奥樣は御在なさらない。お寂しいとは御尤だ、と老の涙はいとど脆かつたが、やがて忙しく目を拭いて、涙を去むで、もう泣くまいと覺悟したやうに紙を袂に入れて了つて、
「それに今日は姻家の奥樣も御歸になつたものですから、急に猶の事お寂しうございます。」
と盆の物を安排して、鷄子を割つて其へ出しながら
「何も御肴がございませんので、本當は御精進なのでございますけれど、姻家の奥様が其には及ばないと有仰つて、此間から旦那樣だけには御魚や肉を差上げて居りますのですから、お鷄子

も宜うございませう。」
「あゝ、それぢや何か、姻家の家母様やお前は精進なのか。」
「はい。」と老婢は又少し萎れる。
「然うか。」と頭を搔いて、
「些とも氣が着かなんだ。」
「いゝえ、旦那様はお宜うございます。」
「いや、俺も其ぢや精進にしやう。」
「然やうでござりますか。それはまあ何方かと申せば、御精進の方が。」
「佛の爲だな。」
「然やうでございますとも。」
と其可憐さに老婢は又涙に誘はれる。
「唉、もう佛に成つて了つた！」
耐りかねて柳之助は水でも飲むやうに一盃の麥酒を盡して、ほうと息を吐く。老婢は起つて、火を持つて來て見ると、柳之助は目を閉ぢて、壁に靠れて、少しは醉つたやうな、多くは物を思ふやうな態で、瞢然としてゐる。

元は火燵の始末をして、盃などを片寄せて、起たうとすると主は弗と目を開いて、
「何時かな。」
その倚つてゐる壁に時計の掛けてあるのを老婢は見て、
「四時七分前でございます。」
「これから一寸墓詣に行つて來やうかな。」
と柳之助は障子の硝子越に外面を眺める。元は有繫に驚いた。如何な事でも一日に二度も墓詣をするものがあらうか。今日は二七日であるから、朝の内に谷中まで詣つて來たばかりである。それも近い所では無し、まして雨は降る、日は暮れる、これから如何なさらうと云ふのか、と其氣色をば候つたが、隨分出掛もしさうな樣子。

柳之助の身になつたらば、懷しい〳〵遺骸の眠つてゐる所は、目に見えぬ魂魄の猶留る屋棟の下よりは、追慕の渴を醫するに疑無い。彼の墓詣をせうと云ふのは、生きてゐる人を尋ねると同じ意で、戀しさに堪へかねたればこそである。

恁う考へたらば、別に不思議は無い。老婢も然うとは考へたのであるが、極めて不思議に思つた、或は變に思つた、些と氣が如何かしたのではあるまいかと思つた、然ふ思ふと、何と無く可恐いやうな、心細いやうな、途方に晦れたが、左も右も留めるより外に法は無いと思案して、

「もう今日はお遲うございますから、明朝になさいまし。」
「遲くても可いさ。」
「それでも、今朝もう一度御詣をなすつたのぢやございませんか。那麼に一時に幾度も行らつしやらなくつても、日に一度づゝで繁々の方が、却つて佛樣は御喜びでございますよ。」
「然うかな。」と柳之助は稍折れる。
「これから御詣をなさいます代に、御佛前へいらしつて、御線香を多度お供げ遊ばしましな。」
子供が言聞かされたやうに、柳之助は悄々と頷いた。墓詣は思止つた樣子に、老婢は胸を安むじて、
「私も御回向を致しますから、いらつしやいまし。」
日暮に薄る空模樣は雨の爲にいとゞ晦くなつて、製造場の汽笛が曇つた聲で泣くやうに聞える。彼は曳入れられるやうに寂寥を感じて、噫今夜も此寒い、陰氣な二階に燈火と相對で居なければならぬか。居られるものではないと思ふと、柳之助は我知らず衝と起つた。
起つた所で何處へ行くのである? 此が自分の住居であれば何所へ行つたとて(類さん)は居ない。我家であれば、依然此に居るのだ、と座敷中を眴したが、如何しても居る氣が無い。起つて見ると、もう坐る氣も出ぬ。

例ならばランプを持つて昇つて來る時分だ。晩飯の支度をするので、元と呼ぶ聲が聞える時分だ。ランプを持つて來ぬ、元と呼ぶ聲もせぬ、吁寂しい、寂しい。と柳之助は堪へかねて、二間の座敷を往來してゐたが、其でも堪へかねて、竟に階子を下りた。

「元、元！」

と呼びながら玄關の方へ出る。老婢は臺所から駈けて來ると、

「傘を出してくれ。」

と言つたばかりで、焦躁しながら考事をしてゐる眼色。元は前垂で濡手を拭き〳〵、

「何方へ行らつしやいます。」

と其擧動を見てゐる。

「一寸其所まで。」と極めて胡亂に答へる。

「御出掛でございますか。唯今お線香を供げると有仰いましたのに、急に如何爲すつたのでございます。」

恨めしさうに元に視られて、少し面目無かつたか、

「やつぱり一寸行つて來る、どうも氣が濟まんから。」

「御墓詣でございますか。」

柳之助は唯頷いて座敷の内を例の運動してゐる、心では此墓參を異變なものと思ひながら、氣が濟まぬゆゑに行つても見たいのを、如何したものであらうと分別しかねてゐるらしく。

老婢は彌々氣味惡く思つて、之は飽くまでも出しては好くないと、氣に障らぬやうに種々と留めた。留められて見ると、有繫に其に理があるので、振捥つてまでも出やうとは爲ぬけれども、又滿足して思止ることも出來ぬので、益烈しく座敷中を往きつ還りつしてゐる。

此時格子の外に人力車が駐つたので、柳之助は慌てゝ玄關に駈出ると、美しい蠟塗の車は軛を支いて、氣凛と雨具に身を固めた車夫が背面になつて、前桐油を外してゐる。

車の音を聞いた時に、柳之助は不圖類さんが生家から歸つて來たのかと想つた。そこで駈出したのであるが、車を見ると、然で無いのを覺つた。見覺えのある此車は友人の葉山誠哉。

あゝ、葉山が來てくれた、と嬉しいやうな、賴しいやうな、それにも胸が逼つて、又淚が出る。

「おや、葉山樣が入らつしやいました。好い所へまあ。」

と老婢は頻に喜ぶ。

葉山は霜降の厚羅紗の外套を着て、全然と頭巾を被つて、小豆色の爪革を掛けた新しい足駄で細骨の蛇の目を擧げながら、

「あゝ酷い降だ。」と急いで格子の内に入る。
「此御天氣に好くまあ。」
と老婢は急遽起ちかゝつて外套を脫がせる。柳之助は惘然した顏の、氣の無い聲で、
「さあ上りたまへ。」
客と主は連立つて二階へ通る。迹には老婢が車夫に向つて頻に愛相を言ふのが聞えた。
葉山は座敷へ入ると直に、
「おや、麥酒かい、洒落てゐるぢやないか。豪氣だね、火燵は。」
と衝と入つて、
「あゝ寒い、寒い。」と肩を搖る。
性來の無愛相が、憂に心を奪はれてゐるのであるから、柳之助の樣子と云ふものは無い！　可厭な奴が來たと謂はぬばかりである。けれども心の中はなか〳〵嬉しいので、
「此方へ來たまへな。」
と壁際の自分の席を指すと、
「何有、此で可い、其代一盃戴かうか。今日は御見舞に來たのだ、然う、然う、持つて來たものがあつた。」

葉山は手を鳴して、
「車の中の包を。」と老婢に命じた。
元はやがて定紋付の萌黄絹の袱紗包と、重筥らしい包とを持つて來て、葉山の前に差置いて起たうとするのを、
「一寸待つて下さい。」と袱紗の包を解いて、
「之を御佛前へ」
西洋林檎を一籠と蒸菓子が一折、鳩居堂の線香を一箱添へて、蒔繪の盆に載せたまゝ其へ出す。
「おやまあ、御見事な、まあ。」
と元は急に手も出さずに眺めてゐたが、
「旦那様御覽遊ばしまし。」
と其方へ差向ければ、柳之助は頷いたばかり。物馴れた老婢は主人に成代つて百方禮を述べて、
「どれ、御覽に入れて參りませう。」
と起ちかければ、
「それから未だお重だ。これは御菜です。何か旨い物を持つて來やうと思つたけれど、此際の事だから遠慮をして、椎茸、干瓢の類さ、尤も代物は精進だけれど、少しは陰に如何様がしてあ

るかも知れませんよ。」
と笑ひながら包ごと元の方に推遣る。
「それは、まあ何から何まで、難有う存じます。お蔭様で私も大助りでございます。旦那様、又お重を戴きました。」
「それは難有う。」
と柳之助はやう〳〵禮を言ふ。
葉山は手焙を引寄せて、葉巻の細巻を吃しながら、柳之助の又思出してか、俯いてゐるのをぢろり〳〵と視て、何と慰めたものであらうと思案をしてゐると、柳之助は左の袂から手巾を一掴出した。而して隅の方へ投遣ると、其が三つになつて轉がる。今度は右から又二つ引張出した。それをも投出して了つて、袖で目を塗る。
葉山は驚いて見てゐたが、
「何だ、あの手巾は？」
「どうも涙が出て困る。」
「那は悉皆濡れてゐるのかい。なるほど瞼が腫太くなつて、太く目が赤いと思つた。さあ之を貸さう。」と綾絹の白の手巾を火燵の上に出せば、芬と香水が匂ふ。

「好い香がするね。妻が能く言つたつけ、君が來ると好い香がするつて。」
「否味だと言つたのだらう。」
「君も知つとるけれど、妻は決して惡口を言はんかつたよ。特に君に對しちや、何だ、非常に信用して居つたから。」
生前でさへ妻の事を說く柳之助である、まして今日では、其噂を始めたら底止はあるまい。其は可いが、餘り思はせて泣かせるのは健康の爲に好くない、故に慰藉に來たのかと思へば、葉山は故と話頭を轉じて、
「時に。」と言出した。
柳之助の胸の內は、はや妻の事に就いて萬感が滿ちてゐるので、何から話出して可いやら、それにのみ氣を奪られて、他の言は耳にも入らぬ。
「實に恁云ふ時に妻が居つたら御馳走をするのだけれど、居らん、妻は居らん。」
と好い香のする手巾を把つて、柳之助はさしぐむ涙を拭ふ。
「然しね。」と葉山は又言出すと、
「然し、居らんやうな心地はせんよ、死んだとは思はれんよ。」
「それは尤だ。然し……。」

「何故死んだかと思ふと、妻は實際僕を愛して居らんかつたかと思ふよ。」
「那麼無理な事があるものか。」
「あゝ、それは無理かも知れぬ、無理だらう、無理だつた、全く無理だつた。」
彼は最愛の妻の氣に障つた事を不圖言つて、その不機嫌を見て、遽に執成すやうに、詫でもするやうに、頻に斷つた、固より無理などを言ふ意ではなかつた、思餘つて不知口走つたのであるが、無理と尤められて見れば、無理であると心着いたので。すると。(類さん)の艴然とした面影が胸に浮むだのである。最愛の妻の面影は始終眼前には隱顯てゐるが、それが忽ち不興の眼色をして怨めしさうに視たのである。
柳之助は濟まぬと思つた、無理である、と頻に詫びた。けれども心が落着かぬ、卽ち幻の面影は其色を釋かぬのである。耐りかねて柳之助は、
「妻はね、妻は……、」
と言出したが、さて何と言つたものやら、有繫に惑つたのである。
「妻は君も能く言つたけれど、非常に客を喜んでね、僕とは違つて愛相が好かつた。」
とは言つたが、是では未だ其不興を釋くには足らぬと思つた。然し早速に言ふべき事が出なかつたので、姑く考へてゐたが、何を思出したか、又涙ぐむで了ふ。

「時に、君は學校の方は如何した？」

と葉山は持扱つてゐた（時に）をやう〳〵用立てる。

「學校？　學校なんぞは管はん、もう否だ。」

苦い顏をして柳之助は頭を掉る。

鷲見柳之助は大學の地質學專科を卒業して、今は東京物理學院の敎授を勉めてゐるのであるが、謹勉であり、懇切であり、而も十分に實力のある所から、學院の氣承も生徒の信用も極めて好い、欲には試驗の點が少し辛いと云ふ噂の外に、此人に對する非難の聲は全く無い。學院では實に難有い大事の人になつてゐるのである。

「管はぬたつて、然うは行かないぢやないか、自分の職業ぢやないか。餘り長く退いてゐたら、學校の方で差支へるだらう。」

「差支へても管はん。」

「那麼自棄を言つちや困るね。もう少し休むだら出る方が可いよ、獨で引籠つて居るよりは却つて氣が霽れるから。」

「唉もう何を爲るのも否だ、何も出來は爲んよ。實際僕は生きとる樂が無いのだ。生きて居らうとは思はんよ。」

葉山は手酌の麥酒を一口飲むで、
「困つたもんだ。」
と櫓の上へどつさりと轟れる。
「僕は實に寂しくて可かん。君、それは實に寂しいものだよ。それに這麼雨の降る日などは、如何しやうかと思ふやうだ。何所へ行つても家中線香の氣がして、其が實に耐らんね。恁云ふ心地で一月も居つたら僕は屹と病氣をする、病氣をしても看病する者は無し、慰めてくれる者は無し、一日だつて僕は寐てゐられやせん。設然うなつたら如何せうかと思ふと、實に心細い。今でさへ這麼心地なのだから、あゝ否だ、否だ！」惣毛竪つたやうに柳之助は身顫ひをする。
「那麼事まで考へた日には際限が無い。どうも今更爲方も無い。何も天命と思切るより外は無いのだ。」
「僕は到底思切れんよ。」
「思切れんと云つたつて……。」
「だつて、思切れんぢやないか、僕の身になつて見給へな。君は殘酷だ。」
「殘酷は過いね。君が何程思切れないと云つた所で、お類さん樣が生返るぢやなからう。」
「ぢや思切つたら生返るか。」

と柳之助は急立つた氣色。

「又那麼無理を言ふよ。君の心は十分察してゐるわね。けれども哀むで傷らずだよ。君は細君の爲に體を毀しても苦しくないのだね。」

返答に窮へてゐる間に葉山はコツプの酒を飲盡して、更に一盃を注がうとすると、半分よりは無い。

「麥酒はもう無いかい。」

「無けりや買はう。」

と喚鈴を鳴して元に聞けば、幾許もあると、又一本口を拔いて來る。

「まあ一盃飲むで、もう那麼話は止さうよ。」

と葉山は一つ差した。

「他の話より此話が可いのだから、もつと爲てくれ給へ。」

「可けないよ。始終考へては欝いでゐる所へ持つて來て、又其話をしたら愈泣かせるのだ不吉な話は止さう。」

「不吉とは？　君……」

柳之助は口へ持つて行つたコツプを控へて、屹となる。

「いや、悪かつた。私は今日は君が獨で寂しからうと思つて、見舞に來たのだ。然し一々言ふ事が君の感情を害すやうで、誠に濟まない。御迷惑だらうから私は是で御暇をする。」

身繕をして、葉山は起たうとする、其袖を柳之助は緊と捉へた。

「あゝ、悪かつた、僕が悪かつた。言過ぎたよ、免してくれ給へ。實際不吉に違無いのだ。」

苦に柳之助は詫びる。

「それぢや然云ふ話は止すかい。」

と未だ立膝をして羽織の紐を正してゐる。

「止す、止す。」

と片手に葉山の袂を捉へながら、慌てゝコツプを空けて、

「さあ一盃、一盃飲むでくれたまへ。」と突付ける。

此子供らしい所が葉山の柳之助に惚れてゐる所で。彼が他の思はくをも管はず、直に（妻が）と言ふのも、不吉と言はれて、今腹を立つたのも、皆此子供らしさからである。

「那麼話は止すと云ふなら。」

と恩がましくコツプを受けて葉山は又火燵に入る。

「まあ居てくれたまへ。君に往かれて了ふと僕は孤獨だ。」

盃を差して置きながら、酌をするのは忘れて、薄團に顏を抑付けて柳之助は又欝ぎ出す。
慭ひ合手になつてゐたら、彌々思出させるばかりと、葉山は不如飜弄して了ふ氣で、
「おい御酌は？」
「や、忘れた。」
と慌忙しく壜を取つて注ぐと、たらりと一雫ほど。兩個は思はず顏を見合せる。
「何だな、壜が違つてゐるよ。」
柳之助は濟したもので壜を替へて酌をする。滾々と出る酒を見ながら葉山は少しく笑を帶びて、
「有る酒ならば恁うして出る、ねえ鷲見。」
と泡を噴く酒と柳之助の顏とを等分に見較べる。妙な事を言ふと思つて、柳之助はおのれの手元を見い〳〵葉山の顏を眺める。
「ねえ、無い酒は出ない、君は酒の無い壜で酌をすることは出來ないと云ふ事を知つてゐるぢやないか。」
「それが……？」
と柳之助は怪訝な顏をする。
「それがさ、無い酒も、亡い人も同じ事だらう。だから、餘り然う怏々思はないが可いと云ふ

のさ。」と一口附けて、

「肴をくれたまへな、その鷄子を。君が手づから割つてくれるのさ。」

一個取つて皿の縁へ抵てやうとして、柳之助は一寸控へた。

「何を考へてゐるのだ。」

「僕は今日から精進なんだからな。」

「君は精進でも、私が戴くのだから可からう。然し精進(しようじん)は解つたが、今日からとは解せないね、今日からとは如何いふ理だ。」

「もう可いよ、可いよ。」

と一思に劈然と皿の縁へ打着ける。

「然うだ、然うだ。下地を注けて、あつ、那麼(そんな)に注けて……如何するのだ。さあ〱此方へ貸した。鷄子(たまご)をもう一個……辛さうだから塡めるのさ。それから盆を、後が箸だ。」

葉山は之を櫓の上で好いやうに鹽梅(あんばい)するのを、凝然(しげ〱)と視てゐたが、

「君は好いな、一寸那麼(そんな)事(こと)も上手にやる。僕は全く出來んのだ。悉皆妻にしてもらつとつたのだ。その妻がもう居らんのだ。吁、困つたなあ。」

口頭に出したのは纔に如此(これだけ)耳であるが、胸の中には千萬無量の思が紛亂したので、彼は蒲團に

顔を推着け、擦着けて悶えた。
葉山は餘りの様子に手を着けかねて、姑く默つて視てゐると、柳之助は急に顔を擧得なかつた。いつまでも視てゐれば、いつまでも擧げぬので、
「其話は止すと云つたぢやないか。」
それでも柳之助は仍顔を擧げぬ。
「さあ、もう好加減にしないか。」
と肩先を輕く拊けば、やう〳〵擧げた顔は、洗つたやうに涙に浸されてゐる。
「如何かならんかな。僕はもう耐らん、不愉快で。這麼不愉快な事は無い。如何しても慰められん不愉快だ。僕は今迄は甚麼不愉快な事があつても、妻に慰められたのだ。僕は其妻を亡つて了つた。今朝墓詣をしたのだ。實に、君、夢だね、赤土の土饅頭に一本の墓標が立つとるばかりで、雨が寂しく降つとるのだ。君、之を見てくれたまへ。」
例の絹の手巾で半面を掩へながら、柳之助は本箱の上にある雲州焼の小さな瓢形の一輪挿を指す。葉山は見た。染垂れた山茶花の半開が一輪横向になつて挿してある。
「君。是だよ。」
と柳之助は火燵から這出て、横向になつてゐるのを正面に正さうとしたが、枝が曲つてゐるの

で、如何しても外方へ振つて了ふ。花入の方でやうやう鹽梅をして此方を向かせて、

「この山茶花だよ、好いだらう。」

何が好いのだか、葉山には少しも解らぬ。

「君、好いだらう、好いと言つてやつてくれ給へ。」

「又思出したのかい。」

困り果ては所爲事無しに葉山は麥酒を飲む。

「妻は一體賑かなのが好きだつたに、寂しい森の中で雨に降られて、唯一人埋まつとるぢやないか。僕は實に胸が一杯になつて如何することも出來んかつた。而すると、姻家の母がね、此花を見付けて僕に敎へたのだ。垣の隅を見ると、此花が唯一朶咲いとるのだね、君、其木に唯一朶なのだよ。母が言ふには、是は類の魂だ。類の思が遺つて花になつて咲いたのだ。類の大好の長襦袢には山茶花の模樣が着いとつたから、是は類の魂に違無い、と言つて泣くのだ。僕も見ると丁度、此方を向いて此花が咲いとるのだ。變な事を言ふやうだけれど、其時は此花が實際類の顏に見えたよ。風が來て動くのだ。類が藥を飲むのは否だと言つてね、首を掉つたやうだつた。僕は其時は妻が復活つたのかと想つた。考へて見れば妻は僕等の脚の下に埋まつとるのだ、是は山茶花なのだ。妻の母は紙を出して、泣きながら此花を拭いとるのだ。何を爲るのかと聞いたら、君、

親子だね……。」

柳之助は烟返つて語が續かぬ。葉山は茫然酒を飲むでゐる。

「母親の言ふには、雨が灑つて冷たさうだから、少し拭いてやる、と君、自分の濡れるのも知らずに熱心に拭いてやつとるぢやないか。而して此花を全然鼻紙で裹むで了つた。那麼事をするものだから僕は猶悲しい、這麼所に獨で置くのは可哀さうだから、內へ持つて行かうと言ふと、それぢや一所に連れて行つてくれつてね、折つて僕に渡したのだ。君、此花だよ、あゝ、君の方を向いとるよ。」

柳之助は壁に頭を推當てゝ泣出した。餘り愚痴とは思ひながら、浸々哀に搔口說かれて、葉山も誘はれ氣味の稍胸逼る。

「もう言はないが可い、いつまで言つたつて所爲が無い。」

と鼻聾になつて顏を撫廻す。

「言はしてくれたまへ。言はずに思つとるのはなほ不愉快だ。言つとれば多少氣が霽れるから。」

「それぢや此方が窮るよ。」

「君は窮つたつて、僕が窮つとるほど窮りはすまい。」

と柳之助は涙を拂つて悶懸ける。

「然うどうも理窟を言はれちや困るね。」

「然し、君は僕が這麼(こんな)に思つとるのに、少しも僕を可哀(あはれ)だと思つてくれんのだ。君は平氣でをるのだ。妻は君の兄のやうに思つとつたのに、君は類が亡くなつても、悲しいとも何とも思つてくれんのだ。君は然云ふ不實な人物とは思はんだつた。類の爲に眞實泣くものは、類の母親と僕と二人限だ。君は類の死んだのを悲しいと思つてくれんかね、僕は悲しい、這麼悲しいことは覺えない。」

柳之助は潸々と泣く。其體(そのてい)は如何にも可哀であるが、葉山は寧ろ首を傾けた。ちと逆上(のぼせ)てゐるのではあるまいかと考へると、誘(さそ)はれた涙は遏つて、葉山は愕然(ぎよつ)としたのである。

「それぢや如何すれば可いのさ、もう其話は止すと言つたから、私は歸るのを又居たのだ。然すりや又其話を始めて、擧句の果は私を攻撃するのだ。悪いことは言はない、然う思徹(おもひつ)めてばかり居ては體が耐らないから、努めて氣の紛れるやうに工夫をしたまへ。第一內にばかり引込むでゐるのが好くない。些と出掛けたまへ。」

「それが既に不實だ。死んだものは爲方が無いから、忘れて了へ、思ふなと云ふのは、殘酷(ざんこく)ぢやないか。僕は死んだから思ふのだ。思つたから如何なる、泣いたから如何なると、那麼(そんな)卑劣(ひれつ)な、目的などを有つとる理のものぢやない。君は僕より年長だし、經驗にも富むどるし、世間にも通

じとるから、僕の考へてゐる所は或は僻してをるだらう、君の社會的の目から見たら宛然子供だらう。君の言ふ所は世間の行ふ所なのだらう。君は世間を以て僕を責めるのだ。僕は世間は知らん、けれども幸ひに僕の心には世間と云ふものに曇らせられん一片の誠がある。其誠がある爲に僕は忘れられんのだ。からして忘れられんのは、決して愧づべき事ではないと思ふ。」

「誰も愧づべき事だとも何とも言ひはしないよ。」

「言はんけれど君は愧づる方だらう。」

「えゝ、もう、何方でも宜しきやうに願ひませう。」

と言つた限で、其後は柳之助が何と言はうが、見向もせずに、くびりくびりと獨飮むでゐる。

柳之助ははつと思つて、

「君腹を立つたのか。」

葉山は昂然として、

「あゝ腹を立つたよ。」

「僕は言過ぎたかね。」

「あゝ言過ぎたよ。」

「免してくれ給へ、ねえ。」

彼は無雜作に例の子供のやうに過を悔ゆる。

「宜い、君は僕を不實だと言ひました。」

「だから言過ぎたと言つて謝るのだ、免してくれ給へ。」

「君は成程君は可愛いけれど、朋友などの事は何とも思はないのだね。宜い、解つた。」

「那麼事があるものか、那麼事は無い。」

「それなら朋友の言ふ事も用ゐたが可いぢやないか。」

「無論用ゐるさ。」

「用ゐるね、屹度用ゐるね。」

餘り念を推れるので、如何なる事かと柳之助は覺束なく思ひながら、

「用ゐる、用ゐる。」

と言ひは言つたが、さて何を言はれるか、と氣遣はしげに葉山の顏を視てゐる。

「外の事でもないがね、内にばかり引込むでゐるのは好くないから、本當にちと出掛けたまへ。」

「何所へ？」

「まづ學校へ行くのは一番好いが……」

「未だ腦が亂れとるから、それは可かんよ。」

「それでは、僕の家へ來たまへ、遊びに來るのだ。御馳走するよ。出掛けた方が氣が霽れて甚麼に好いか知れやしない。氣も進まなからうけれど、まあ瞞されたと思つて來て見給へよ。屹と來るかい、宜いかい、來るね。」

柳之助は熟と思案してゐる。

「如何したのさ、別に考へるほどの事は無からうぢやないか。内に引込むでゐるよりは氣が霽れるよ。明日は休日で、私も一日内に居るから、朝から來たまへ。何を那麼に考へてゐるのだらう。」

太く考へてゐるのが葉山には解らなかつた。尤も何事にも直に考へるのが此人の癖ではあるが、己の信ずる唯一人の葉山の言ふ事は、常に自分の了簡よりも信ずるほどであるから、葉山が右といへば右、左といへば左、つい應と言はぬことは無いのである。今日に限つて、何故か考へるにも當らぬ事を太く考へる。なるほど葉山には解らなかつた。

けれども、是は仔細も無い事で、例の細君の死を悲む餘、何を爲るのも氣が無いので、外へも出たくはないのであらう、と恁う判じたから、猶更勵めて、否應無しに引出さうと考へたのである。

利發の葉山も是ばかりは踏違へてゐた。なるほど柳之助は何を爲るのも憂いのである。外へ出

る氣も無いのである。然し、彼はその最愛の妻を亡つた、女に於ける唯一人の所好を無くしたのであれば、此上は其心を慰むるには、男に於ける唯一人の所好を恃まねばならぬ、その葉山が深切に云ふ事をば、如何にしても背かう道理が無い。葉山が強ひて言ふならば、隨分學校へも出るのである。

然し、葉山の家へばかりは、柳之助の思案をする理がある。それは自分と地下の類との外に知るものは無い。さすがの葉山も之を知らぬ。知らぬのではない、知らせぬのではない、知らせることが出來ぬのである。知られては一大事なのである。

我家へ來いと切に勵めらるゝのは、恰も此知られては一大事と衝突したので、何事にも直に考へる柳之助には、此際太く考へねばならぬのである。と云ふのは、柳之助は葉山の內眷が大の嫌で、彼は固より多數の人を虫が好かぬその中でも、最も好いてゐる人の妻を最も好かぬのである。其好かぬと云ふに就ては、何等の原因も理由も無い、其所が所謂虫が好かぬので。自分の兄とも賴む人の內眷、其を好かぬではならぬ、と柳之助は常に考へる。それで、先方から己を疎みでもするのかと云へば、氣も無い、葉山同樣に實を盡してくれる。其人をば何故に自分は嫌ふのか、と柳之助は始終心に訊ねて見るが、一向理窟は無い。

葉山の內眷と云ふのは、美人ではないが、目鼻立の揃つた、色白の身材の纖削とした、閑雅な、

奥様らしい様子の人物。若し其短所を擧げたらば、少し寂しくて、無人相で、何を爲るにも極めて不熱心のやうに見える。然かと云つて、萬更義務でしてゐるとも見えぬが、進むで爲してゐるとは猶のこと見えぬ。萬事が機械的で、韵致(うまみ)といふものが無い。恰も其容貌の整つてゐながら何の趣も無いのと、能く一致してゐる。

那云ふ女と能く添つて居られたものだ、と柳之助は常に思ふ。別して、（むづかしや）の葉山が能く彼で滿足をしてゐると、其も亦一件の不審にしてゐる。

凡そ女子と云ふものは、柔に溫であるべきものである、（類(るゐ)さん）は十分柔に溫であつた、と彼は信じてゐる。然るに葉山のお種樣は蠟石細工(らふせきざいく)のやうに、硬くて冷たい。自分の最も好いてゐる者と正反對である爲に、虫が好かぬのであるか、と柳之助は考へもした。

葉山には所謂焦れてゐるほどであるから、毎日でも逢ひたいのである。お種樣を見なければならぬのが否さに、控へに控へて、三度行く所も一度にしてゐる。それでも一週に二度は缺かさず尋ねて行く。其通り隨分足が近いから、氣の着く葉山でも此內祕(このないひ)ばかりは知らずにゐる。

妻には限らず兩箇の居る所に他が來ると、氣先を折られたやうな調子で、柳之助は必ず悄(しよげ)るので、自分と（類さん）との外には打解けたことの無い男であるから、自分の外は內眷にも氣を置くものと葉山は考へて、可成妻をも近けぬやうにしてゐる。

折々お種樣が少し親くしかけると悄る。嫌であるから悄るのであるが、葉山は然うとは知らぬから、此男の癖で、我妻も此人には他人であると諦めて、格別尤めもせぬのであるが、奚んぞ知らむ、多くの他人よりも此お種樣を彼は一倍好かぬのである。

常ならば柳之助も言はるゝまゝに此掛けるのである。今は此悲哀愁歎の心を枉げて、虫の好かぬ人の所へ行かうとは思はなかつた。けれども葉山は常より熱心に誘ふ。因で柳之助は思案に晦れたのである。

段々責められて見ると、如何あつても否むべき理が無いので、進まぬながらも柳之助は承知をした。其を機に葉山は起たうとする、柳之助は如何しても還さぬ。切つて還ると言へば、泣出しさうな顏をして寂しがる。其をば捨てゝ還るも氣毒さに、出た火燵へ又入る。又有間して、又還ると言へば又引留める。葉山は悖はずに二度まで引留められた。三度四度と大概三十分毎に還らうとすれば、斟酌無しに柳之助は左右放さうとせぬ。到頭九時になる。此分では十時が十一時になつても放すまいと察たので、葉山は、酒がもつと欲いと言出した。柳之助は早速註文通り日本酒を取寄せて出すと、葉山は飲むでは差し、飲むでは差し、無性に差した。

「僕は然うは飲めんよ、迷惑するよ。到底君の敵手は出來んのだから……。」

と後には柳之助も猪口を取らぬやうにすると、

「敵手が無くちや旨くないね。君も獨は寂しいと云つて、僕を引留めたらう。寂しいのは、君ばかりぢやない、獨酌も寂しい。君が敵手をしてくれなければもう御暇だ。」

葉山は直に起ちかけるので、然うは飲めぬながら、還られるのが否さに、受ける。知らず識らず醉が廻れば、體が怠くなつて、柳之助は其所に横仆になると、忽ち積日の疲勞が發して、前後不覺の高鼾で、ぐつすりと寢入つて了ふ。

葉山も麥酒の下地に二合未滿も入れたから、大分酩酊の狀で、柳之助の寢入るのを呼びもせずに見てゐたが、竟に鼾を搔始めたのを聞いて、面白さうに笑つた。

「やあ、到頭盛潰して遣つた。あゝ、能く寢た。寢るが好い。恁云ふ時は十分に寢て腦を休めるが何よりだ。」

葉山は火燵蒲團を剝いで、柳之助に被けて、

「俺ぢや不足だらう。醉の假寢に何か被けて遣ると云ふのは、朋友の所作ぢやない、俺の爲る事ぢやないが、俺が爲なけりや外に爲るものは無い、喃、鶯見。

いや、成程痩せた！　頰が減けて、目も窪むだ。思へば可哀さうなものだ。〳〵の字狀になつて手枕をして、座敷の隅に轉つてゐる具合は、如何しても獨身者だ。細君が亡なつたら何と無く急に不潔なつたよ。可哀さうに、憂身を窶してゐる。」

這麼事を考へながら、葉山は悄然と火燵櫓に倚懸つてゐた。時雨は蕭々と、黑い風の隙洩るにつれて、身顫の出るほど寂寥は外から逼つて來る。其中で老婢が沈むだ〳〵聲して方便品を讀む。

「元は感心に回向をしてゐる。あゝ哀だ。旦那殿は高鼾で寢てござる。實は老少不定だなあ！恁う酒などが出てゐると、細君が居ないとは想はれない。俺でさへ然う思ふのだから、鷲見が寂しがるのも無理は無いか。

細君巧くもないのに料理自慢だつけ。俺の顏さへ見りや、飯を食つて行け。飯を食つて行けが病だつた。一度御世辭に茄子の鴫燒を賞めたら、それから每歲茄子が出ると、鴫燒の御招待だつけ。旦那殿が蹌踉御使者に立つて、今日は君種々御馳走が出來るよ、も罪が無くて可笑かつた。もう來年から彼鴫燒も食へないと思ふと、好い心地はしないものだ。いや未だ有つた。細君得意の早吸物――魚餅に蕩汁昆布と云ふので、每々窘らせたよ。當面今晚あたりは、何もございませんでと云ふので、例の金の網の、靑漆の椀が出る所だ。あゝ又かと思ふやうだつたが、其人が居なくなつて見れば、不味い物も懷しい。果然、いや、果然、氣が着かなかつたが、今日は俺の(所好な)猪口が出てゐない。貴方は奇つてゐらつしやるからと云つて、變に歪むだ、踏潰したやうな、赤樂の氣障さ加減の耐らない猪口を出してくれたつけ、是は貴方のだと云つて弄謔半分に始終出した、彼奴が出てゐない。何だか勝手が違ふと思つた。一寸した事が旣に恁うだ、鷲見

の寂しがるのは無理も無い。俺でさへ憶出すと好い心地はしない。」

葉山はほたりと膝に涙を零した。

「懇意にしたものゝ居なくなるのは心細いものだ。俺も來ちや内のやうに我儘に言つたつけ。昨日まで赤い手絡を掛けて大きな圓髷を結つて嬉しがつてゐた人は、もう佛樣になつて了つたのかい。」

彼は目を瞬いて、洟を啜つた。

「どれ線香でも供げて、御暇としやうか。」

葉山は枕頭に近くあつたラムプを遠く離して、

「あゝ、能く寢てゐる。此羸れた顏を見ると不便でならない。今に目を覺したら、又泣くのだ。ぢや、もう歸るよ、明朝待つてゐるよ。」

立起らうとすれば、本箱の上の山茶花に目が着く、葉山は悚然として寒くなつた。燈影の微昏い所に赤い花の此方を向いた狀は、心ありげに首を延して覗いてゐるやうに見ゆる。葉山は突立つたまゝ其花を眤と視てゐたが、白縮緬の衿卷の端を引出して、窃と目を拭いて、其花入を柳之助の枕頭に直して、

「膝枕だ、膝枕だ。それぢや、然やうなら。」

と言つたが、不思議にも其は彼が常にお類に挨拶をする調子であつた。

以上の拔萃で、主人公の柳之助と葉山といふ人物と、その位置との概念が與へられたことゝ思ふが、この葉山の細君のお種といふ女の性格が一寸面白く出來てゐる。葉山が柳之助を訪ねて家へかへつて來て、柳之助のしほれてゐる樣子を話すと、お種といふ女が、この鷲見に對して、あまりさういふ愚痴つぽい、十日も十五日も立つのに友人を捉へて、返らぬことを繰りかへして泣き立てるといふのは、餘りに男らしくないといふやうなことを云つてゐる。すると葉山が、（お前は昔氣質だからそんなことを云つてゐるのだ、この頃は夫婦の情愛の深いのと、綾羅紗の合羽が行るのだから仕方がないよ）と洒落まじりにいふするとお種が（昔氣質ですから私は流行ものは嫌ひ）といふやうな風なお種といふ女は堅氣の女で、鷲見を見下げ果てた人とまで愛相をつかしてゐて、自分が若し葉山なら叱りつけてやりたい位に思つてゐる。その果には葉山が鷲見にこんなに同情してゐるからには、葉山も少しお類さんがなくなつたのを、他人事のやうに思はんからだらう、と少し嫉妬ぎみである。そこへ鷲見が墓參りの歸りにやつて來た。そして外套の隱しからピンヘッドを取り出して、中へ入つてゐる繪を引きぬいで、（一寸これを見て吳れ給へ、よく見て吳れたまへ）といふので、葉山が手に取ってみたが、何の事か分らん。ピンヘッドはいまのバットみたいな舶來の强い煙草であつた。そして其の繪はヒンドスタンの女が、何か食料品を入れた鉢を抱えてゐる立姿である。鷲見はそれが死んだ女房のお類に似てゐるといつて聞かないのである。（何が似て居るものか、日本人とインドスタニーほど違うよ、）といふと、此度は上着の隱

しに手を入れて、細君の寫眞を取り出す。島田のは見合ひの時ので、束髪と銀杏返しと丸髷の四枚である。それから今途中で婚禮の荷物に出會つたが、その紋が丸に枇杷の葉が三枚、それがお類の紋と同じだと云つて、又亡妻のことをいひ出す。あんなにして結婚しても矢張りあのお嫁さんも死ぬであらうなどゝ云つてゐる。人間は實に果敢ないもので、あの荷物の主も矢張りお類と同じに土になつて了ふのだ。それを思ふと結婚などするものではない。一つの悲しみを增すやうなものだ、彼等はまだそんなことを知らんから結婚したりするのだが、氣の毒なものだ、とかいつて何かいふとすぐ自分の悲しみに惹きつけて來る。そんな工合に鷲見が非常に愚痴つぽい。しかし葉山の家にゐると何となく明く幸福さうなので非常に羨しがつてゐる。別にこれといふ小說の筋はない。

それから鷲見は悲しい思ひ出の多い家を疊んで、葉山の所へ同居することになるのであるが、その前に在りし昔しを偲ぶために、亡き妻の式服を自分の夜着に作り替へさせる一條がある。そこが一寸面白いから拔いで見やうと思ふ。

一日でも早く退きたい家に、未だ此先凡そ六週間も居なければならぬと思へば、如何して暮されるであらう。と柳之助は途方に晦れたが、思返されぬ所を是非も無いと思返して、左も右も百個日過ぎるまで待つ！　とした所で、轉居は爲る、就いては其用意を爲ねばならぬ。今から六週間といふ日があれば、寧ろ十分に用意を爲るとせう。明日にも引越すやうに騷いでは見たが、實

は何の用意も無いので。此暇に徐々と支度を爲るも可からう、と所爲事無しに氣を取直して、轉居の前に於ける始末と、後に於ける處置とに就いて、彼は百方考へたのである。

下宿に爲うか、葉山へ同居を爲うかの二事、是こそ第一着の問題でありながら、未だに決定してないのは迂濶であると、先之から極める事にして、考へたが、考へたが、依然分別は着き切らぬ。十の八までは葉山に同居がしたいのであるが、唯お種と云ふものが可厭さに、好ましからぬ下宿と秤に懸けてゐるので、此は既に幾度も考へては、毎も分別が着かず仕舞で、其時になつたらば如何にかなるだらうで、抛却してあるので、實は今日に至るまで未だ行先は定らぬのである、それは定らぬが、轉居をするだけは確としてゐる。因で、彼は遽に定めかねる分別は後にして、容易に手の着けられる始末からと思付いて、一日元の針仕事をして居る所へ出掛けて、

「お前急に一つ裁縫をしてくれんか。」

見苦しく取散した所へ恐多いと云ふ風で老婢は慌てゝ座側を片附けながら、

「甚麽お仕事でございます。」

「夜具だ」

「お夜具？　縫直すのでございますか。」

「いや、新しく縫ふのだ。」

老婢は（へえ）とばかりで、異しな事をと思つた。
「縮緬の夜衣と云ふのはあるかなあ。」
いよ〳〵異しいと思ひながら、
「へい、御座います。」
「紋附は異しいかなあ。」
「へえ？」と元は彼の問よりも未だ異しい顔をして、縮緬の紋付か、夜衣の紋附か、其意が解りかねてゐる。
「紋の付いた夜衣だ。」
「如何な事でも……。」と元は笑出した。此に葉山が居たらば、然ぞや呼吸の續くまで洒落のめした事であらう。柳之助は眉さへ動さず、
「然うかなあ。」と老婢の笑止むのを待つて、
「夜衣だから、紋が付いとつても誰も見やせんから管はんぢやないか。」
老婢は又可笑がる。
「私は又わざ〳〵御紋付の夜衣をお拵へなさるのかと存じたのでございますよ。」
「それは可笑いさ。」と柳之助も始めて少しばかり笑つて、

「俺の言ふのは夜衣の紋付よ。お前は紋付の夜衣だと思つたか。」
夜衣の紋付に紋付の夜衣、何方でも同じ事でありさうなものを、と老婢は又其が可笑くて健か笑ふ。
「那様に可笑いか。」
「旦那様は本當に面白いことを有仰います、而してまあ何をお拵へになるのでございます。」
「紋付で夜衣を拵へるのだ。」
「へえ？」と老婢は又解らなくなる。
「尋常の衣服で夜着は出來るのかな。」
「何と有仰います。」
「一反あれば夜衣は出來るか。」
「然やうでございますよ。」
「然すると、尋常の衣服を解して、それで夜衣は出來るのだな。」
「然やうでございますよ。」
「それぢや拵へてくれ。」
「へえ。」と元には未だ全然と會得めぬ。

「蒲團は如何だ。蒲團も出來るかな。」
「やつぱり御服でゞございますか。」
「然うだ、やつぱり衣服で拵へるのだ。」
「而して其は旦那様が御召になるのでございますか。」
「然う俺が着るのだ。」
元は慓然として、さあ大變！ 旦那様は到頭お氣が觸れたさうなと、然う思へば此五六日別けて色澤の惡い柳之助の顏を、其と無く打目戍つては、眼色に氣を着けたが、變つた所も無いらしい。幸ひに未だ然ほど劇しくはないが、些少は確に違つてゐると見て取つた。
彼が二十年も前深川に所帶を持つてゐた頃、隣の長屋に髪結が住むでゐて、それの夫は鳶の者であつたが、是が不圖發狂した。その病の初發は、或日外から歸つて來ると、唐突に妙なことを言つて、氣味が惡いから一寸來てくれと呼れたので、直に行つて見ると、手拭を挈げて藥罐の中を覗き散して、もう少しだ〳〵と言つてゐる、容體に恁うと變つた所は無いが、唯眼色が可恐くなつて瞿々してゐた。狂人は何でも眼色で知れると云ふことを、其時人に敎へられたのである。
紋服を解いて夜衣を拵へる！ 藥罐を覗いて、もう少しと、餘り相違は無いと思ふほど、柳之助の顏を視る元の目は多少か常ならぬ色を顯して來る。

「何を俺の顔を那様に視るのだ。夜衣は出來るとして蒲團は如何だ。」
「で旦那様が其を召すのでございますか。」と稍聲も顫へる。柳之助は一向無貪着に、
「然うだと言ふのに。」
「わざ〳〵御紋服を暴殄になさいませんでも、旦那様の が那麼して歴然とお在なさるぢやございませんか。それから未だ奥様のもお奇麗になつて御座いますよ。那様に貴方御夜具なんぞは多度ございましたつて爲方がございませんよ。」
柳之助は耳聒しいと云ふ躰で、
「可いよ。別に要るのだ。いづれお前にも話を爲るけれど、少し事情があるのだからまあ拵へてくれ。」
「へえ、それは拵へは致しますが、如何遊ばすので。」
「如何しても可いぢやないか。」と少しく聲が暴くなつたので、
「へえ。」と老婢は默つて了ふ。
此問答の末柳之助は佛間の小座敷へ老婢を連れて、押入の簞笥からお類が大事の縮緬の紋附を出させたが、其は亡人が祝言に用ゐた、鳩羽鼠の裾模様で、質な更紗縮緬の二枚下着が附いてゐる。其更紗の質なのも、裾模様でないのも、長く着られるやうにと、母親の心を籠めたのである

ものを、未だ〳〵裾模様も着られる齢で、其主は亡き數に入つたと思へば、形見こそ今は仇なれで、元は不覺に鼻を塞らせる。花橘の共ではないが、簞笥を啓けると芾然と起つ麝香の香に、柳之助は胸迫つて、少時は主從とも言は無かつた。

「もう一枚、能く着とつた縞の衣服があるだらう、那を見せてくれ。」

と柳之助は簞笥の傍を離れて、座敷の內を步き始める。

「あの絣織のでございますか。」

「絣織だか何だか知らんが、ぴか〳〵光るのさ。」

細い矢絣崩の（おさすり）に着た絣織の小袖を出して見せると、其だと言ふ。さて縮緬の紋服は夜衣にして、絣織を蒲團に爲る、出來るだけ早く仕立てるやうに、と重ねて誂へたが、爲を思つて飽くまで元は不承知であつた。なるほど主の命であるからは、而して主の物であるからは、煮て食はうと、炙いて食はうと、おのれの橫出る所でないとは知つてゐるが、當初に疑つた如く、此所作は加何しても正氣ではないと思ふから、如何に奉公人でも齡の手前唯諾々とばかり言つてはゐられぬ。まして姻家の母親などに對しても、這麼無法な事を爲しては合はす顏も無いわけと、口を極めて此思立を止めたのである。然し彼は既に止める時迚も止るまいとは覺悟した。何故となれば、恁云ふ無法を思立つほどに氣が狂つて居るからは、理非を聞分ける耳は得持つまいと思

つて。が、左も右も止めるだけは止めて見て、聞分けたらば幸ひ、聽かぬやうならば、陽は畏まつて置いて、此始末を姻家の方に知らせやう、と胸を定めて、さて止めて見たのである。案の定言へば言ふほど氣色を損じて、

「お前が拵へるのが可厭なら頼まん、仕立屋へ遣る、俺が持つて行く。」

と例に無く息巻く具合、元は斷然其の正氣でない事を確めたのである。因で、然やうならば私が致しますから、と御意次第になつて、件の二枚を風呂敷に包むで、其を抱へて茶の間へ退ると、なほ跟いて來て、直に取掛れと逼る。元も之には弱つて、種々に言飾へたが、柳之助は傍に坐つて桿でも動かぬ氣色。叉此で遲々してゐたら、引攫つて飛出しさうに見えるので、爲む方無さに澁々膝の上に紋服を披げて、鋏を持ちは持つたが、燃立つやうな紅絹の色と、好もしい染の香氣とに、目も眩れ、心も消ゆるばかり、（勿躰ない）で胸も張裂けるやう。餘り切無さの一寸遁に、元は鋏を委いて、用ありさうに叉紋服を把玩引廻して、襟を見たり、裾を見たり、力の有らむ限忸怩してゐると、其氣も知らず柳之助は、

「好い夜衣が出來るだらう。」

其尾に附いて元は再び懇々と搔口說いた、恁した立派な紋服をば夜衣などに爲て了ふことの暴殄と、姻家の親御樣に對しても辨疏の無さに、如何も鋏の刄が當てられぬゆゑ、之ばかりは思止

るやうにと。

誠は面に顯れて、命乞でもするやうに、如何に老婆心とは謂ひながら、餘りの事々しさに柳之助も驚かされた。實に元は此を先途と面を犯して諫めたのである。爲に彼の心も動いて、なるほど年寄の身にもなつたら、傍に附いてゐて恁云ふ無法な事を爲せるには忍びぬのであらう、其とても究竟は此方の益を思ふから。左も右も事情を話さぬのが惡かつた、藪から棒に註文したゆゑに、如何するのかと吃驚したのであらう、とやうやう心着いたので、百個日の後は此所帶を疊む事から、荷物は姻家へ還す一條、彼への形見頒まで具に聞かせると、元の驚愕は益太甚しい。それでこそ紋服の一枚くらゐは引裂くのさへ無理は無いと思つた。事情を聞くほど、如何かしてゐるのではあるまいかの疑團は彌〻解けぬ。

なか〳〵紋服を暴殄にするくらゐな事ではない、もつと〳〵大きく氣が觸れてゐるらしい。其大きさは到底偏婆風情の手も口も出せる所ではない、いづれ姻家の親御樣も何とか言はれるであらうし、葉山樣も其曉は又何とか爲さるであらうからと、まづ〳〵手拭を掔げて藥罐を覗くやうな取留らぬ所作の無いのを、元は其身の厄免にして、左か右か柳之助の言ふことが會得めたのである。然う思つて見れば、始から深川の隣のキ印のやうに眼色が變つてゐたでもなし、變な調子も無かつたし、世間で謂ふ發狂とは違ふ、女に溺つて譯もなく家藏を潰したり、慾に牽されて見

す〳〵大損を爲る例と同じやうな、一時の迷とでも云ふのである、と其は其で釋然解つたとして、さて此を仕舞つて其から如何爲るのやら、有繋に其も聞きたい。

「それで、何でございますか、一先此をお引拂ひ遊ばして、暫く御勉强を爲さいまして、又何頃御家をお持ち遊ばすので？」

「それは今から解らん。」

「いづれお持ち遊ばすのでございませう。」

「もう面倒臭いから持つまいかとも思つとる。」

「それでも貴方、又奥様が御出になりましたら然うは……。」

と言ふのを柳之助は引手繰つて、

「奥様なんぞ來るものか！　俺は死んだ奥様の外に奥様は有りません。」

元も或物を引手繰られた心地で、柳之助の顏をば探すやうに眴して、

「では、もう奥様はお有ちになりませんので？」

「有つものか、一生有たんのよ。」

「一生お有ちになりませんので？」

「もし俺が先に死んで、奥さんが殘つて居つたら、元、猶且奥さんは一生寡で居るよ。然云

ふ約束だもの、俺も一生獨で居るのだ。それだから一生忘れん爲に是で夜具を拵へて置くのぢやないか。」

彼の語氣は漸く沈むで、後は氣の腐つた太息をして、

「つまらんよなあ、世の中は。」と絲織の小袖を引寄せて、それを丸めて枕に仆れる。

元も其胸中を察して見れば、お可憐と思はぬではないが、男の口からは餘な言分で、樣子を知らぬ目には、同然手拭を挈げて藥罐を覗くやうに見ゆるであらう。何處までも情の深いのには違無いが、深過るのも變なものと考へた。

「それは然うでもございませうけれど、女子は女子、殿方は殿方で別でございます。一生お獨では、それこそ御不自由で、迚も續くものではございません。昔から女子は操を立通しますが、殿方の然うまゐりませんのは、女子の寡居で不自由なのは左か右かなりますけれど、殿方では其辛抱が出來ないのでございます。ですから、殿方は奥樣を二人有たうが、三人有たうが、誰も何とも申しは致しません。女子の方は爲れば辛抱の出來るものを、又外の男を有つては濟まない義でございますから、操を立てるが道としてあるのは、其處なのでございませう。」

之を聞くと柳之助は遽に起回つて、

「やあ、元はなか／＼學者だね、こりや感心した、感心したよ。」

「あれ、可厭でございますね。」
「然う言ふ、世間では然う言ふのだ。然し、男だつて女だつて人間に差は無からう。男は不自由しては困る、女は不自由しても困らんと云ふ理屈は無いぢやないか、誰の不自由も同じ事だ。世間の人はね、能く話をする時自分の細君の事を（嚊）などゝ言ふよ、ね、然う言ふ人が能く有る。それがお前、紳士とも謂はれる人がだよ。俺には如何いふ理だか那が解らんね。何ぼ自分の妻だからと言つて、（嚊）とは失敬ぢやないか。何で那様に輕蔑するのだらう。俺は他が（嚊）などゝ言ふのを聞くと、（畜生）と言つとるやうに思はれて、不愉快で耐らんね。（畜生）と言ふのも同じぢやないか、那様に輕蔑しとる細君なら、有たんが可いのだ。其等の人は一躰如何云ふ精神で妻を有つとるのだらう。妻と云ふものを下女か何かのやうに考へとるのだ、それだから其細君が類さんのやうに歿なりでもすると、下女が出て行つたやうに直に代を迎ふ。而して其を當然のやうに考へとる、世間一般に。那様方が有るものか！　俺は然うぢやない、俺は細君は朋友だと思つとるのだ、深切な朋友だと。實際然うぢやないか。」
　直には後を續けぬので、元は間を合せて、
「然やうでございますとも。」
「然うだらう、然うさ、無論然うさ、二人と無い朋友だ。朋友が死んだと云つて、直に代が出

來るかい出來やせんだらう。下女なら幾多も代がある、其だつて、是は好いと思つた下女の代は滅多にあるものか。猶更細君ぢやないか、其代が容易に……所か、全く有りはせんよ。」

「それでは有りましたらばお迎ひ遊ばしませう。」

柳之助は嚴に頭を掉る。

「有つても迎はん！　又有る理は無い!!」

「それは御座いませんか存じませんが、若や御座いましても、お迎ひ遊ばしませんので？」

「うむ、迎はん！　決して迎はんよ。それは不自由な事も知つとる、男は女と違つて、操を守らんでも可い事も知つとるさ、然し俺は他の者を奧さんに有つ氣は無いのだ。類さんの事は如何しても忘れられんもの、忘れられん間に有つことは出來ん、然だらう。然し俺は一生忘れられんから、一生有たんと極めたのだ。

既往の事を考へて見ると類さんには、非常に世話になつたのに、生きとる時ばかり大騒をして、其人が死んで了ふと直に忘れるなどゝ云ふ、那様薄情な事があるものか。死んでも死なゝくつても、世話になつたのは世話になつたのだし、可愛いのは依然可愛いのだ、死んで了つたから如何でも可いと云ふ氣になるやうでは、本當の夫婦の情ではない。だから俺は類さんは死んでも猶且生きとる時のやうに思つとる、一日だつて類さんの事を思はん日は無いよ。類さんが生きとる内

俺が他の女を可愛がつたら、類さんは甚麼に慍るだらう。慍る慍らんは措いて、類さんは俺一人の事を思つとるのに、俺の方では他の者を可愛がると云つては實に濟まん義だ。那樣事が人情として出來るものではないさ。可いかい、生きとる內でさへ那樣事が出來んものを、死んで了つて居らんからと云つて出來るかい、死んだらば猶更氣の毒で出來んぢやないか。既に死ぬと云ふ事が可哀さうなのだ、親や夫やね、又那したい、恁したいと思ふ事を遺して、未だ二十二や約で死ぬ！ 這麼可哀さうな事があるものか。何爲に世の中に生れて來たのだ、唯悲しい思を爲に來たやうなものぢやないか。其だけでもう十分可哀さうなのだ。」

ほつたりと淚を零して、

「其上に俺が又他の者を嫁に迎つて、今まで類さんと暮して居つたやうに面白さうに一所に居つたら、類さんの心地は甚麼だらう！ 屍に鞭つと云ふ語がある、死んだものを打つのだ、酷い事の譬に能く言ふ。幾許怨が有つても、死んだものを敵手にするのは卑怯だ。死んで了へば怨は消える、ねえ、怨が有つてさへ、死ねば線香の一本ぐらゐは上げて遣るべきだ。まして睦しくした夫婦ぢやないか、那樣氣の毒な事が出來るものか。如何なる不自由にも換へられんから、俺は一生獨身で暮す。死んだ上は夫は他に奪られる！ 這麼可哀さうな事があるものか。死んだのは如何も爲方が無いから、せめて俺だけは他の者と夫婦にはならん、是が類さんへの寸志だ。類さ

んの死んだのに較べれば、俺が不自由するくらゐは何でもない。類さんも死んだから、俺も不自由する！」

元に話をしてゐながら、思迫る餘に半は獨語になつて、覺えず悲を漏すのである、元は挨拶に窮つて、

「御尤でございますとも。」

餘りと思ひながらも、理極めて哀さに、その意に悖ふことは折から言出されもせず、縮緬の紋服を暴殄にするぐらゐに止立を爲るも氣毒になつて、彼の鋏は惜氣もなく竟に小袖の襟の絲を弗と斷る。

それから亡くなつたお類の母親が、鷺見が餘りにしほれて滅入つてゐるのを見かね、且つは年増女中のお元だけでは何かに不便だといふので、お類の妹のお島といふ娘を、家事の手傳ひに鷺見の所へやることになる。それでも最初はお母さん自身がお島に附いて行つて、掃除をしてやつたり臺所を片附けたり、御飯拵へをしたり、鷺見の氣が紛れて元氣づくやうにと、母と娘と一つになつて色々世話を燒くのであるが、これには意味があるので、鷺見といふ男は學者でもあり、人格は好いしするから、姉娘のあと、妹娘を押し附けやうといふ腹なのである。そして幾日かの後には、自宅の用事にかこつけて、母親はお島だけをおいて引き揚げてゆく。お島は姉から見ると、いくらかお俠肌で、母親の吩咐どほり、姉

以上の氣の利かし方で、何かと側で世話をやくので、本來ならば鷲見の氣分が明くなる筈だが、却つてお類の生きてゐる時のことを思ひ出すばかりで、どうもお島が傍にゐられるのがいやでたまらない。半分は女房氣取りか何かでお愛相のない柳之助の身のまはりのことを世話をやくのが氣に入らない。自然家にゐるのが氣詰りで、屢々葉山の家庭へ入り浸る。そして愚痴をこぼす。そこで葉山が智惠を授けて、母親の所へそつと斷りの手紙を出す。お島といふ娘は少しおちやつぴいなので、それを聞いて非常に怒つて歸つていつて了ふ。あんな變人の所にゐるものかといつた調子である。

以下拔萃するのは鷲見が葉山夫婦の所へ引き取られて、二階に陣取ることになつてからのことであるが、それは柳之助の氣分を引き立てるために、葉山が或晩細君の同意を得て、下谷あたりの待合へ柳之助を連れてゆくのである。そこに鷲見の亡妻お類に酷肖（そつくり）の藝者がゐるので、それに氣を紛らすこともあらうかと思つたのである。同時に世間不見（みず）の野暮な柳之助を少し敎育して、遊びの一つも覺えるやうにといふ葉山の腹なのである。その待合の場面が、紅葉山人得意の壇場で、鷲見のやうな學者肌の不粹（ぶすゐ）な男と花柳氣分との對照で讀者を唸らせやうといふのが作者の山である。恐らくこの邊が多情多恨の見せ場ではないかと思ふ。

右以上の文章の中で、二人で下谷の待合へ行つた時。通された部屋の筋向ひの間で、藤八拳をやつてゐる影坊子が映つてゐる。それを突立つて見てゐた柳之助が、（馬鹿な眞似をしとるなあ）といふ所がある。かういふ所はわざとらしくなくて一寸微笑させるのだけれど、中には少しこじつけもあつて、作者の無病呻吟の凝つたこり方をした跡が見えすいて、今讀んでみると、非常に得意がつて書いたやうな洒落が却つて間の拔けた感じのするものもある。これは何といつても作者が机の上で、文章や詞の面白

味に溺れ過るためだと思ふが、併し「多情多恨」の面白味もそこにあるので、從つてそれがあの時分の硯友社といふ文學者仲間の雰圍氣であり、自然主義前派の呑氣な作家氣質であつたと思へば好い。

それからこの待合へ入つて來ても、迂濶な鶯見がそれを料理屋だと思つてゐる。電燈がついてゐるので、彼はこの家は多分西洋料理も出來るのだらうと考へ、そして部屋が意氣な日本造りで電燈がついてゐるからには、和洋を兼ねてゐるのだらうと鶯見らしく呑みこんで了ふ、多分其の時分には電燈のあるのは何かさういつた商賣屋だとか、ハイカラな家に限つたものであらう。電氣燈といつてゐるのも一寸面白い。其の時代を思はせるものがある。それから鶯見が（あゝ腹が減つた）といふので女中が（あら、洪水は岐阜ときまつたのですが、飢饉は、貴郎、何方？）と洒落を云ふ。（大水がその時分岐阜にあつたものと思へる。）するとすかさぬ葉山が、（今朝の火事は番町だよ）と云ふのは、飢饉は何方について來た洒落である。火事はどちらとよく云ふからである。それから又それに續いて女中が（番町には私の情郎がゐるのよう）と返す。すると葉山が（はてな、もう臺灣にはゐないのかい）と又返す。女中がこん度は眞面目になり、（おや何故貴方）といふのである。すると葉山が（軍夫の話だらう）かういふ風に洒落が流暢に流れてゆくのである。軍夫といふのは矢張り其の時分にあつたもので、軍さの時の人夫で、これは日露戰爭大分前のことだから、軍夫といつたもので多分今の輜重兵のことであらう。この葉山がかういふ家へ來ると、女中たちにちやほやされるし好い氣になつて洒落のめしてゐるのと反對に、食ふことばかりを云つてゐる鶯見は手持無沙汰でゐるのである。第一女中は葉山にちやほやするし、藝者も宴會などの場合と違つて、年も行かない癖に男を男とも思はない風で、大膽に振舞つてゐる。それが非度く鶯見の趣味に合はない。所か癪に障つて來る。終に何のためにかういふ所へ來たのか分らなくなつ

て、葉山の家にゐて細君のお種と話をしたり、給仕をして貰ふ時の方が餘程氣樂である。そしてそれと同時にその頃から今迄嫌ひであつたお種といふ女の、故意とらしからぬ親切に好意が持てゝ來るのである。その邊の心理狀態は、相當微妙に書けてゐると思ふ。

多情多恨

後篇

さて一所になつて見ると、お種の想つたほど、柳之助は其事を苦に病むのでもないらしい。夫から聞いた所では、間がな隙がな思窮めて、食べるものも食べずに泣いてゐるのかとも考へられたのである。猶夫は懇々も言つた、鷲見はまるで病人なのだから。其心得で取扱はなければならぬ。何でも看病を爲る意で、親切に、優しくと、聞いた時はお種も自失した。

抑も家内に人一個殖ゑるといふは、思の外面倒なもの。それが、奉公人でもなく、厄介でもなく、泊客でもなければ、萬更預りものでもない、同居と謂へば謂ふやうなものゝ、尋常の同居とは少し理が違ふ。第一主の親友であつて、此方から言出して世話を爲るのであつて見れば、勿論大事に爲なければならぬ。次には看病も爲なければならぬ、總て主同樣に扱はなければならぬ、

究竟二人の夫に册かなければならぬのである。夫一人、その一人に册くさへが手一杯の大役である、一日の務はそれでも〳〵澤山なのに、四歳になる保といふ子もあれば。七十に近い舅もある。或時は最一人お種の欲い場合も有るのに、同じ厄介ながらも偶には何かの手助になる人物でゝも有る事か、目に見えて手の掛る、相應に氣苦勞も爲ねばならぬ、所謂二人の夫を有つやうなものと思へば、有繫に慄然としたが、案ずるよりは產むが易しで、まづ柳之助が一日の生活は、朝の八時に學校へ出て、午後の四時に退けて來る。それから二階へ昇つて燈の點く頃迄机に向つてゐる。其内には夫も退けて來る。一所に夕飯となる。二階を鷲見に貸してから、夫は大方茶の間にゐる。夜になれば其處へ話に來ることもあり、又此方から二階に遊びに行くこともある。やがて寢る、それで仕舞なので。

別に何の事も無い。言出しては泣き、思出しては鬱ぐでもなかつた。夜は寢られぬからとて、過日のやうに雞の鳴く迄お伽に坐らせられるでもなかつた。お一人で御寂しからうと、茶を煎れて持つて行つて、合手を爲なければ濟まぬのでもなかつた。然し、柳之助は無口で、無愛相で、世話になりながら氣毒さうな顏も爲ずで、構つてもらはなくても困らぬといつたやうな風で、始終不足らしい、折角世話をしても効の無い、居られて面白くない御客ではあるが、其處が正是手の掛らぬ所と、お種は少しも可厭な顏を爲ずに、彼此と陰ながら心着ける。

葉山は又、自分が押張つて同居をさせたのであるから、如何でも爰で柳之助の氣が引立つてくれなければ、面目の惡いやうな所もあるので、昨日は恁う、今日は如何と、日々の様子に注意して、殆ど其一顰一笑にも心を動すばかりであつたが、幾分の歡喜は、學校へ出るにも、話をするにも、乃至は机に向ふにも、大分元氣が出たやう。―― 假其までゝなくとも、漸く諦は付いた鹽梅。

「もう一息だ。」と葉山は賴しく思つた。

成程一時から見れば、元氣も出たやうではあるが、未だ〳〵顔の色は雨晒にされたやうに、光澤も脂も脫けて、頰の邊は凄いほど窶れて、何を見るにも勢の無い眼色で、其さへ直に伏目になる。身體の疲勞した爲か、不相變思徹めてゐる所爲か、何と無く起居が耄けてゐる。

お種の注意で怠らず滋養物を薦めてゐるが、引移つてから未だ漸く二週間許と云ふので、然したる驗も見えぬ。それをお種は頻に遣立つて、如何か最少し發揮しさうなものであるが、と折に觸れては言出すと、一日葉山は擽つたいやうに笑ひながら、

「尋常の病氣擧句ぢやなし、牛乳やソツプのやうな物で責立てたつて、然う着々肥立つて耐るものか。那云ふ病氣には又別に結構な適薬が有るのさ。」

「何でございます。」とお種が眞に承ければ、

「お前たちの嫌ひな藥よ。」と益々擽つたさうに笑ふ。
「私が飲むのぢやございませんから私が嫌ひだつて管はないぢやございませんか、甚麼藥なのです？」
葉山は天を仰いで徐に頤を撫でた。
「甚麼藥と云つて、一寸申難いのさ。」
判然は解らぬが、大方那樣事であらう、お種も稍勘付いて。
「貴方又鷲見樣のやうな方に悪い事をお誨へなすつては可けませんよ。――本當でございますよ。」
葉山は衝と横を向いて、鼻の心で笑つてゐる。
「昨晩も大層お遲うございました。」
「然やう、然やう、彼此一時過でしたかな。」
言へば冷かされるか、飜弄されるに極つてゐるので、お種は其なり默つて了つて、暫く無言である内に、葉山は直に我を折つて又話出す。
「實に不思議な事も有るものぢやないか、昨夜俺は吃驚した。」
お種は應答もせずに精々と縫仕事をしてゐる。

「えゝ、おい、吃驚したと言ふのに。」

「然でございますか。」

「もう止さう、張合の無い。」と葉山は座を起たうとすれば、

「はい、伺ひますよ。」

「心身に聽くなら話すけれど、……昨夜まあ社の員と行つたと思ひな。」

「行らしつたのですか。」とお種は顏を擧げる。

「まあ行つたのよ。」

「それ御覽なさいまし。」

「餘計な事を言はずに話の要領を聽きなよ。行つたのだ、すると顯れたのが、四五日前に披露をしたと云ふ藝者だ、可いかね、それが料らず俺の乳母の娘で、（やゝ貴方は）と云ふ事實でも何でも無かつたけれど、吃驚したね。其藝者が十八九だ、十八九は少しも驚かなかつたが、お類さんに生寫！」

「へゝえ。」とお種も有繫に針の手を停める。

「それ、聞いてさへ吃驚するだらう。まして正の物を見たのだから、驚いたらうぢやないか。」

「本當でございますか。」

「背恰好から軆度、聲は全然で違ふがね、それは目鼻立から額際、頬の具合、いやもう肖たとは未だ。

そこで俺は反復思つたね、嗚呼之を鷲見に見せたら、甚麽に喜ぶだらう。――鷲見は屹度泣出すよ。で、調子が又馬鹿にお類さんに似てゐるのだから耐らない、何處か恁う女學生染みた、それは餘程似てゐる。那は是非鷲見に見せたい、見せなくちや謬だ。那は全く鷲見の爲に出來てゐる藝者だよ。」

業々しいにも程が有ると言ひたさうに、お種は獨り面白さうな夫の顏を視るばかり。

「何と不思議ぢやないか。」

「然ですねえ。」と不承々々。

「然ですねえ處かい、這麽結構な藥が亦と有るものか、ソツプや鶏子で那の鬱の虫が治りつ事無し、所謂氣保養と云ふ奴でなけりや。疾から其は考へてゐたのだけれど、何しろ精進中の體だ、そいつを曳張出して茶屋小屋這入は、第一佛の前へ對しても濟まずさ、俺も亦餘り無分別のやうで、そこらが何と無く具合が惡かつたから、實は今日迄控へてゐたのだ。

それで、日増に鷲見の様子が好ければ、酷く譽めた話でもないのだから、那樣事はお舍諸に爲やうと思つたのだけれど、何しろ那してお前が切と盡力してくれるけれど、牛乳やソツプぢや迚

も可けませんよ。其處へ持つて來て、今の瓜二つと云ふ藝者を見たものだから、もう耐らなくなつて了つた。如何だい、右の藥を少々ばかり用ゐるのは。」

「まあ、那樣事はお舍諸なさいましよ。」法界悋氣でも無しに、細君は徹頭徹尾の不賛成。

極めて冷々に言つて退ける。

「何故？」

「何故でもお舍諸なさいましよ。」

「家暮は困る！　解らな過るぢやないか。」

お種は色を正して、

「私も家暮ですし、鷲見さんも家暮です。」

「成程。」と夫は餘所々々しく言ふ。

「ですから那樣意氣な藥は症に適ひはしません。」

「適つたら如何する？」と葉山は意氣込めば、

「それですから、適つたら猶大變ぢやございませんか。貴方は、もう……。」と後は言はぬほど

お種は眞に〳〵呆れたのである。夫は夫で又別に呆れて、

「困つたものだ、辨らない人だ。如何すればお前のやうに家暮で塊るのだ。一寸洒落に藝者を揚げると云へば、もう直に其場で帯か何かの無心を言はれて、翌日は芝居へ連れさせられて、三日目には起請の取替でもして、……」

「もう可うございます、解りましたよ。」と匆々と針箱を仕舞つて、取散したものを片附ける。

「おや〳〵縁日商人が夕立を吃つたやうに、無闇に片附けるよ。如何したのだ。」

「もうお夕飯の支度を爲なければなりません。あれ、あれ、其を踏むで居らしつちや困るぢやありませんか。」

見ればば膝の下に裁片の端を敷いてゐたので、葉山は其を取つて投付けながら、

「食だ〳〵と、嚇しなさんな、腹なんぞは空いてゐるものか。」

「それでもゝう支度を爲なければ。」

「私と鷲見のは御無用になさいよ。」

「晩く上るのですか。」

「いゝや、是から。」

「では直に上りますか。」

「直に行くのよ。」

「何方へ。」

「へん、家暮め！」

湯島切通を驀地に下りて一直線に走らせる二臺の人力車は、三町許も行くと、唯有る横町の角に停つた。

上野の彼岸櫻も昨日今日咲初めたとはいひながら、未だ薄寒い夜風が砂を捲いて來る、此風さへ無かつたらばと想れるのは、さすがに春めかしい月の色、朧に霞む向側を、古風に辻占や花輪糖が呼むで行けば、此方側では何處とも知らず媚かしい三味線の音が幾所に聞える。

車を下りた二人は、霜降の二重外套を着て、挽付の低いのを蹈いたのゝ後から、洋服の一人は蹡蹱と案內されて行くやうな樣子、――葉山は到頭柳之助を連出したのである。

旋て其橫町を曲ると、忽ち一廓の別天地、狹い兩側に軒ランプやら御神燈やらが星の如く輝いて、意氣な音〆は行くほど繁く、通過る格子の內から突然に太皷を擊つて、黃色い聲を出されたので、柳之助は不意を吃つて、（あゝつ）と言つたが、其聲を返して、

「おい、おい、何處へ行くのだよ。」

「まあ何でも可いから跟いて來給へ。」

「僕は西洋料理が可いな。」

「西洋料理でも何でも御好次第。」

柳之助は不安心な顔をして、前後を眗しながら葉山に追付いて、

「非常な藝者屋だね。」

うんともすんとも言はず、葉山は匆々と歩くばかり。

「えゝ、葉山、僕が出る時妻君がね、今晩は早くお歸んなさいと言つたよ。而して何だか心配さうな顔をしとつたが、如何云ふのだらう。」

「さあ、如何云ふものかね。」と葉山の目は笑つてゐる。

「だから早く歸るが可からう、飯を食つたら直に歸らう。」

「勿論さ。」と言ふより早く葉山は磨硝子の燈籠を懸けた門へ衝と入つた。案内が入るから柳之助も跟いて入つたので、何屋であるのやら一向知らぬのである。

門の内は奥深く御影石で甃むだ露地の正面が秩然とした式臺造で、障子が一枚啓いて、銀地の衝立が電燈に反射してゐる。其陰を隱顯忙しさうに走る人影も見える。

玄關にかゝると直に婢が顯れて、葉山の顔を見るより空々しく可懷さうに、

「おや！　入らつしやいまし。」

何と無く間の悪い狀で、柳之助は葉山の後に立ちながら、見るとも無く目を遣ると、左手の小陰が立派な供待になつて、自用車らしいのが五六臺並むで、車夫は雜然と火鉢に聚つて酒を飮むでゐる。

何といふ家か知らぬが繁昌する店、と柳之助は思つた。奥まつた一間へ案内される途次、思寄らぬ所に階子があつたり、無理な所に座敷があつたりして、頻に藝者の徘徊ふのを見掛けたが、大分二階の賑かな樣子。二人の通されたのは、茶掛つた小意氣な六疊で、折廻した椽の外は中庭になつて、その筋向の間では客と藝者の藤八を打つ影法師が映るのを、柳之助は突立つて見てゐたが、

「馬鹿な眞似をしとるな。」と障子を閉てゝどつかり坐ると、此狹い間を電燈の光は耐らぬほど眩く照して、未だ火鉢も出ねば、婢も來ず、唯明くばかりあつて闃寂した中に、葉山が床柱に凭れて、象牙の煙管筒の頭を閑さうに抜差する音がスポン／＼と鳴る。柳之助は又更紗紬の裀の上に我張つて貧乏動をしながら、黒部杉の天井を不思議さうに眺めてゐたが、矢庭に、

「腹が空いた。」

「これから飮まうといふ前に立つて、どうも賴もしくないね。」

「けれども腹が空いとるのだから爲方が無い。實際此は西洋料理も出來るのか。」

「何でも。」
「ふむ、然うか、成程。」
「何だい、酷く感心するぢやないか。」
「どうも僕は恁云ふ座敷に電氣燈は可笑いと思つたが、其所爲だな。」
葉山は怪訝な目をして、
「どの所爲だい。」
「和洋を兼ねるからだらう。」大いに發明したやうに言ふ。
「何だ、愚にも付かない。」
所へ婢は火鉢を持つて來て、直に引返して茶と菓子を運ぶ。
「あゝ腹が減つた。」と又もや柳之助の呻くのを聞いて、婢は茶を注いでゐたが、
「あら、洪水は岐阜と極つたのですが、飢饉は、貴方、何方？」
「えゝ。」とばかりに柳之助は荒膽を拉がれた。虚さぬ葉山は、
「今朝の火事は番町だよ。」
「あら、然う、番町には私の情郎が居るのよう。」
と惡身をしながら甘怠れて言ふのを、柳之助は愕然と打目戍つてゐたが、やがて眉を皺めて横

を向いた。
「いや、然うだつけかね、はてな、もう臺灣にはゐないのかい。」
餘り葉山の眞面目さに婢も不覺と釣込まれて、
「おや、何故、貴方。」
「軍夫の話だらう。」
「おふざけなさいよう！　貴方の洒落は例でも罪が深いから可厭さ。」
「もつと罪の深い事があるのだが、知つてゐるかい。」
「大知り！」と圖に乘る途端、耐りかねたか柳之助は、
「早く何か食はうぢやないか。」
正に是晴天の霹靂、婢は打魂消て、如何に此人が家暮であるか、後學の爲に見て置きたいといふ顔で、彼の面を眺めながら、
「貴方は餘程賤しいよ。此は待合ぢやありませんか、物を食べるなんて、那樣賤しい事を爲る所ぢやないの。」
是も亦柳之助には霹靂一聲で、
「や、此は待合茶屋か。」

「はい、待合茶屋でございます。」
柳之助は慌て氣味で、
「葉山、此は待合茶屋なのかい、おい。」
「何爲、和洋兼帯の料理屋だよ。今直に命じるから辛抱したまへ。それぢやお若さん、何ぞ旨さうなものを、大急でね。」
「何に致しませう。」
「西洋料理だ！」と柳之助な獨で主張する。
「御前があゝ有仰るものだから、それぢや西洋料理と爲やう。」
「貴方も？」
「俺は謝る。」
「では、此方は西洋料理、よろしい。そこで貴方の御肴は？」
と御肴の二字に惡く力を入れて、頗る諷する所あるが如し。葉山はぐつと呑込みの、
「それには今日は些と註文が有るのさ。」
「でせう？」と全然心得てゐるのは、更に葉山には心得られなかつた。恁して又彼此と手間取るのを、柳之助は可悶がつて、

「早くしてくれ、もう耐らん。」

急立てられて婢も耐らず、好い話は後にして、

「よろしい、汽車の綱曳！」と忙々出て行つたが、直に入つて來て、（でせう？）の話を續ける。

「本當に貴方は罪が深いよ。ですが彼妓も流石だと思ひましたね。貴方とは感心！　全く目が高い。一昨日も來て、（先方樣は御存無しの片思だからつまらないわ、姉さん。）か何か言つてるから、及はずながら私も不便になつて、よろしい、今度入らしつたら私が是非一本買つていたゞいてあげるからなんぞは、今考へて見ると、お若さん馬鹿だつたね。片思とは世を忍ぶ假の名で、實は貴方の方にもトンと胸に應があるのは、こりや凄い！」

何を履違へたのか、獨合點をしてお若の辨じつけるのを、葉山は一向不案内さうに聽いてゐたが、

「おや、それは又部類が違ふやうだ。誰だい。」

「誰だいもないぢやないかね、かね、かね。」とお若は嘯く。

「私の今晩の註文といふのは、少々事情ありで、此間の、それ、姫松といふのね……。」

言ひも訖らぬにお若の猿臂は早くも延びて、葉山の鼻頭でびしやりと一つ拍子を打つた。

「お賴ん申しますよ。」

「はて、心得ぬ。」と思入がある。

「怪しやなあでせう。何ですよう、不知不識しい、其ぢやありませんか。」

「ぢやお前の話は姫松かい。」

「はあ。」

「そいつは大失敗だ。」と葉山は頭を圓める。

「ぢや貴方の御心當は未だ別にあるんですか。」

「何さ、其は嘘だけれど、……困つたねえ。」

葉山は少しく困つたのである。お若の說に據れば、今晩呼ばうとする藝者は、嘘にも自分の事を彼此言つてゐると云ふ。それこそ唯呼ぶのなら困るどころではない、至極妙であらうが、生憎妙でないのは、例のやうにわい〳〵で推掛けて來た今夜ではない、不思議にも鷲見の類さんに生寫の其藝者が、柳之助に見せたいばかり、見せての上の分別も隨分無きにしもあらざる矢先へ、意外の門違は有難迷惑とも、不都合とも。お若は那樣事とは知らぬから、彼者には極內で、功德になるから呼むで遣つてくれなどゝ頻に懇願する。考へた所で葉山も今更爲方が無い。

「看板に詐があつたら代は戴くまいね。」

「貴方でもない、お目が第一曇らぬ鏡でせう。」

「ぢや掛けて見やう。」
「飛んで來ますよ。」とお若も嬉々起つ。
「羽の生へた猫ぢやいよ〳〵看板に詐がありさうだ。」
「なんぞと言つて置いて、後で面倒が勃起つたつて私は知りませんよ。」
と出て行く。
柳之助は漸く夢の覺めたやうな顏をして、
「何の話を爲とるのだか、更に解らんぢやないか。而して誰か來るのか。えゝ、何が來るのだ。」
「誰も來やしないよ。」
「羽の生へた猫といふのは何だい。唯猫なら藝者だらう、けれども羽の生へたと云ふのは？」
「うむ、あれは洒落を言つたのさ。」
「何の洒落だい。」
益責められて、葉山も少し塞つたが、
「今に持つて來るから見給へ。」と拙いながらも遁げて見れば、柳之助はそれで得心して、
「うむ、料理だね。何か變つた料理か何かだらう。」
「愛嬌があるねえ。」と葉山は下肚の痛いのを怺へながら。

旋て酒は出たが、食ふものとては、ちよつぴりと燒海苔に裂鯣、氣取つた香の物ぐらゐ、柳之助は到底空腹を癒しかねて悶々してゐると、襖の外で艶なる聲が、

「姉さん、此方？」

「はあ、直と。」

とお若の案内に應じて顯れたのが藝者である。鬘ほど豐の髮を潰島田にして、白粉が濃いのかと見えるほど色白の、豐頬の、眉の好い、目元の涼しい、左に泣黑子のある、仇氣の無い、芝居の娘形を摸したやうな風なのが、閾際で挨拶をして顏を擧げると、はつとした鹽梅で、お若の傍へ匐るやうに坐つて、

「貴方、先日は如何も。熱いのね、姉さん。」

と菫色の絹ハンケチを顏へ加てれば、お若は横目で、

「御尤！」

「あら、姉さん、來早々苛めなくつても可いぢやありませんか。」

「苛められても可いぢやありませんか。」

「知らない！」と姫松は一轉と背後を向けて、

「貴方、お酌！」と葉山に銚子を出す。

爾時お若は障子も響けるばかりに、
「えへ、えへ、えへん。」
唯驚いたのは柳之助。待ちに待つた西洋料理は來ずに、羽の生へてゐるとか謂ふ猫が顯れたので。事有りげに葉山は自分を誘出して、晩餐でもといふから其氣でゐたれば、料理屋へは來ずに待合茶屋へ來た。何の爲に待合茶屋へ來たのであらう、而して何の爲に藝者などを揚げたのであらう。其も此も可いが、何の爲に始から恁々だと明さなかつたのであらう。彼は元來洒落の好きな男であるから、是も例の手で、自分を驚かす爲に故と秘してゐたのであらうか。其にしても此場の様子は、五里霧中を徘徊するやうで、一向合點が行かぬ。
成程好むで這麼所へ遊びに來るほど有つて、葉山は誠に面白さうに見える。けれども自分は更に面白くない、のみか、不愉快である。寧ろ苦痛を感ずる。お若とかいふ彼赭面の婢、彼は何者である。客を客とも思はず、無禮極ることを言つたり、厭ふべき擧動をしたり、殆ど我々を侮蔑してゐるのである。實に見るも汚はしい。
それから次には藝者！　那も大會などの場合には、興も佐ける、席上の周旋もする、必要の道具で、賑かな、好いものであると思はれる。然し、恁云ふ人の少い場合には、何の必要が有るのか。凡そ女子は彼等の年齒では、人の前を怯れて、物をさへ得言はぬ、手を一つ動すにも淑しく

してをる、其が處女の美德とも謂ふのであるに、彼は男の如く大膽に物を言つたり、物馴れた老者のやうに差出た振舞を爲る。實に其憎さは、面に唾しても遣りたい。

而して彼等は仲間同士で勝手に喋つたり、笑つたり、戲れたり、怪しからぬ我儘を働くばかりで、全く眼中に客といふものを置かぬではないか。我々は何の爲に這麼所へ來たのか、而して何の爲に藝者を揚げたのか。這麼中で物を食つたとて決して旨からう道理が無い。恁して居る中も絶えず一種の苦痛を感ずる。

自分の家で自分の膳で、その方が幾何氣樂か知れぬ。彼等は我々の一擧一動一言一句に卑むべき注意をして、少しでも見出す所が有れば、忽ち捉へて笑草に爲うと、那樣事ばかりを始終念懸けてゐるのであらう。

從來は厭ふべき人としてお種さんを遠けてゐた。今度一家の人となつて見れば、能く世話をしてくれる。それでも未だ何と無く隔てられて、十分には打解けられぬ、何所までも他人のやうな氣がして。彼豬面、彼藝者、思へば彼等こそ他人の、厭ふべき奴なので、家に居てお種さんと話をする時、或は給仕をしてくれる時、決して此に今居るやうな苦痛は感ぜぬ。

西洋料理が來たら、早く食つて、安樂な我家へ還らう、と柳之助は熟と考込むで、葉山の洒落も、姫松の味な文句も、お若のお喋舌も耳には入らず、兀々と苦い顏をしてゐた。すると姫松は

思出したやうに、

「貴方や、大層お眞面目ぢやございませんか。お一盃召上れよ。」

と柳之助の前へ向直れば、其顔を尻目に挂けて、

「俺は要らん。」

「あら、餘り御挨拶ぢやありませんか。」

其處へ葉山は身替（みがはり）の盃を出して、

「此人はお肚が空いてゐるので機嫌が惡いのだ。お若さん、御誂（おあつらへ）は如何したよ。」

「那様にお邪魔になさらなくつても參りますよ。」

と空の銚子を攫つて起つて行く。

「鷲見（すみ）、ちつとも飲まないぢやないか。今日は君への御馳走なのだよ。これほど御馳走してゐるのに、一言も挨拶をしてくれないのは酷いぢやないか。何とか言つてくれ給へ、此御馳走に就いてさ。」

心有りげな葉山の語も柳之助には十分に判じかねて、

「どの御馳走？　未だ何も有りはせんぢやないか。」

それを理窟ぽく、眞になつて言ふのが、姫松には餘程可笑くて、

「貴方や、御覽なさいな、這麼にお酒だの、種々お肴だの、電氣燈だの、藝者だの、有るぢやありませんか。」

「御馳走さ。」と葉山は徐と顧で藝者を指したが、姬松は煙草を吸付けてゐたので知らずにゐる。藝者が御馳走は柳之助にも解つたが、之に就いて何とか言へとは、何と言ふのであらうと、藝者の方と葉山とを見合せて、遽に口を開きかねてゐる。

「よく見たまへ、肖てゐるだらう。」

柳之助は正直に眤と姬松の顏を眺めるので、

「あら、貴方可厭よ。」とハンカチイフで黑子の邊を隱しながら、首を縮めて斜に葉山の方を見込むで、

「貴方、這麼人の善い方に那樣惡智惠を付けるものぢやありませんよ。貴方こそ肖てゐる癖に」

と嬉しさうにしてゐる。

「乃公のにてゐるのは土鍋のお粥さ、長々の疾病でね。」

「あら、然うすりや。」と姬松は忽ち居直つて、

「私は水を汲むだり、お香々を切つたり……。」

「指を切つたり、血を出したり、乃公が舐めて遣つたり、結いて遣つたり。」

「噓ばつかり。」と異に絡みかける。葉山は面白半分、
「物は試しぢやないか、切りもしないで何が解るものか。」
「私は隨分切るわ！　星さん。」
彼は此家での變名を星と云ふ。それは一座の同伴は皆各自に持物が有るのに、葉山ばかりは未だに月と見たのがないと云ふので、お若が此名を付けたのである。
「切つてもらはう、切れるなら切つてもらはう、然し薄く切つておくれよ、私は齒が惡いから。」
出し拔れた姬松は悔しさうに默つて了つて、在合ふ盃の冷えたのを把つて自暴に呷と飮む。
「餘り見事！　是はお重ねだ。然し體に障ると誰かゞ共難儀だよ。」
と注いで遣る。
姬松は昂然として、
「御心配には及びません、土鍋でお粥を煮てくれますとさ。」
「畜生め！　お香々なら乃公が切らうよ。」
「どうぞ成るたけ薄く。」
「いや、今度は此方が自暴に飮む番か。」と自分の前には盃が無いので、隣のを拾はうとすると、
「誰に肖とるのだ、僕には解らんよ。」と今まで視てゐたやうに、柳之助はやう〳〵言出す。折

から嚢に拳を打つてゐた座敷で、調子を低く、ツヽン、ツン〳〵、チツチリン、チリレン、ツンテン、ツトチンチンチン去りし女房のツヽンツン形見とてツトチンチンチン行燈に殘せし、針のあと、わが子を膝に、引寄せて、男なみだの、もらひ乳。

柳之助は熟と聽いてゐた樣子であつたが、別に何とも言はなかつた。言ひたいことの有る葉山も先控へて默つてゐると、姬松が纔に、

「好いのね。」と呟く傍から、又もや〔更行く鐘〕を唄出す。

聞捨にならぬ美音が手に取るやうなので、有繫に此方でも水を打つたやうにしてゐたが、旋てそれもチリレン、ツンテン、ツトチンチンチンと納るのを切掛に、葉山はしみ〴〵藝者の橫顏を眺めてゐた目を突如と外して、

「肖てゐるのが解らない？　是が？　是が解らないかい。」

「解らん。」と柳之助は又一目視て首を掉る。

「是がだよ、是が解らない事があるものか。えゝ情無い目だ。能く見給へ、ようく！」

「可厭よ、もう、星樣、どうせ土鍋でお粥ですからさ。」と姬松は小氣味を惡がつて、外方を向いて了ふ。

柳之助は益稀有な目をしてゐるのを、葉山は少しく焦燥氣味で、

「もう解つたらう。如何だい、肖てゐるだらう。」
「もう星樣、私は澤山よう。」と姫松は衝と起つて、座敷の外へ遁出した。
「未だ解らないのかい、是は怪しからん！　君は醉つてゐるからだ、……」
「醉つとるより腹が減つとる。」
「うむ、然うだ。それぢやまあ腹を拵へてから、能く見給へ。」
早速手を鳴せば、漸く今來たと云ふので、姫松とお若が料理を運び込む。柳之助は得たり賢しと、五皿と云ふものを前に並べて、夢の如くスウプを吸つて了ふと、息も吐かずに肉叉と食刀を十文字に構へたが、梭を投るやうに左右の一上一下するのを、感心して視てゐた姫松は、
「巧いのねえ、あの手つきが、貴方餘程黒人よ。而して第一召上るのゝ速いこと。」
「そこへ惚れたか。」と葉山は又言懸る。
「いくら惚れてもねえ、私のやうなものゝ合手にはなつて下さいませんとさ。」
と聞いて柳之助は竊と顏を擧げたが、藝者は葉山の方を瞶めてゐるので、又竊と食事に掛る。
「又お前ほどのものが片思を爲るなんて、那樣腕の無い話があるものか。それは丁度金の有る奴が泣言を云ふのと同じ心意氣なのだ、誰が本當にするものかね。」
實際姫松はお若の言つた通り此星さんには酷く岡惚れてゐるのであるから、葉山が何處までも

茶にしてゐるのが、悔しいやら、愁いやら、噬（くひ）付きたいほど憤れたくて、
「好い加減にして下さいよ。何も那様（そんな）に異（おツ）う有仰らなくつたつて、御迷惑なら御迷惑だと有仰いな。」
葉山は然も氣の毒さうに、
「言つても可いかい。」
有繋（さすが）に意外の挨拶に姫松も今は堪忍袋（かんにんぶくろ）の緒が切れたやうな聲（こゑ）をして、
「はあ、有仰（おつしや）いとも！」
「言ふよ。」
「仰有（おつしや）いな！　憤れつたい。」
「迷惑……。」
姫松は瞥然と見る。
「どころかい。」
「何ですつて？」
がちやんと物の破れたやうな音がしたので、二人とも吃驚（びつくり）して見向けば、柳之助が肉叉（フオーク）と食刀（ナイフ）を皿の上に投出したのである。而して窄袴（ズボン）を緩（ゆる）めながら、

「あゝ、食つた、食つた！」

「さあ腹が出來たら見たまへ。」と葉山は忽ち女の方を餘所にすると、姫松は茫然して、又今に構つてくれるのを心待にしてゐたが、急には那様氣色も無いので、不滿さうに襦袢の襟を弄つてゐた。

腹の出來た目で見ても、誰に肖てゐるのやら柳之助には解りかねた。葉山は怺へかねて、（類さんに生寫）と打明した所で、成程と横手を拍れる豫想が、なか〳〵驀然とも爲ぬのみか、

「類さんに!?」と呆れられて、

「然う！」とばかりに二の句は續かぬまでに失望したのを、何處を如何見て、何を言つてゐるのやらと、此人にも似合はぬ馬鹿々々しさを、柳之助は聲高に笑つたのである。葉山は又、是程に肖てゐるものを、本人にあらざるよりは之より肖やうがあるものではない。彼の目は如何かしてゐる。其も知らずに他を笑ふなどゝは以ての外と、小癪に障らぬでもなかつたが、左も右も面々が見る目の事、肖ぬと見たものを是非肖てゐるに爲る事もならず、

「何故是が肖てゐないだらう。」と持餘して抛出したやうに言へば、

「何故でも肖て居らんものは肖て居らんものぢやないか。」

僞でもなく柳之助は肖てゐぬと見たのであるが、葉山は見れば見るほど肖てゐるので、如何し

ても彼の言が信じられなくて、

「本當に肖てゐないかい。如何しても然うは見えないかい。」

と冗くも訊ねた。柳之助は頽として――葉山は實に彼の自分に向つて此時ほど頽とした事を見なかつたのである。

「何處が肖とるのだ？　君は如何かしとるよ。」

葉山は決して自分の目が如何かしてゐるとは信ぜぬ。其通りに柳之助とても自分が然うとは信ぜぬ。

「これは證據裁判（しようこさいばん）となつた。」と葉山が呟くと、彼は猶頑（なほぐわん）として、

「僕より確な證據は無いぢやないか。」

間に介つて狼狽されたのが姫松。抑も誰に肖たのやら、肖ないのやら、始は何だか洒落のやうであつたのが、後には段々むづかしくなつて、岡惚の星さんは機嫌（きげん）を損じたやうな顔色。食べる物さへ食べて了へば可恐（こわ）い事は無いと云はないばかりに、彼木訥漢（あのむつつり）の急に氣の強くなつた面の憎さ。左も右も捨てゝ置いたら惡からうと。

「酷いわ、貴方がたは、他の顔を捉へて議論したりなんぞして。」

因で葉山は氣を變へて、

「ちつと心意氣でも聞かうか。」

「是非伺ひませう。」と姫松は急遽して壁際に寄せてある三絃を取りに起つたのは、是からたつぷりと思の丈を糸に言はせる覺悟、乃至少しは自慢の喉も聴いてもらつて、萬更一山百文の不見手でもない處を見せたい下心。

衣兜の時計を出して見ると柳之助は起上つて、

「行かう、もう十時だ。」

「あゝ行かう。」といふ聲を聞くと、姫松は三絃を挈げて慌忙しく取つて返したが、ずつと落着拂つて、

「歸すもんですか。」

「でも此人が歸ると云ふから。」

「私は此方は留めはしないわ。」

「さあ、葉山。」と柳之助は自分の席から二三尺ばかりを忙しく往きつ復りつしてゐたが、左右女が彼此言つては自分を袖にして葉山を留めたがる、葉山も强ひては歸りたがらぬ様子を見て、往きつ復りつの區域を次第に擴げて、遂に襖の外へ出て了ふ。

本文の拔萃はこの位にして置く。この作品は前にもいつた通り、世事に迂い智識階級と學校の先生と、ブルジョワとも云へないが、いつて見ればプチブルの一市民葉山の日常生活を書いたものであるが、今迄の紅葉山人の作品のやうに、小說的な山といふものはない。從つてその興味は氷炭相容れない二つの人格の對照であるが、全體にこの朴訥漢と通人との日常の行爲や對話に山人の人間的な氣分が出てゐるので、道德問題にふれたといふ所も格別ないし、其の時分のこととて今のやうな不安な生活氣分といふものの背景もない。作家獨特の趣味性から成りたつたもので、讀めば全部を讀まないと面白味が分らないといつたやうなものである。人間の描寫は何分にも自然主義以後のやうに內面的といふ譯にはゆかないが、性格描寫といふやうなものは、主人公の鷲見、複主人公の葉山よりも、寧ろお種とお島との二人の女性の方が勝れてゐる。少しも感傷的な所もないが、それかといつて理性的だともいへない。年の割りに物分りの好い比較的自分といふものをちやんと持つてゐる割に、周圍に對しても寛容の理解を持たうとする、まあ云つてみれば聰明なお種は、恐く作者の趣味性から割り出された女性ではないかと思ふ。今一人のお島はこの小說の中ではお種ほど重要な役割を演じてゐるわけではないが、モダン氣分の無邪氣な姿がよく出てゐる。

鷲見は葉山のうちに同居するやうになつてからも、最初はどうも葉山の留守中は學校へいつてゐる間は紛れてゐるが、家へ歸るのが何となし憂鬱であつたし、お種の方も鷲見の女々しい氣質が氣に入らない。普通からいふと二人の感情が、いつかは破裂すべきである。お種が（あんな變人の世話は御免だ）といひ出しさうである。併しそこに作者の女性に對する注文があるので、それをお種といふ女性を通して實行させてゐる。これも作者の道德感と云ふほど深い意味のあるものではないが、「伽羅枕」の佐太

夫などに見るやうな、反抗氣分だとか、憎惡だとか、自尊心だとか、さういつた强い個性はむしろ作者の趣味に合はないことで、まあ云つて見れば世間普通の微温的な女性を書いたものが多い。自覺した個性的な婦人はその時代にはなかつたものである。さういふ個性の表はれたのは、イブセンのドラマなどが日本の文壇に移入されてからのことで、時代からいふと、日露戰爭以後のことである。日露戰爭は在來の凡ての道德や習慣を或程度まで破壞したのである。そしてそこに劃期的な自然主義が生れたものである。

以下少しばかり鶯見とお種との關係と成行きに就いて、本文を引用する代りに、梗概のやうなものを說明的に書いておかうと思ふ。

待合へいつた翌日お種が（ゆふべはどうでした）と聞く。すると（似とるものですか、あれは全く噓で唯あんなことを云つて揶揄つたんです、似ておつた所で高が藝者ぢや）といつて笑つてゐる。そこでお種がこつちは親切で、良人の友人として世話をしてゐるのは——例へば靴下の破れまで氣を附けるやうにしてゐるのに、柳之助はさういふ親切にも氣がつかぬやうに常に却つて苦々しい顏をしてゐるけれど、併しお種といふのはさういふことは素振りにも出さずに、その時柳之助をお茶に呼んで、矢張りこの先き貴郞も二度目の奥さんを貰つた方が好い。段々年取つてから獨りでは困るといつて、結婚を勸める。すると柳之助は徹頭徹尾結婚はしないといふのである。再婚などすれば死んだお類の魂が痛む、といつて拒むのである。それから柳之助は或日お類に似てゐるものを見せてやらうといふので、何時の間に注文したのか、油繪の肖像畫を持つて來る。それがお類にそつくりといふので、二階の上り口の所に

据ゑ附けて置く。その肖像畫は柳之助が一番好いと思つてゐる寫眞をモデルにして、歸寧きの風俗を寫したもので髪は島田、桃の實に千雀の挿込み、高い前髪のかげに牡丹形の櫛の端が見えて、見事に鬢が出てゐる。額の廣い、濃くない一字眉も、小さい眼が鋭く澄んで鼻は尋常、よく締つた口元の愛らしさ、片手は椅子に掛け右の手は袖に引き入れ、白袷に縮緬の三枚襲ね、上は水色の丸に四角木瓜の紋付、下着は鳩羽鼠の更紗で、帶は葡萄色地に金茶の網目を織り出して、銀鼠で細く光淋千鳥を一群づゝに、所々唐松を地色で配つてある。ふさ〳〵と絡つた緋の花纐纈の帶揚が胸のあたりに雲鶴の形を見せて、帶止の金具は柳の輪の中に金色の一輪椿といふ扮飾である。柳之助はそれを夫婦にみせて非度く喜んでゐる。お種は（誠によく似ていらつしやいます、お髮がねえ、よく出來てゐます）といふ褒め方をする。繪が拙いので葉山は褒めるにも褒められず困つてゐる。柳之助は油繪の正面の壁に兩膝を抱えてもたれ餘念なく眺め盡してゐる間に、恍惚として來て夢見心地に引き入れられて了ふ。すると眼が懷しさうに動いたり、堅く結んだ口唇が綻びたり、横顔をさへ振り向けて側によつて來さうにしては、又イんでものを云ひかける。記憶の出來ぬほど話をする。柳之助は全く醉つたやうになつて了ふ。同時にその繪が柳之助の眼には素的な名畫に見えるといふやうな場面もある。

或日葉山の雇はれてゐる會社の社長が園遊會を催すので、葉山夫婦と子供と三人で盛裝して出掛ける。その時のお種が今迄はさうも思はなかつた柳之助の眼に素的に美しく見える。この時のお種夫婦の着附も紅葉流に非常にくわしく描かれてゐるが、それは略するとして柳之助が、君ももう出掛けるのだらう僕の方の園遊會は寂しいばかりだといつて、これも外出の仕度をしてゐる。彼のゆくべき園遊會は、石の塔ばかり並んだ谷中の森である。お種はそれを思ひやると、自分達夫婦が晴れやかに着飾つて出てゆ

くのが、何だか濟まないやうな氣がする。葉山は（それぢやこつちは賑かな墓詣りか）といつて笑ふ。（それぢや留守をたのむよ、早く歸つて來て留守をして呉れなくつちや困るよ）といふと、柳之助は實に僕は感服した。細君が實に立派です。といつて見惚れてゐる。

柳之助とお種が急に接近しだしたのはその時分からで、その後葉山が會社の用で關西へ出張するやうになつてからは、益々二人の仲が近くなつて來る。或時などは（貴女の側へ來て本を讀んでをつても構ひませんか）といつて、お種の側へ來て本を讀んだりして話しこむ。（病氣でもしたら貴女に世話して貰う積りです、僕は貴女を姉と思つとるです）。（姉樣とは非度うございます、妹にしておいて下さい）とお種も戯談にして了ふ。柳之助は飽くまで眞面目で（葉山君が兄ですから、貴女も矢張り姉ですよ）と、そして二階へ上るのも億劫さうで、いつまでもお種の側にゐたが、或晩などはお種が二階に上つてくさ〳〵してゐる柳之助を慰めるために、葡萄酒をもつていつて呑ませる。柳之助は大抵は下にゐてお種に附き絡つてゐるのに、外から歸つた時とか出てゆく時とかになると屹度二階に上つてゆくので、女中が注意してみると、鷲見は定つて油繪に顏を押しつけてゐる。臺所では鷲見のことを厭な人、といふことになつて了ふ。するうちに或時彼は非常に佗しい晩で雨さへしよぼ〳〵降つてゐる、夜も更けてきたのでは眠らうと思ふのだが、どうしても寢つかれない。妙にこぢれて了つて氣分のもつれのやり場がなくなつて了ふので。惡いとは知りつつも、そうつと下へ下りて、お種の寢間の襖を開けると、舅がお種の側に寢てゐる。これは隱居所の方は鼠が出て眠れないからだといふのだが、實は鷲見の素振りが怪しいので、老人が心配してお種の番に來てゐるものらしい。そして葉山が前振れもなしに或日突然旅先きから歸つて來た時に、端なく平和なこの家庭に破亂が生じる。葉山が父親と鷲見の間に狹まれて困つ

て了ふ。柳之助は自分は好いとしても細君に濟まないと、いつて老人に會つて釋明しやうといふので、非常に昂奮する。傍でお種は泣きだす。葉山は漸く柳之助を宥めて、兎も角に家を出て貰うことにして𨻶がつく。といふ所でこの小説は終りを告げてゐる。

この柳之助とお種の接近に就いて、二人の心理が非常に精細に描寫されてゐる。少しくどいやうな所もあるが、仕事は至つて細く、讀者をはら〳〵させる所までいつてゐるのであるが、結局二人は潔白で一歩も道德の埒外へは踏みだしてゐない。柳之助のお種に對する氣持ちには何か分明りしないものがあつて、戀愛に似た陰影もないことはないが、作者はお種をそこまで引きづつてゆくことを避けてゐる。そこに作者の好みの一人の女性が完全に愛護されてゐる。

金色夜叉

前編

「金色夜叉」は餘りにも有名な日本の小説の一つである。文豪尾崎紅葉が有名であるよりも以上に有名である。今一つ面白いことは、男主人公の間貫一と女主人公のお宮が、「金色夜叉」より以上にも人口に噲炙してゐることである。ちやうどそれは作者の誰であるかを知らない大衆が、小春治兵衞やお染久松を、長い間不斷に口にして來たやうなものである。これは卽て作品の大衆性を保證するもので、それが鑑賞すべき藝術として受取られる遑もないくらゐに、直ちに作中の人物そのものに同感するのが、一般大衆の感情であるからである。彼等は藝術に理解をもつとか、作者に同感するといふよりも、旣に抽象化され一般化された現實の作中人物そのものに、自他共通の或るものを感ずるのである。中村武羅夫氏はそれについて言つてゐる。「作品の文學的價値といふやうなものよりも、その大衆性に却つて不朽の生命がある所以である。それよりも「金色夜叉」のどういふ點に、不朽の生命があるのか。時代を超越し、老若男女の差別なく、萬人の「金色夜叉」に心を惹きつけられるのは、どういふところであるか。これは私だけの考へであるが、「金色夜叉」を通じて現はれてゐるところの作者紅葉の『文學魂』『人間的誠實と熱意』といふやうなものが、萬人の心を動かし、胸を打つのではないだらうか」と。筆者の考へるところも、また其の通りである。これを今一つ推詰めると、其所謂「文學魂や人間的誠意

と熱意」とが、果して何んなものであるかといふことになり、それの價値によつて、作品の價値も決定する譯であるが、紅葉先生の場合では、その根柢と成つてゐるものに、漢文學から來た儒教の常識的道德觀と、弱を助け强を挫く江戸ッ兒の氣慨をもつて矜りとした市井人の反抗氣分といふやうなものだと思へば、大した間違はあるまいかと思ふが、其のなかには關東人のもつ氣質の重要な要素であるところの、傳法といふやうなもの丶含まれてゐるのは勿論である。傳法と言つて惡ければ、潔白正直で、非妥協的な人間の必然の運命としての現はれである。叛逆、復讐、甚しいのは歪みくねつた呪咀のやうなものがそれであらう。

紅葉先生のもつてゐた正義感といつたやうなものは、時代が時代であつたゞけに、今から考へると、相當偏狹な箇人的なもので、正常の狀態では極めて潔白正直だが、少し旋毛が曲つて來ると、是が非でもどこまでも意地を張り通して行くといつたやうな、俗に言ふ慈悲もあれば罰もあるといつたやうなところがある。貫一の性格はちやうどさう言つた作者の性格の一端の誇張されたもので、彼の取つた徑路は、純潔な青年の陷りさうな運命である。その表現に不自然なところや無理のあるのも仕方があるまい。しかしその誇張や無理のあるところが卽(やが)てこの作品の特徴で、作者の時代的な惱みの不自然な大寫(おほうつ)しが、やがて太い神經の大衆に魅力のある所以であらうが、謂つて見れば「金色夜叉」全體が大向ふを唸らせるためのクロオザップであり、大見得なのである。これに比べると「不如歸」には、さう言つた誇張がなく、今少し日常に近い現實を取扱つてゐるので、「金色夜叉」ほどの興奮はない代りに、しんみり胸に沁みるものがある。同じ悲劇でも悲壯劇と悲劇との違ひがある。一つは雄壯なオーケストラで、一つは祕(ひそ)やかな室內樂のやうなものであらうか。作のもつてゐる人生觀社會觀といつたやうな深淺廣狹はまた別であ

る。

要するに「金色夜叉」は作家の人間として有つてゐる氣魄精力の有りたけを盡くして、强引に押して行つたやうな作品で、從つて「三人妻」や「多情多恨」のやうに、怡しんで書いてゐない。部分的の小說的技術にはさういふところもあるが、全體として見ると、今迄の作品に見られない苦惱の迹が歷々出てゐる。出來ばえから言つても、五年間の力作であるだけに、全部の均齊が保たれてゐないし、むらもある。何といつても、かるた會のところから、有名な熱海海岸の場面に至るまでの初篇の數囘が尤も好い出來だと思ふ。詰り貫一が、失戀から一つ出つて、心機の一轉を來す動機と、さうさせたお宮の性格と心理、それと其をめぐる鴫澤夫婦の生活、富山唯繼の人物の輪廓などが、寸分の隙間もなく組み立てられてゐて、描寫の筆も細かい。この大作に取りかゝらうといふ張り切つた意氣込みが、全篇に溢れてゐる。强ち他の諸篇が劣つてゐるといふのではないが、大體筋の說明のやうなものになつてゐて、全體的な人生の姿とか生活の雰圍氣といふやうなものゝ密度が稀薄に流れ易い傾きがあつて、取ついた以上、主題があるだけに、一般の讀者は何うしても最後までついて行かなければ納得のできないやうなものであるのは勿論だし、十二三年のあひだに、こゝまで發展して來た作者の偉大な手腕と規模を窺ふには、是非とも全篇を讀んでおく必要があらうが、豐かな藝術味はむしろ初篇の方に凝結してゐるかと思ふ。

一篇の主頭として抽象化された道德觀が、大體正を蹈み邪を挫くといつたやうな時代の感情であることは、以上の說明で解ると思ふが、更にスタイルについて言ふならば、作の結構が大きいだけに、作者の體度も亦氣負つたもので、漢文を骨格とし國文を肉としたやうなもので、あの時代でも相當難かしい堅い文章であつたので、今の人には頗る讀みづらい。文字も漢文の素養がなければ解らないやうな喧し

いものばかりを擇りに擇つたものである。彫琢推敲は由來作者の創作的生命で、病膏盲に入るといつていゝほどの凝り方であつた。大體において、全篇を通して、文體は一致してゐるが、章を重ねるに從つて、作の氣分もかはり、筋の發展と歸趨に苦しんだ結果、最初のやうな氣嵩なところがなくなり、いくらか平易になつたことも事實であらう。それには確かに體の疲れといふことも看のがせない。作者はこの篇の完成を告ぐるに先だち、最後の篇を書いた翌年に病歿したのである。

以下かるた會の場面を拔萃し、續いて描寫の佳興に入つた主要部分を銀幕式に隨所に摘出して、連鎖劇風に說明で繫いで、それによつて作品の內容と全篇の筋を示すこととしよう。

金色夜叉

未だ宵ながら松立てる門は一樣に鎖籠めて、眞直に長く東より西に横はれる大道は掃きけるやうに物の影を留めず、いと寂しくも往來の絕えたるに、例ならず繁き車輪の輾は、或は忙しかりし、或は飮過ぎし年賀の歸來なるべく、疎に寄する獅子太鼓の遠響は、はや今日に盡きぬる三箇日を惜むが如く、其哀切に小き膓は斷れぬべし。

元日快晴、二日快晴、三日快晴と誌されたる日記を濆して、此黃昏より凩は戰出でぬ。今は(風吹くな、なあ吹くな)と優しき聲の宥むる者無きより、憤をも增したるやうに飾竹を吹靡け

つつ、乾びたる葉を粗なげに鳴して、吼えては走行き、狂ひては引返し、揉みに揉んで獨り散々に騷げり。微曇りし空は之が爲に眠を覺されたる氣色にて、銀梨子地の如く無數の星を顯して、鋭く沍えたる光は寒氣を發つかと想はしむるまでに、其薄明に曝さるる夜の街は殆ど氷らんとするなり。

人此裏に立ちて寥々冥々たる四望の間に、爭か那の世間あり、社會あり、都あり、町あることを想得べき。九重の天、八際の地、始めて渾沌の境を出でたりと雖も、萬物未だ盡く化生せず、風は試に吹き、星は新に輝ける一大荒原の何等の旨意も、秩序も、趣味も無くて、唯濫に邈く横はれるに過ぎざる哉。日の中は宛然沸くが如く樂み、謳ひ、醉ひ、戯れ、歡び、笑ひ、語り、興ぜし人々よ、彼等は儚くも夏果てし孑孑の形を斂めて、今將何處に如何にして在るかを疑はざらんとするも難からずや。多時靜なりし後、遙に拍子木の音は聞えぬ。其響の消ゆる頃忽ち一點の燈火は見え初めしが、揺々と町の盡頭を横截りて失せぬ。再び寒き風は寂しき星月夜を擅に吹くのみなりけり。唯有る小路の湯屋は仕舞を急ぎて、廂間の下水口より噴出づる湯氣は一團の白き雲を舞立てて、心地惡き微温の四方に溢るると與に、垢臭き惡氣の盛に迸るに遭へる綱引の車あり。勢ひて角より曲り來にければ、避くべき遑無くて其中を駈抜けたり。

「うむ、臭い。」

車の上に聲して行過ぎし跡には、葉巻の吸殻の捨てたるが赤く見えて煙れり。

「もう湯は拔けるのかな。」

「へい、松の内は早仕舞でございます。」

車夫の恁く答へし後は語絶えて、車は驀直に走れり。紳士は二重外套の袖を犇と掻合せて、獺の衿皮の内に耳より深く面を埋めたり。灰色の毛皮の敷物の端を車の後に垂れて、横縞の華麗なる浮波織の蔽膝して、提灯の徽章はTの花文字を二個組合せたるなり。行き行きて車は此小路の盡頭を北に折れ、稍廣き街に出でしを、僅に走りて又西に入り、其の南側の半程に箕輪と記したる軒燈を掲げて、剡竹を飾れる門構の内に挽入れたり。玄關の障子に燈影の映しながら、格子の鎖固めたるを、車夫は打叩きて、

「頼む、頼む。」

奥の方なる響動の劇しきに紛れて、取合はんともせざりければ、二人の車夫は聲を合せて訪ひつつ、格子戸を連打にすれば、旋て急足の音立てて人は出で來ぬ。

圓髷に結ひたる四十約の小く痩せて色白き女の、茶微塵の絲織の小袖に黒の奉書紬の紋付の羽織着たるは、此家の內儀なるべし。彼の忙しげに格子を啓るを待ちて、紳士は優然と内に入らんとせしが、土間の一面に充滿たる履物の杖を立つべき地さへあらざるに遲へるを、彼は虛さず勤

篤に下立ちて、此の敬ふべき賓の爲に辛くも一條の道を開けり。恁て紳士の脫捨てし駒下駄のみは獨り障子の內に取入れられたり。

箕輪の奧は十疊の客間と八疊の中の間とを打抜きて、廣間の十個所に眞鍮の燭臺を据ゑ、五十目掛の蠟燭は沖の漁火の如く燃えたるに、間每の天井に白銅鍍の空氣ランプを點したれば、四邊は眞晝より明に、人顏も眩きまでに耀き遍れり。三十人に餘んぬる若き男女は二分に輪作りて、今を盛りと歌留多遊を爲るなりけり。蠟燭の焰と炭火の熱と多人數の熱蒸と混じたる一種の溫氣は殆ど凝りて動かざる一間の內を、莨の煙と燈火の油煙とは互に纏れて渦卷きつつ立迷へり。込合へる人々の面は皆赤うなりて、白粉の薄剝げたるあり、髮の解れたるあり、衣の亂次く着頹れたるあり。女は粧ひ飾りたれば、取亂したるが特に著るく見ゆるなり。男はシャツの腋の裂けたるも知らで胴衣ばかりになれるあり、羽織を脫ぎて帶の解けたる尻を突出すもあり、十の指をば四まで紙にて結ひたるもあり。然しも息苦しき溫氣も、咽ばさるる煙の渦も、皆狂して知らざる如く、寧ろ喜びて罵り喚く聲、笑頽るる聲、捩合ひ、踏破く犇き、一齊に揚ぐる響動など、絕間無き騷動の中に狼藉として戲れ遊ぶ爲體は、三綱五常も糸瓜の皮と地に塗れて、唯是修羅道を打覆したるばかりなり。海上風波の難に遭へる時、若干の油を取りて航路に澆げば、浪は奇くも

忽ち鎭りて、船は九死を出づべしとよ。今此の如何とも爲べからざる亂脈の座中をば、其油の勢力をもて支配せる女王あり。猛びに猛ぶ男たちの心も其人の前には和ぎて、終に崇拜せざるはあらず。女たちは皆猜みつつも畏を懷けり。中の間なる團欒の柱側に座を占めて、重げに戴ける夜會結に淡紫のリボン飾して、小豆鼠の縮緬の羽織を着たるが、人の打騷ぐを與あるやうに涼き目を瞪りて、躬は淑かに引繕へる娘あり。粧飾より相貌まで水際立ちて、凡ならず媚を含めるは、色を賣るものの假の姿したるにはあらずやと、始めて彼を見るものは皆疑へり。一番の勝負の果てぬ間に、宮といふ名は普く知られぬ。娘も數多居たり。醜きは、子守の借着したるか、茶番の姫君の戶惑せるかと覺しきもあれど、中には二十人並、五十人並優れたるもありき。服裝は宮より數等立派なるは數多あり。彼は其點にては中の位に過ぎず。貴族院議員の愛娘とて、最も不器量を極めて遺憾なしと見えたるが、最も綺羅を飾りて、其起肩に紋御召の三枚襲を被ぎて、帶は紫根の七絲に百合の折枝を縒金の盛上にしたる、人々之が爲に目も眩れ、心も消えて眉を皺めぬ。此外種々色々の絢爛なる中に立交らひては、宮の裝は纔に曉の星の光を保つに過ぎざれども、彼の色の白さは如何なる美しき染色をも奪ひて、彼の整へる面は如何なる麗はしき織物よりも文章ありて、醜き人たちは如何に着飾らんとも其の醜きを蔽ふ能はざるが如く、彼は如何に飾らざるも其の美しきを害せざるなり。

袋棚と障子との片隅に手爐を圍みて、蜜柑を剝きつつ語ふ男の一個は、彼の横顔を恍惚と遙に見入りたりしが、遂に思堪へざらんやうに呻き出せり。

「好い、好い、全く好い！　馬士にも衣裳と謂ふけれど、美しいのは衣裳には及ばんね。物其自らが美しいのだもの、着物などは如何でも可い、實は何も着て居らんでも可い。」

「裸體なら猶結構だ！」

此の强き合槌撃つは、美術學校の學生なり。

綱曳にて駈着けし紳士は姑く休息の後內儀に導かれて入來りつ。其後には、今まで居間に潜みたりし主の箕輪亮輔も附添ひたり。席上は入亂れて、爰を先途と激して勝負の最中なれば、彼等の來れるに心着きしは稀なりけれど、片隅に物語れる二人は逸早く目を側めて紳士の風采を視たり。

廣間の燈影は入口に立てる三人の姿を鮮かに照せり。色白の小き內儀の口は疳の爲に引歪みて、其夫の額際より赭禿げたる頭顱は滑かに光れり。妻は尋常より小きに、夫は勝れたる大兵肥滿にて、彼の常に心遣ありげの面色なるに引替へて、生きながら布袋を見る如き福相したり。

紳士は年齒二十六七なるべく、長高く、好き程に肥えて、色は玉のやうなるに頰の邊には薄紅を帶びて、額厚く、口大きく、腮は左右に蔓りて、面積の廣き顏は稍正方形を成せり。緩く波打

てる髪を左の小鬢より一文字に撫付けて、少しは油を塗りたり。濃からぬ口髭を生して、小からぬ鼻に金縁の目鏡を挾み、五紋の黑塩瀨の羽織に華紋織の小袖を裾長に着做したるが、六寸の七絲帶に金鏈子を垂れつつ、大様に面を擧げて座中を眴したる容は、實に光りを發つらんやうに四邊を拂ひて見えぬ。此團欒の中に彼の如く色白く、身奇麗に、而も美々しく裝ひたるはあらざるなり。

「何だ、彼は?」

例の二人の一個は然も憎さげに呟けり。

「可厭な奴!」

唾吐くやうに言ひて學生は故と面を背けつ。

「お俊や、一寸。」と內儀は群集の中より其娘を手招きぬ。

お俊は兩親の紳士を伴へるを見るより、慌忙しく起ちて來れるが、顏好くはあらねど愛嬌深く、いと善く父に肖たり。高島田に結ひて、肉色縮緬の羽織に撮みたるほどの肩揚したり。顏を赧めつゝ紳士の前に跪きて、慇懃に頭を低れば、彼は纔に小腰を屈めしのみ。

「どうぞ此方へ。」

娘は案內せんと待構へけれど、紳士は然して好ましからぬやうに頷けり。

母は歪める口を怪しげに動かして、
「あの、見事な、まあ、御年玉を御戴きだよ。」
お俊は再び頭を低げぬ。紳士は笑を含みて目禮せり。
「さあ、まあ、被入いまし。」
主の勸むる傍より、妻はお俊を促して、お俊は紳士を案内して、客間の床柱の前なる火鉢在る方に伴れぬ。妻は其處まで介添に附きたり。二人は家内の紳士を遇ふことの極めて、鄭重なるを訝りて、彼の行くより坐るまで一擧一動も見脱さゞりけり。其の行く時彼の姿は恰も左の半面を見せて、團欒の間を過ぎたりしが、無名指に輝ける物の凡ならず強き光は燈火に照添ひて、殆ど正しく見る能はざるまでに眼を射られたるに呆れ惑へり。天上の最も明なる星は我手に在りと言はまほしげに、紳士は彼等の未だ曾て見ざりし大さの金剛石を飾れる黃金の指環を穿めたるなり。お俊は骨牌の席に復へると侔しく、密に隣の娘の膝を衝きて口早に囁きぬ。彼は忙々しく顏を擡げて紳士の方を見たりしが、其人よりは其指に耀く物の異常なるに駭かされたる體にて、
「まあ、那の指環は！一寸、金剛石？」
「然うよ。」
「大きいのねえ。」

「三百圓だつて。」

お俊の說明を聞きて彼は漫に身毛の彌立つを覺えつゝ、

「まあ！　好いのねえ。」

鱓の目ほどの眞珠を附けたる指環をだに、此幾歲か念懸くれども未だ容易に許されざる娘の胸は、忽ち或事を思ひ浮べて攻鼓の如く轟けり。彼は惘然として殆ど我を失へる間に、電光の如く隣より伸來れる猿臂は鼻の前なる一枚の骨牌を引攫へば、

「あら、貴方如何したのよ。」

お俊は苛立ちて彼の橫膝を續けさまに拊きぬ、

「可くつてよ、可くつてよ、以來もう可くつてよ。」

彼は始めて空想の夢を覺して、及ばざる身の分を諦めたりけれども、一旦金剛石の强き光に燒かれたる心は幾分の知覺を失ひけんやうにて、然しも目覺しかりける手腕の程も見る見る漸く四途亂になりて、彼は敢無くも此時よりお俊の爲に賴み難き味方となれり。

恁して彼より此に傳へ、甲より乙に通じて、

「金剛石！」

「うむ、金剛石だ。」

「金剛石??」
「成程金剛石！」
「まあ、金剛石よ。」
「那が金剛石？」
「見給へ、金剛石。」
「あら、まあ金剛石??」
「可感い金剛石。」
「可恐い光るのね、金剛石。」
「三百圓の金剛石。」

瞬く間に三十餘人は相呼び相應じて紳士の富を謳へり。

彼は人々の更互におのれの方を眺むるを見て、其手に形好く葉巻を持たせて、右手を袖口に差入れ、少し懈げに床柱に靠れて、目鏡の下より下界を見遍すらんやうに目配して居たり。

恁る目印ある人の名は誰しも問はであるべきにあらず、洩れしはお俊の口よりなるべし。彼は富山唯繼とて、一代分限ながら下谷區に聞ゆる資産家の家督なり。同じ區なる富山銀行は其父の私設する所にして、市會議員の中にも富山重平の名は見出さるべし。

宮の名の男の方に持囃さるゝ如く、富山と知れたる彼の名は直に女の口々に誦ぜられぬ。あはれ一度は此紳士と組みて、世に愛たき寳石に咫尺するの榮を得ばや、と彼等の心々に冀はざるは希なりき。人若し彼に咫尺するの榮を得ば、啻に其の目の類無く樂さるゝのみならで、其の鼻までも菫花の多く齅ぐべからざる異香に薰ぜらるるの幸を受くべきなり。男たちは自から荒められて、女の擧りて金剛石に心牽さるゝ氣色なるを、或は妬く、或は淺ましく、多少の興を冷さゞるはあらざりけり。獨り宮のみは騷げる體も無くて、其の清しき眼色は然しもの金剛石と光を爭はんやうに、用意深く、心樣も幽しく振舞へるを、崇拜者は益々懽びて、我等の慕ひ參らする効はあるよ、偏に此君を奉じて孤忠を全うし、美と富との勝負を唯一戰に決して、紳士の憎き面の皮を引剝かん、と手薬煉引いて待ちかけたり。然れば宮と富山との勢は恰も日月を並懸けたるやうなり。宮は誰と組み、富山は誰と組むらんとは、人々の最も懸念する所なりけるが、鬮の結果は驚くべき豫想外にて、目指されし紳士と美人とは他の三人と與に一組になりぬ。始め二つの輪作りし人數は此時合併して一の大なる團欒に成されたるなり。而も富山と宮とは隣合に坐りければ、夜と晝との一時に來にけんやうに皆狼狽騷ぎて、忽ち其隣に自ら社會黨と稱ふる一組を出せり。彼等の主義は不平にして、其目的は破壞なり。則ち彼等は專ら腕力を用ゐて或組の果報と安寧とを妨害せんと爲るなり。又其前面には一人の女に內を守らしめて、屈强の男四人左右に遠征軍を

組織し、左翼を狼藉組と稱し、右翼を蹂躪隊と稱するも、實は金剛石の鼻柱を挫かんと大童になれるに外ならざるなり。果せる哉、件の組は此勝負に蓬き大敗を取りて、人も無げなる紳士も、有繫に鼻白み、美しき人は顔を赧めて、座にも堪ふべからざるばかりの面皮を缺されたり。此の一番にて紳士の姿は不知見えずなりぬ。男たちは萬歳を唱へけれども、女の中には掌の玉を失へる心地したるも多かりき。散々に破壞され狼藉され、蹂躪されし富山は、餘りに這文明的ならざる遊戯に怖をなして、密に主の居間に逃歸れるなりけり。

鬘を被たるやうに梳りたりし彼の髮は椶櫚箒の如く亂れて、環の隻捥げたる羽織の紐は手長猿の月を捉へんとする狀して搖曳と垂れり。主は見るより然も慌てたる顔して、

「どう遊ばしました。おゝ、お手から血が出て居ります。」

彼は矢庭に煙管を捨てゝ、忽にすべからざらんやうに急遽と身を起せり。

「あゝ、酷い目に遭つた。どうも那樣亂暴ぢや爲樣が無い。火事裝束ででも出掛けなくつちや迚も立切れないよ。馬鹿にしてゐる！　頭を二つばかり撲れた。」

手の甲の血を吮ひつゝ富山は不快なる面色して設の席に着きぬ。豫て用意したれば、海老茶の紋縮緬の裀の傍に七寶燒の小判形の大手爐を置きて、蒔繪の吸物膳をさへ据ゑたるなり。主は手を打鳴して婢を呼び、大急に銚子と料理とを誂へて、

「それは如何も飛でもない事を。外に何處もお怪我はございませんでしたか。」
「那様に有られて耐るものかね。」
爲う事無さに主も苦笑せり。
「唯今絆創膏を差上げます。何しろ皆書生でございますから隨分亂暴でございませう。故々御招申しまして甚だ恐入りました。もう彼地へは御出陣にならんが宜うございます。何もございませんが此で何卒御寛り。」
「所が最一遍行つて見やうかとも思ふの。」
「へえ、又被入いますか。」
物は言はで打笑める富山の腮は愈展れり。早くも其意を得てや破顏せる主の目は、薄の切疵の如く幾と有か無かになりぬ。
「では御意に召したのが、へえ？」
富山は益笑を湛へたり。
「ございましたらう、然うでございませうとも。」
「何故な。」
「何故も無いものでございます。十目の見る所ぢやございませんか。」

富山は頷きつつ、
「然うだらうね。」
「彼は宜うございませう。」
「一寸好いね。」
「まづ其の御意でお熱い所をお一盞。不滿家の貴方が一寸好いと有仰る位では、餘程尤物と思はなければなりません、全く寡うございます。」
倉皇入來れる內儀は思ひも懸けず富山を見て、
「おや、此方にお在あそばしたのでございますか。」
彼は先の程より臺所に詰切りて、中入の食物の指圖などして居たるなりき。
「酷く負けて逃げて來ました。」
「それは好く逃げて被入いました。」
例の歪める口を窄めて內儀は空々しく笑ひしが、忽ち彼の羽織の紐の偏斷れたるを見尤めて、環の失せたりと知るより、慌て驚きて起たんとせり、如何にとなれば其環は純金製のものなればなり。富山は事も無げに、
「何爲、宜い。」

「宜いではございません。純金では大變でございます。」
「何爲、可いと言ふのに。」と聞きも訖らで彼は廣間の方へ出でゝ行けり。
「時に彼の身分は如何かね。」
「然やう、悪い事は御座いませんが……。」
「が、如何したのさ。」
「が、大した事はございませんです。」
「それは然うだらう。然し凡そ其麼ものかね。」
「舊は農商務省に勤めて居りましたが、唯今では地所や家作などで暮して居るやうでございます。如何か小金も有るやうな話で、鴫澤隆三と申して、直隣町に居りまするが、極手堅く小體に遣つて居るのでございます。」
「はあ、知れたもんだね。」
我は顔に頤を掻撫づれば、例の金剛石は燦然と光れり。
「それでも可いさ、然し嫁れやうか、嗣子ぢやないかい。」
「然やう、一人娘のやうに思ひましたが。」
「それぢや窮るぢやないか。」

「私は恐い事は存じませんから、一つ聞いて見ませうで。」

程無く内儀は環を捜得て歸來にけるが、誰が惡戲とも知らで耳搔の如く引展されたり。主は彼に向ひて宮の家内の樣子を訊ねけるに、知れる一遍は語りけれど、娘は猶能く知るらんを、後に招きて聽くべしとて、夫婦は頻に觴を侑めけり。

富山唯繼の今宵此に來りしは、年賀にあらず、骨牌遊にあらず、娘の多く聚れるを機として、嫁選せんとてなり。彼は一昨年の冬英吉利より歸朝するや否や、八方に手分して嫁を求めけれども、器量望の太甚しければ、二十餘件の緣談皆意に稱はで、今日が日までも仍其事に齷齪して已まざるなり。當時取急ぎて普請せし芝の新宅は、未だ人の住着かざるに、はや日に黑み、或所は雨に朽ちて、薄暗き一間に留守居の老夫婦の額を鳩めては、寂しげに彼等の昔を語るのみ。

骨牌の會は十二時に迨びて終りぬ。十時頃より一人起ち、二人起ちて、見る間に人數の三分の一强を失ひけれども、猶飽かで殘れるものは景氣好く勝負を續けたり。富山の姿を隱したりと知らざる者は、彼敗走して歸りしならんと想へり。宮は會の終まで居たり。彼若疾く還りたらんには、恐く踏留るは三分の一弱に過ぎざりけんを、と我物顏に富山は主と語合へり。

彼に心を寄せし輩は皆彼が夜深の歸途の程を氣遣ひて、我願くは何處までも送らんと、絕か念

ひに念ひけれど、彼等の深切は無用にも、宮の歸る時一人の男附添ひたり。其人は高等中學の制服を着たる二十四五の學生なり。金剛石に亞いでは彼の擧動の目指(めざゝ)れしは、座中(ざちゆう)に宮と懇意に見えたるは彼一人なりければなり。此の一事の外は人目を牽くべき點も無く、彼は多く語らず、又は躁(さは)がず、始終(しじゆう)愼(つゝま)しくして居たり。終まで此兩個の同伴なりとは露顯(ろけん)せざりき。然あらんには餘所々々しさに過ぎたればなり。彼等の打連れて門を出づるを見て、始めて失望せしもの寡からず。

宮は鳩羽鼠の頭巾を被りて、濃淺黃地に白く中形模樣ある毛織のシオールを絡ひ、學生は焦茶の外套を着たるが、身を窄めて吹來る凩(こがらし)を遣過しつゝ、遲れし宮の辿着くを待ちて言出せり。

「宮さん那の金剛石の指環を穿めて居た奴は如何だい、可厭に氣取つた奴ぢやないか。」

「然うねえ、だけれど衆が彼人を目の敵にして亂暴(らんぼう)するので氣の毒だつたわ。隣合つて居たもんだから私まで酷い目に遭されてよ。」

「うむ、彼奴が高慢な顏をしてゐるからさ。實は僕も横腹を二つばかり突いて遣つた。」

「まあ、酷いのね。」

「那云ふ奴は男の目から見ると反吐(へど)が出るやうだけれど、女には如何だらうね、那麼(あんな)のが女の氣に入るのぢやないか。」

「私は可厭だわ。」

「芬々と香水の匂がして、金剛石の金の指環を穿めて殿様然たる服裝をして、好いに違無いさ。」

學生は嘲むが如く笑へり。

「私は可厭よ。」

「可厭なものが組になるものか。」

「組は鬮だから爲方が無いわ。」

「鬮だけれど、組に成つて可厭さうな様子も見えなかつたもの。」

「那様無理な事を言つて！」

「三百圓の金剛石ぢや到底僕等の及ぶ所にあらずだ。」

「知らない！」

宮はシオールを搖上げて鼻の半まで掩隱しつ。

「あゝ寒い！」

男は肩を峙てゝ直と彼に寄添へり。宮は猶默して歩めり。

「あゝ寒い！」

宮は仍、答へず。

「あゝ寒い！」
彼は此時始めて男の方を見向きて、
「如何したの。」
「あゝ、寒い。」
「あら可厭ね、如何したの。」
「寒くて耐らんから其中へ一處に入れ給へ。」
「何の中へ。」
「シオールの中へ。」
「可笑い、可厭だわ。」
男は逸早く彼の押へしシオールの片端を奪ひて、其中に身を容れたり。
宮は歩み得ぬまでに笑ひて、
「あら貫一さん、是ぢや切なくて歩けやしない。あゝ、前面から人が來てよ。」
恁る戯を作して憚らず、女も爲すまゝに信(まか)せて咎めざる彼等の關繫(くわんけい)は抑も如何。事情ありて十年來鴫澤(しぎさは)に寄寓せる此の間貫一は、今年の夏大學に入るを待ちて、宮が妻せらるべき人なり。

以上はその時代の唯一の社交機關ともいふべき、かるた會における、富山とお宮との會見であるが、同時にそれは本人のお宮には內密(ないしよ)で行はれた二人の見合である。これが旣に物質に飽き、生活に惠まれた金持階級の橫暴であると共に、さう言つた人物との交際を光榮と心得て取持つものゝ阿諛である。そしてそこから全篇の悲劇が生まれ、愛人同士の運命が狂つて行くのであるが、それに續いてお宮が今も昔しもかはらない世の慾望に引摺られて行つたことと、貫一が次第に不安を感じて行く徑路とは全篇のうちでも作者が一方ならぬ苦心をもつて書いたところであらう。

或日箕輪の內儀は思も懸けず訪來りぬ。其娘(そのむすめ)のお俊(しゆん)と宮とは學校朋輩にて常に往來したりけれども、未だ家と家との交際はあらざるなり。彼等の通學せし頃さへ親々は互に識らで過ぎたりしに、今は二人の往來も漸く疎くなりけるに及びて、俄に其母の來れるは、如何なる故にか、と宮も兩親も怪しき事に念へり。

凡そ三時間の後彼は歸行きぬ。

先に怪しみし家內は彼の來りしよりも其用事の更に思懸けざるに驚けり。貫一は不在なりしかば此の珍しき客來のありしを知らず、宮も亦敢て告げずして、二日と過ぎ、三日と過ぎぬ。其日より宮は少しく食して、多く眠らずなりぬ。貫一は知らず、宮は逾(いよいよ)告げんとは爲ざりき。此間に兩親は幾度と無く談合しては、其事を決しかねて居たり。

彼の陰に在りて起れる事、又は見るべからざる人の心に浮べる事どもは、貫一の知る因もあらねど、片時も其目の忘れざる宮の様子の常に變れるを見出さんは難き事にあらず。然も無かりし人の顔の色の遽に光を失ひたるやうにて、振舞など別けて力無く、笑ふさへいと打濕りたるを。

宮が居間と謂ふまでにはあらねど、彼の箪笥手道具等置きたる小座敷あり。此には小燵の爐を切りて、用無き人の來ては迭に冬籠する所にも用ゐらる。彼は常に此に居て針仕事するなり。倦めば琴をも彈くなり。彼が手玩と見ゆる狗子柳のはや根を弛み、眞の打傾きたるが、鮟鱇切の水に埃を浮べて小机の傍に在り。庭に向へる肱懸窓の明きに敷紙を披げて、宮の膝の上に紅絹の引解を載せたれど、針は持たで、懶げに火燵に靠れたり。

彼は少しく食して多く眠らずなりてよりは、好みて此一間に入りて、深く物思ふなりけり。兩親は仔細を知れるにや、此様子をば怪まんともせで、唯彼の爲すまゝに委せたり。

此の日貫一は授業始の式のみにて早く歸來にけるが、下座敷には誰も見えで、火燵の間に宮の咳く聲して、後は靜に、我が歸りしを知らざるよと思ひければ、忍足に窺寄りぬ。襖の僅に啓きたる隙より差覗けば、宮は火燵に倚りて硝子障子を眺めては俯目になり、又胸痛きやうに仰ぎては太息吐きて、忽ち物の音を聞澄すが如く、美しき目を瞪るは、何をか思凝すなるべし。人の窺ふと知らねば、彼は口も訴ふるばかりに心の苦悶を其狀に顯して憚らざるなり。

貫一は異みつゝも息を潜めて、猶彼の爲んやうを見んとしたり。宮は少時ありて火燵に入りけるが、遂に櫓に打俯しぬ。

柱に身を倚せて、斜に内を窺ひつゝ貫一は眉を顰めて思惑へり。

彼は如何なる事ありて然ばかり案じ煩ふならん。然ばかり案じ煩ふべき事を如何なれば我に明さゞるならん。その故のあるべく覺えざると與に、案じ煩ふ事のあるべきをも彼は信じ得ざるなりけり。

恁く又案じ煩へる彼の面も自ら俯きぬ。問はずして知るべきにあらずと思定めて、再び内を差覗きけるに、宮は猶打俯して居たり、何時か落ちけむ、蒔繪の櫛の零れたるも知らで。

人の氣配に驚きて宮の振仰ぐ時、貫一は既に其傍に在り。彼は慌てゝ思頽るゝ氣色を蔽はんとしたるが如し。

「あゝ、吃驚した。何時御歸んなすつて。」

「今歸つた。」

「然う。些も知らなかつた。」

宮はおのれの顏の頬に眺めらるゝを眩ゆがりて、

「何を那様に視るの、可厭、私は。」

然れども彼は猶目を放たず、宮は故と打背きて、裁片畳の内を撈せり。

「宮さん、お前さん如何したの。えゝ、何處か不快のかい。」

「何ともないのよ。何故？」

恁く言ひつゝ忩急に撈せり。貫一は帽を冠りたるまゝ火燵に片肱掛けて、斜に彼の顔を見遣りつゝ、

「だから僕は始終水臭いと言ふんだ。然う言へば、直に疑深いの、神經質だのと言ふけれど、それに違無いぢやないか。」

「だつて何ともありもしないものを……。」

「何ともないものが、惘然考へたり、太息を吐いたりして鬱いで居るものか。僕は先之から唐紙の外で立つて見て居たんだよ。病氣かい、心配でもあるのかい。言つて聞したつて可いぢやないか。」

宮は言ふ所を知らず、纔に膝の上なる紅絹を手弄るのみ。

「病氣なのかい。」

彼は僅に頭を掉りぬ。

「それぢや心配でもあるのかい。」

彼は仍頭を掉れば、

「ぢや如何したと云ふのさ。」

宮は唯胸の中を車輪などの廻るやうに覺ゆるのみにて、誠にも詐にも言を出すべき術を知らざりき。彼は犯せる罪の終に秘む能はざるを悟れる如き恐怖の爲に心慄けるなり。如何に答へんとさへ惑へるに、傍には貫一は益詰らんと待つよと思へば、身は搾らるゝやうに迫來る息の隙を、得も謂はれず冷かなる汗の流れ〳〵ぬ。

「それぢや如何したのだと言ふのに。」

貫一の聲音は漸く苛立ちぬ。彼は得言はぬを怪しと思へばなり。宮は驚きて不覺に言出せり。

「如何したのだか私にも解らないけれど、……私は此二三日如何したのだか……變に色々な事を考へて、何だか世の中が滿らなくつて、唯悲くなつて來るのよ。」

呆れたる貫一は瞬もせで耳を傾けぬ。

「人間と云ふものは今日恁して生きてゐても、何時死んで了ふか解らないのね。恁して居れば、可樂な事もある代に辛い事や、悲い事や、苦い事なんぞが有つて、二つ好い事は無し、考へれば考へるほど私は世の中が心細いわ。不圖然う思出したら、毎日那樣事ばかり考へて、可厭な心地になつて、自分でも如何か爲たのか知らんと思ふけれど、私病氣のやうに見えて？」

目を閉ぢて聽居し貫一は徐に瞼を開くと與に眉を顰めて、

「それは病氣だ！」

宮は打萎れて頭を垂れぬ。

「然し心配する事は無いさ、氣に爲ては可かんよ、可いかい。」

「えゝ、心配しはしません。」

異しく沈みたる其聲の寂しさを、如何に貫一は聽きたりしぞ。

「それは病氣の所爲だ、腦でも不良のだよ。那樣事を考へた日には、一日だつて笑つて暮せる日は有りはしない。固より世の中と云ふものは然う面白い義のものぢやないので、又人の身の上ほど解らないものは無い。其は其に違無いのだけれど、衆が皆那樣了簡を起して御覽な、世界中御寺ばかりになつて了ふ。儚いのが世の中と覺悟した上で、その儚い、滿らない中で切ては樂を求めやうとして、究竟我々が働いて居るのだ。考へて鬱いだ所で、滿らない世の中に儚い人間と生れて來た以上は、どうも今更爲方が無いぢやないか。だから、滿らない世の中を幾分か面白く暮さうと考へるより外は無いのさ。面白く暮すには、何か樂が無ければならない、一事憑と云ふ樂があつたら決して世の中は滿らんものではないよ。宮さんはそれでは樂と云ふものは無いのだね。此樂があればこそ生きてゐると思ふ程の樂は無いのだね。」

宮は美しき目を擧げて、求むる所あるが如く偷に男の顏を見たり。
「屹度無いのだね。」
彼は笑を含みぬ。然れども苦しげに見えたり。
「無い？」
宮の肩頭を捉りて貫一は此方に引向けんとすれば、爲すまゝに彼は緩く身を廻したれど、顏のみは可羞しく背けて居たり。
「さあ、無いのか、有るのかよ。」
肩に懸けたる手をば放さで連に搖るゝを、宮は銕の槌もて撃懲さるゝやうに覺えて、安き心もあらず、冷なる汗は又一時流出でぬ。
「是は怪しかちん！」
宮は危みつゝ彼の顏色を候ひぬ。常の如く戲るゝなるべし、其面は和ぎて一點の怒氣だにあらず、寧ろ辱頭には笑を包めるなり。
「僕などは一件大きな〳〵樂があるので、世の中が愉快で愉快で耐らんの。一日が經つて行くのが惜くて〳〵ね。僕は世の中が滿らない爲に其樂を拵へたのではなくて、其樂の爲に此世の中に活きて居るのだ。若し此世の中から其樂を取去つたら、世の中は無い！貫一といふ者も無い！

僕は其樂と生死を俱にするのだ。宮さん、可羨しいだらう！」

宮は忽ち全身の血の氷れるばかりの寒さに堪へかねて打顫ひしが、此の心の中を覺られじと思へば弱る力を勵して、

「可羨しいわ。」

「可羨しければ、お前さんの事だから分けてあげやう。」

「何卒。」

「えゝ、悉皆遣つて了へ！」

彼は外套の衣兜より一袋のボン〳〵を取出して火燵の上に置けば、餘力に袋の口は弛みて、紅白の玉は珊々と亂出でぬ。這は宮の最も好める菓子なり。

お宮の父鴫澤隆三は、貫一の父の恩義に酬ゐるために、孤獨の貫一を引取つて教育してゐるうちに、いつか二人を娶せようといふ默契が表面化され、貫一も宮もその積りでゐたのであり、貫一の同窓仲間でも、既定の事實として前途を祝福してゐたのだが、以上のことがあつてから、隆三が貫一を呼んで、宮が富山へ行くことについて、諒解を求めようとして、樣々に說得する。その時お宮は母親につれられて、既に富山に逢ふために熱海へ行つてゐたのである。

以下はお馴染の熱海海岸の場面である。この場面の貫一の吐き出す言々句々は、總て芝居の臺詞であ

つて、若い學生の言葉としてはちよつと受取りにくいやうな、苦勞をつんだ世間人的なものであるが、そこに作者の面目が躍如として出てゐる。それはやがて作者の人生哲學なのである。

打霞みたる空ながら、月の色は匂滴るゝやうにて、微白き海は縹緲として限を知らず、譬へば無邪氣なる夢を敷けるに似たり。寄せては返す波の音も眠げに怠りて、吹來る風は人を醉はしめんとす。打連れて此濱邊を逍遙せるは貫一と宮となりけり。

「僕は唯胸が一杯で、何も言ふことが出來ない。」

五歩六歩行きし後宮はやう〳〵言出でつ。

「堪忍して下さい。」

「何も今更謝ることは無いよ。一體今度の事は翁さん姨さんの意から出たのか、又はお前さんも得心であるのか、其を聞けば可いのだから。」

「…………。」

「此地へ來るまでは、僕は十分信じて居つた、お前さんに限つて那樣了簡のあるべき筈は無いと。實は信じるも信じないも有りはしない、夫婦の間で、知れ切つた話だ。

昨夜翁さんから悉しく話があつて、其上に頼むといふ御言だ。」

差含む涙に彼の聲は顫ひぬ。

「大恩を受けてゐる翁さん姨さんの事だから、頼むと言はれた日には、僕の體は火水の中へでも飛込まなければならないのだ。翁さん姨さんの頼なら、無論僕は火水の中へでも飛込む精神だ。火水の中へなら飛込むが、此頼ばかりは僕も聽くことは出來ないと思つた。火水の中へ飛込めと云ふよりは、もつと無理な、餘り無理な頼ではないかと、僕は濟まないけれど翁さんを恨らんでゐる。

而して、言ふ事も有らうに、此頼を聽いてくれゝば洋行さして遣るとお言ひのだ。い……い……いかに貫一は乞食士族の孤兒でも、女房を賣つた錢で洋行せうとは思はん！」

貫一は踏留りて海に向ひて泣けり。宮は此時始めて彼に寄添ひて、氣遣しげに其顏を差覗きぬ。

「堪忍して下さいよ、皆私が……何ぞ堪忍して下さい。」

貫一の手に縋りて、忽ち其肩に面を推當つると見れば、彼も泣音を洩すなりけり。波は漾々として遠く烟り、月は朧に一灣の眞砂を照して、空も汀も淡白き中に、立盡せる二人の姿は墨の滴りたるやうの影を作れり。

「それで僕は考へたのだ、是は一方には翁さんが僕を說いて、お前さんの方は姨さんが說得しやうと云ふので、無理に此處へ連出したに違無い。翁さんも姨さんの頼と有つて見れば、僕は不承

知を言ふことの出來ない身分だから、唯々と言つて聞いて居たけれど、宮さんは幾多でも剛情を張つて差支無いのだ。如何あつても可厭だとお前さんさへ言通せば、此縁談はそれで破れて了ふのだ。僕が傍に居ると智惠を付けて邪魔を爲ると思ふものだから、遠くへ連出して無理往生に納得させる計だなと考着くと、さあ心配で〳〵僕は昨夜は夜一夜寐はしない。那様事は萬々有るまいけれど、種々言はれる爲に可厭と言はれない義理になつて、若や承諾するやうな事があつては大變だと思つて、家は學校へ出る積で、僕はわざわざ樣子を見に來たのだ。

馬鹿な、馬鹿な！　貫一ほどの大馬鹿者が世界中を捜して何處に在る！　僕は是程自分が大馬鹿とは、二十五歳の今日まで知……知……知らなかつた。」

宮は可悲と可懼に襲はれて少しく聲さへ立てゝ泣きぬ。

憤を抑ふる貫一の呼吸は漸く亂れたり。

「宮さん、お前は好くも僕を欺いたね。」

宮は覺えず慄けり。

「病氣と云つて此へ來たのは、富山と逢ふ爲だらう。」

「まあ、其ばつかりは……。」

「おゝ、其ばつかりは？」

「餘り邪推が過ぎるわ、餘り酷いわ。何ぼ何でも餘り酷い事を。」

泣入る宮を尻目に挂けて、

「お前でも酷いと云ふ事を知つてゐるのかい、宮さん。是が酷いと云つて泣く程なら、大馬鹿者にされた貫一は……貫一は……貫一は血の涙を流しても足りは爲んよ。

お前が得心せんものなら、此地へ來るに就いて僕に一言も言はんと云ふ法は無からう。家を出るのが突然で、其暇が無かつたなら、後から手紙を寄來すが可いぢやないか、出抜いて家を出るばかりか、何の便も爲ん處を見れば、始から富山と出會ふ手筈になつてゐたのだ。或は一所に來たのか知れはしない。宮さん、お前は奸婦だよ。姦通したも同じだよ。」

「那樣酷いことを、貫一さん、餘りだわ、餘りだわ。」

彼は正體も無く泣頽れつゝ、寄らんとするを貫一は突退けて、

「操を破れば奸婦ぢやあるまいか。」

「何時私が操を破つて？」

「幾許大馬鹿者の貫一でも、おのれの妻が操を破る傍に付いて見て居るものかい！　貫一と云ふ歷とした夫を持ちながら、其夫を出抜いて、餘所の男と湯治に來てゐたら、姦通して居ないといふ證據が何處に在る。」

「然う言はれて了ふと、私は何とも言へないけれど、富山さんと逢ふの、約束してあつたのと云ふのは、其は全く貫一さんの邪推よ。私等が此地に來てゐるのを聞いて、富山さんが後から尋ねて來たのだわ。」

「何で富山が後から尋ねて來たのだ。」

宮は其唇に釘打たれたるやうに再び言は出でざりき。貫一は、恁く詰責せる間に彼の必ず過を悔い、罪を詑びて、其身は未か命までも己の欲する儘ならんことを誓ふべしと信じたりしなり。設し信ぜざりけんも、心陰に望みたりしならん。如何にぞや、彼は露ばかりも然せる氣色は無くて、引けども朝顏の垣を離るまじき一圖の心變を、貫一はなか〳〵信じからず覺ゆるまでに呆れたり。

宮は我を棄てたるよ。我は我妻を人に奪はれたるよ。我命にも換へて最愛みし人は芥の如く我を惡めるよ。恨は彼の骨に徹し、憤は彼の胸を劈きて、幾と身も世も忘れたる貫一は、あはれ奸婦の肉を啖ひて、此熱腸を冷さんとも思へり。忽ち彼は頭腦の裂けんとするを覺えて、苦痛に得堪へずして尻居に僵れたり。

宮は見るより驚く遑もあらず、諸共に砂に塗れて搔抱けば、閉ぢたる眼より亂落つる涙に浸れる灰色の頰を、月の光は悲しげに彷徨ひて、迫れる息は凄しく波打つ胸の響を傳ふ。宮は彼の背

後より取縋り、抱緊め、撼動して、戰く聲を勵せば、勵す聲は更に戰きぬ。

「如何して、貫一さん、如何したのよう!」

貫一は力無げに宮の手を執れり。宮は涙に汚れたる男の顏をいと懇に拭ひたり。

「吁、宮さん恁して二人が一處に居るのも今夜限だ。お前が僕の介抱をしてくれるのも今夜限だ。お前が僕の介抱をしてくれるのも今夜限、僕がお前に物を言ふのも今夜限だよ。一月の十七日、宮さん、善く覺えてお置き。來年の今月今夜は、貫一は何處で此月を見るのだか! 再來年の今月今夜……十年後の今月今夜……一生を通して僕は今月今夜を忘れん、忘れるものか、死んでも僕は忘れんよ! 可いか、宮さん、一月の十七日だ。來年の今月今夜になつたらば、僕の涙で必ず月は曇らして見せるから、月が……月が……月が……曇つたらば、宮さん、貫一は何處かでお前を恨んで、今夜のやうに泣いて居ると思つてくれ。」

宮は挫ぐばかりに貫一に取着きて、物狂しう咽入りぬ。

「那樣悲い事をいはずに、ねえ貫一さん、私も考へた事があるのだから、それは腹も立たうけれど、どうぞ堪忍して、少し辛抱してゐて下さいな。私はお肚の中には言ひたい事が澤山あるのだけれど、餘り言難い事ばかりだから、口へは出さなけれど、唯一言いひたいのは、私は貴方の事は忘れはしないわ――私は生涯忘れはしないわ。」

「聞きたくない！　忘れんくらゐなら何故見棄てた。」
「だから、私は決して見棄てはしないわ。」
「何、見棄てない？　見棄てないものが嫁に歸くかい、馬鹿な！　二人の夫が有てるかい。」
「だから、私は考へてゐる事があるのだから、最少し辛抱して其を――私の心を見て下さいな。屹度貴方の事を忘れない證據を私は見せるわ。」
「え丶、狼狽へて行らんことを言ふな。食ふに窮つて身を賣らなければならんのぢやなし、何を苦んで嫁に歸くのだ。内には七千圓も財産が在つて、お前は其處の一人娘ぢやないか、而して婿まで極つてゐるのぢやないか、其婿も四五年の後には學士になると、末の見込も着いてゐるのだ。而もお前は其婿を生涯忘れないほどに思つて居ると云ふぢやないか。それに何の不足が有つて、無理にも嫁に歸かなければならんのだ。天下に是くらゐ理の解らん話が有らうか。如何考へても、嫁に歸くべき必要の無いものが、無理に算段をして嫁に歸かうと爲るには、必ず何ぞ事情が無ければ成らない。
婿が不足なのか、金持と緣を組みたいのか、主意は決して此二件の外にはあるまい。言つて聞かしてくれ。遠慮は要らない、さあ、さあ、宮さん、遠慮することは無いよ。一旦夫と定めたものを振捨てるくらゐの無遠慮なものが、這麼事に遠慮も何も要るものか。」

「私が惡いのだから堪忍して下さい。」

「それぢや婿が不足なのだね。」

「貫一さん、それは餘りだわ、那樣に疑ふのなら、私は甚麼事でもして、而して證據を見せるわ。」

「婿に不足は無い？　それぢや富山は財があるからか、して見ると此結婚は慾からだね、僕の離緣も慾からだね。で、此結婚はお前も承知をしたのだね、えゝ？

翁さん姨さんに迫られて、餘義無くお前も承知をしたのならば、僕の考で破談にする方は幾許もある。僕一人が惡者になれば、翁さん姨さんを始めお前の迷惑にもならずに打壞して了ふことは出來る、だからお前の心持を聞いた上で手段があるのだが、お前も適つて見る氣は有るのかい。

貫一の眼は其全身の力を聚めて、思惱める宮が顏を銳く打目戍れり。五步き、七步行き、十步を行けども、彼の答はあらざりき。貫一は空を仰ぎて太息したり。

「宜しい、もう宜しい。お前の心は能く解つた。」

今ははや言ふも益無ければ、重ねて口を開かざらんかと打按じつゝも、彼は亂るゝ胸を寬うせんが爲に、强ひて目を放ちて海の方を眺めたりしが、仍得堪へずやありけん、又言はんとして顧れば、宮は傍に在らずして、六七間後なる波打際に面を掩ひて泣けるなり。

可惱しげなる姿の月に照され、風に吹れて、あはれ消えもしぬべく立ち迷へるに、淼々たる海の端の白く頽れて波と打寄せたる、艶に哀を盡せる風情に、貫一は憤をも恨をも忘れて、少時は畫を看る如き心地もしつ。更に、此美しき人も今は我物ならずと思へば、なか〳〵夢かとも疑へり。

「夢だ〳〵、長い夢を見たのだ！」

彼は頭を低れて足の向ふまゝに汀の方へ進行きしが、泣く〳〵歩來れる宮と互に知らで行合ひたり。

「宮さん、何を泣くのだ、お前は些とも泣くことは無いぢやないか、空涙！」

「どうせ然うよ。」

殆ど聞得べからざるまでに其聲は涙に亂れたり。

「宮さんお前に限つては然云ふ了簡は無からうと、僕は自分を信じる程に信じてゐたが、それぢや依様お前の心は慾だね、財なのだね。如何に何でも餘り情無い、宮さん、お前はそれで自分に愛相は盡きないかい。好い出世をして、然ぞ榮耀も出來て、お前はそれで可からうけれど、財に見換へられて棄てられた僕の身になつて見るが可い。無念と謂はうか、口惜いと謂はうか、宮さん、僕はお前を刺殺して——驚くことは無い！——いつそ死んで了ひたいのだ。それを怺へてお

前を人に奪れるのを手出しも爲ずに見てゐる僕の心地は、甚麽だと思ふ、甚麽だと思ふよ！　自分さへ好ければ他は如何ならうともお前は管はんのかい。一體貫一はお前の何だよ。何だと思ふのだよ。鳴澤の家には厄介者の居候でも、お前の爲には夫ぢやないかい。僕はお前の男妾になつた覺は無いよ、宮さん、お前は貫一を玩弄物にしたのだね。平生お前の仕打が水臭い〳〵と思つたも道理だ、始から僕を一時の玩弄物の意で、本當の愛情は無かつたのだ。然うとは知らずに僕は自分の身よりもお前を愛して居た。お前の外には何の樂も無いほどにお前の事を思つて居た。其程までに思つてゐる貫一を、宮さん、お前は如何しても棄てる氣かい。

　それは無論金力の點では、僕と富山とは比較にはならない。彼方は屈指の財產家、僕は固より一介の書生だ。けれども善く宮さん考へて御覽、ねえ、人間の幸福ばかりは決して財で買へるものぢやないよ。幸福と財とは全く別物だよ。人の幸福の第一は家內の平和だ、家內の平和は何か、夫婦が互に深く愛すると云ふ外は無い。お前を深く愛する點では、富山如きが百人寄つても到底僕の十分の一だけも愛することは出來まい、富山が財產で誇るなら、僕は彼等の夢想することも出來ん此の愛情で爭つて見せる。夫婦の幸福は全く此の愛情の力、愛情が無ければ既に夫婦は無いのだ。

　己の身に換へてお前を思つてゐる程の愛情を有つてゐる貫一を棄てゝ、夫婦間の幸福には何の

益も無い、寧ろ害になり易い、その財産を目的に結婚を爲るのは、宮さん如何いふ心得なのだ。然し財といふものは人の心を迷はすもので、智者の學者の豪傑のと、千萬人に勝れた立派な男子さへ、財の爲には隨分陋い事も爲るのだ。其を考へれば、お前が偶然氣の變つたのも、或は無理も無いのだらう、からして僕は其は咎めない。但もう一遍、宮さん善く考へて御覽な、其の財が――富山の財産がお前の夫婦間に何程の效力があるのかと謂ふことを。

雀が米を食ふのは僅十粒か二十粒だ、俵で置いてあつたつて、一度に一俵食へるものぢやない、僕は鴫澤の財産を讓つてもらはんでも、十粒か二十粒の米に事を缺いて、お前に饑い思を爲せるやうな、那樣意氣地の無い男でもない。若し間違つて、其の十粒か二十粒の工面が出來なかつたら、僕は自分は食はんでも、決してお前に不自由は爲せん。宮さん、僕は是……是程までにお前の事を思つてゐる!」

貫一は雫するを拂ひて、

「お前が富山へ嫁く、それは立派な生活をして、榮耀も出來やうし、樂も出來やう、けれども那箇の財産は決して息子の嫁の爲に蓄さうとして作られた財産ではない、と云ふ事をお前考へなければならんよ。愛情の無い夫婦の間に、立派な生活が何だ! 榮耀が何だ! 世間には、馬車に乘つて心配さうな靑い顏をして、議會へ招れて行く人もあれば、自分の妻子を車に載せて、其

を自分が挽いて花見に出掛ける車夫もある。富山へ嫁けば、家内も多ければ人出入も、劇しゝ、從つて氣兼も苦勞も一通の事ぢやなからう。其中へ入つて、氣を傷めながら愛しても居らん夫を持つて、それでお前は何を樂に生きてゐるのだ。然して勸めて居れば、末には那の財産がお前の物になるのかい。富山の奥様と云へば立派かも知れんけれど、食ふ所は今の雀の十粒か二十粒に過ぎんのぢやないか。設んば那の財産がお前の自由になるとした所で、女の身に何十萬と云ふ金が如何なる、何十萬の金を女の身で面白く費へるかい、雀に一俵の米を一度に食へと云ふやうなものぢやないか。男を持たなければ女の身は立てないものなら、一生の苦樂他人に頼るで、女を寶とするのは其夫ではないか。何百萬圓の財が有らうと、其夫が寶と爲るに足らんものであつたら、女の心細さは、なか／＼車に載せて花見に連れられる車夫の女房には及ばんぢやあるまいか。

聞けば彼富山の父と云ふものは、内に二人外に三人も妾を置いてゐると云ふ話だ。財の有る者は大方那樣眞似をして、妻は些の床の置物にされて、謂はゞ棄てられて居るのだ。棄てられて居ながら其愛されて居る妾よりは、責任も重く、苦勞も多く、苦ばかりで樂は無いと謂つて可い。お前の嫁く唯繼だつて、固より所望でお前を迎ふのだから、當座は隨分愛しも爲るだらうが、其が長く續くものか、財が有るから好きな眞似も出來る、他の樂に氣が移つて、直にお前の戀は冷

されて了ふのは判つて居る。其時になつてのお前の心地を考へて御覧、那の富山の財産が其苦を拯ふかい。家に澤山の財が在れば、夫に棄てられて床の置物になつて居ても、お前はそれで樂かい、滿足かい。

　僕が人にお前を奪られる無念は謂ふまでも無いけれど、三年の後のお前の後悔が目に見えて、心變をした憎いお前ぢやあるけれど、猶且可哀さうでならんから、僕は眞實で言ふのだ。

　僕に飽きて富山に惚れてお前が嫁くのなら、僕は未練らしく何も言はんけれど、宮さん、お前は唯立派な所へ嫁くといふ其ばかりに迷はされて居るのだから、其は過つてゐる、其は實に過つてゐる。愛情の無い結婚は究竟自他の後悔だよ。今夜此場のお前の分別一つで、お前の一生の苦樂は定るのだから、宮さん、お前も自分の身が大事と思ふなら、又貫一も不便だと思つて、頼む！　頼むから、もう一度分別を爲直してくれないか。

　七千圓の財産と貫一が學士とは、二人の幸福を保つには十分だよ。今でさへも隨分二人は幸福ではないか、男の僕でさへ、お前が在れば富山の財産などを可羨いとは、更に思はんのに、宮さん、お前は如何したのだ！　僕を忘れたのかい、僕を可愛くは思はんのかい。」

　彼は危きを拯はんとする如く犇と宮に取着きて、匂滴るゝ頸元に沸ゆる涙を濺ぎつゝ、蘆の枯葉の風に揉るゝやうに身を顫せり。宮も離れじと抱緊めて諸共に顫ひつゝ、貫一が臂を咬みて咽

泣に泣けり。

「嗚呼、私は如何したら可からう！　若し私が彼方へ嫁つたら、貫一さんは如何するの、それを聞かして下さいな。」

木を裂く如く貫一は宮を突放して、

「それぢや斷然お前は嫁く氣だね！　是迄に僕が言つても聽いてくれんのだね。ちえゝ、腸の腐つた女！　姦婦！」

其聲と與に貫一は脚を擧げて宮の弱腰を礑と踢たり。地響して横樣に轉びしが、なかなか聲も立てず苦痛を忍びて、彼はそのまゝ砂の上に泣伏したり。貫一は猛獸などを撃ちたるやうに、彼の身動も得爲ず弱々と僵れたるを、なほ憎さげに見遣りつゝ、

「宮、おのれ、おのれ姦婦、やい！　貴樣のな、心變をしたばかりに間貫一の男一匹はな、失望の極發狂して、大事の一生を誤つて了ふのだ。學問も何も最う廢だ。此恨の爲に貫一は生きながら悪魔になつて、貴樣のやうな畜生の肉を啖つて遣る覺悟だ。富山の令……令夫……令夫人！　もう一生お目には掛らんから、其顏を擧げて、眞人間で居る内の貫一の面を好く見て置かないかい。長々の御恩に預つた翁さん姨さんには一目會つて段々の御禮を申上げなければ濟まんのでありますけれど、仔細あつて貫一は此儘長の御暇を致しますから、隨分お達者で御機嫌よろしう

……宮さん、お前から好く然う言つておくれ、よ、若し貫一は如何したとお訊ねなすつたら、あの大馬鹿者は一月十七日の晩に氣が違つて、熱海の濱邊から行方知れずになつて了つたと……。」

宮は矢庭に蹶起きて、立たんと爲れば脚の痛に脆くも倒れて効無きを、漸く這寄りて貫一の脚に縋付き、聲と涙とを争ひて、

「貫一さん、ま……ま……待つて下さい。貴方これから何……何處へ行くのよ。」

貫一は有繋に驚けり、宮が衣の披けて雪可羞しく露せる膝頭は、夥しく血に染みて顫ふなりき。

「や、怪我をしたか。」

寄らんとするを宮は支へて、

「えゝ、這麼事は管はないから、貴方は何處へ行くのよ。話があるから今夜は一所に歸つて下さい、よう、貫一さん、後生だから。」

「話が有れば此で聞かう。」

「此ぢや私は可厭よ」

「えゝ、何の話があるものか。さあ此を放さないか。」

「私は放さない。」

「剛情張ると蹴飛すぞ。」

「蹴られても可いわ。」

貫一は力を極めて振断れば、宮は無殘に伏轉びぬ。

「貫一さん。」

貫一ははや幾間を急行きたり。宮は見るより必死と起上りて、脚の傷に幾度か仆れんとしつゝも後を慕ひて、

「貫一さん、それぢやもう留めないから、もう一度、もう一度……私は言遺した事がある。」

遂に倒れし宮は再び起つべき力も失せて、唯聲を賴に彼の名を呼ぶのみ。漸く朧になれる貫一が影の一散に岡を登るが見えぬ。宮は身悶して猶呼續けつ。旋て其の黑き影の岡の頂に立てるは、此方を目戍れるならんと、宮は聲の限に呼べば、男の聲も遙に來りぬ。

「宮さん！」

「あ、あ、あ、貫一さん！」

首を延べて眴せども、目を瞪りて眺むれども、聲せし後は黑き影の搔消す如く失せて、其かと思ひし木立の寂しげに動ず、波は悲しき音を寄せて、一月十七日の月は白く愁ひぬ。

宮は再び戀しき貫一の名を呼びたりき。

上編と中編との間には、四五年の時日が流れてゐるが、主人公の運命も亦一大變化があつて、彼は既に學友仲間からも鳴澤の家庭からも姿を消し、有名な高利貸し鰐淵某の手代となつて、暗中に飛躍しつつあるのである。その思ひ切つた行動を取るまでの徑路は省略されてゐるが、元來新聞の連載物なので、讀者の意表に出ようとしたものであらう。動機の方が可なり重要視されて詳しく描寫されて、以下は高利貸しになつてからの樣々の苦難と、餘りにも素直に悔恨したお宮が、だにのごとく附き纏ふ同業者の赤樫滿枝の謝罪しようとするのを、頑強にも徹頭徹尾排斥すると共に、眞實の自分を發見して、貫一に熱情にも一瞥をも與へない彼の強い性格が、幾多波瀾曲折につれて、描寫されてゐる譯である。

以下摘出したのは、兄弟のやうに親しくしてゐた荒尾讓介といふ、この芝居ではひどく大向ふ受けのする作中のヒイロが、參事官として地方へ赴任するために、同窓に送られて新橋驛を立つところだが、その中に高利貸しのために惱まされてゐる男も一人あつて、その頃有名な女アイスの美人赤樫滿枝の噂も出るのである。

作者は人目を憚つて竊かに荒尾の見送りに來た貫一の、變り果てた姿をこゝに點出してゐる。

以下摘出したのは、蔭ながら心ばかりの訣別を惜しんで、驛を出て來る貫一が、圖らず同業の滿枝に會つて、戀を打明けられる、これも見物受けのする一場面である。

柵の柱の下に在りて帽を揮りたりしは、荒尾が言の如く、四年の生死を詳悉にせざりし間貫一にぞありける。彼は親友の前に自の影を晦し、共の消息をさへ知らせざりしかど、陰ながら荒尾

が動静の概略を伺ふことを怠らざりき。這回其の參事官たる事も、午後四時發の列車にて赴任する事をも知るを得しかば、餘所ながら暇乞もし、二つには榮譽の錦を飾れる姿をも見んと思ひて、群集に紛れて此には來りしなりけり。

何の故に間は四年の音信を絕ち、又何の故に然しも懷に忘れざる舊友と相見て別を爲さゞりしか。彼が今の身の上を知らば、此の疑問は自ら解釋せらるべし。

柵の外に立ちて列車の行くを送りしは獨り間貫一のみにあらず、其許に聚ひし老若貴賤の男女は皆個々の心をもて、愁ふるもの、樂むもの、虞ふもの、或は何とも感ぜぬものなど、品變れども目的は一なり。數分時の混雜の後車の出づると與に、一人散り、二人散りて、彼の如く久しう立盡せるはあらざりき。旋て重き物など引くらんやうに彼の漸く踵を旋せし時には、推重るまでに柵際に聚ひし衆は殆ど散果てゝ、驛夫の三四人が箒を執りて場內を掃除せるのみ。

貫一は差含るゝ淚を拂ひて、獨り後れたるを驚きけん、遽に急ぎて、蓬萊橋口より出でんと、恰も石段際に寄る所を、誰とも知らで中等待合の內より聲を懸けぬ。

「間さん！」

慌てゝ彼の見向く途端に、

「些と。」と戶口より半身を示して、黃金の腕環の氣爽に燦ける手なる絹ハンカチイフに唇邊を

掩ひて、束髪の婦人の小腰を屈むるに會へり。艶なる面に得も謂はれず愛らしき笑をさへ浮べたり。

「や、赤樫さん！」

婦人の笑もて迎ふるには似ず、貫一は冷然として眉だに動かさず。

「好い所でお目に懸りましたこと。急にお話を致したい事が出來ましたので、まあ、些と此方へ。」

婦人は内に入れば、貫一も澁々跟いて入るに、長椅子に掛れば、止む無く其の側に座を占めたり。

「實は那の保險建築會社の小車梅の件なのでございますがね。」

彼は黒樗文絹の帶の間を捜りて金側時計を取出し、手早く收めつゝ、

「貴方どうせ御飯前で被在いませう。此では御話も出來ませんですから、何方へかお供を致しませう。」

紫根鹽瀬に消金の口金打ちたる手鞄を取直して、婦人はやをら起上りつ。迷惑は貫一が面に顯れたり。

「何方へ？」

「何方でも、私には解りませんですから貴方のお宜い所へ。」
「私にも解りませんな。」
「あら、那様事を仰有らずに、私は何方でも宜いのでございます。」
荒布革の横長なる手鞄を膝の上に搔抱きつゝ貫一の思案せるは、其の宜き方を擇ぶにあらで、倶に行くをば躊躇せるなり。
「まあ、何にしても出ませう。」
「然やう。」
貫一も今は是非無く婦人に従ひて待合所の出會頭に、入來る者ありて、其の足尖を挫げよと踏付けられぬ。驚き見れば長高き老紳士の目尻も異しく、滿枝の色香に惑ひて、是は失敬、意外の麁相をせるなりけり。彼は猶懲りずまに此の目覺しき美形の同伴をさへ暫く目送せり。
二人は停車場を出でゝ、指す方も無く新橋に向へり。
「本當に、貴方、何方へ參りませう。」
「私は何方でも。」
「貴方、何時までも那様事を言つて被在つては限がございませんから、好い加減に極めやうでは御座いませんか。」

「然やう。」
滿枝は彼の心進まざるを曉れども、勉めて吾意に從はしめんと念へば、然ばかりの無遇をも甘んじて、
「それでは、貴方、鰻鱺は上りますか。」
「鰻鱺？　遣りますよ。」
「鷄肉と何方が宜うございます。」
「何方でも。」
「餘り御挨拶ですね。」
「何爲ですか。」
此時貫一は始めて滿枝の面に眼を移せり。百の媚を含みて瞶へし彼の眸は、未だ言はずして既に其の言はんとせる半をば語盡したるべし。彼の爲人を知つて畜生と疎める貫一も、有繫に艷なりと思ふ心を制し得ざりき。滿枝、貝の如き前齒と隣れる金齒とを露して片笑みつゝ、
「まあ、何爲でも宜うございますから、それでは鷄肉に致しませうか、」
「それも可いでせう。」
三十間堀に出でゝ、二町ばかり來たる角を西に折れて、唯有る露地口に淸らなる門構して、光

澤消硝子の軒燈籠に鳥と標したる方に、人目には然ぞ解あるらしう二人は連立ちて入りぬ。いと奥まりて在りとも覺えぬ邊に六疊の隱座敷の板道傳に離れたる一間に案內されしも宜なり。

懼れたるにもあらず、困じたるにもあらねど、叉全く然にあらざるにもあらざらん氣色にて貫一の容さへ可愼げに默して控へたるは、恁る處に此の人と共にとは思懸けざる爲躰を、有繫に胸の安からぬなるべし。通し物は逸早く滿枝が好きに計ひて、少頃は言無き二人が中に置れたる莨盆は仔細らしう一炷の百和香を燻らせぬ。

「間さん、貴方どうぞお樂に。」

「はい、これが勝手で。」

「まあ、那樣事を有仰らずに、よう、どうぞ。」

「內に居つても私は此の通なのですから。」

「噓を有仰いまし。」

恁ても貫一は膝を崩さで、卷莨入を取出せしが、生憎一本の莨もあらざりければ、手を鳴さんとするを、滿枝は先んじて、

「お間に合せに之を召上りましな。」

麻蝦夷の御主殿持と與に薦むる筒の端より燒金の吸口は仄に輝けり。齒は黃金、帶留は黃金、

指環は黄金、腕環は黄金、時計は黄金、今又煙管は黄金にあらずや。黄金なる哉、金、金! 知る可し、其の心も金! と貫一は獨り可笑さに堪へざりき。

「いや、私は日本莨は一向可かんので。」

言ひも訖らぬ顔を滿枝は熟と視て、

「決して穢いのでは御座いませんけれど、つい心着きませんでした。」

懷紙を出して故とらしく其の吸口を拭へば、貫一も少しく慌てゝ、

「決して然云ふ譯ぢやありません、私は日本莨は用ゐんのですから。」

滿枝は再び彼の顔を眺めつ。

「貴方、嘘をお吐きなさるなら、もう少し物覺を善く遊ばせよ。」

「はあ?」

「先日鰐淵さんへ上つた節、貴方召上つて被在つたではございませんか。」

「はあ?」

「瓢簞のやうな恰好のお煙管で、而して羅宇の本に些と紙の卷いてございました。」

「あ!」と叫びし口は頓に塞がざりき。滿枝は仇無げに口を掩ひて笑へり。此の罰として貫一は直に三服の吸付莨を强ひられぬ。

左右する間に盃盤は陳ねられたれど、滿枝も貫一も三盃を過し得ぬ下戶なり。女は淸めし猪口を出して、

「貴方、お一盞。」

「可かんのです。」

「又那樣事を。」

「今度は實際。」

「それでは麥酒に致しませうか。」

「いや、酒は和洋とも可かんのですから、どうぞ御隨意に。」

酒には禮ありて、おのれ辭せんとならば、必ず他に侑めて酌せんとこそあるべきに、甚しい哉、彼の手を束ねて、御隨意にと會釋せるや、滿枝は心憎しとよりはなか〳〵に可笑しと思へり。

「私も一向不調法なのでございますよ。折角差上げたものですから、お一盞お受け下さいましな。」

貫一は止む無く其の一盞を受けたり。はや恁く酒になりけれども、滿枝が至急と言ひし用談に及ばざれば、

「時に小車梅の件と云ふのは甚麼事が起りましたな。」

「もうお一盞召上れ、それからお話を致しますから。まあ、お見事！　もうお一盞。」
彼は忽ち眉を攅めて、
「いや那様に。」
「それでは私が戴きませう、恐入りますがお酌を。」
「で、小車梅の件は？」
「其の件の外に未だお話があるのでございます。」
「大相有りますな。」
「酔はないと申上げ難い事なのですから、私少々酔ひますから、貴方。憚様ですが最一つお酌を。」
「酔つちや困ります。用事は酔はん内にお話し下さい。」
「今晩は私酔ふ意なのでございますもの。」
其の媚ある目の邊は漸く花櫻の色に染みて、心樂げに稍身を寛に取成したる風情は、實に匂など零れぬべく、熱しとて紺の絹精縷の被風を脱げば、羽織は無くて、粲然としたる紋御召の袷に黒樗文絹の丸帯、華麗に紅の入りたる友禅の帯揚して、鬢の後れの被る耳際を掻上ぐる左の手首には、早蕨を二筋寄せて蝶の宿れる形したる例の腕環の爽に晃き遍りぬ。常に可忌と思へる物を恁く明々地に見せつけられたる貫一は、得堪ふまじく苦りたる眉状して密に目を翦しつ。彼は女

の貴族的に装へるに反して、黒紬の紋付の羽織に藍千筋の秩父銘撰の袷着て、白縮緬の兵兒帶も新しからず。

彼を識れりし者は定めて見咎むべし、彼の面影は尠からず變りぬ。愛らしかりし處は皆失せて、四年に餘る悲酸と憂苦と相結びて常に解けざる色は、自から暗き陰を成して其面を蔽へり。撓むとも折るべからざる堅忍の氣は、沈鬱せる顏色の表に動けども、嘗て宮を見しやうの優しき光は再び其の眼に輝かずなりぬ。見ることの冷に、言ふことの謹めるは、彼が近來の特質にして、人は之が爲に狎るゝを憚れば、自も亦苟も親みを求めざるほどに、同業者は誰も〳〵偏人として彼を遠けぬ。焉んぞ知らん、貫一が心には、然しもの戀を失ひし身のいかで狂人たらざりしかを怪むなりけり。

彼は色を正して、滿枝が獨り興に乘じて盃を重ぬる躰を打目戍れり。

「もう一盞戴きませうか。」

笑を湛ふる眸は微醺に彩られて、更に別様の媚を加へぬ。

「もう止したが可いでせう。」

「貴方が止せと有仰るなら私は止します。」

「取て止せとは言ひません。」

「それぢや私醉ひますよ。」

答無かりければ、滿枝（みつえ）は手酌して其の半を傾けしが、見る〳〵頬の麗しく紅になれるを、彼は手もて掩ひつゝ、

「あゝ、醉ひましたこと。」

貫一は聞かざる爲して莨を燻らし居たり。

「間さん、……」

「何ですか。」

「私今晩は是非お話し申したいことがあるので御座いますが、貴方お聽き下さいますか。」

「それをお聞き申す爲に御同道したのぢやありませんか。」

滿枝は嘲むが如く微笑みて、

「私何だか醉つて居りますから、或は失禮（しつれい）なことを申上げるかも知れませんけれど、お氣に障へては困りますの。然し、御酒の上で申すのではございませんから、どうぞ其のお意（つもり）で、宜うございますか。」

「撞着して居るぢやありませんか。」

「まあ那樣に有仰らずに、高が女の申すことでございますから。」

こは事難しうなりぬべし。克はぬまでも多少は累を免れんと、貫一は手を拱きつゝ俯目になりて、力めて關らざらんやうに持成すを、滿枝は擦寄りて、

「これお一盞で後は決してお強ひ申しませんですから、是だけお受けなすつて下さいましな。」

貫一は些の言も出さで其の猪口を受けつ。

「これで私の願は屆きましたの。」

「易い願ですな。」と、あはや出でんとせし唇を結びて、貫一は纔に苦笑して止みぬ。

「間さん。」

「はい。」

「貴方失禮ながら、何でございますか、鰐淵さんの方に未だお長く被在るお意なのですか。然し、いづれ獨立あそばすので御座いませう。」

「勿論です。」

「而して。まづ何頃彼方と別にお成りあそばすお見込なのでございますの。」

「資本のやうなものが少しでも出來たらと思つて居ます。」

滿枝は忽ち聲を斂めて、物思はしげに差俯き、莨盆の縁をば弄べるやうに煙管もて刻を打ちて居たり。折しも電燈の光の遽に晦むに驚きて顏を擧れば、又舊の如く一間は明うなりぬ。彼は煙

管を捨てゝ猶暫し打案じたりしが、
「這麼事を申上げては甚だ失禮なのでございますけれど、何時まで彼方に被在るよりは、早く獨立あそばした方が宜いでは御座いませんか。もし明日にも然と云ふ御考で被在るならば、私……這麼事を申しては……烏滸がましいので御座いますが、大した事は出來ませんけれど、都合の出來るだけは御用達申して上げたいのでございますが、然う遊ばしませんか。」
意外に打れたる貫一は箸を扣へて女の顏を屹と視たり。
「然う遊ばせよ。」
「其は何云ふ譯ですか。」
實に貫一は答に窮せるたりき。
「譯ですか?」と滿枝は口籠りたりしが、
「別に申上げなくてもお察し下さいましな、私だつて何日までも赤樫に居たいことは無いぢやございませんか。然云ふ譯なのでございます。」
「全然解らんですな。」
「貴方、可うございますよ。」
可恨しげに滿枝は言を絕ちて、橫膝に莨を拈り居たり。

「失禮ですけれど、私はお先へ御飯を戴きます。」
貫一が飯櫃を引寄せんとするを、はたと抑へて、
「お給仕なれば私致します。」
「それは憚様です。」
滿枝は飯櫃を我が側に取寄せしが、茶椀を共に伏せて、彼方の壁際に推遣りたり。
「未だお早うございますよ、もうお一盞召上れ。」
「もう頭が痛くて克はんですから赦して下さい。腹が空いて居るのですから。」
「お餒い所を御飯を上げませんでは、然ぞお辛うございませう。」
「知れた事です。」
「然でございませう。それなら、此方で思つて居ることが全で先方へ通らなかつたら、餒いのに御飯を食べないのよりは夐に辛うございますよ。那様にお餒じければ御飯をお附け申しますから、貴方も只今の御返事をなすつて下さいましな。」
「返事と言はれたつて、有仰ることの主意が能く解らんですもの。」
「何為お了解になりませんの。」
責むるが如く男の顏を見遣れば、彼も亦詰るが如く見返しつ。

「解らんぢやありません か。親い御交際の間でもない私に資本を出して下さる。而して其の譯

は と云へば、貴方も彼處を出る。解らんぢやありませんか。どうか飯を下さいな。」

「解らないとは、貴方、お酷いぢやございませんか、ではお氣に召さないのでございますか。」

「氣に入らんと云ふ事は有りませんが、緣も無い貴方に金を出して戴く……。」

「あれ、其の事ではございませんてば。」

「どうも非常に腹が空いて來ました。」

「それとも貴方外にお約束でも遊ばした御方がお在なさるのでございますか。」

彼終に鋒鋩を露し來れるよと思へば、貫一は猶解せざる躰を作して、

「妙な事を聞きますね。」

と苦笑せしのみにて續く言もあらざるに、滿枝は圖を外されて、やゝ心惑へるなりけり。

「然云ふやうなお方がお在なさらなければ、……私貴方に御願があるのでございます。」

貫一も今は屹と胸を据ゑて、

「うむ、解りました。」

「あゝ、お了解になりまして?!」

嬉しと心に言へらんやうの氣色にて、彼は猪口に餘せし酒を一息に飲乾して、其の盃を銜と貫

一に差せり。

「又ですか。」

「是非！」

發(はずみ)に乘せられて貫一は思はず受ると齊しく盈々注れて、下にも置れず一口附くるを見たる滿枝が歡喜！

「其のお盃は淸めてございませんよ。」

一々底意ありて怱諸にすべからざる女の言を、彼はいと可煩しくて持餘せるなり。

「お了解になりましたら、どうぞ御返事を。」

「其の事なら、どうぞ是限にして下さい。」

僅に慿く言ひ放ちて貫一は嚴かに沈默しつ。滿枝(みつえ)も有繫(さすが)に醉を冷して、彼の氣色を候ひたりしに、例の言寡なる男の次いでは言はざれば、

「私も這麼可耻しい事を、一旦申上げたからには、此儘では濟されません。」

貫一は緩かに頷けり。

「女の口から慿云ふ事を言出しますのは能々の事でございますから、其に對する丈の理由を有仰つて、どうぞ十分に私が得心の參るやうにお話し下さいましな、私座興で這麼事を申したので

はございませんから。」

「御尤です。私のやうな者でも那様に言つて下さると思へば、決して嬉くない事はありません。ですから、其の御親切に對して裹まず自分の考量をお話し申します。けれど、私は御承知の偏屈者でありますから、衆とは大きに考量が違つて居ります。

第一私は一生妻といふ者は決して持たん覺悟なので、御承知か知りませんが、元私は書生でありました、それが中途から學問を罷めて、此商賣を始めたのは、放蕩で遣損つたのでもなければ、敢て食窮めた譯でも有りませんので。書生が可厭さに商賣を遣らうと云ふのなら、未だ外に幾多も好い商賣は有りますさ、何を苦んで這麼極惡非道な、白日盜を爲すと謂はうか、病人の喉口を干すと謂はうか、命よりは大事な人の名譽を殺して、其の金錢を奪取る高利貸などを擇むものですか。」

聽居る滿枝は益す醉を冷されぬ。

「不正な家業と謂ふよりは、もう惡事ですな。それを私が今日始めて知つたのではない、知つて身を墮したのは、私は當時敵手を殺して自分も死にたかつたくらゐ無念極る失望をした事があつたからです。其の失望と云ふのは、私が人を頼にして居つた事があつて、其の人達も頼れなければならん義理合になつて居つたのを、不圖した慾に誘れて、約束は違へる、義理は捨てる、而

して私は見事に賣られたのです。」

火影を避けんとしたる彼の目の中の遽に耀けるは、なほ新なる痛恨の涙の浮べるなりけり。

「實に賴少い世の中で、其の義理も人情も忘れて、罪も無い私の賣られたのも、原はと云へば、金錢からです。假初にも一匹の男子たる者が、金錢の爲に見易へられたかと思へば、其の無念といふものは、私は一……一……一生忘れられんです。

輕薄でなければ、詐、詐でなければ利慾、愛相の盡きた世の中です。それほど可厭な世の中なら、何爲一思に死んで了はんか、と或は御不審かも知れん。私は死にたいにも、其の無念が障になつて死切れんのです。賣られた人達を苦めるやうな那樣復讐などは爲たくはありません、唯自分だけで可いから、一旦受けた恨！　それだけは屹と霽さなければ措かん精神。片時でも其の恨を忘れることの出來ん胸中といふものは、我ながら然う思ひますが、全で發狂して居るやうですな。それで、高利貸のやうな殘刻の甚しい、殆ど人を殺す程の度胸を要する事を毎日扱つて、而して感情を暴して居なければ迚も堪へられんので、發狂者には適當の商賣です。そこで、金錢ゆゑに賣られもすれば、辱められもした、金錢の無いのも謂はゞ無念の一つです。其の金錢が有つたら何とでも恨が霽されやうか、と其を樂に義理も人情も捨てゝ掛つて、今では名譽も色戀も無く、金錢より外には何の望も持たんのです。又考へて見ると、憖ひ人などを信じるよりは、金錢

を信じた方が間違が無い。人間よりは金錢の方が負か頼になりますよ、頼にならんのは人の心です！

先恁云ふ考で此の商賣に入つたのでありますから、實を申せば、貴方の貸して遣らうと有仰る資本は欲いが、人間の貴方には用が無いのです。」

彼は仰ぎて高笑しつゝも、其の面は痛く激したり。

滿枝は彼の言の決して譌ならざるべきを信じたり。彼の偏屈なる、實に然るべき所見を懷けるも怪むには足らずと思へるなり。然れども、彼は未だ戀の甘きを知らざるが故に、心狹くも此の面白き世に偏屈の扉を閉ぢて、詐と輕薄と利欲との中に詐と輕薄と利欲との外なる樂あるを曉らざるならん。旋て我夫を教へん、と滿枝は輙く望を失はざるなりき。

「では何でございますか、私の心も依樣頼にならないとお疑ひ遊ばすのでございますか。」

「疑ふ、疑はんと云ふのは二の次で、私は其の失望以來此の世の中が嫌で、總ての人間を好まんのですから。」

「それでは誠も〳〵――命懸けて貴方を思ふ者がございましても？」

「勿論！　別して惚れたの、思ふのと云ふ事は大嫌です。」

「あの、命を懸けて慕つて居るといふのがお了解になりましても？」

「高利貸の目には涙は無いですよ。」
今は取付く島も無くて、滿枝は暫し惘然として居たり。
「どうぞ御飯を頂戴。」
打萎れつゝ滿枝は飯を盛りて出せり。
「これは恐入ります。」
彼は啖ふこと傍に人無き若し。滿枝の面は薄紅になほ醉は有りながら、醉へる體も無くて、唯打案じたり。
「貴方も上りませんか。」
恁く會釋して貫一は三盃目を易へつ。良有りて、
「間さん、」と、呼れし時、彼は滿口に飯を啣みて遽に應ふる能はず、唯目を擧げて女の顏を見たるのみ。
「私も這麼事を口に出します迄には、もしや貴方が御承知の無い時には、と其等を考へまして、もう多時胸に疊んで居つたのでございます。それまで大事を取つて居りながら、恁う一も二も無く奇麗にお謝絶を受けては、私實に面目無くて……餘り悔しうございますわ。」
慌忙しくハンカチイフを取りて、片手に恨泣の目元を掩へり。

「面目無くて私此座が起れません、間さん、お察し下さいまし。」
貫一は冷々に見返りて、
「貴方一方を嫌つたと云ふ譯なら、然うかも知れませんけれど、私は總ての人間が嫌なのですから、どうぞ惡からず思つて下さい。貴方も御飯をお上んなさいな。おゝ！　而して小車梅の件に就いてのお話は？」
泣赤めたる目を拭ひて滿枝は答へず。
「何云ふお話ですか。」
「那樣事は奈何でも宜うございます。間さん、私奈何しても思切れませんから、然う思召して下さい。で、お可厭ならお可厭で宜うございますから、私が這麼に思つて居ることを、どうぞ何日までもお忘れなく……屹と覺えて被在いましよ。」
「承知しました。」
「もつと優しい言をお聞せ下さいましな。」
「私も覺えて居ます。」
「もつと何とか有仰りやうが有りさうなものではございませんか。」
「御志は決して忘れません。是なら宜いでせう。」

滿枝は物をも言はず衝と起ちしが、翩然と貫一の身近に寄添ひて、

「お忘れあそばすな。」と言ふさへに力籠りて、其の太股を絕か撮れば、貫一は不意の痛に覆らんとするを支へつゝ横樣に振拂ふを、滿枝は早くも身を開きて、知らず顏に手を打鳴して婢を呼ぶなりけり。

話題は一轉して、貫一とお宮とが、ゆくりなく氷川の田鶴見子爵の庭園で、ちよいと顏を合せる場面があるが、そこまで行くあひだの富裕な田鶴見子爵の身分や人物、宏大な邸宅や庭園の細描があり、その家令の畔柳が貨殖の道に長けてゐて、貫一の主人鰐淵に資金を融通してをり、一方また其の頃上流階級の道樂であつた寫眞の仲間として、お宮の良人の富山唯繼とも交際のあるところから、端なく此の屋敷のうちでお宮が貫一の姿を見ることになつてゐるのである。貫一がこゝへ來てゐることについても、作者は支那の小說をでも見るやうに、用意周到な段取りを立てゝゐて、偶然の機會のやうには思はせないだけの手を盡くしてゐる。それは又滿枝にも關したことで、その頃美人で腕つこきの滿枝とは、同業仲間であるところから、鰐淵が彼女に迷つてゐるらしいのを薄々感づいてゐる鰐淵の女房が、或る時良人の居所を突きとめようとして、いつも行きつけの田鶴見子爵邸內にある畔柳家令のところへ貫一を遣る。するとちやうど其の時、畔柳の令孃の靜緖に案內されて、邸內を見て歩いてゐるお宮の手にしてゐる望遠鏡のレンズに、貫一の姿が映るのである。その頃お宮は漸く初めから愛のなかつた富山の妻としての自分の不滿と、貫一を裏切つた悔恨とを、明かに感じ出してゐたので、この邂逅が強い衝動を與へ

たのは言ふまでもない。寫眞道樂の田鶴見子爵は、

萬足らざる無き閑日月をば、書に耽り、畫に樂み、彫刻を愛し、音樂に嘯き、近き頃よりは專ら寫眞に遊びて、齡三十四に迨べども頑として未だ娶らず。其の居るや、行くや、出づるや、入るや、常に飄然として、絕えて貴族的容儀を修めざれど、自らなる七萬石の品格は、面白う眉秀でゝ、鼻高く、眼爽に、形の淸に揚れるは、皎として玉樹の風前に臨めるとも謂ふべくや、御代々御美男にわたらせらるゝ。

といふやうな風格の男で、曾ては、

彼の地に留學の日、陸軍中佐なる人の娘と相愛して、末の契も堅く、月下の小舟に比翼の櫂を操り、スプレイの流を指して、此の水の絡に涸るゝ日はあらんとも、我が戀の焰の消ゆる時あらせじ、と互の誓詞に詐はあらざりけるを、歸りて母君に請ふことありしに、いと太う驚かれて、こは由々しき家の大事ぞや。畏くも我が田鶴見の家をばなでう禽獸の檻と爲すべき。あな、可疎しの吾子が心や

と言はれて、結婚することもできなかつた、失戀の人である。しかし此の人物は說明が詳しい割りに、筋の上では、その後何等の役割を演じてゐない。作者は又畔柳のことを世體の描寫とともに、面白く書いてゐる。

彼は元田鶴見の藩士にて、身柄は謂ふにも足らぬ足輕頭に過ぎざりしが、才覺ある者なりければ、廢藩の後出でゝ小役人を勤め、轉じて商社に事へ、一時或は地所家屋の賣買を周旋し、萬年靑を手掛け、米屋町に出入し、何れにしても世渡の茶を濁さずといふこと無かりしかど、皆思はしからで巡査を志願せしに、上官の首尾好く、竟には警部にまで取立てられしを、中ごろにして金是權と感ずる所ありて、奉職中蓄得たりし三百餘圓を元に高利貸を始め、世間の未だ此の種の惡手段に慣れざるに乘じて、或は欺き、或は嚇し、或は賺し、或は虐げ、纔に法網を潜り得て辛くも繩附たらざるの罪を犯し、積不善の五六千圓に達せし比、恰も好し、畔柳の後見を得たりしは、虎に翼を添へたる如く、現に彼の今運轉せる金額は殆ど數萬に上るとぞ聞えし。

畔柳は此手より穫るゝ利の半は、之を御殿の金庫に致し、半は之を懷にして、鰐淵も之に因りて利し、金は一にして其利を三にせる家令が六臂の働は、主公が不生產的なるを補ひて猶餘あ

りとも謂ふべくや。
鰐淵直行、此人ぞ間貫一が捨鉢の身を寄せて、牛頭馬頭の手代と頼まれ、五番町なる其の家に四年の今日まで寄寓せるなり。貫一は鰐淵の裏二階なる八疊の一間を與へられて、名は雇人なれども客分に遇はれ、手代となり、顧問となりて、主の重寶大方ならざれば、四年の久しきに彌れども主は彼を出すことを喜ばず、彼も亦家を構ふる必要無ければ、敢て留るを厭ふにもあらで、手代を勤むる傍若干の我が小額をも運轉して、自ら營む便もあれば、今慭ひに此を出でゝ瘦臂を張らんよりは、然るべき時節の到來を待つには如かじと分別せるなり。

さて案内役の靜緒が、望遠鏡をお宮に渡す時の臺詞が面白いから、それもちよつと拔いで見よう。これがこの舞台へ貫一を引出す作者の手段だからである。

箇は殿の佛蘭西より持ち歸られし名器なるを、漸く取出して薦めたり。形は一握の中に隱るゝばかりなれど、能く遠くを望み得る力は幾と神助と疑ふべく、筒は乳白色の玉もて造られ、僅に黄金細工の金具を施したるのみ。
旋て双眼鏡は貴婦人の手に在りて、措くを忘らるゝまでに愛でられけるが、目の及ばぬ遠き限

は南に北に眺盡されて、彼は此の鏡(グラス)の凡ならず精巧なるに驚ける狀なり。

「那處に遠く些の小楊枝ほどの棒が見えませう、那が旗なので、淺黃(あさぎ)に赤い柳條(しま)の模樣まで昭然(はつきり)見えて、而して旗竿(はたざを)の頭に鳶が宿(とま)つて居るのが手に取るやう。」

「おや、然やうでございますか。何でも此の位の眼鏡は西洋にも多度御座いませんやうで、招(せう)魂社(こんしや)のお祭の時などは、狼煙(のろし)の人形が能く見えるのでございます。私は之を見まする度に然やう思ひますのでございますが、恁云ふ風に話が聞えましたら然ぞ宜うございませう。餘り近くに見えますので、音や聲なんぞが致すかと想ふやうでございます。」

「音が聞えたら、彼方此方の音が一所に成つて紛雜になつて了ひませう。」

恁く言ひて齊しく笑へり。靜緒(しづを)は客遇に慣れたれば、可羞げに見えながらも話を求むるには拙からざりき。

「私は始めて之を見せて戴きました折、殿樣(とのさま)に全然(すつかり)騙(だま)されましたのでございます。鼻の前に見えるだらうと仰せられますから、然やうにございますと申上げますと、見えたら直に其の眼鏡を耳に推付けて見ろ、早くさへ耳に推付ければ、音でも聲でも聞へると仰せられますので……。」

淀無く語出づる靜緒の顏を見入りつゝ貴婦人(きふじん)は笑ましげに聽居たり。

「私は急いで推付けましたのでございます。」

「まあ！」
「何有、ちつとも聞えは致しませんのでございますから、然やう申上げますと、推付けやうが惡いと仰せられまして、御自身に遊ばして御覧なさるのでございますよ。何遍致して見ましたか知れませんのでございますけれど、何も聞えは致しませんので。然やう致しますると、お前では可かんと仰せられまして、御供を致して居りました御家來から、御親類方も御在で被居いましたが、皆爲つて御覧遊ばしました。」
貴婦人は怺へかねて失笑せり。
「あら、本當なのでございますよ。それで、未だ推付けやうが惡い、もつと早く〳〵と仰せられるものでございますから、御殿に居ります速水と申す者は餘り急ぎましたので、耳の此處を酷く打ちまして、血を出したのでございます。」
彼の歡べるを見るより靜緒は椅子を持來りて薦めし後、さて語り續くるやう。
「それで誰にも聞えないのでございます。然やう致しますると、殿様は御自身に遊ばして御覧で、なるほど聞えない。奈何したのか知らんなんて、それは、もう實にお眞面目なお顔で、故と御考へあそばして、佛蘭西に居た時には能く聞えたのだが、日本は氣候が違ふから、空氣の具合が眼鏡の度に合はない、それで聞えないのだらうと仰せられましたのを、皆本當に致して、一年

ばかり釣られて居りましたのでございます。

其の名器を手にし、其の耳にせし人を前にせる貴婦人の興を覺ゆることは、殿の惡作劇を親く睹たらんにも劣らざりき。

「殿様はお面白い方で被在いますから、隨分那樣事を遊ばしませうね。」

「それでも此の二三年はどうも御氣分がお勝れ遊ばしませんので、お險しいお顏をして被在るのでございます。」

書齋に掛けたる半身の畫像こそ其の病根なるべきを知れる貴婦人は、卒に空目遣して物の思はしげに、例の底寂しう打濕りて見えぬ。

良有りて彼は徐に立ち上りけるが、這回は更に邇きを眺めんとて双眼鏡を取り直してけり、彼方此方に差向くる倚の當所も無かりければ、偶ま唐棣葉のいと近きが鏡面に入り來て一面に蔓りぬ。粒々の實も珍しく、何の木かと其儘仔細に視たりしに、葉蔭を透きて人顏の見ゆるを、心とも無く眺めけるに、自から得忘れぬ面影に肖たる所あり。

貴婦人は差し向けたる手を緊と据ゑて、目を拭ふ間も忙しく、なほ心を留めて望みけるに、枝葉の遮りて左右に思ふまゝならず。漸く其の顏の明に見ゆる隙を求めけるが、別に相對へる人ありて、髮は黑けれども眞額の瑩々禿げたるは、先に挨拶に出でし家扶の畔柳にて、今一人なる其

人こそ、眉濃く、外眦の昂れる三十前後の男なりけれ。得忘れぬ面影に肖たりとは未や、得忘れぬ其の面影なりと、ゆくりなくも認めたる貴婦人の鏡持てる手は兢々と打顫ひぬ。

　次ぎに段々接近して、摺れ違ふところも出しておかう。

四邊に往來のあるにあらねば、二人の姿は忽ち彼の目に入りぬ。一人は畔柳の娘なりとは疾く知られけれど、顔打背けたる貴婦人の眩く着飾りたるは、子爵の客なるべしと纔に察せらるゝのみ。互に歩み寄りて一間ばかりに近けば、貫一は靜緒に向ひて慇懃に禮するを。宮は傍に能ふ限は身を窄めて、密に流眄を凝したり。其の面の色は慘として夕顔の花に宵月の映へる如く、其の冷なるべきも幾と相似たりと見えぬ。脚は打顫ひ／＼、胸は今にも裂けぬべく轟くを、覺られじとすれば猶打顫ひ、猶轟きて、貫一が面影の目に沁むばかり見ゆる外は、生きたりとも死にたりとも自ら分かぬ心地してき。

貫一は帽を打着て行過ぎんとする際に、ふと目鞘の走りて、館の賓なる貴婦人を一瞥せり。端無くも相互の面は合へり。宮なるよ！　姦婦なるよ！　銅臭の肉蒲團なるよ！　と且は驚き、且は憤り、はたと睨めて動かざる眼には見る／＼涙を湛へて、唯一攫にもせまほしく肉の躍るを

推恢へつゝ、竊かに齒咬をなしたり。可懷さと可耻さとを取集めたる宮が胸の内は何に喩へんやうも無く、あはれ、人目だにあらずば抱付きても思ふまゝに苛まれんをと、心のみは憧れながら身を如何とも爲難ければ、せめて此の誠は通ぜよかしと、見る目に思を籠むるより外はあらず。貫一は衝と踏出して始の如く足疾に過行けり。宮は附人に面を背けて、唇を咬みつゝ歩めり。

中篇の第五章あたりから、間貫一の受難に就いて、二つばかり面白い場面が出てゐる。其の一つは、鰐淵から高利を借りた人の連帶で苦んでゐる、遊佐といふ男の住居である。この男は日本郵航會社の社員で、友人の法學士蒲田と、同じ會社の貨物係にゐる風早とが非度く彼に同情してゐるので、或時この二人が遊佐の所へ來て酒を飲む。その途中撞球の自慢話をして酒落のめしてゐる一段がある、

「別に御馳走と云つては無いけれど、松茸の極新しいのと、製造元から貰つた黑麥酒が有るからね、鷄でも買つて、寛り話さうぢやないか」

遊佐が弄れる半月形の熏豚の鑵詰も、此の設にとて途に求めしなり。

「それは結構だ。然う泊か知れて見ると急ぐにも當らんから、どうだね、一ゲエム、君は此頃風早と對に成つたさうだが、長足の進歩ぢやないか。然し、どうも其の長足のちやうはてう(貂)足らず、續ぐにフロックを以つて爲るのぢやないかい。此頃は全然フロックが止つた？　はゝは

はは、それはお目出度いやうな御愁傷のやうな妙な次第だね。然し、フロツクが止つたのは明に一段の進境を示すものだ。まあ、それで大分話せるやうになりました。」
凮早は例の皺嗄聲して大笑を發せり。
「更に一段の進境を示すには、竪杖をして二寸三分クロオスを裂かなければ可けません。」
「三たび臂を折つて良醫となるさ。那から僕は竪杖の極意を悟つたのだ。」
「へゝへ、此頃の僕の後曳の手際も知らんで。」
之を聞きて、こたびは遊佐が笑へり。
「君の後曳も口ほどではないよ。此間那處の主翁が然う言つて居た、凮早さんが後曳を三度なさると、新しいチヨオクが半分失る……。」
「穿得て妙だ。」
「チヨオクの多少は業の巧拙に關せんよ。遊佐が無闇に杖を取易へるのだつて、決して見とも好くない。」
蒲田は手もて遽に制しつ。
「もう、それで可い。他の非を擧げるやうな者に業の出來た例が無い。悲い哉君達の球も蒲田に八十で廢止だね。」

「八十の事があるものか。」
「それでは幾箇で來るのだ。」
「八十五よ。」
「五とは情無い！　心の程も知られける哉だ。」
「何でも可いから一ゲエム行かう。」
「行かうとは何だ。願ひますと言ふものだ。」
語も訖らざるに彼は傍腹に不意の肱突を吃ひぬ。
「あ、痛！　然う強く撞くから毎々球が滾げ出すのだ。凮早の球は暴いから癇癪玉と謂ふのだし、遊佐のは馬鹿に柔いから蒟蒻玉。それで、二人の撞く所は雷公と蚊帳が捫捽して居るやうなものだ。」

といふやうな場面があつて、家へ歸つて來ると、下に間貫一が來て待つてゐる。そこで蒲田と凮早は元の同窓間貫一に會つて、談判したあげくには、活劇が演じられる。ここは芝居にもよく出る所だから一寸抜いてみる。

座敷には寠める遊佐と沈着きたる貫一と相對して、莨盆の火の消えんとすれば呼ばず、彼の傍

に茶托の上に休せたる茶碗は、嘗て肺病患者と知らで出せしを恐れて除物にしたりしをば、妻の取出して故と用ゐたるなり。

遊佐は憤を忍べる聲音にて、

「それは出來んよ。勿論朋友は幾多も有るけれど、書替の連帶を賴むやうな者は無いのだから。考へて見給へ、何ぼ朋友の中だと云つても外の事と違つて、借金の連帶は賴めないよ。然う無理を言つて困らせんでも可いぢやないか。」

貫一の聲は重きを曳くが如く底強く沈みたり。

「敢て困らせるの、何のと云ふ譯ではありません。利は下さらず、書替は出來んと、それでは私の方が立ちません。何方とも今日は是非願はんければならんのでございます。連帶と云つたところで、固より貴方がお引受けなさる精神なれば、外の迷惑にはならんのですから、些の名義を借りるだけの話、それくらゐの事は朋友の誼として、何方でも承諾なさりさうなものですがな。究竟名義だけあれば宜いので、私の方では十分貴方を信用して居るのですから、決して其の連帶者に掛らうなどゝは思はんのです。此で何とか一つ廉が付きませんと、私も主人に對して言譯がありません。利を受取る譯に行かなかつたから、書替をして來たと言へば、それで一先づ句切が付くのでありますから、どうぞ一つ然う願ひます。」

遊佐は答ふる所を知らざるなり。
「何方でも可うございます、御親友の内で一名。」
「可かんよ、それは到底可かんのだよ。」
「到底可かんでは私の方が濟みません。然う致すと、自然御名譽に關るやうな手段も取らんければなりません。」
「奈何せうと言ふのかね。」
「無論差押です。」
遊佐は强ひて微笑を含みけれど、胸には犇と應へて、はや八分の怯氣付きたるなり。彼は悶えて捩斷るばかりに其髭を拈り〳〵て止まず。
「三百圓やそこらの端金で貴方の御名譽を傷けて、後來御出世の妨碍にもなるやうな事を爲るのは、私の方でも決して可好くはないのです。けれども、此方の請求を容れて下さらなければ已むを得んので、實は事は穩便の方が双方の利益なのですから、更に御一考を願ひます。」
「それは、まあ、品に由つたら書替も爲んではないけれど、君の要求は元金の上に借用當時から今日迄の制規の利子が一ケ年分と、今度拂ふべき九十圓の一月分を加へて三百九十圓かね、其に對する三月分の天引が百十七圓强、某と合して五百圓の證書面に書替へろと云ふのだらう。又

そこが連帯債務と言ふだらうけれど、一文だつて自分が費つたのでもないのに、此間九十圓といふものを取られた上に、又改めて五百圓の證書を書される！　餘り馬鹿々々しくて話にならん。此方の身にも成つて少しは斟酌するが可いぢやないか。一文も費ひもせんで五百圓の證書が書けると想ふかい。」

空嘯きて貫一は笑へり。

「今更那様事を！」

遊佐は陰に切歯(はがみ)をなして其の横顔(よこがほ)を睨付けたり。

彼も遁れ難き義理に迫りて連帯の印捺きしより、不測の禍は起りて恁る憂き目を見るよと、太く己に懲りてければ、此際人に連帯(れんたい)を頼みて、同様の迷惑を懸くることもやと、斷じて貫一の請求を容れざりき。さりとて今一つの請求なる利子を即座に拂ふべき道もあらざれば、彼の進退は維に谷ると與に貫一も此場は一寸も去らじと構へたれば、遊佐は羂(わな)に係れる獲物の如く一分時毎に窮する外は無くて、今は唯身に受くべき謂無き責苦を受けて、恁までに惱まさるゝ不幸を恨み、繇りて一點の人情無き賤奴の虐待(ぎやくたい)を憤る胸の內は、前後も覺えず暴れ亂れて幾と引裂けんとするなり。

「第一今日は未だ催促(さいそく)に來る約束ぢやないのではないか。」

「先月の廿日にお拂ひ下さるべきのを、未だにお渡が無いのですから、何日でも御催促は出來るのです。」

遊佐は拳を握りて顫ひぬ。

「然云ふ怪しからん事を！　何の爲に延期料を取つた。」

「別に延期料と云つては受取りません。期限の日に參つたのにお拂が無い、因で空しく歸る其の日當及び俥代として下すつたから載きました。ですから、若し那に延期料と云ふ名を附けたらば、其の日の取立を延期する料とも謂ふべきでせう。」

「貴、貴樣は！　最初十圓だけ渡さうと言つたら、十圓では受取らん、利子の內金でなしに三日間の延期料としてなら受取る、と言つて持つて行つたぢやないか。それからつい此間又十圓……。」

「それは確に受取りました。が、今申す通り、無駄足を踏みました日當でありますから、其日が經過すれば、翌日から催促に參つても宜い譯なのです。まあ、過去つた事は措きまして……」

「措けんよ。過去りは爲んのだ。」

「今日は其事で上つたのではないのですから、今日の始末をお付け下さいまし。では奈何あつても書替は出來んと有仰るのですな。」

「出來ん！」

「で、金も下さらない？」

「無いから遣れん！」

貫一は目を側めて遊佐が面を熟と候へり。其の冷に鋭き眼の光は異しく彼を襲ひて、坐に熱する怒氣を忘れしめぬ。遊佐は忽ち吾に復れるやうに覺えて、身の危きに處るを省みたり。一時を快くする暴言も竟に曳れ者の小唄に過ぎざるを曉りて、手持無沙汰に鳴を鎭めつ。

「では、何頃御都合が出來るのですか。」

機を制して彼も劣らず和ぎぬ。

「さあ、十六日まで待つてくれたまへ。」

「晱と相違ございませんか。」

「十六日なら相違無い。」

「それでは十六日まで待ちますから……。」

「延期料かい。」

「まあ、お聞きなさいまし、約束手形を一枚お書き下さい。それなら宜うございませう。」

「宜い事も無い……。」

「不承を有仰る所は少しも有りはしません、其の代り何分か今日お遣し下さい。」
恁く言ひつゝ手鞄を開きて、約束手形の用紙を取出せり。
「錢は有りはせんよ。」
「僅少で宜しいので、手數料として。」
「又手數料か！　ぢや一圓も出さう。」
「日當、俥代なども入つて居るのですから五圓ばかり。」
「五圓なんと云ふ金圓は有りはせん。」
「それぢや、どうも、」
彼は遽に躊躇して、手形用紙を惜めるやうに拈るなりけり。
「えゝ、では三圓ばかり出さう、」
折から紙門の開きけるを弗と貫一の瞻ふる目前に、二人の紳士は徐々と入來りぬ。案内も無く恁る內證の席に立入りて、彼等の各心得顏なるは、必ず子細あるべしと思ひつゝ、彼は少しく座を動ぎて容を改めたり。紳士は上下に分れて二人が間に坐りければ、貫一は敬ひて禮を作せり。
「どうも曩から見たやうだ、見たやうだと思つて居たら、間君ぢやないか。」
「餘り樣子が變つたから別人かと思つた。久しく會ひませんな。」

貫一は愕然として二人の面を眺めたりしが、忽ち身の熱するを覺えて、其の誰なるやを憶出せるなり。

「是はお珍しい。何方かと思ひましたら、蒲田君に風早君。久しくお目に掛りませんでしたが、いつもお變無く。」

「其後は奈何ですか、何か當時は變つた商賣をお始めですな――儲りませう。」

貫一は打笑みて、

「儲りもしませんが、間違つて這麼事になつて了ひました。」

彼の毫も愧づる色無きを見て、二人は心陰に呆れぬ。侮りし風早も恁ては與し易からず思へるなるべし。

「儲けづくであるから何でも可いけれど、然し思切つた事を始めましたね。君の性質で能く此の家業が出來ると思つて感服しましたよ。」

「眞人間に出來る業ぢやありませんな。」

是實に眞人間にあらざる人の言なり。二人は此の破廉恥の老面皮を憎しと思へり。

「酷いね、それぢや君は眞人間でないやうだ。」

「私のやうな者が愁ひ人間の道を守つて居つたら、迚も此世の中は渡れんと悟りましたから、

學校を罷めると與に人間も罷めて了つて、此の商賣を始めましたので。」
「然し眞人間時分の朋友であつた僕等に恁して會つてゐる間だけは、依舊眞人間で居てもらひたいね。」
風早は親しげに放笑せり。
「然う〳〵、それ、那の時分浮名の聒しかつた、何とか云つたつけね、それ、君の所に居つた美人さ。」
貫一は知らざる爲してゐたり。
「おゝ〳〵那？　さあ、何とか云つたつけ。」
「ねえ、間君、何とか云つた。」
設し其の舊友の前に人間の面を赧めざる貫一も、是に到りて多少の心を動かさゞるを得ざりき。
「那様滿らん事を。」
「此頃は那の美人と一所ですか、可羨しい。」
「もう昔話は御免下さい。それでは遊佐さん、之に御印を願ひます。」
彼は矢立の筆を抽きて、手形用紙に金額を書入れんとするを、
「あゝ些と、その手形は何云ふのですね。」

貫一の簡單に其の始末を述ぶるを聽きて、

「成程御尤、そこで少しお話が爲たい。」

蒲田は姑く助太刀の口を噤みて、皺嗄聲の如何に辨ずるかを聽かんと、吃餘の葉巻を火入に挿して、威長高に腕組して控へたり。

「遊佐君の借財の件ですがね、那は奈何か特別の扱をして戴きたいのだ。君の方も營業なのだから、御迷惑は掛けませんさ、然し舊友の頼と思つて、少し勘辨をしてもらひたい。」

彼も答へず、是も少時は言はざりしが、

「奈何かね、君。」

「勘辨と申しますと？」

「究竟君の方に損の掛らん限は減けてもらひたいのだ。知つての通り、元此の借金は遊佐君が連帯であつて、實際頼れて印を貸したゞけの話であるのが、測らず倒れて來たといふ譯なので、それは貸主の目から見れば、那樣事は奈何でも可いのだから、取立てるものは取立てる、其處は能く解つて居る、からして今更其の愚痴を言ふのぢやない。然し朋友の側から遊佐君を見ると、取んだ災難に罹つたので、如何にも氣の毒な次第。ところで、圖らずも貸主が君と云ふので、轍鮒の水を得たる思で我々が中へ入つたのは、營業者の鰐淵として話を爲るのではなくて、舊友の

間として、實は無理な頼も聽いてもらひたいのさ。夙て話は聞いて居るが、那の三百圓に對しては、借主の遠林が從來三回に二百七十圓の利を拂つて在る。それから遊佐君の手で九十圓、合計三百六十圓と云ふものが既に入つて居るのでせう。して見ると、君の方には既に損は無いのだ、であるから、此の三百圓の元金だけを遊佐君の手で返せば可いといふ事にしてもらひたいのだ。」

貫一は冷笑せり。

「然すれば遊佐君は三百九十圓拂ふ譯だが、是が一文も費はずに空に出るのだから隨分辛い話、君の方は未だ〳〵利益になるのを此で見切るのだから是も辛い。因で辛さ競を爲るのだが、君の方は三百圓の物が六百六十圓になつてゐるのだから、立前にはなつてゐる、此方は三百九十圓の全損だから、此を一つ酌量してもらひたい、ねえ、特別の扱で。」

「全でお話にならない。」

秋の日は短しと謂はんやうに、貫一は手形用紙を取上げて、用捨無く約束の金額を書入れたり、一齊に彼の面を注視せし風早と蒲田との眼は、更に相合うて瞋れるを、再び彼方に差向けて、いとゞ嚴しく打目戍れり。

「どうか然云ふ事にしてくれたまへ。」

「それでは遊佐さん、之に御印を願ひませう。日限は十六日、宜うございますか。」

此の傍若無人の振舞に蒲田の怺へかねたる氣色なるを、風早は目授して、

「間君、まあ少し待つてくれたまへよ。恥を言はんければ解らんけれど、此の借金は遊佐君には荷が勝過ぎて居るので、利を入れるだけでも方が付かんのだから、長く之を背負つて居た日には、躰も一所に沈沒して了ふばかり、實に一身の浮沈に關る大事なので、僕等も非常に心配して居るやうなものゝ、力が足らんで如何とも手の着けやうが無い。對手が君であつたのが運の盡きざる所なのだ。舊友の僕等の難を拯ふと思つて、一つ賴を聽いてくれ給へ。全然損を掛けやうと云ふのぢやないのだから、決して然う無理な賴ぢやなからうと思ふのだが、奈何かね、君。」

「私は鰐淵の手代なのですから、然云ふお話は解りかねます。遊佐さん、では、今日はまあ三圓頂戴して之に御印を、どうぞお早く。」

遊佐は其の獨に計ひかねて覺束なげに頷くのみ、言はで忍びたりし蒲田の怒は此時衝くが如く、

「待ち給へと言ふに！　先から風早が口を酸くして賴んで居るのぢやないか、錢貰が門に立つたのぢやない、人に對するには禮と云ふものがある、可然き挨拶を然たまへ。」

「お話がお話だから可然き御挨拶の爲やうが無い。」

「默れ、間！　貴様の頭腦は錢勘定ばかりして居るので、人の言ふ事が解らんと見えるな。誰が其の話に可然挨拶を爲ろと言つた。友人に對する擧動が無禮だから節めと言つたのだ。高利貸

なら高利貸のやうに、身の程を省みて神妙にして居れ。盗人の兄弟分のやうな不正な營業をして居ながら、恁して舊友に會つたらば赧い顏の一つも爲ることか、世界漫遊でもして來たやうな見識で、貴樣は高利を貸すのを適れ名譽と心得てゐるのか。恥を恥とも思はんのみか、一枚の證文を鼻に懸けて我々を侮蔑した此の有樣を、荒尾讓介に見せて遣りたい！　貴樣のやうな畜生に生れ變つた奴を、荒尾は依樣昔の間貫一だと思つて、此間も我々と話して、貴樣の安否を苦にしてな、實の弟を殺したより、貴樣を失つた方が悲いと言つて鬱いで居たぞ。其の一言に對しても少しは良心の眠を覺せ！　眞人間の風早庫之助と蒲田鐵彌が中に入るからは決して迷惑を掛けるやうな事は爲んから、今日は順しく歸れ、歸れ。」

「受取るものを受取らなくては歸れもしません。貴下方がそれまで遊佐さんの件に就いて御心配下さいますなら、恁う爲すつて下さいませんか、左も右も此の約束手形は遊佐さんから戴きまして、此の方の形はそれで一先附くのですから、改めて三百圓の證書をお書き下さいまし、風早君と蒲田君の連帶にして。」

蒲田は此の手段を知るの經驗あるなり、

「うん、宜い。」

「では然う爲つて下さるか。」

「うん、宜い。」

「然う致せば又お話の付けやうもあります。」

「然し氣の毒だな、無利息、十個年賦は。」

「えゝ？　常談ぢやありません。」

有繋に彼の一本參りしを、蒲田は誇りがに嘲笑しつゝ、

「常談は措いて、いづれ四五日内に篤と話を付けるから、今日の所は、久しぶりで會つた僕等の顏を立てゝ、何も言はずに歸つてくれ給へな。」

「然云ふ無理を有仰るで、私の方も然るべき御挨拶が出來なくなるのです。既に遊佐さんも御承諾なのですから、此の手形はお貰ひ申して歸ります。未だ外へ廻るで急ぎますから、お話は後日寛り伺ひませう。遊佐さん、御印を願ひますよ。貴方御承諾なすつて置きながら今になつて遲々なすつては困ります。」

「疫病神が戶惑したやうに手形々々と煩い奴だ。俺が始末をして遣らうよ。」

彼は遊佐が前なる用紙を取りて、

「金壹百拾七圓……何だ、百拾七圓とは。」

「百十七圓？　九十圓だよ。」

「金壹百拾七圓と此通り書いてある。」
恁る事は能く知りながら彼は故と怪しむなりき。
「そんな筈は無い。」
貫一は彼等の騒ぐを尻目に掛けて、
「九十圓が元金、之に加へた二十七圓は天引の三割、是が高利(アイス)の定法(ちやうはふ)です。」
音もせざれど遊佐(ゆさ)が膽(きも)は潰れぬ。
「お……ど……ろ…… いたね！」
蒲田は物をも言はず件の手形を二つに引裂き、遊佐も風早(かざはや)も是はと見る間に、猶も引裂き〳〵引捩りて間が目先に投遣(なげや)りたり。彼は騒(さわ)げる色も無く、
「何を爲るのです。」
「始末をして遣つたのだ。」
「遊佐さん、それでは手形もお出し下さらんのですな。」
彼は間が非常手段を取らんとする、と心陰(こゝろひそか)に懼(おそれ)を作して、
「いや然ふ譯ぢやない……。」
蒲田は佗と膝を前めて、

「いや、然云ふ譯だ！」

彼の鬼臉なるをいと稚しと輕しめたるやうに、間は故と色を和げて、

「手形の始末は それで 付いたか知りませんが、貴方も折角中へ入つて下さるなら、最少し男らしい扱をなさいましな。私如き畜生とは違つて、貴方は立派な法學士、」

「おゝ俺が法學士なら奈何した。」

「名實が相副はんと謂ふのです。」

「生意氣な、もう一遍言つて見ろ。」

「何遍でも言ひます。學士なら學士のやうな所業を爲さい。」

蒲田が腕は電光の如く躍りて、猶言はんとせし貫一が胸先を諸摑に無圖と捉りたり。

「間、貴樣は……。」

捩向けたる彼の面を打目戍りて、

「取つて投げてくれやうと思ふほど憎い奴でも、恁して顔を見合せると、白い二本筋の帽を冠つて、煖爐の前に膝を並べた時分の姿が目に附いて、嗚呼、順しい間を、と力抜がして了ふ。貴樣これが人情だぞ。」

鷹に遭へる小鳥の如く身動も得爲で押付けられたる貫一を、風早は有繋に憫然と見遣りて、

「蒲田の言ふ通りだ。僕等も中學に居た頃の間と思つて、それは誓つて迷惑を掛けるやうな事は爲んから、君も友人の誼を思つて、二人の頼を聽いてくれ給へ。」

「さあ、間、奈何だ。」

「友人の誼は友人の誼、貸した金は貸した金で自から別問題……。」

彼は忽ち吭迫りて言ふを得ず、蒲田は稍強く緊めたるなり。

「さあ、もつと言へ、言つて見ろ。言つたら貴樣の呼吸が止るぞ。」

貫一は苦しさに堪へで振釋かんと掎けども、嘉納流の覺ある蒲田が力に敵しかねて、なか〳〵其の爲すに信せたる幾分の安きを頼むのみなりけり。遊佐は驚き、風早も心ならず、

「おい蒲田、可いかい、死にはしないか。」

「餘り、暴くするなよ。」

蒲田は哄然として大笑せり。

「恁なると金力よりは腕力だな。ねえ、どうしても是は水滸傳にある圖だらう。惟ふに、凡そ國利を護り、國權を保つには、國際公法などは實は糸瓜の皮、要は兵力よ。萬國の上には立法の君主が無ければ、國と國との曲直の爭は抑も誰の手で遺憾無く決せらるゝのだ。茲に唯一つ審判の機關がある、曰く戰！」

「もう釋してやれ、大分苦しさうだ。」
「强國にして辱められた例を聞かん、故に僕は外交の術も嘉納流よ。」
「餘り酷い目に遭せると、僕の方へ報つて來るから、もう舍してくれたまへな。」
他の言に手を弛めたれど、蒲田は未だ放ちも遣らず、
「さあ、間、返事は奈何だ。」
「吭を緊められても出す音は變りませんよ。間は金力には屈しても、腕力などに屈するものか。憎いと思ふなら此面を五百圓の紙幣束でお撲きなさい。」
「金貨ぢや可かんか。」
「金貨、結構です！」
「ぢや金貨だぞ！」
油斷せる貫一が左の高頰を平手打に絕か吃すれば、呀と兩手に痛を抑へて、少時は顏も得擧げざりき。蒲田はやう〳〵座に復りて、
「急には此奴歸らんね。いつそ此で酒を始めやうぢやないか、而して飲み且談ずると爲う。」
「さあ、それも可からう。」
獨り可からぬは遊佐なり。

「此で飲んぢや旨くないね。而して形が付かなければ、何時までだつて歸りはせんよ。酒が仕舞になつて是ばかり遣られたら猶困る。」

「宜い、歸去には僕が一所に引張つて好い處へ連れて行つて遣るから。ねえ、間、おい、間と言ふのに。」

「はい。」

「貴樣、妻君有るのか。おゝ、風早！」

と彼は橫手を拍ちて不意に叫べば、

「えゝ、吃驚する、何だ。」

「憶出した。間の許婚はお宮、お宮。」

「此頃は他と一所かい。鬼の女房に天女だけれど、今日ぢや大きに日濟などを貸して居るかも知れん。えゝ、貴樣、那樣事を爲しちや可かんよ。けれども高利貸などは、これで却つて女子には溫しいとね。間、然うかい。彼等の非義非通を働いて暴利を貪る所以の者は、依樣旨いものを食ひ、好い女を自由にして、好きな榮耀がして見たいと云ふ、唯それだけの目的より外は無いのだと謂ふが、然なのかね。我々から考へると、人情の忍ぶ可からざるを忍んで、經營慘憺と努める所は、何ぞ非常の目的があつて貨を殖へるやうだがな、譬へば、軍用金を聚めるとか、お家の

寶を質請するとか。單に己の慾を充さうばかりで、那麽思切つた殘刻な仕事が出來るものではないと想ふのだ。許多のガリ〳〵亡者は論外として、間貫一に於ては何ぞ目的が有るのだらう。這麽非常手段を遣るくらゐだから、必ず非常の目的が有つて存するのだらう。」

秋の日は忽ち黄昏れて、稍早けれど燈を入るゝと與に、用意の酒肴は順を逐ひて運び出されぬ。

「おつと、麥酒かい、頂戴。鍋は風早の方へ、貴方は宜しくお賴み申しますよ。うゝ、好い松茸だ、京でなくては恁は行かんよ――中が眞白で、庖丁が軋むやうでなくては。今年は不作だね瘠せてゐて、虫が多い、那の雨が障つたのさ。間、奈何だい、君の目的は。」

「唯貨が欲いのです。」

「で、其の貨を奈何する。」

「滿らん事を！　貨は奈何でもなるぢやありませんか。奈何でもなる貨だから欲い、其の欲い貨だから、恁して催促もするのです。さあ、遊佐さん、本當に奈何して下さるのです。」

「まあ、之を一盃飮んで、今日は機嫌好く歸つてくれ給へ。」

「私は酒は不可のです。」

「そら、お取次だ。」

「折角差したものだ。」

「全く不可のですから。」

差付けらるゝを推除くる機に、コップは脆くも蒲田の手を脱れば、莨盆の火入に抵りて發矢と割れたり。

「何を爲る！」

貫一も今は怺へかねて、

「奈何したと！」

やをら起たんと爲る所を、蒲田が力に胸板を衝れて、一耐もせず仰様に打僵けたり。蒲田は此の隙に彼の手鞄を奪ひて、中なる書類を手任に掴出せば、狂氣の如く駈寄る貫一、

「身分に障るぞ！」と組み付くを、利腕捉つて、

「默れ！」と捩伏せ、

「さあ、遊佐、其の中に君の證書が在るに違無いから、早く其奴を取つて了ひ給へ。」

之を聞きたる遊佐は色を變へぬ。風早も事の餘に暴なるを快しと爲ざるなりき。貫一は駭きて、撥返さんと右に左に身を揉むを、蹈跨りて捩揚げ捩揚げ、蒲田は聲を勵して、

「此期に及んで！　躊躇する所でないよ。早く、早く、早く！　風早、何を考へとる。さあ、遊佐、えゝ、何事も僕が引受けたから、管はず遣り給へ。證書を取つて了へば、後は細工はりう

り僕が心得て居るから、早く探したまへと言ふに。」

手を出しかねたる二人を睨廻して、蒲田はなか〳〵下に貫一の悶ゆるにも劣らず、獨り業を沸して効無き地蹈を蹈みてぞ居たる。

「それは餘り遣過ぎる、善くない、善くない。」

「善いも惡いもあるものか、僕が引受けたから管はんよ。遊佐、君の事ぢやないか、何を惘然して居るのだ。」

彼は幾と慄きて、寧ろ蒲田が腕立の紳士にあるまじきを諫めんとも思へるなり。腰弱き彼等の與するに足らざるを憤れる蒲田は、寶の山に入りながら手を空うする無念さに、貫一が手も折れよとばかり捩上れば、

「あゝ、待つた〳〵。蒲田君、待つてくれ、何とか話を付けるから。」

「えゝ聒しい。君等のやうな意氣地無しはもう頼まん。僕が獨で遣つて見せるから、後學の爲に能く見て置き給へ。」

恁く言捨てゝ蒲田は片手して己の帶を解かんとすれば、時計の紐の生憎に絡るを、躁りに躁りて引放さんとす。

「獨で奈何するのだよ。」

彼は有繫に見かねて手を假さんと寄り進みつ。
「奈何するものか、此奴を蹈縛つて置いて、僕が證書を探すわ。」
「まあ、餘り穩でないから、それだけは思ひ止り給へ。今間も話を付ると言つたから。」
「何か此奴の言ふ事が！」
間は苦しき聲を搾りて、
「屹と話を付けるから、此手を釋してくれ給へ。」
「屹と話を付けるな――此方の要求を容れるか。」
「容れる。」
詐とは知れど、二人の同意せざるを見て、蒲田も然まではと力挫けて、竟に貫一を放ちてけり。

これは第一の受難で、第二の受難は、滿枝に附纏はれて或晩四谷見附邊を歩いてゐると、暗闇の中から躍りでた狼藉もの〻ために、さん〴〵打ちのめされる、弓の折れやステッキのやうなもので、厭といふほどやられる、これも蒲田や風早の仕業らしい。

貫一は病室の人となるのである。

すると、この病室で又面白い芝居が初まる。それはお宮の父鴫澤隆一が見舞がてらやつて來て、元々

貫一を愛してゐるのだし、貫一のためにも惡しかれと思つてやつたことではないのだが、飛んだことになつたものだといつて、色々いひ宥めて、和解しやうとするのである。强情な貫一は面を背けて取り合はうとはしない。鳴澤は仕方なしに立ち去る、赤樫滿枝が丁度其の場に居合せて、何かと貫一の世話をやいてゐる、貫一はこれにも惱まされてゐる。鳴澤が去つたあと間もなく滿枝に氣をもつてゐる鰐淵老人が、病室を訪れて、滿枝が女房氣取りで病人の看病をしてゐるのをみて嫉妬するのであるが、これも又貫一のためには一つの煩ひである。

この後は、これも鰐淵のために窘められて、一粒種の伜を監獄に入れられて了つた不運な狂女のために、鰐淵の家は燒かれて、鰐淵夫婦は非業の最後を遂げて了ふ。といふ一場面がある。これは貫一が病室に呻吟してゐた間のことで、この狂女の火を附けるまでの描寫や、氣が狂ふまでの深酷な事件が精緻な筆で描かれてゐるが、その燒後へ病室から出て來た貫一と、不斷父の商賣や、高利貸としての父の社會觀人生哲學といつたものと、兎角相容れないものをもつてゐる鰐淵の息子の直道とが、相會つて鰐淵の運命に相抱いて泣く場面も相當の芝居である。

作者はこの金色夜叉といふ作品で、相當强烈な主觀を表現してゐるが、同時に又客觀的な寛容もあつて、人非人の鰐淵にも全體觀としての同情を惜まないものゝあるのは注意すべき點である。

これからが續篇に入るのである。卷頭に出てゐるのは、これも芝居や映畫に仕組まれて、大衆にお馴染の深い芝山內で、荒尾讓介とお宮と邂逅の一場面である。

時を錢なりとして之を換算せば、一秒を一毛に見積りて、壹人前の睡量凡そ八時間を除きたる一日の正味十六時間は、實に金五圓七拾六錢に相當す。之を三百六十五日の一年に合計すれば、金貳千壹百〇貳圓四拾錢の巨額に上るにあらずや。然れば玆に廿七日と推薄りたる歳末の市中は物情恟々として、世界絶滅の期の終に宣告せられたらんも恁やとばかりに、坐りし人は出でゝ歩み、歩みし人は走りて過ぎ、走りし人は足も空に、合ふさ離るさの氣立ましく、肩相摩しては傷き、轂相撃ちては碎けぬべきをも覺えざるは、心々に今を限と慌て騷ぐ事ありて、不狂人も狂せるなり。彼等は皆過去の十一箇月を虚に送りて、一秒の塵の積める貳千餘圓の大金を何處にか振落し、後悔の尾に立ちて今更の血眼を瞪き、草を分け、瓦を撥しても、其の行方を尋ねんと爲るにあらざるなし。恁る間にも常は止一毛に値する一秒の壹錢乃至拾錢にも暴騰せる貴々重々の時は、速射砲を連發にするが如く飛過るにぞ、彼等の恐慌は更に意言も及ばざるなる。

其の平生に怠無かりし天は、又今日に何の變易もあらず、悠々として蒼く、昭々として闊く、浩々として靜に、而も確然として其の覆ふべきを覆ひ、終日北の風を下し、夕付く日の影を耀して、師走の塵の表に高く澄めり。見遍せば兩行の門飾は一様に枝葉の末廣く壽山の翠を交し、十町の軒端に續く注連繩は、福海の霞揺曳して、繁華を添ふる春待つ景色は、轉た舊り行く歳の魂を驚かす。

彼の人々の貳千餘圓を失ひて馳違ふ中を、梅提げて通るは誰が子、獵銃擔げ行くは誰が子、妓と車を同うするは誰が子、啣楊枝して好き衣着たるは誰が子。或は二頭立の馬車を驅る者、結納の品々担する者、雜誌など讀みもて行く者、五人の子を數珠繋にして勸工場に入る者、彼等は各若干の得たる所有りて、如此く自ら足れりと爲るにかあらん。此等の少く失へる者は喜び、彼等の多く失へる輩は憂ひ、又希には全く失はざりし人の樂めるも、皆內には齷齪として、盈てるは虧けじ、虧けるは盈たんと、孰か其の求むる所に急ならざるはあらず、人の世は三の朝より花の晝、月の夕にも其の思の外はあらざれど、勇怯は死地に入りて始めて明なる年の關を、物の數とも爲ざらんほどを目にも見よとや、空臑の酔を踏み、鐵鞭を曳き、一巻のブツクを懷にして、嘉平治平の袴の焼海苔を綴れる如きを穿ち、フラネルの浴衣の洗曬して垢染にしたるに、文目も分かぬ木綿縞の布子を襲ねて、ジオンソン帽の瓦色に化けたるを頂き、焦茶地の縞羅紗の二重外套は何の冬誰が不用をや讓られけん、尋常よりは寸の薄りたるを、身材の人より豐なるに絡ひたれば、例の袴は風にや吹斷れんと危くも閃きつゝ、其人は齡三十六七と見えて、形癯せたりとにはあらねど、寒樹の夕空に倚りて孤なる風情、猶り負ふ氣無く麗しくも富める髭髯は、下には乳の邊まで毿々と垂れて、左右に拈りたるは八字の蔓を巻きて耳の根にも迨びぬ。打見れば面目爽に、稍傲れる色有れど峻しくはあらず、而も今陶々然として酒興を發し、春の日長の野邊を

辿るらんやうに、西筋の横町を此の大路に出で來らんとす。

「瓢空しく夜は靜にして高樓に上り、酒を買ひ、簾を卷き、月を邀へて醉ひ、醉中劍を拂へば光月を射る。」

彼は節をかしく微吟を放ちて、行く〳〵且樂むに似たり。打晴れたる空は琉璃色に夕榮えて、俄に迫え勝る𩕄の目口に沁みて磨鍼を打つらんやうなるに、烈火の如き醉顏を差付けては太息嘘いて、右に一歩左に一歩と　きつゝ、

「往々悲歌して獨り流涕す、君山を剗却して湘水平に、桂樹を斫却して月更に明ならんを、丈夫志有りて……。」

と唱ひ出づる時、一隊の近衞騎兵は南頭に馬を疾めて、眞一文字に行手を橫斷するに會ひければ、彼は鐵鞭を植てゝ、舞立つ砂煙の中に魁の花を裝へる健兒の參差として推行く後影をば、壯なる哉と謂まほしげに看送りて、

「我四方に遊びて意を得ず、陽狂して藥を施す成都の市、」

と漫に其詩の首をば小聲朗に吟じ居たり。さては往來の遑き目も皆牽れて、此の節季の修羅場を獨天下に吃ひ醉へるは、何者の暢氣か、自棄か、豪傑か、悟か、醉生兒か、と異しき姿を見て過る有れば、面を識らんと窺ふ有り、又は其の身の上など思ひつゝ行くも有り。彼は太く醉へれ

ば總て知らず、町の殷賑を眺め遣りて、何方を指して行かんとも心定らず姑く立てるなりけり。
然ばかり人に怪しまるれど、彼は今日のみ此町に姿を顯したるにあらず、折々散歩すらんやうに出來ることあれど、箇樣の醉態を認むるは、兼て注目せる派出所の巡査もめづらしと思へるなり。

旋て彼は鐵鞭を曳鳴して、大路を右に出でしが、二町許も行きて、乾の方より狹き坂道の開きたる角に來にける途端に、風を帶びて馳下りたる俥は、生憎其方に蹌ける醉客の腰の邊を一衝撞てたりければ、彼は御舍を打つて二間も彼方へ撥飛さるゝと齊しく、大地に橫面擦つて僵れたり。不思議にも無難に踏留りし車夫は、此の麁忽に氣を奪れて立ちたりしが、面倒なる敵手と見たりけん、そのまゝ轅を回して逃れんとするを、俥の上なる黑綾の吾妻コオト着て、素鼠縮緬の頭巾被れる婦人は樺色無地の絹臘虎の膝掛を推除けて、駐めよ、返せと聞ゆるを、猶聽かで曳々と挽き行く後より、

「待て、こら!」と喝する聲に、行く人の始て事有りと覺れるも多く、はや車夫の不情を尤むる語も聞ゆるに、耐りかねたる婦人は强て其處に下車して返し來りぬ。

例の物見高き町中なりければ、此の忙しき際をも忘れて、寄來る人數は蟻の甘きを探りたるやうに、一面には遭難者の土に踞へる周邊を擁し、一面には婦人の左右に傍ひて、目に物見すと揉

立てたり。婦人は途を來つゝ被物を取りぬ。紋羽二重の小豆鹿子の手絡したる圓髷に、鼈甲脚の金七寶の玉の後簪をはすに、高蒔繪の政子櫛をかざして、よそほひは實に塵をも怯れぬべき人の謂ひ知らず思惑へるを、可痛の嵐に堪へぬ花の顏や、と群集は自ら聲を斂めて肝に徹ふるなりき。

いと更に面の褻まほしき此場を、頭巾脫ぎたる彼の可羞さと切なさとは、幾許なりけん、打赧めたる顏は措き所あらぬやうに、人堵の內を急足に辿りたり。帽子も鐵鞭も、懷にせしブツクも、薩摩下駄の隻も投散されたる中に、醉客は半ば身を擡げて血を流せる右の高頰を平手に掩ひつゝ、寄來る婦人を打見遣りつ。彼は其の前に先づ惴れず會釋して、

「どうも取んだ麁相を致しまして、何とも相濟みませんでございます。おや、お顏を！　お目を打ちましたか、まあ奈何も……。」

「いや太した事は無いのです。」

「然やうでございますか。何處ぞお痛め遊ばしましたでございませう。」

腰を得立てず居るを、婦人は仍ほ氣遣へるなり。

車夫は數次腰を屈めて主人の後方より進出でけるが、

「どうも、旦那、誠に申譯もございません、どうか、まあ平に御勘辨を願ひます。」

眼を其方に轉じたる醉客は恚れるとしもなけれど聲肅に、
「貴樣は善くないぞ。麁相を爲たと思うたら何爲車を駐めん。逃げやうとするから呼止めたんじや。貴樣の不心得から主人にも恥を搔する、」
「へい恐入りました。」
「どうぞ御勘辨あそばしまして。」
俥の主の身を下して辭を添ふれば、彼も打頷きて、
「以來氣を着けい、よ。」
「へい……へい。」
「早う行け、行け。」
やをら彼は起たんとすなり。さては望外なる主從の喜に引易へて、見物の飽無氣さは更に望外なりき。彼等は幕の開かぬ芝居に會へる想して、餘に落着の蛇尾振はざるを悔みて、はや忙々しき踵を回すも多かりけれど、また見榮あるこの場の模樣に名殘を惜みつゝ去り敢へぬもありけり。
車夫は起ち惱める醉客を扶けて、履物を拾ひ、鞭を拾ひて宛行へば、主人は帽を淸め、ブツクを取上げて彼に返し、頭巾を車夫に與へて、懇に外套、袴の泥を拂はしめぬ。免されし罪は消え

ぬべきも、歴々と挫傷の其面に殘れるを見れば、疚しきに堪へぬ心は、なほ爲すべき事あるを吝みて私せるにあらずやと省られて、彼は有繫に見捨てかねたる人の顏を、始は可傷と眺めたりしに、其の眼色は漸く鋭く、且は疑ひ且は怪しむらんやうに、忍びては矚りつゝ便無げに佇みけるに、いでや長居は無益とばかり、彼は蹌踉と踏出せり。

婦人は左にも右にも遣過せしが、又何とか思直しけん、遽に追行きて呼止めたり。頭を捻向けたる醉客は眊れる眼を屹と見据ゑて、自か他かと訝しさに言も出さず。

「もしお人違でございましたら御免あそばしまして、貴方は、あの、もしや荒尾さんでは被在いませんですか。」

「は？」彼は覺えず身を回して、丁と立てたる鐵鞭に攲り、這は是白日の夢か、空華の形か、正體見んと爲れど、醉眼の空しく張るのみにて、益す霽れざるは疑なり。

「荒尾さんで被在いましたか！」

「はあ？　荒尾です、私荒尾です。」

「那の間貫一を御承知の？」

「あゝ、間貫一、舊友でした。」

「私は鴫澤の宮でございます。」

「何、鴫澤……鴫澤の……宮と有仰る……？」

「はい、間の居りました宅の鴫澤。」

「おゝ、宮さん！」

奇遇に驚かされたる彼の醉は頓に半は消えて、せめて昔の俤を認むるや、と其人を打眺むるより外はあらず。

「お久しぶりで御座いました。」

宮は懽び勇みて犇と寄りぬ。

今は美しき俥の主ならず、路傍の醉客ならず名宣合へる彼と此との思は如何。間貫一が鴫澤の家に在りし日は、彼の兄の如く友として善かりし人、彼の身の如く契りて怜しかりし人にあらずや。

その日の彼等は又同胞にも得べからざる親を以て、膝をも交へ心をも語りしにあらずや。その日の彼等は多少の轉變を覺悟せし一生の中に、今日の奇遇を算へざりしなり。縱し然りとも、一たび同胞と睦合へりし身の、弊衣を飄して道に醉ひ、流車を驅りて富に驕れる高下の差別の自ら種有りて作せるに似たる如此きを、彼等は更に〳〵夢ざりしなり。其の算へざりし奇遇と夢ざりし差別とは、咄々、相携へて二人の身上に逼れるなり。女氣の脆き涙ははや宮の目に濕ひぬ。

「まあ大相お變り遊ばしましたこと！」
「貴方も變りましたな！」
然しも見えざりし面の傷の可恐きまでに溢す血を出すに、宮は持たりしハンカチイフを與へて拭はしめつゝ、心も心ならず様子を窺ひて、
「お痛みあそばすでせう。少しお待ちあそばしまし。」
彼は何やらん吩咐けて車夫を遣りぬ。
「直此の近くに懇意の醫者が居りますから、其處まで被入つて下さいまし、唯今俥を申附けました。
「何の、那様に騒ぐほどの事は無いです。」
「あれ、お殆うございますよ、而して大相召上つて被在るやうですから、左も右もお俥でお出あそばしまし。」
「いんや、宜しい、大丈夫。」
「時に間は其後奈何しましたか。」
宮は胸先を刀の透るやうに覺ゆるなりき。
「其事に就きまして色々お話も致したいので御座います。」

「然し、奈何して居ますか。」

「無事ですか。」

「はい、……。」

「決して無事ぢやない筈です。」

生きたる心地もせずして宮の慙ぢ懊ける傍に、車夫は見苦しからぬ一臺の辻車を伴ひ來れり。漸く面を擧れは、いつ又寄りしとも知らぬ人立を、可忌くも巡査の怪みて近くなり。

鬚深き横面に貼薬したる荒尾讓介は既に蒼く醉醒めて、煌々たる空氣ラムプの前に襞積もあらぬ袴の膝を丈六に組みて、接待莨の葉巻を燻らしつゝ意氣肅に、打萎れたる宮と熊の敷皮を斜に差向ひたり。這は是、彼の識れると謂ひし醫師の奥二階にて、疊敷にしたる西洋造の十疊間なり。物語ははや緒を解きしなるべし。

「間が影を隱す時僕に遣した手紙が有る、それで悉い様子を知つて居るです。其の手紙を見た時には、僕も顫へて腹が立つた。直に貴方に會うて、是非これは思返すやうに飽くまで忠告して、それで聽かずば、もう人間の取扱は爲ちや居られん、腹の癒ゆるほど打踣して、一生結婚の成らんやう立派な不具にして與れやう、と既に其時は立上つたですよ。然し、間が言を盡しても貴方

が聴かんと云ふ、僕の言を容れやう道理が無い。又間を嫌うた以上は、貴方は富山への賣物じや、他の賣物に疵を附けちや濟まん、と然う思うて、そりや實に矢も楯も耐らん胸を拳つて了うたんです。」

宮が顔に推當てたる片袖の端より、連に眉（まゆ）の顰むが見えぬ。

「宮さん、僕は貴方は然云ふ人ではないと思うた。那程（あれほど）互（たがひ）に愛して居つた間さへが欺かれたんぢやから、僕の欺（あざむか）れたのは無理も無いぢやらう。僕は僕として貴方を怨むばかりでは慊らん。間に代つて貴方を怨むですよ、いんや、怨む、七生まで怨む、屹と怨む！」

終に宮が得堪へぬ泣音は洩れぬ。

「間の一身を誤つたのは貴方が誤つたのじや。其は又間にしても、高が一婦女子に棄てられたが爲に志を挫いて、命を抛つたも同然の墮落（だらく）に果てる彼の不心得は、別に間として大いに責めんけりやならん。然し、間が如何に不心得であらうと、貴方の罪は依然として貴方の罪じや、のみならず、貴方が間を棄てた故に、彼が今日の有様に墮落したのであつて見れば、貴方は女の操（みさほ）を破つたのみでない、併せて夫を刺殺（さしころ）したも……。」

宮は慄然として振仰（ふりあふ）ぎしが、荒尾の鋭き眥（まなじり）は貫一が怨も憑りたりやと、其の見る前に身の措所無く打竦みたり。

「同じですよ。然うは思ひませんか。で、貴方の悔悟されたのは善い、是は人として悔悟せんけりやならん事。けれども残念ながら今日に及んでの悔悟は業に晩い。間の墮落は間其人の死んだも同然、貴方は夫を持つて六年、なあ、水は覆つた、盆は破れて了うたんじや。恁う成つた上は最早神の力も逮ぶことではない。お氣の毒じやと言ひたいが、猶且貴方が自ら作せる罪の報で、固より恁く有るべき事ぢやらうと思ふ。」

宮は俯きてよゝと泣くのみ。

吁、吾が罪！　然りとも知らで犯せし一旦の吾が罪！　其の吾が罪の深さは、彼人ならぬ人さへ恁まで憎み、恁まで怨むか。然もあらば、必ず思知る時有らんと言ひし其人の、爭で〳〵吾が罪を容すべき。吁、吾が罪は終に容されず、吾が戀人は終に再び見る能はざるか。

宮は胸潰れて、涙の中に人心地をも失はんとすなり。

おのれ、利を見て愛無かりし匹婦、憎しとも憎しと思はざるにあらぬ荒尾も、當面に彼の悔悟の切なるを見ては、有繋に情は動くなりき。宮は際無く顏を得擧げず居たり。

「然し、好う悔悟を作つた、間が容さんでも、又僕が容さんでも、貴方は其の悔悟に因つて自ら容されたんじや。」

由無き慰藉は聞かじとやうに宮は俯しながら頭を掉りて更に泣入りぬ。

一自にでも容されたのは、誰にも容されんには勝つて居る、又自ら容さるゝのは、終には人に容さるゝ其が始ぢやらうと謂ふもの。僕は未だ未だ容し難く貴方を怨む。怨みは爲るけれど、今日の貴方の胸中は十分察するのです。貴方のも察するからには、他の者の間の胸中(きようちゆう)も亦(また)察(さつ)せにやならん、可いですか。而して孰が多く憐むべきであるかと謂へば、間の無念は抑(そもそも)甚麼(どんな)ぢやらうか、なあ、僕は其を思ふんです。其を思うて見ると貴方の苦痛を傍觀(ばうくわん)するより外は無い。

　恁して今日圖らずお目に掛つた。僕は婦人として生涯の友にせうと思うた人は、後にも先にも貴方(あなた)ばかりじや。いや、それは段々お世話にもなつた、忝いと思うた事も幾度か知れん、其の媛友(レディフレンド)に何年ぶりかで逢うたのぢやから、僕も實に可懷う思ひました。」

　宮は泣音の迸らんとするを咬緊めて、濡浸れる袖に犇々と面を擦付けたり。

「けれど又、圓髷に結うて、立派にして居らるゝのを見りや、決して可愛うはなかつた。幸ひ貴方が話したい事が有ると言るゝ、善し、那樣(あのやう)に間を詐つた貴方じや、又僕を幾何ほど詐ることぢやらう、其を聞いた上で、今日こそは打踣して與れやうと待つて居つた。然(しか)るに、貴方の悔悟僕は陰に喜んで聽いたのです。今日の貴方は依樣(やはり)僕(ぼく)の友(フレンド)の宮さんぢやつた。好う貴方は悔悟なすつた！　然も無かつたら、貴方の顏に此の十倍の疵を附けにや還さんぢやつたのです。なあ、自ら容されたのは人に赦さるゝ始——解りましたか。

で、間に取成してくれい、詫を言うてくれい、とのお囑ぢやけれど、それは僕は爲ん。爲んのは、間に對して奈何も出來んのぢやから、又貴方に罪有りと知つて居りながら共人から頼まるゝ僕でない。又僕が間であつたらば、斷じて貴方の罪は容さんのぢやから。

恁して親友の敵に逢うてからに、指も差さずに別るゝ、是が荒尾の貴方に對する寸志と思うて下さい。いや、久しぶりで折角お目に掛りながら、可厭な言ばかり聞せました。それぢや、まあ、御機嫌好う、これでお暇します。」

會釋して荒尾の身を起さんとする時、

「暫く、どうぞ。」宮は取亂したる泣顔を振擧げて、重き瞼の露を拂へり。

「それでは此上茜歴にお願ひ申しましても、貴方はお詫を爲つては下さらないので御座いますか。而して貴方も猶且私を容さんと有仰るので御座いますか。」

「然うです。」

忙しげに荒尾は片膝立てゝ居たり。

「どうぞ最暫く被在つて下さいまし、唯今直に御飯が參りますですから。」

「や、飯なら欲うありませんよ。」

「私は未だ申上げたい事が有るのでございますから、荒尾さんどうかお坐り下さいまし。」

「いくら貴方が言うたつて、返らん事ぢやありませんか。」
「那様にまで有仰らなくても、…… 少しは、堪忍なすつて下さいまし。」
火鉢の縁に片手を翳して、何をか打案ずる様なる目を翕しつゝ荒尾は答へず。
「荒尾さん、それでは、迚もお聴入はあるまいと私は諦めましたから、貫一さんへお詫の事はもう申しますまい、又貴方に容して戴く事も願ひますまい。」
咄嗟に荒尾の視線は轉じて、猶語續る宮が面を掠め去りぬ。
「唯一目私は貫一さんに逢ひまして、其前でもつて、私の如何にも悪かつた事を思ふ存分謝りたいので御座います。唯彼人の目の前で謝りさへ爲たら、それで私は本望なのでございます。素より容してもらはうとは思ひません、貫一さんが又容してくれやうとも、えゝ、どうせ私は思ひは致しません。容されなくても私は管ひません。私はもう覺悟を致し……。」
宮は苦しげに涙を呑みて、
「ですから、どうぞ御一所にお伴れなすつて下さいまし。貴方がお伴れなすつて下されば、貫一さんは屹と逢つてくれます。逢つてさへくれましたら、私は殺されましても可いので御座います。貴方と二人で私を責めて責めて責め抜いた上で、貫一さんに殺さして下さいまし。私は貫一さんに殺してもらひたいので御座います。」

感に打れて霜置く松の如く動かざりし荒尾は、忽ち其の長き髯を振りて頷けり。

「うむ、面白い！　逢うて間に殺されたいとは、宮さん好う言はれた。然なけりやならんじや。然し、なあ、然しぢや、貴方は今は富山の奥さん、唯繼と云ふ夫の有る身じや、滅多な事は出來んですよ。」

「私は管ひません！」

「可かん、そりや可かん、間に殺されても辭せんと云ふ其の悔悟は可いが、それぢや貴方は間有るを知つて夫有るのを知らんのぢや。夫を奈何なさるなあ、夫に道が立たん事になりはせまいか、そこも考へて貰はにやならん。

して見りや、始には富山が爲に間を欺き、今又間の爲に貴方は富山を欺くんじや。一人ならず二人欺くんじや！　一方には悔悟して、其が爲に又一方に罪を犯したら、折角の悔悟の効は沒つて了ふ。

「那樣事は管ひません！」

無慙に唇を咬みて、宮は抑へ難くも激せるなり。

「管はんぢや可かん。」

「いゝえ、管ひません！」

「そりや可かん！」
「私はもう那樣事は管ひませんのです。私の軀は甚麽になりませうとも、疾から棄てゝ居るので御座いますから、唯最一度貫一さんにお目に掛つて、此の氣の濟むほど謝りさへ致したら、其場でもつて私は死にましても本望なのですから、富山の事などは……不如然して死んで了ひたいので御座います。」
「それ〳〵然云ふ無考な、譯の解らん人に僕は與することは出來んと謂ふんじや。一體然した貴方は了簡ぢやからして、始に間をも棄てたんじや。不埒です！　人の妻たる身で夫を欺いて、それで管はんとは何事ですか。那樣貴方が了簡であつて見りや、僕は寧ろ富山を不愍に思ふです、貴方のやうな不貞不義の妻を有つた富山其人の不幸を愍まんけりやならん、いや、愍む、貴方よりは富山に僕は同情を表する、愈よ憎むべきは貴方じや。」
四途亂に濕へる宮の目は焚ゆらんやうに耀けり。
「然う有仰つたら、私は奈何して悔悟したら宜いので御座いませう。荒尾さん、どうぞ助けると思召してお諭へなすつて下さいまし。」
「僕には諭へられんで、貴方がまあ能う考へて御覽なさい。」
「三年も四年も前から一日でも其事を考へません日と云つたら無いのでございます。其が爲に

始終悒々と全で疾つて居るやうな氣分で、噫もう這麼なら、いつそ死んで了はう、と熟く然うは思ひながら、唯もう一目、一目で可うございますから貫一さんに逢ひませんでは、どうも死ぬにも死なれないので御座います。」

「まあ能う考へて御覧なさい。」

「荒尾さん、貴方それでは餘りでございますわ。」

獨に餘る心細さに、宮は男の袂を執りて泣きぬ。理切めて荒尾も其手を拂ひかねつゝ、吾ならぬ愁に胸塞れて、實にもと覺ゆる宮が衰容に眼凝し居たり。

「荒尾さん、這麼に思つて私は悔悟して居るのぢやございませんか、昔の宮だと思召して頼に成つて下さいまし。どうぞ、荒尾さん、どうぞ、さあ、お詫へなすつて下さいまし。」

涙に昏れて其の語は能くも聞えず。階子下の物音は膳運び出づるなるべし。

果して人の入來て、夕餉の設すとて少時紛されし後、二人は謂ふべからざる侘しき無言の中に相對するのみなりしを、荒尾は始めて高く咳きつ。

「貴方の言るゝ事は能う解つて居る、決して無理とは思はんです。如何にも貴方に詫へて上げたい、詫へて貴方の身の立つやうな處置で有るなら、詫へて上げんぢやないです。けれどもじや、其が詫へて上げられんのは、僕が貴方であつたら恁う爲ると云ふ考量に止るので……いや、いや、

そりや言れん。言うて善い事なら言ひます。人に對して言ふべき事でない、況や誨ふべき事ではない、止だ僕一箇の了簡として肚の中に思うた迄の事、究竟荒尾的空想に過ぎんのぢやから、空想を誨へて人を誤つては奈何もならんから、僕は何も言はんので、言はんぢやない、實際言得んのじや。然し猶能う考へて見て、貴方に誨へらるゝ方法を見出したら、更にお目に掛つて申上げやう。折が有つたら又お目に掛ります。は、僕の住居? 住居は、まあ言はん方が可い、蜑が子なれば宿も定めずじや。言うても差支は無いけれど、貴方に押掛けらるゝと困るから、まあ言はん。は、如何にも、這麼態をして居るので、貴方は吃驚なすつたか、然うでせう。自分にも驚いて居るのぢやけれど奈何も爲方が無い。僕の身の上に就ては段々仔細が有るですとも、其もお話したいけれど、又此次に。

酒は餘り飲むな? はあ、今日のやうに醉うた事は希です。忝い、折角の御忠告ぢやから今後は宜い、氣を着くるです。

力に成つてくれと言うたとて、義として僕は貴方の力には成れんぢやないですか。貴方の胸中も聽いた事ぢやから、敵にはなるまい、けれど力には成られんですよ。

間にも其後逢はんのですとも。一遍逢うて聞きたい事も言ひたい事も頗る有るのぢやけれど、も、訪ねもせんので。それにや一向意味は無いですとも。はあ、一遍訪ねませう。明日訪ねてく

れい？　然うは可かん、僕も是でなか〳〵用が有るのぢやから。あゝ、貴方も浮世が可厭か、僕も御同様じや。世の中と云ふものは、一つ間違ふと誠に面倒なもので、僕なども今日の有様では生効の無い方ぢやけれど、此儘で空く死ぬるも残念でな、然う思うて生きては居るけれど、苦しみつゝ生きて居るなら、死んだ方が無論勝ですさ。何故(なにゆゑ)命(いのち)が惜(をし)いのか、考へて見ると頗る解なくなる。」

語りつゝ彼は食を了りぬ。

「嗚呼、貴方に給仕して貰ふのは何年ぶりと謂ふのか知らん。間も善う食うた。」

宮は差含(さしぐ)ひ涙を啜れり。盡きせぬ悲を何時までか見んとやうに荒尾は俄に身支度して、

「こりや然し却つてお世話になりました。それぢや宮さん、お暇。」

「あれ、荒尾さん、まあ、貴方……。」

はや彼は起てるなり。宮は其前に塞りて立ちながら泣きぬ。

「私は奈何したら可いのでせう。」

「覚悟一つです。」

始て誨ふるが如く言放ちて荒尾の排け行かんとするを、彼は猶も縋りて、

「覚悟とは？」

「讀んで字の如し。」

驚破、彼の座敷を出づるを、送りも行かず、坐りも遣らぬ宮が、姿は寂しくも壁に向ひて動かざりけり。

以下掲載するのは、富山夫人としてのお宮の覺醒と煩悶とである。

宮は既に富むと裕なるとに饜きぬ。抑も彼が此家に嫁ぎしは、慾深き娘氣の一圖に、榮耀榮華の欲するまゝなる身分を願ふを旨とするなりければ、始より夫の愛情の如きは、有るも善し、有らざるも更に善しと、殆ど無用の物のやうに輕めたりき。今や其願足りて、而も遂に饜きたる彼は彌よ貪らるゝ愛情の煩はしきに堪へずして、寧ろ影を追ふよりも儚き昔の戀を思ひて、私に樂むの味あるを覺ゆるなり。

恬なりてより彼は自ら唯繼の面前を厭ひて、寂しく垂籠めては隨意に物思ふを懌びたりしが、圖らずも田鶴見の邸内に貫一を見しより、彼の然して昔に變らぬ一介の書生風なるを見しより、一度は絶えし戀ながら、仍冥々に行末望あるが如く、然るは彼が昔のまゝの容なるを、今も其の獨を守りて、時の到るを待つらんやうに思做さるゝなりけり。

其時は果して到るべきものなるか。宮は躬の心の底を叩きて、答を得るに沮みつゝも、有繋に又己にも知れざる秘密の潜める心地して、一面には覺束なくも、又一面には左にも右にも信ぜらるゝなり。

便ち宮の夫の愛を受くるを難堪く苦しと思知りたるは、彼の寫眞の鏡面の前に悶絶せし日よりにて、其の戀しさに取迫めては、いでや、此の富めるに饜き、裕なるに倦める家を棄つべきか、棄てよとならば遲はじと思へるも屢なりき。唯敢て之を爲ざるは、竊に望は繫けながらも、行くべき方の怨を解かざるを虞るゝ故のみ。

素より宮は唯繼を愛せざりしかど、決して之を憎むとにはあらざりき。然れど今はしも正に其念は起れるなり。自ら謂へらく、吾夫こそ當時戀と富との値を知らざりし己を欺き、空く輝ける富を示して、售るべくもあらざりし戀を奪ひけるよ、と悔の餘は恁る恨をも他に被せて、彼は己を過りしをば、全く夫の罪と爲せり。

此心なる宮は此の一月十七日に會ひて、此の一月十七日の雪に會ひて、いとゞしく貫一が事の忍ばるゝに就けて轉た惡人の夫を厭ふこと甚しかり。無辜の唯繼は恁る今宵の樂を授る此の美しき妻を拜するばかりに、有程の誠を奉げて、蜜よりも甘き言の數々を唖きて止まざれど、宮が耳には人の聲は聞えずして、雪の音のみぞいと能く響きたる。

其雪は明方になりて歇みぬ。乾坤の白きに漂ひて華麗に差出でたる日影は、漲るばかりに暖き光を鋪きて終日輝きければ、七分の雪は其日に解けて、はや翌日は往來の妨碍もあらず。處々の泥濘は打續く快晴の天に曝されて、刻々に乾き行くなり。

此雪の爲に外出を封ぜられし人は、此の日和と此の道とを見て、皆怺へかねて昨日より出でしも多かるべし。まして今日となりては、手置の宜からぬ横町、不性たる裏通、屋敷町の小路などの氷れる雪の九十九折、或は捏返せし汁粉の海の、差掛りて難儀を極むるとは知らず、見渡す町通の乾々干に固れるに唆かされて、控へたりし人の出でざるはあらざらんやうに、往來の常より頻なる午前十一時といふ頃、屈み勝に疲れたる車夫は、泥の粉衣掛けたる車輪を可惱しげに轉して、黑綾の吾妻コオト着て、鐵色縮緬の頭巾を領に卷きたる五十路に近き賤しからぬ婦人を載せたるが、南の方より芝飯倉通に來かゝりぬ。

唯有る横町を西に切れて、某の神社の石の玉垣に沿ひて、だら〳〵と上る道狹く、繁き木立に南を塞がれて、殘れる雪の夥多しきが泥交に蹈散されたるを、件の車は曳々と挽上げて、取着に土塀を由々しく構へて、門には電燈を掲げたる方にぞ入りける。

這は富山唯繼が住居にて、其の女客は宮が母なり。主は疾に會社に出勤せし後にて、例刻に來れる髮結の今方歸行きて、まだ其迹も掃かぬ程なり。紋羽二重の肉色鹿子を掛けたる大圓髷より

水は滴るばかりに、玉の如き喉を白絹のハンカチイフに巻きて、風邪氣などにや連に打咳きつつ、宮は奥より出迎に見えぬ。其の故とも覺えず餘に著き面羸は、唯一目に母が心を驚せり。

閑ある身なれば、宮は月々生家なる兩親を見舞ひ、母も同じほど訪ひ音づるゝをば、此上無き隱居の保養と爲るなり。信に女親の心は、娘の身の定りて、其家榮え、其身安泰に、而もいみじう出世したる姿を見るに增して樂まさるゝ事はあらざらん。彼は宮を見る毎に大なる手柄をも成したらんやうに、吾が識れるほどの親といふ親は、皆才覺無く、仕合薄くて、有様は氣の毒なる人達哉、と漫に己の誇らるゝなりけり。然れば月毎に彼が富山の門を入るは、正に人の母たる成功の凱旋門を過る心地もすなるべし。

可懷きと、嬉しさと、猶今一つとにて、母は得々と奥に導れぬ。久しく垂籠めて友欲しき宮は、拯を得たるやうに覺えて、有るまじき事ながら、或は密に貫一の報を齎せるにはあらずやなど、枉げても念じつゝ、せめては愁に閉ぢたる胸を姑くも寛うせんとするなり。

母は語るべき事の日頃蓄へたる數々を措きて、先づ宮が血色の氣遣しく衰へたる故を詰りぬ。同じ事を夫にさへ問れしを思合せて、彼は然までに己の羸れたるを惧れつゝも。

「然う？　でも、何處も惡い所なんぞ有りはしません。餘り體を動かさないから、その所爲かも知れません。けれども、此頃は時々氣が鬱いで鬱いで耐らない事があるの。那は血の道と謂ん

でせうね。」

「あゝ、それは血の道さ。私なんぞも持病にあるのだから、依様然だらうよ。それでも、それで瘦せるやうぢや良くないのだから、お醫者に診てもらふ方が可いよ。放つて措くから畢竟持病にもなるのさ。」宮は唯頷きぬ。母は不圖思起してや、然も慌忙しげに、

「後が出來たのぢやないかい。」

宮は打笑みつ。然れども例の可羞とにはあらで傍痛き餘を微見せしやうなり。

「那樣事はありはしませんわ。」

「然う何日までも沙汰が無くちや困るぢやないか。本當に未だ那樣樣子は無いのかえ。」

「有りはしませんよ。」

「無いのを手柄にでもして居るやうに、何だね。一人はもう無くて奈何するのだらう、先へ寄つて御覽、後悔を爲るから。本當なら二人ぐらゐ有つて好い時分なのに、那限後が出來ない所を見るとやつぱり躰が弱いのだね。今の內養生して丈夫にならなくちや可けないよ。お前は然して平氣で、いつまでも若くて居る氣なのだらうけれど、本宅の方なんぞでも後が〱つて、甚麼に待兼ねてお在だか知れはしないのだよ。內ぢや又阿父さんは、他は奈何したと謂ふんだらう、情無い奴だ。子を生み得ないのは女の恥だつて、慍り切つて居なさるくらゐだのに、當人のお前と

云つたら、可厭に落着いて居るから、憎らしくてなりはしない。而して、お前は先の內は子供が所好だつた癖に、自分の子は欲くないのかね。」宮も有繋に當惑しつゝ、
「欲しくない事はありはしませんけれど、出來ないものは爲方が無いわ。」
「だから、何でも養生して、體を丈夫にするのが專だよ。」
「體が弱いとお言ひだけれど、自分には別段此が惡いと思ふ處も無いから、診てもらふのも變だし……けれどもね、阿母さん、私は疾から言はう言はうと思つて居たのですけれど、實は氣に懸る事があつてね、それで始終何だか心持が快くないの。其の所爲で自然と體も良くないのか知らんと思ふのよ。」
母の其目は眴り、其膝は前み、其胸は潰れたり。
「奈何したのさ！」宮は俯きたりし顏を寂しげに起して、
「私ね、去年の秋、貫一さんに逢つてね……。」
「然かい！」
己だに聞くを憚る秘密の如く、母は其の應ふる聲をも潛めて、まして四邊には油斷もあらぬ氣勢なり。
「何處で。」

「内の方へも全然爾來の様子は知れないの？」

「あゝ。」

「些も？」

「あゝ。」

「奈何して居ると云ふやうな話も？」

「あゝ。」僅く纔に應ふるのみにて、母は自ら湧せる萬感の渦の裏に陥りてぞ居たる。

「然う？　阿父さんは内證で知つてお在ぢやなくて？」

「いゝえ、那様事は無いよ。何處で逢つたのだえ。」宮は其の梗概を語れり。聽居る母は、彼の事無く共場を遁れ得てし始末を詳かにするを俟ちて、始めて重荷を下したるやうに哱と息を息きぬ。實に彼は熱海の梅園にて膩汗を搾られし次手惡さを思合せて、憂き目を重ねし宮が不幸を、不敏とも、慘しとも、今更に親心を傷むるなりけり。然れども過ぎし其事よりは、爲に宮が前途に一大障礙の或は來るべきを案じて、母はなか〳〵心穩ならず。

「而して貫一は奈何したえ。」

「お互に知らん顔をして別れて了つたけれど……。」

「あゝ、それから？」

「其限なのだけれど、私は氣になつてね。それも出世して立派になつて居るのなら、然うも思はないけれど、つまらない風采をして、何だか大變羸れて、私も極が惡かつたから、能くは見なかつたけれど、氣の毒のやうに身窄しい樣子だつたわ。それに、聞けばね。番町の方の鰐淵とかいふ、地面や家作なんぞの世話をして居る内に使はれて、依樣其處に居るらしいのだから、好い事は無いのでせう。那して子供の内から一處に居た人が、那麽になつて居るかと思ふと、昔の事を考へ出して、私は何だか情無くなつて……。」彼は襦袢の袖の端に窃と眶を塗りて、

「好い心持はしないわ、ねえ。」

「へえゝ、那樣になつて居るのかね。」母の顏色も異しき寒さにや襲はるゝと見えぬ。

「それ迄だつて、憶出さない事は無いけれど、去年逢つてからは、毎日のやうに氣になつて、可厭な夢なんぞを度々見るの。阿父さんや、阿母さんに會ふ度に、今度は話さう、今度は話さうと思ひながら、私の口からは何と無く話し難いやうで、實は今迄言はずに居たのだけれど、其事が初中終苦になる所爲で氣を傷めるから體にも障るのぢやないかと、然う想ふのです。」

思凝せるやうに母は或方を見据ゑつゝ、言は無くて頷き居たり。

「それで、私は阿母さんに相談して、貫一さんを奈何かして上げたいの――那時に那樣話も有つたのでせう。而して依舊鴫澤の跡は貫一さんに取して下さいよ、それでなくては私の氣が濟ま

ないから。今迄は行方が知れなかつたから爲方がないけれど、聞合せれば直に分るのだから、其を抛つて措いちや此方が惡いから、阿父さんにでも會つて貰つて、何とか話を付けるやうにして下さいな。而して從來通に內で世話をして、甚麼にも彼人の目的を達しさして、立派に吾家の跡を取して下さい。私は然うしたら兄弟の盃をして、何處までも生家の兄さんで、末始終力になつて欲いわ。」

宮が此言は決して內に自ら欺き、又敢て外に他を欺くにはあらざりき。影とも儔く隔の闕の遠き戀人として餘所に朽さんより、近き他人の前に己を殺さんぞ、同じく受くべき苦痛ならば、其の忍び易きに就かんと冀へるなり。

「それは然でもあらうけれども、隨分考へ物だよ。彼人の事なら、內でも時々話が出て、何處に奈何して居るか知らんつて、案じないぢやないけれど、阿父さんも能くお言ひなのさ、如何に何だつて、餘り貫一の仕打が憎いつて。成程それは、お前との約束ね、其を反古にしたと云ふので、齡の若いものゝ事だから腹も立たう、立たうけれど、お前自分の身の上も些は考へて見るが可いわね。子供の內から那して世話になつて、全く內のお蔭で左も右も那丈にもなつたのぢやないか、其の恩も有れば、義理も有るのだらう。そこの所を些と考へたら、あれぎり家出をして了ふなんて、那麼まあ面抵がましい仕打振をするつてが有るものかね。

それぢや那約束を反古にして、もうお前には用は無いから奈何でも獨で勝手に爲るが可い、と云ふやうな不人情なことを假初にも爲たのぢやなし、鳴澤の家は讓らうし、所望なら洋行も爲せやうと迄言ふのぢやないか。それは一時は腹も立たうけれど、好く了簡して前後を考へて見たら、萬更譯の解らない話をして居るのぢやないのだもの、私達の顏を立てゝくれたつて、那樣に罰も當りはしまいと思ふのさ。而してお剩に、阿父さんから十分に譯を言つて、頭を低げないばかりにして賴んだのぢやないかね。だから此方には少しも無理は無い筈だのに、貫一が餘り身の程を知な過るよ。

それはね、阿父さんが昔彼人の親に世話になつた事があるさうさ、其の恩返なら、行處の無い軀を十五の時から引取つて、高等學校を卒業する迄に仕上げたら、それで十分だらうぢやないか。仝く、お前、貫一の爲方は增長して居るのだよ。それだから、阿父さんだつて、私だつて、那されて見ると決して可愛くはないのだからね、今更此方から搜出して、右や左言ふほどの事はありはしないよ。それぢや何ぼ何でも不見識とやらぢやないか。」

其の不見識とやらを嫌ふよりは、別に嫌ふべく、懼るべく、警むべき事あらずや、と母は私に慮れるなり。

「阿父さんや阿母さんの身になつたら、然う思ふのは無理も無いけれど、どうも此儘ぢや私が

氣が濟まないんですもの、今になつて考へて見ると、貫一さんが悪いのでなし、阿父さん阿母さんが悪いのでなし、全く私一人が悪かつたばかりに、貫一さんには阿父さん阿母さんを恨ませるし、阿父さん阿母さんには貫一さんを悪く思はせたのだから、依様私が仲へ入つて、元々通に爲なければ濟まないと思ふんですから、貫一さんの悪いのは、どうぞ私に免じて、今迄の事は水に流して了つて、改めて貫一さんを内の養子にして下さいな。若し然なれば、私もそれで苦勞が滅るのだから、屹度體も丈夫になるに違無いから、是非然云ふ事に阿父さんにも頼んで下さいな、ねえ、阿母さん、然して下さらないと、私は段々體を悪くするわ。」

恁く言出でし宮が胸は、斯に盡く其罪を懺悔したらんやうに、多少の涼しきを覺ゆるなりき。

「那様に言ふのなら、還つて阿父さんに話をして見やうけれど、何も其の所爲で體が弱くなると云ふ譯も無かりさうなものぢやないか。」

「いゝえ、全く其の所爲よ。始終そればかり苦になつて、時々考込むと、實に耐らない心持になることがあるんですもの。此間逢ふ前までは那様でもなかつたのだけれど、那から急に――然うね、何と謂つたら可いのだらう――私が那麼に不仕合な身分にして了つたと然う思つて、然ぞ恨んで居るだらうと、氣の毒のやうな、可恐いやうな、而して、何と無く私は悲しくてね。外には何も望は無いから、どうか彼人だけは元のやうにして、那の優しい氣立で、末始終阿父さんや

阿母さんの世話をして貰つたら、甚麽に嬉しからうと、那様事ばかり考へては鬱いで居るのです。いづれ私からも阿父さんに話をしますけれど、當面阿母さんから好く此譯を然う言つて、本當に賴んで下さいな。私二三日の内に行きますから。」

然れども母は投首して、

「私の考量ぢや、どうも今更ねえ、……」

「阿母さんは！　何も那様に貫一さんを惡く思はなくたつて可いわ。折角話をして貰はうと思ふ阿母さんが然云ふ氣ぢや、迚も阿父さんだつて承知をしては下さるまいから……。」

「お前がそれまでに言ふものだから、私は不承知とは言はないけれど……。」

「可いの、不承知なのよ。阿父さんも猶且貫一さんが憎くて、大方不承知なんでせうから、私は憑據にはしないから、不承知なら不承知でも可いの。」

涙含みつゝ宮が焦心になれるを、母は打惑ひて、

「まあ、お聞きよ。それは、ね、……。」

「阿母さん、可いわ――私、可いの。」

「可かないよ。」

「可かなくつても可いわ。」

「あれ、まあ、……何だね。」

「どうせ可いわ。私の事は管つてはおくれでないのだから……。」

我にもあらで迸(ほとばし)る泣聲を、銜と袖に抑へても、宮は急來る涙を止めかねたり。

「何もお前、泣くことは無いぢやないか。可笑な人だよ。だからお前の言ふことは解つて居るから、内へ歸つて、善く話をした上で……。」

「可いわ。そんなら、然うで私にも了簡があるから、奈何とも私は自分で爲るわ。」

「自分で那樣事を爲るなんて、それは可くないよ。恁云ふ事は決してお前が自分で爲ることぢやないのだから、それは可けませんよ。」

「…………。」

「歸つたら阿父さんに善く話を爲やうから、……泣くほどの事は無いぢやないかね。」

「だから、阿母さんは私の心を知らないのだから、頼効が無い、と謂ふのよ。」

「多度お言ひな。」

「言ふわ。」

眞顔作れる母は火鉢の縁に丁と煙管を撃けば、他行持の暫く乾されて弛みし雁首(がんくび)は、ほつくり脫けて灰の中に舞込みぬ。

不幸な家庭における、或日の富山夫婦を點出しておくことも、順序として必要であらう。

門々の松は除かれて七八日も過ぎぬれど、仍ほ正月機嫌の失せぬ富山唯繼は、今日も明日もと行處を求めては、夜を晝に繼ぎて打廻るなりけり。宮は毫かも之を咎めず、出づるも入るも唯彼の爲すに任せて、恰も旅館の主の爲らんやうに、形ばかりの送迎を怠らざると謂ふのみ。

此の夫に對する仕向は兩三年來の平生を貫きて、彼の性質とも病身の故とも許さるゝまでに目慣されて、又彼方よりも咎められざるなり。其と共に唯繼の行も曩日とは漸く變りて、出遊に耽らんとする傾も出で來しを、淺瀨の浪と見し間も無く近き頃より俄に深陷して浮るゝと知れたるを、宮は猶しも措きて咎めず。他は如何にとも爲よ、吾身は如何にとも成らば成れと互に咎めざる心易さを偷みて、異しき女夫の契を繫ぐにぞありける。

恁れども唯繼は仍ほ其妻を忘れんとはせず。始終の憂に瘁れたる宮は決して美しき色を減ぜざりしよ、彼が其の美しさを變へざる限は夫の愛は虧くべきにあらざりき。抑も此に嫁ぎしより一點の愛だに無かりし宮の、今に到りては啻に愛無きに止らずして、陰に厭ひ憎めるにあらずや。其故に彼は漸く家庭の樂からざるをも感ずるにあらずや。其故に彼は外に出でゝ憂を霽すに忙は

しきにあらずや。然れども彼の忘れず時に歸り來るは、又此の妻の美しき顔を見んが爲のみ。既に其顔を見了れば、何ばかりの樂のあらぬ家庭は、彼をして火無き煖爐の傍に處しむるなり。彼の凍えて出でざること無し。出づれば幸ひに其の金力に賴りて勢を得、媚を買ひて、一時の慾を肆まにし、其處には樂むとも知らず樂み、苦むとも知らず苦みつゝ宮が空しき色香に溺れて、內には恁る美しきものを手活の花と眺め、外には到る處に當世の覇を鳴して推廻すが、此上無う紳士の願足れりと心得たるなり。

いで、其の妻は見るも厭しき夫の傍に在る苦を片時も輕くせんとて、彼の繁き外出を見赦して、十度に一度も色を作さゞるを、風引かぬやうに召しませ猪牙とやらの難有き賢女の志とも戴き喜びて、いと堅き家の守と且は等閑ならず念ひにけり。然るは獨り夫のみならず、本家の兩親を始親屬知邊に至るまで一般に彼の病身を憫みて、おとなしき嫁よと賞め揚さぬはあらず、實に彼は某の妻のやうに出行かず、くれがしの夫人のやうに氣儘ならず、又は誰々の如く華美を好まず、强請事せず、而も其等の人々より才も容も立勝りて在りながら、常に內に居て夫に事ふるより外を爲ざるが、最怜しと見ゆるなるべし。宮が褒める秘密は知る者もあらず、躬も絕えて異まるべき穗を露さゞりければ、其の夫に事へて捗々しからぬ僞も僞とは爲られず、却りて人に憫まるゝなんど、其身には量無き幸を享くる心の內に、獨り遣方無く苦める不幸は、又量無しと爲ざらん

や。

十九にして戀人を棄てにし宮は、昨日を夢み、今日を嘆ちつゝ、過せば過さるゝ月日を累ねて、茲に廿あまり五の春を迎へぬ。此春の齎せしものは痛悔と失望と憂悶と、別に空く其の身を老しむる齢なるのみ。彼は釋れざる囚にも同じかる思を悩みて、元日の明るよりいとゞ懊惱の遣る方無かりけるも、年の始といふに臥すべき病ならねば、起き居るまゝに本意ならぬ粧も、色を好める夫に勸められて、例の美しと見らるゝ淺ましさより、猶甚しき淺ましさを其人の陰に陽に恨み悲むめり。

宮は今外出せんとする夫の寒凌ぎに葡萄酒飲む間を暫く長火鉢の前に冊くなり。木振賤しからぬ二鉢の梅の影を帶びて南緣の障子に上り盡せる日脚は、袋棚に据ゑたる福壽草の五六輪咲揃へる葩に輝きつゝ、更に唯繼の身よりは光も出づらんやうに、彼は畫眩き新調の三枚襲を着飾りて、其の最も珍と爲る里昂製の白の透織の絹領卷を右手に引摳ひ、左に宮の酌を受けながら、

「あ、拙い手付……あゝ零れる、零れる！　是は恐入つた。これだからつい餘所で飲む氣にもなりますと謂つて可い位のものだ。」

「ですから多度上つて被入いまし。」

「宜しいかい、宜しいね。宜い。今夜は遲いよ。」

「何時頃お歸來になります。」

「遲いよ。」

「でも大約時間を極めて置いて下さいませんと、お待ち申して居る者は困ります。」

「遲いよ。」

「それぢや十時には皆寢みますから。」

「遲いよ。」

又言ふも煩しくて宮は口を閉ぢぬ。

「遲いよ。」

「…………。」

「驚くほど遲いよ。」

「…………。」

「おい、些と。」

「…………。」

「おや、お前慍つたのか。」

「…………。」

「慍らんでも可いぢやないか、おい。」
彼は續け樣に宮の袖を曳けば、
「何を作るのよ。」
「返事を爲んからさ。」
「お遲いのは解りましたよ。」
「遲くはないよ、實は。だからして、まあ機嫌を直すべし。」
「お遲いならお遲いで宜うございますから……」
「遲くはないと言ふに、お前は近來直に慍るよ、何云ふのかね。」
「一つは病氣の所爲かも知れませんけれど、」
「一つは俺の浮氣の所爲かい。恐入つたね。」
「……。」
「お前一つ飲まんかい。」
「私澤山。」
「ぢや俺が半分助けて遣るから。」
「いゝえ、澤山なのですから。」

「まあ然う言はんで、少し、注ぐ眞似。」
「欲くもないものを、貴方は。」
「まあ可いさ、お酌(しやく)は、それ恁云ふ鹽梅(あんばい)に、愛子流(あいこりう)かね。」
妓の名を聞ける宮の如何に言ふらん、と唯繼は陰に樂み待つなる流眄を彼の面に迸れるなり。
宮は知らず貌に一口の酒を啣みて、眉を顰めたるのみ。
「もう飲めんのか、ぢや此方へお寄來し。」
「失禮ですけれど、」
「此上へもう一盃注いで貰はう。」
「貴方、十時過ぎましたよ、早く被行(いらつしや)いませんか。」
「可いよ、此の二三日は別に俺の爲る用は無いのだから。それで實はね、今日は少し遲くなるのだ。」
「然うでございますか。」
「遲いと云つたつて怪いのぢやない。此の廿八日に傳々會(でんでんくわい)の大溫習が有るといふ譯だらう、因で今日五時から糸川の處へ集つて下溫習を爲るのさ。俺は、それお特得の、(親々に誘(いざな)はれ、難波(なには)の浦を船出して、身を盡したる、憂きおもひ、泣いてチ、チ、あかしのチントン風待にテチン

チンツン……。)」

厭しげに宮の餘所見せるに、乘地の唯繼は愈よ聲を作りて、

「(たま〱逢ひはア――ア逢ひイ――ながらチツン〱〱つれなき嵐に吹分けられエヽ、エ、エ、、、ツン〱〱テツテツトン、テツトン國へ歸ればア、、、、父イ、、、母のチ、、チン〱〱〱〱チイン思ひも寄らぬ夫定……。)」

「貴方もう好加減になさいましよ。」

「もう少し聽いてくれ、(立つる操を破ら……。)」

「又寛り伺ひますから、早く被行いまし。」

「然し、巧くなつたらう、ねえ、些と聞けるだらう。」

「私には解りませんです。」

「是は恐入つた、解らないのは情無いね、少し解るやうに成つて貰はうか。」

「解らなくても宜しうございます。」

「何、宜しいものか、淨琉璃の解らんやうな頭腦ぢや爲方が無い。お前は一體冷淡な頭腦を有つて居るから、それで淨琉璃などを好まんのに違無い、奈何も然うだ。」

「那樣事はございません。」

「何、然うだ。お前は一體冷淡さ。」
「愛子は奈何でございます。」
「愛子か、他は那で冷淡でないさ。」
「それで能く解りました。」
「何が解つたのかね。」
「解りました。」
「些も解らんよ。」
「まあ可うございますから、早く被行いまし、而して早くお歸りなさいまし。」
「うゝ、是は恐入つた、冷淡でないぢや早く歸る、お前待つて居るか。」
「私は何時でも待つて居りますぢや御座いませんか。」
「是は冷淡でない！」

漸く唯繼の立起れば、宮は外套を着せ掛けて、不取敢彼に握手を求めぬ。這は決して宮の冷淡ならざるを證するに足らざるなり。故に、此の女夫の出入に握手するは、夫の始より命じて習せし躾なるをや。

夫を玄關に送り出でし宮は、旋て氷の窖などに入るらん想しつゝ、是非無き歩を運びて居間に

還りぬ。彼は其夫と偕に在るを謂はんやう無き累と爲なれど、又其の獨を守りて此家に處るゝをも堪へ難く悒き(いぶせき)ものに思へるなり。必しも力むるとにはあらねど、夫の前には自ら氣の張ありて、左に右に然るべくは振舞へど、恣まなる身一箇となれば、遽に慵く打勞れて、心は整へん術も知らず紊れに亂るゝが常なり。

火鉢に倚りて宮は我を喪へる躰なりしが、如何に思入り、思回し思窮(おもひつ)むればとて、解くべきにあらぬ胸の內の、終に明けぬ闇に彷徨へる可悲さは、在るにもあられず身を起して彼は障子の外なる緣に出でたり。

麗しく冱えたる空は遠く三四(みつよつ)の凧の影を點じて、見遍す庭の名殘無く冬枯れたれば、淺露(あからさま)なる日の光の呟きのみにて、啼狂ひし梢の鵯(ひよ)の去りし後は、隔てる隣より戞々と羽子突く音して、なか〳〵此には其の寒さを忍ぶ値あらぬを、彼は然れども少時居て、又空を眺め、又冬枯を見遣り、同じき日の光を仰ぎ、同じき羽子の音を聞きて、抑へんとはしたりけれども抑へ難さの竟に苦しく、再び居間に入ると見れば、其處にも留らで、書齋の次なる寢間に入るより、身を抛(なげう)ちてベツドに伏したり。

厚き蓐の積れる雪と眞白き上に、亂疊める幾重の衣の彩を爭ひつゝ、妖なる姿の意も介かず橫れるを、窓の帷(カアテン)を透して隱々照したる、實に匂も零るゝやうにて、彼は浪に漂ひし人の今

打揚げられたるも現ならず、幾と力竭きて絶入らんとするが如く、止だ手枕に横顔を支へて、力無き眼を瞪れり。竟には溜息吻きて其目を閉づれば、片寢に倦める面を内向けて、裾の寒さを佗しげに身動したりしが、猶も底止無き思の淵は彼を沈めて遑さゞるなりけり。

隅棚の枕時計は奕と秒刻を忘れぬ。益す靜に、益す明かなる閨の内には、空しとも空しき時の移るともなく移るのみなりしが、忽ち差入る鳥影の軒端に近く、俯したる宮が肩頭に打遁りて飜きつ。

良有りて彼は嫋くベツドの上に起直りけるが、鬢の縺れし頭を傾けて、帷の隙より僅に眺めらるゝ庭の面に見るとしもなき目を遣りて、當所無く心の彷徨ふ蹤を追ふなりき。

久しからずして彼は此をも出でゝ又居間に還れば、直に簞笥の中より友禪縮緬の帶揚を取出し、心に籠めたりし一通の文とも見ゆるものを抜きて、這度は主の書齋に持ち行きて机に向へり。其の巻紙は貫一が遺せし筆の跡などにはあらで、いつかは宮の彼に送らんとて、別れし後の思の丈を竊に書聯ねたるものなりかし。

往年宮は田鶴見の邸内に彼を見しより、いとゞ忍びかねたる胸の内の訴へん方もあらぬ切なさに、唯心寛の假初に援りける筆ながら、なか〳〵口には打出し難き事を最好く書きも陳けも爲しを、あはれ彼人の許に送りて、思ひ知りたる今の悲さを告げばやと、一圖の意をも定めしが、又

案ずれば、其文の果して貫一の手に觸れ、目にも入るべきか。縦し然ればとて、憎み怨める怒の餘に投返されて、人目に曝さるゝ事などあらば、徒に身を滅す疵を求めて終りなんをと、遣れば火に入る蟲の危く、捨つるは惜くも、旋て好き首尾の有らんやうに據無き頼を繋けつゝ、彼は懊惱に堪へざる毎に取出でゝは寫し易ふる傍ら、或は書添へ、或は改めなどして、此文に向へば自ら其人に向ふが如く、其人に向ひては幾と言盡して心殘のあらざる如く、止之に因りて欲するまゝの夢をも結ぶに似たる快きを覺ゆるなりき。恁して得送らぬ文は寫せしも灰となり、反古となりて、彼の帶揚に籠められては、いつまで草の可哀や用らるゝ果も知らず、宮が手習は實に久うなりぬ。

些箇に慰められて過せる身の荒尾に邂逅ひし嬉しさは、何に似たりと謂はんも愚にて、此人をこそ仲立にて、積る思を遂げんと頼みしを、仇の如く與せられざりし悲さに、然らでも切なき宮が胸は搔亂れて、今は漸く危きを懼れざる覺悟も出で來て、いつまで草のいつまで恁てあらんや、文は送らんと、此の日頃思ひ立ちてけり。

紙の良きを擇び、筆の良きを擇び、墨の良きを擇び、彼は意して其字の良きを殊に擇びて、今日の今ぞ始めて假初ならず寫さんと爲なる。打顫ふ手に十行餘認めしを、衝と裂きて火鉢に差燕べければ、焔の急に炎々と騰るを、可疎しと眺めたる折しも、紙門を啓けて其光に惧えし婢は、

覺えず主の氣色を異みつゝ、

「あの、御本家の奥様がお出で遊ばしました。」

芝公園でゆくりなくお宮に逢つた荒尾讓介は、今度は自身で昔しの同窓間貫一をわざ〳〵訪問することになる。さすが商賣柄、冷酷無情を主義のやうにしてゐる貫一も、學校時代から畏敬してゐた荒尾の前には、昔しの同窓らしい懷かしさもあつて、昔しながらの人間間貫一が頭を擡げかけて來るのである。ところで其處へ赤樫滿枝がやつて來て、荒尾も亦恩人に對する連帶責任の債務で、滿枝に窘められてゐることが解るのである。

主夫婦を倂せて燒亡せし鰐淵が居宅は、然るほどに貫一の手に賴りて其跡に改築せられぬ。有形よりは小躰に、質素を旨としたれど專ら舊の構造を模して差はざらんと勉めしに似たり。

間貫一と陶札を掲げて、彼は此の新宅の主になれるなり。家督たるべき直道は如何にせし。彼は始より此の不義の遺產に手をも觸れざらんと誓ひ、且之を貫一に與へて、其物は正業の資たれ、其人は改善の人たれと冀ひしを、貫一は今此家の主となれるに、仍先代の志を飜さずして、益す盛に例の貪を營むなりき。然れば彼と貫一との今日の關繫は如何なるものならん、絕えて之を知る者あらず。凡そ人生箇々の裏面には必ず如此き內情若くは秘密とも謂ふべき者ありながら、

幸に他の穿鑿を免れて、曖昧の裏に葬られ畢んぬる例尠からず。二代の鰐淵なる間の家の此の一件も亦貫一と彼との外に洩れざるを得たり。

恁して今は鰐淵の手代ならぬ三番町の間は、其向に有數の名を成して、外には善く貸し、善く斂むれども、內には事足る老婢を役ひて、僅に自炊ならざる男世帶を張りて、仍も奢らず、樂まず、心は昔日の手代にして、趣は失意の書生の如く、依然たる變物の名を失はで居たり。

出ては有繫に勞れて日暮に歸り來にける貫一は、彼の常として、吾家ながら人氣無き居間の內を、旅の木蔭にも休へる想しつゝ、稍興冷めて坐りも遣らず、物の悲き夕を特に獨の感じ居れば、老婢はランプを持ち來りて、

「今日三時頃でございました、お客樣が見えまして、明日又今頃來るから、是非內に居てくれるやうにと有仰つて、お名前を伺つても、學校の友達だと言へば可い、と然う有仰つてお歸りになりました。」

「學校の友達？」臆測にも知る能はざるは此の藪から棒の主なり。

「甚麼風の人かね。」

「然やうでございますよ、年紀四十約の蒙茸と髭髯の生えた、身材の高い、剛い顏の、全で壯士見たやうな風躰をしてお在でした。」

「…………。」些の憶起す節もありや、と貫一は打案じつゝも半は怪むに過ぎざりき。
「而して、まあ大相横柄な方なのでございます。」
「明日三時頃に又來ると？」
「然やうでございますよ。」
「誰か知らんな。」
「何だか誠に風の悪さうな人躰で御座いましたが、明日參りましたら通しませうで御座いますか。」
「ぢや用向は言つては行かんのだね。」
「然やうでございますよ。」
「宜しい、會つて見やう。」
「然やうでございますか。」起ち行かんとせし老婢は又居直りて、
「それから何でございました、間も無く赤樫さんが被入いまして、」
貫一は懌ばざる色を作して之に應へたり。
「神戸の蒲鉾を三枚、見事なのでございます。それに藤村の蒸羊羹を下さいまして、私まで毎度又頂戴物を致しましたので御座います。」

彼は益す不快を禁じ得ざる面色して、應答も爲で聽き居たり。

「而して明日五時頃些とお目に掛りたいから、然う申上げて置いてくれと有仰つてゞ御座いました。」

可しとも彼は口には出さで、寧ろ止めよとやうに忙く領けり。

學校友達と名宣りし客は其言の如く重ねて訪ひ來ぬ。不思議の對面(たいめん)に駭(おどろ)き惑へる貫一は、迅雷(じんらい)の耳を掩ふに遑(いとま)あらざらんやうに劇く吾を失ひて、頓には其の惘然たるより覺むるを得ざるなりき。荒尾(あらを)讓介(じやうすけ)は席の温る間の手弄に放ちも遣らぬ下髯の、長く忘れたりし友の今を如何にと觀るに忙しかり。

「殆ど一昔と謂うても可い程になるのぢやから話は澤山ある、けれども之より先に聞きたいのは、君は今日でも僕をじや、此の荒尾を親友と思うて居るか、奈何かと謂ふのじや。」

答ふべき人の胸は仍自在に語るべくもあらず亂れたるなり。

「考へる迄はなからう。親友と思うて居るなら、居る、然うなけりや、ないと言ふ迄で、是(イエス)か否(ノウ)かの一つじや。」

「そりや昔は親友であつた。」

彼は覺束無げに言出せり。
「然う。」
「今は然ぢやあるまい。」
「何爲にな。」
「其後五六年も全く逢はずに居たのだから、今では親友と謂ふことは出來まい。」
「何有五六年前も一向親友ではありやせんぢやつたではないか。」
貫一は目を側めて彼を訝りつ。
「然ぢやらう、學士になるか、高利貸になるかと云ふ一身の浮沈(ふちん)の場合に、何等の相談も爲んのみか、それなり失踪して了うたのは、何處が親友なのか。」
其の常に懟ぢ且悔(あつくゆ)る一事を責められては、癒えざる瘡をも割るゝ心地して、彼は苦しげに容を斂め、聲をも出さで居たり。
「君の情人(ラヴア)は君に負いたぢやらうが、君の友は決して君に負かん筈じや。其の友を何爲に君は棄てたか。其通り棄てられた僕ぢやけれど、恁して又訪ねて來たのは、未だ君を實は棄てんのじやと思ひ給へ。」
學生たりし荒尾！　參事官たりし荒尾！　尾羽打枯せる今の荒尾の姿は變りたれど、猶一片の

變らぬ物ありと知れる貫一は、夢とも消えて、去りし、去りし昔の跡無き跡を悲しと偲ぶなりけり。

「然し、僕が棄てゝも棄てんでも、那樣事に君は痛痒を感ずるぢやなからうけれど、僕は僕で、友の德義として左に右一旦は棄てんで訪ねて來た。で、斷然棄つるも、又棄てんのも、唯今日にある意じや。

今では荒尾を親友とは謂へん、と君の言うた所を以つて見ると、又今更親友であることを君は望んでは居らんやうじや。然であるならば僕の方でも敢て望まん、立派に名宣つて僕も間貫一を棄つる！」

貫一は頭を低れて敢て言はず。

「然し、今日まで親友と思うて居つた君を棄つるからには、是が一生の別になるのぢやから、其の餞行として一言云はんけりやならん。

聞、君は何の爲に貨を殖へるのじや。彼の大いなる樂とする者を奪れた爲に、其に易へる者として金錢といふ考を起したの乎。其も可からう。可いとして措く。けれどもじや、其を獲る爲に不義不正の事を働く必要が有る乎。君も現在他から苦められて居る軀ではないのか。然なれば己が又他を苦むるのは尤も用捨すべき事ぢやらうと思ふ。それが他を苦むると謂うても、難儀に附入つて、而して其血を搾るのが君の營業、殆ど强奪に等い手段を以つて金を殖へつゝ、君はそれ

で今日慰められて居るの乎。如何に金錢が總ての力であるか知らんけれど、人たる者は惡事を行つて居つて、一刻でも安樂に居らるゝものではないのじや。それとも、君は怡然として樂んで居る乎、長閑な日に花の盛を眺むるやうな氣持で催促に行つたり、差押を爲たりして居る乎。奈何かい、間。」

彼は愈よ口を閉ぢたり。

「恐くじや。然云ふ氣持の事は、此の幾年間に一日でも有りはせんのぢやらう。君の顏色を見い！　全で罪人じやぞ。獄中に居る者の面じや。」

別人と見るまでに彼の淺ましく瘁れたる面を矚りて、譲介は涙の落つるを覺えず。

「間、何で僕が泣くか、君は知つて居るか。今の間ぢや知らんぢやらう。幾多貨を殖へた所で、君は其分では到底慰めらるゝ事はありはせん。病が有るからと謂うて毒を飲んで、其病が痊るぢやらうか。君は恰も藥を飲む事を知らんやうなものぢやぞ。僕の友であつた間は那樣痴漢ぢやなかつた、して見りや發狂したのぢや。發狂してからに馬鹿な事を爲居る奴は尤むるに足らんけれど、一婦人の爲に發狂した其の根性を、彼の友として僕が慙ぢざるを得んのじや。間、君は盜人と言れたぞ。罪人と言れたぞ、狂人と言はれたぞ。少しは腹を立てい！　腹を立てゝ僕を打つとも蹴るとも爲て見い！」

彼は自ら言ひ、自ら憤り、尙自ら打ちも蹴も爲んずる色を作して速々答を貫一に逼れり。

「腹は立たん！」

「腹は立たん？　それぢや君は自身に盜人とも、罪人とも……。」

「狂人とも思つて居る。一婦人の爲に發狂したのは、君に對して實に面目無いけれど、旣に發狂して了つたのだから、どうも今更爲やうが無い。折角ぢやあるけれど、此儘棄置いてくれ給へ。」

貫一は纔に恁く言ひて已みぬ。

「然うか。それぢや君は不正な金錢で慰められて居るのか。」

「未だ慰められては居らん。」

「何日慰めらるゝのか。」

「解らん。」

「而して君は妻君を娶うたか。」

「娶はん。」

「何爲娶はんの乎、恁して家を構へて居るのに獨身ぢや不都合ぢやらうに。」

「然でもないさ。」

「君は今では彼の事を奈何思うて居るな。」
「彼とは宮の事かね。他は畜生さ！」
「然し、君も今日では畜生ぢやが、高利貸などは人の心は有つちや居らん、人の心が無けりや畜生じや。」
然云ふけれど、世間は大方畜生ぢやないか。」
「僕も畜生かな。」
「…………。」
「間、君は彼が畜生であるのに激して猶且畜生になつたのじやな、若し彼が畜生であつたのを改心して人間に成つたと爲たら、同時に君も畜生を罷めにやならんじやな。」
「彼が人間に成る？　能はざる事だ！　僕は高利を貪る畜生だけれど、人を欺く事は爲んのだ、詐つて人の誠を受けて、而して其れを賣るやうな殘忍な事は決して爲んのだ。始めから高利と名宣つて貸すのだから、否な者は借りんが可いので、借りん者を欺いて貸すのぢやない。宮の如き畜生が何で再び人間に成り得るものか。」
「何爲成り得んのか。」
「何爲成り得るのか。」

「然なら君は彼の人間に成り得んのを望むのか。」

「望むも望まんも、那麼者に用は無い！」

寧ろ其面に唾せんとも思へる貫一の氣色なり。

「そりや彼には用は無いぢやらうけれど、君の爲に言ふべきことぢやと思ふから話すのぢやが、彼は今では大いに悔悟して居るぞ、君に對して罪を悔いて居るぞ！」

貫一は吾を忘れて嗤笑ひぬ。彼は其の如何に賤むべき乎、謂はんやうもあらぬを念ひて、更に嗤笑ひ、猶嗤笑ひ、遏めんとして又唾笑ひぬ。

「彼も然して悔悟して居るのぢやから、君も悔悟するが可からう、悔悟する時ぢやらうと思ふ。」

「彼の悔悟は彼の悔悟で、僕の與る事は無い。畜生も少しは思知つたと見える、其も可からう。」

「先頃計らず彼に逢うたのじや、すると、僕に向うて涙を流して、そりや眞實悔悟して居るのぢや。而して僕に詫を爲てくれ、其が成らずば、君に一遍逢せてくれ、と縋つて頼むのじやな、けれど僕も思ふ所が有るから拒絶はした。又君に對しても、彼が其様に悔悟して居るから容して遣れと勸めは爲ん、其は別問題じや。但僕として君に言ふ所は、彼は悔悟して獨り苦んで居る。則ち彼は自ら罰せられて居るのぢやから、君は君として怨を釋いて可からうと思ふ。君が其怨を釋いたなら、昔の間に復るべきぢやらうと考へるのじや。

君は今のところ慰められて居らん、それで又、何日慰めらるゝとも解らんと言うたな、然しじや、彼が悔悟してからに其様に思うて居ると聞いたら、君は其を以つて大いに慰められはせんかな。君が此の幾年間に得た金錢、それは幾多か知らんけれど、其の寡からん金錢よりは、彼が終に悔悟したと聞いた一言の方が、遙に大いなる力を以つて君の心を慰むるであらうと思ふのぢやが、奈何か。」

「それは僕が慰められるよりは、宮が苦まなければならん爲の悔悟だらう。宮が前非を悟つた爲に、僕が失つた者を再び得られる譯ぢやない、然して見れば、僕の今日は其に因つて少も慰められる所は無いのだ。憎いことは彼は飽くまで憎い、が、其の憎さに僕が慰められずに居るのではないからして、宮共者の一身に向つて、僕は棄てられた怨を報いやうなどゝは決して思つて居らん、畜生に讐を復す價は無いさ。

今日になつて彼が悔悟した、それでも好く悔悟したと謂ひたいけれど、是は固より然う有るべき事なのだ。始に那麼不心得を爲なかつたら、悔悟する事は無かつたらうに——不心得であつた、非常な不心得であつた！」

彼は黯然として空く懷へるなり。

「僕は彼の事は言はんのじや、又彼が悔悟した爲に君の失うた者が再び得らるゝ譯でないから

それぢや慰められんと謂ふのなら、それで可いのじや。要するに、君は其の失うた者が取返されたら可いのぢやらう、而して其の目的を以つて君は貨を殖へて居るのぢやらう、なあ、然すりや其の貨さへ得られたら、好んで不正な營業を爲る必要は有るまいが。君が失うた者が有る事は知つて居る。其が爲に常に樂まんのも、同情を表して居る、因で金錢の力に頼つて慰められやうとして居る、に就いては異議も有るけれど、それは君の考に委する。貨を殖へるも可い、可いとする以上は大いに富むべしじや。けれど、富むと云ふのは貪つて聚むるのではない。又貪つて聚めんけりや貨は得られんのではない、不正な手段を用んでも、富む道は幾多も有るぢやらう。君に言ふのも、な、其の目的を變へよではない、止だ手段を改めよじや。路は違へても同じ高嶺の月を見るのぢやが。」

「辱いけれど、僕の迷は未だ覺めんのだから、間は發狂して居る者と想つて、一切管ひ付けずに措いてくれ給へ。」

「然うか。奈何あつても僕の言は用られんのじやな。」

「容してくれ給へ。」

「何を容すのぢや！　貴樣は俺を棄てたのではないか、俺も貴樣を棄てたのじやぞ、容すも容さんも有るものか。」

「今日限互に棄てゝ別れるに就いては、僕も一箇（ひとつ）聞きたい事が有る。それは君の今の身の上だが、奈何したのかね。」
「見たら解るぢやらう。」
「見たばかりで解るものか。」
「貧之して居るのよ。」
「それは解つて居るぢやないか。」
「それ丈じや。」
「それ丈の事が有るものか、何で官途を罷めて、而して那様（そんな）に貧乏（びんばふ）して居るのか、様子が有りさうぢやないか。」
「話した所で狂人には解らんのよ。」
荒尾は空嘯きて起たんと爲なり。
「解つても解らんでも可いから、まあ話す丈は話してくれ給へ。」
「其を聞いて何爲る。あゝ貴様は何か、金でも貸さうと云ふのか。No thank じや、赤貧洗ふが如く窮して居つても、心は怡然として樂んで居るのじや。」
「それだから猶、何爲て然う窮して、其を又樂んで居るのか、其には何か事情が有るのだらう、

から、其を聞せてくれ給へと言ふのだ。」
荒尾は故らに哈々として笑へり。
「貴様如き無血蟲が那様事を聞いたとて何が解るものか。人間らしい事を言ふな！」
「然うまで辱められても辭を返すことの出來ん程、僕の軀は腐つて了つたのだ。」
「固よりじや。」
「恁う腐つて了つた僕の軀は今更爲方が無い、けれども、君は立派に學位を取つて、參事官の椅子にも居た人、國家の爲に有用の器であることは、決して僕の疑はん所だ。で、僕は常に君の出世を豫想し、又陰に其を禱つて居つたのだ。君は僕を畜生と言ひ、狂人と言ひ、賊と言ふけれど、君を懷ふ念の僕の胸中を去つた事はありません。今日迄君の外には一人の友も無いのだ。一昨年であつた、君が靜岡へ赴任すると聞いた時は、嬉くもあり、可懷くもあり、又考へて見れば、自分の身が悲くもなつて、僕は一日飯も食はんで居た。其に就けても、久し振で君に逢つて慶賀も言ひたいと念つたけれど、奈何も逢れん僕の軀だから、切て陰ながらでも君の出世の姿が見たいと、新橋の停車場へ行つて、君の立派に成つたのを見た時は、何も彼も忘れて僕は唯嬉くて涙が出た。」
さてはと荒尾も心陰に頷きぬ。

一君の出世を見て、それほど嬉しかつた僕が、今日君の那様に零落して居るのを見る心持は甚麽であるか、察し給へ。自分の身を顧ずに恁云ふ事を君に向つて言ふべきではないけれど、僕はもう己を棄てゝ居るのだ、一婦女子の詐如きに憤つて、其が爲に一身を過つたと知りながら、自身の覺悟を以て匡正することの出來んと謂ふのは、全く天性愚劣の致す所と、自ら恨むよりは無いので、僕は生きながら腐れて、是で果てるのだ。君の親友であつた間貫一は既に亡き者に成つたのだ。と然ふ想つてくれ給へ。であるから、是は間が言ふのではない、君の親友の或者が君の身を愛んで忠告するのだとして聽いてくれ給へ。何云ふ事情か、君が話してくれんから知れんけれど、君の軀は十分自重して、社會に立つて壯なる働を作して欲いのだ。君は然して窮迫して居るやうだけれど、決して世間から棄てられるやうな君でない事を僕は信ずるのだから、一箇人として己の爲に身を愛みたまへと謂ふのではなく、國家の爲に自重し給へと願ふのだ。君の親友の或者は君が其才を用る爲に社會に出やうと爲るならば、及ぶ限の助力を爲る精神であるのだ。」

貫一の面は病などの忽ち愈えけんやうに輝きつゝ、如此く潔くも麗しき辭を語れるなり。

「うゝ、それぢや君は何か、僕の恁して落魄して居るのを見て氣毒と思ふのか。」

「君が謂ふほどの畜生でもない！」

「其處じや、間。世間に貴様のやうな高利貸が在る爲に、適れ用らるべき人才の多くがじや、

名を傷け、身を誤られて、社會の外に放逐されて空く朽つるのじやぞ、國家の爲に自重せいと、僕の如き者にでも然う言うてくるゝのは忝いが、同じ筆法を以つて、君も社會の公益の爲に共の不正の業を罷めてくれい、と僕は又賴むのじや。今日の人才を滅す者は、曰く色、曰く高利貸ぢやらう。此通り零落れて居る僕が氣毒と思ふなら、君の爲に艱されて居る人才の多くを一層不敏と思うて遣れ。

君が愛に失敗して苦しむのもじや、或人が金錢の爲に苦むのも、苦むと云ふ點に於ては差異は無いぞ。で、僕も恁して窮迫して居る際ぢやから、憂を分つ親友の一人は誠欲いのじや、昔の間貫一のやうな友が有つたらばと思はん事は無い。其の友が僕の身を念うてくれて、社會へ打つて出て壯に働け、一臂の力を假さうと言ふのであつたら、僕は如何に嬉しからう！ 世間に最も喜ぶべき者は友、最も惡むべき者は高利貸じや。如何に高利貸の惡むべきかを知つて居る丈、僕は益す友を懷ふのじや。其の昔の友が今日の高利貸――其の惡むべき高利貸！ 吾又何をか言はんじや。」

彼は口を閉ぢて、貫一を疾視せり。

「段々の君の忠告、僕は難有い。猶自分にも篤と考へて、此の腐れた軀が元の通潔白な者に成り得られるなら、其に越した幸は無いのだ。君も亦自愛してくれ給へ。僕は君には棄てられても、君の大いに用られるのを見たいのだ。又必ず大いに用られなければならん其人が、然して不遇で

居るのは、殘念であるよりは僕は悲い。那様に念つても居るのだから、一遍君の處も訪ねさしてくれ給へ。何處も今居るかね。」

「まあ、高利貸などは來て貰はん方が可い。」

「其日は友(フレンド)として訪ねるのだ。」

「高利貸に友は持たんものな。」

雍(しとや)かに紙門(ふすま)を押啓きて出來れるを、誰かと見れば滿枝なり。彼如何なれば不躾にも此席には顯れけん、と打駭ける主よりも、荒尾が心の中こそ更に匹ふべくもあらざるなりけれ。いでや、彼は窘(くるし)みて其の長き髯をば痛に拈りつ。然れど狼狽へたりと見られんは口惜しとやうに、遽に其手を胸高に拱きて、動かざること山の如しと打控へたる様も、自ら故とらしくて、亦見好げにはあらざりき。

滿枝は先づ挨拶して、さて荒尾に向ひて一際禮を重く、而も躬は手の動き、目の視るまで、專ら貴婦人の如く振舞ひつゝ、笑むともあらず面を和げて姑く辭を出さず。荒尾は此際なか／＼默するに堪ずして、

「是は不思議な所で！　成程間とは御懇かな。」

「君は奈何して此方を識つて居るのだ。」

左瞻右視して貫一は呆るゝのみなり。

「そりや少し識つて居る。然し、長居はお邪魔ぢやらう、大きに失敬した。」

「荒尾さん。」

満枝は遑さじと呼留めて、

「恁云ふ處で申上げますのも如何で御座いますけれど、」

「あゝ、そりや此で聞くべき事ぢやない。」

「けれど毎も御不在ばかりで、お話が付きかねると申して弱り切つて居りますで御座いますから、」

「いや、會うたところでからに話の付けやうもないのじや。遁げも隱れも爲んから、まあ時節を待つて貰はうさ。」

「それは甚麼にもお待ち申上げますけれど、貴方の御都合の宜しいやうにばかり致しては居られませんで御座います。そこはお察しあそばしませな。」

「うゝ、隨分酷い事を察しさせられるのじやね。」

「近日に是非私お願ひ申しに伺ひますで御座いますから、どうぞ宜しく。」

「そりや一向宜しくないかも知れん。」

「あゝ、然う、此の前でございましたか、那の者が伺ひました節、何か御無禮な事を申上げましたとかで、大相な御立腹で、お刀をお抜き遊ばばして、斬つて了ふとか云ふ事が御座いましたさうで。」

「有つた。」

「あれ、本當に然やうな事を遊ばしましたので？」

滿枝は彼に恥ぢよとばかり嗤笑ひぬ。然知つたる荒尾は飽くまで眞顏を作りて、

「本當とも！　實際那奴斫却つて了はうと思うた。」

「然しお考へ遊ばしたで御座いませう。」

「まあ其邊じや。那でも犬猫ぢやなし、斬捨にもなるまい。」

「まあ。怖い事ぢや御座いませんか。私なぞは滅多に伺ふ譯には參りませんで御座いますね。」

夫は誰が事を言ふならんとやうに、荒尾は項を反して噪き笑ひぬ。

「僕が美人を斬るか、其の目で僕が殺さるゝか。どう歸つて、刀でも拭いて置かう。」

「荒尾君、夕飯の支度が出來たさうだから、食べて行つてくれ給へ。」

「其は折角ぢやが、盜泉の水は飲まんて。」

「まあ貴方、私お給仕を勤めます。さあ、お下に被居つて。」
滿枝は荒尾の立てる脚下に褥を推付けて、賓に還さじと主にも劣らず最惜む樣なり。
「全で御夫婦のやうじやね。是は好一對じや。」
「其のお意で、奈何ぞお席に被居つて。」
固より留らざるべき荒尾は終に行かんとしつゝ、
「間、貴樣は……。」
「…………。」
「…………。」
彼は唇の寒かるべきを思ひて、空く鬱仰して歸り去れり。其の言はざりし語は直に貫一の胸に響きて、彼は人の去にける迹も、仍ほ聽くに苦しき面を得擧げざりけり。

程も有らずランプは點されて、止だ在りけるまゝに竦み居たる彼の傍に置るゝと與に、其光に照さるゝ滿枝の姿は、更に粧をも加へけんやうに怪しからず妖艶に、宛然色香を擅にせる牡丹の枝を咲撓めたる風情にて、彼は親しげに座を進めつ。
「間さん、貴方奈何あそばして。非常にお鬱ぎ遊ばして被居るぢや御座いませんか。」

貫一は怠くも纔に目を移して、
「一躰貴方は奈何して荒尾を御存じなのですか。」
「私よりは、貴方が那方の御朋友(ごほういう)で被居るとは、實に私意外で御座いますわ。」
「貴方は奈何して御存じなのです。」
「まあ債務者のやうな者なので御座います。」
「債務者！　荒尾が？　貴方の？」
「私が直接に關係した譯ぢや御座いませんのですけれど。」
「はあ、而して額(たか)は若干(どれほど)なのですか。」
「三千圓約でございますの。」
「三千圓？　それで其の直接の貸主と謂ふのは何處の誰ですか。」
滿枝は彼の邊に捩向きて膝の前むをさへ覺えざらんとするを見て、歪むる口角に笑を忍びつゝ、
「貴方は實に現金で被在(いらつしや)るのね。御自分のお聽になりたい事は熱心にお成りで、平生私がお話でも致すと、全で取合つても下さいませんのですもの。」
「まあ可いです。」
「些とも可い事はございません。」

「うゝ、然すると直接の貸主と謂ふのが有るのですね。」
「存じません！」
「お話し下さいな、様子に由つては其金は私から辨償しやうとも思ふのですから。」
「私貴方からは戴きません。」
「上げるのではない、辨償するのです。」
「いゝえ、貴方とは御相談になりません。又貴方が是非辨償なさると云ふ事ならば、私那の債權を棄てゝ了ひます。」
「それは何爲ですか。」
「何爲でも宜しう御座いますわ。ですから、貴方が辨償なさらうと思召すなら、私に債權を棄てゝ了へと有仰つて下さいまし。然う致せば私喜んで棄てます。」
「何云ふ譯ですか。」
「何云ふ譯で御座いますか。」
「甚だ解らんぢやありませんか。」
「勿論解らんので御座いますとも、私自分で自分が解らんくらゐで御座いますもの。然し貴方も、間さん、隨分お解りに成りませんのね。」

「いゝや、僕は解つて居ます。」

「えゝ、解つて被居りながら些もお解りにならないのですから、私も益す解らなくなりますですから、然う思つて被居いまし。」

滿枝は金煙管に手爐の縁を丁と拍ちて、男の顔に流眄の怨を注ぐなり。

「まあ、然云ふ事を言はずに、左も右もお話を被成つて下さい。」

「御勝手ねえ、貴方は。」

「さあ。お話し下さいな。」

「唯今お話致しますよ。」

滿枝は遽に煙管を索めて、さて傍に人無き若く緩に煙を吹きぬ。

「貴方の債務者であらうとは實に意外だ。」

「…………。」

「どうも事實として信ずる事は出來んくらゐだ。」

「…………。」

「三千圓! 荒尾が三千圓の負債を何で爲たのか、殆ど有得べき事でないのだけれど、……」

「…………。」

誰見れば、滿枝は仍も煙管を放たざるなり。

「さあ、お話し下さいな。」

「這麼に遲々して居りましたら、然ぞ貴方憤つたくて被居いませう。」

「憤つたいのは知れて居るぢやありませんか。」

「貴方は何を言つてお在なのです！」

「はい〳〵恐入りました。それぢや早速お話を致しませう。」

「どうぞ。」

「蓋か御承知で被居いましたらう。前に宅を居りました向坂と申すの、他が靜岡へ參つて、今では些と盛に遣つて居るので御座います。それで、那方は靜岡の參事官でお在なのでした、然やうで御座いましたらう。其頃向坂の手から何したので御座います。究竟那方も其件から諭旨免官のやうな事にお成なすつて、又東京へお還りにならなければ爲方が無いので、彼方を引拂ふのに就いて、向坂から話が御座いまして、宅の方へ始は委任して參つたので御座いましたけれど、丁度去年の秋頃から全然此方へ引繼いで了ふやうな都合に致しましたの。

然し、それは取立に骨が折れるので御座いましてね、那して止と遊んでお在も同樣で、飜譯か

何か少許爲さる御樣子なのですから、今の所では奈何にも手の着けやうが無いので御座いますわ。」

「はあ、成程。然し他が何で三千圓と云ふ金を借りたか知らん。」

「それは那方は連帶者なので御座います。」

「はあ！　然し借主は何者ですか。」

「大館朔郞と云ふ岐阜の民主黨員で、選擧に失敗したものですから、其の運動費の後肚だとか云ふ話でございました。」

「うむ、如何にも！　大館朔郞……それぢや事實でせう。」

「御承知で被居いますか。」

「其は荒尾に學費を給した人で、他が始終恩人と言つて居つた其人だ。」

はや其の言の中に彼の心は急に傷みぬ。己の敬愛せる荒尾讓介の窮して戚々たらず、天命を樂むと言ひしは、眞に義の爲に功名を擲ち、恩の爲に富貴を顧ざりし故にあらずや。彼の貧きは萬々人の富めるに優れり。君子なる吾友よ。然しも潔き志を抱ける者にして、其の酬らるゝ薄倖の彼の如く甚しく酷なるを念ひて、貫一は漫ろ涙の沸く目を閉ぢたり。

ちやうど其の時分に間貫一は度々お宮から悔悟と謝罪の手紙を受けとつてゐるのであるが、いつも封も切らずに捨てゝ了ふ。今も幾度目かの手紙を一寸開封しやうとして、又思ひ直して柱に鞭うつて、遂に繩のやうに引き、捩つて了ふ。といふ一刻さであるが、或時荒尾がやつて來るので、客間へ通しておく。そして出てみると多分荒尾の差金であらう、荒尾だといつて訪ねて來た客といふのは、荒尾と思ひきや、それは手紙では思ひの屆かないのを捂しがつて、直にやつて來たお宮なのである。以下貫一に縋りついて赦しを乞ふお宮に對する、貫一の態度を見るべきである。

衝と客間の紙門を排けば、荒尾は居らず、彼の荒尾讓介は居らで、美しう裝へる婦人の獨り羞含しう控へたる。打惑ひて入りかねたる彼の目前に、可疑しき女客も未だ背けたる面を囘さず、細雨靜に庭樹を撲ちて、滴る翠は內を照せり。

「荒尾さんと有仰るのは貴方で。」

彼は先づ恁く會釋して席に着きけるに、婦人は猶も面を示さゞらん樣に頭を下げて禮を作せり。而も彼は輙く其の下げたる頭と拄へたる手とを擧げざるなりき。始に何者なりやと驚されし貫一は、今又何事なりやと彌よ呆れて、彼の樣子を打矚れり。乍ち有りて貫一の眼は慌忙しく覓む

らん色を作して、婦人の俯けるを佗と窺ひたりしが、

「何ぞ御用でございますか。」

「…………。」彼は益す急に左瞻右視して窺ひつ。

「何云ふ御用向でございますか、伺ひませう。」

「…………。」露置く百合の花などの仄に風を迎へたる如く、其の可疑しき婦人の面は術無げに擧らんとして、又慚ぢ懼れたるやうに遲疑ふ時、

「宮！」と貫一の聲は筒抜けて走りぬ。

宮は嬉し悲しの心昧みて、身も世もあらず泣伏したり。

「何用有つて來た！」

怒るべきか、此時。恨むべきか、此時。辱むべきか、悲むべきか、號ぶべきか、罵るべきか、責むべきか彼は一時に萬感の相亂れて急なるが爲に吾を吾としも覺ゆる能はずして打顫ひ居たり。

「貫一さん！　どうぞ堪忍して下さいまし。」

宮は漸う顏を振擧げしも、凄じく色を變へたる貫一の面に向ふべくもあらで萎れ俯しぬ。

「早く歸れ！」

「…………。」

「宮！」

幾年聞かざりし其の聲ならん。宮は危みつゝも可懷しと見る目を覺えず其方に轉せば、鋭く睫ふる貫一の眼の濕へるは、旣に如何なる淚の催せしならん。

「今更お互に逢ふ必要は無い。又お前も何顏で逢ふ意か。先達而から頻に手紙を寄來すが、那は一通でも開封したのは無い、來れば直に燒棄てて了ふのだから、以來は斷じて寄來さんやうに。私は今病中で、慝して居るのも大儀でならんのだから、早く歸つて貰ひたい。」

彼は老婢を召して、

「お客樣のお立だ、お供に然う申して。」

取附く島もあらず思惱める宮を委きて、貫一は早くも獨り座を起たんとす。

「貫一さん、私は今日は死んでも可い意でお目に掛りに來たのですから、貴方の存分に甚麼目にでも遭せて然して其で左も右も今日は勘辨してお願ですから私の話を聞いて下さいまし。」

「何の爲に！」

「私は全く後悔しました！　貫一さん、私は今になつて後悔しました！　悉い事は此間からの手紙に段々書いて上げたのですけれど、全で見ては下さらないのでは、後悔して居る私の甚麼切ない思をして居るか、お解りにはならないでせうが、お目に掛つて口では言ふに言れない事ばか

り、設ひ書けない私の筆でも、那を悉皆見て下すつたら、些とはお腹立も直らうかと、自分では思ふのです。色々お詫は爲る意でも、恁してお目に掛つて見ると、面目が無いやら、悲いやらで、何一語も言へないのですけれど、貫一さん、迚も私は來られる筈でない處へ恁して來たのには、死ぬほどの覺悟をしたのと思つて下さいまし。」

「其が何爲たのだ。」

「然まで覺悟をして、是非お話を爲たい事が有るのですから、御迷惑でもどうぞ、どうぞ、貫一さん、左も右も聞いて下さいまし。」

涙ながらに手を拄へて、吾が足下に額叩く宮を、何爲らんとやうに打見遣りたる貫一は、

「六年前の一月十七日、那時を覺えて居るか。」

「…………。」

「さあ、奈何か。」

「私は忘れは爲ません。」

「うむ。那時の貫一の心持を今日お前が思知るのだ。」

「堪忍して下さい。」

唯見る間に出行く貫一、咄嗟、紙門は鐵壁よりも堅く閉てられたり。宮は其心に張充めし望を

失ひて礑と領伏しぬ。

「豊、豊！」と老婢を呼ぶ聲劇く縁續の子亭より聞ゆれば、直に走り行く足音の響きしが、旋て返し來れる老婢は客間に顯れぬ。宮は未だ頭を擧げず居たり。可憐しき束髮の頸元深く、黃蘗染の半衿に紋御召の二枚袷を重ねたる衣紋の綾先づ謂はんやう無く、肩狀優しう內俯したる脊に金茶地の東綴の帶高く、勝色裏の敷亂れつゝ、白羽二重のハンカチイフに涙を掩へる指に赤く、白く指環の玉を耀したる、殆ど物語の畫をも看るらん心地して、此の美しき人の身の上に何事の起りけると、豊は可恐きやうにも覺ゆるぞかし。

「あの、申上げますが、主人は病中の事でございますもので、唯今生憎と急に氣分が惡くなりましたので、相濟みませんで御座いますが中座を致しました。恐入りますで御座いますが、どうぞ今日は是で御立歸を願ひますで御座います。」面を抑へたるまゝに宮は涙を啖りて、

「あゝ、然やうで御座いますか。」

「折角お出の所を誠にどうもお氣毒さまで御座います。」

「唯今些と支度を致しますから、もう少々置いて戴きますよ。」

「さあ〳〵、貴方御遠慮無く御寛と遊ばしまし。又何だか降出して參りまして、今日はいつそお寒過ぎますで御座います。」

彼の起ちし迹に宮は身支度を爲るにも非で始て甦りたる人の唯在るが如くに打沈みてぞ居たる。
良久しかるに客の起たんとする模様あらねば、老婢は又出來れり。宮は爾時遽に身斂して、

「それではお暇を致します。些と御挨拶だけ致して參りたいのですから、何方にお寢つてお在ですか……。」

「はい、あの何でございます、どうぞもうお管ひ無く……。」

「いゝえ、御挨拶だけ些と。」

「然やうで御座いますか。では此方へ。」

主の本意ならじとは念ひながら、老婢は止むを得ず彼を子亭に案内せり。昨夜の收めざる蓐の内に貫一は着のまゝ打仆れて、夜着も搔卷も裾の方に蹴し、枕は辛うじて其端に幾度か置易られ頭を載せたり。

思ひも懸けず宮の入來るを見て、起回らんとせし彼の膝下に、早くも女の轉び來て、立たんと爲れば袂を執り、猶も犇と寄添ひて、物をも言はず泣伏したり。

「えゝ、何の眞似だ！」

突返さんとする男の手を宮宮は兩手に抱き緊めて、

「貫一さん！」

「何を爲る、此の恥不知！」

「私が惡かつたのですから、堪忍して下さいまし。」

「えゝ、聒しい！　此を放さんか。」

「貫一さん！」

「放さんかと言ふに、えゝ、もう！」

　其身を楯に宮は放さじと爭ひて益す放さず、兩箇が顏は互に息の通はんとすばかり近く合ひぬ。一生又相見じと誓へる其人の顏の、おのれ眺めたりし色は疾く失せて、誰ゆゑ今の別に豔なるも、仍形のみは變らずして、實に彼の宮にして宮ならぬ宮と、吾は如何にして此に逢へる！　貫一は其胸の夢むる間に現ともなく彼を矚れり。宮は殆ど情極りて、纔に狂せざるを得たるのみ。

　彼は人の頭より大いなるダイアモンドを乞ふが爲に、此の貫一の手を把る手をば釋かざらん。大いなるダイアモンド乎、幾許大いなるダイアモンドも、宮は人の心の最も小き誠に値せざるを既に知りぬ。彼の持たるダイアモンドは然せる大いなる者ならざれど、其の棄去りし人の誠は量無きものなりしが、嗟乎、今何處に在りや。其の嘗て誠を惠みし手は冷かに殘れり。空しく其手を抱きて泣かんが爲に來れる宮が悔は、實に幾許大いなる者ならん。

「さあ、早く歸れ！」

「もう二度と私はお目には掛りませんから、今日の所は奈何とも堪忍して、打つなり、毆くなり貫一さんの勝手にして、然して少小でも機嫌を直して、私のお詫に來た譯を聞いて下さい。」

「えゝ、煩い！」

「それぢや打つとも毆くともして……。」身悶して宮の縋るを

「那樣事で俺の胸が霽れると想つて居るか、殺しても慊らんのだ。」

「えゝ、殺れても可い！　殺して下さい。私は、貫一さん、殺して貰ひたい。さあ、殺して下さい。死んで了つた方が可いのですから。」

「自分で死ね！」

彼は自ら手を下して、此身を殺すさへ屑からずとまでに己を鄙むなる乎、餘に辛しと宮は脣を咬みぬ。

「死ね、死ね。お前も一旦棄てた男なら、今更見とも無い態を爲ずに何爲死ぬ迄立派に棄て通さんのだ。」

「私は始から貴方を棄てる氣などは有りはしません。それだから篤りとお話を爲たいのです。死んで了へとお言ひでなくても、私はもう疾から自分ぢや生きて居るとは思つて居ません。」

「那樣事聞きたくはない。さあ、もう歸れと言つたら歸らんか！」

「歸りません！　私は甚麽(どんな)事しても此儘ぢや……歸れません。」

宮は男の手をば益す弛めず、益す激する心の中には、夫もあらず、世間もあらずなりて、唯此の命に易ふる者を失はじと一向に思入るなり。

折から縁に足音するは、老婢の來るならんと、貫一は取られたる手を引放たんとすれば、還は如何、宮は些も弛めざるのみか、其容をだに改めんと爲ず、果して足音は紙門の外に逼れり。

「これ、人が來る。」

「…………。」

宮は唯力を極めぬ。

不意に此體を見たる老婢は、半啓けたる紙門の陰に顏引入れつゝ、

「赤樫(あかがし)さんがお出になりまして御座います。」窮厄の色は衝と貫一の面に上れり。

「あゝ、今其方へ行くから。――さあ、客が有るのだ、好加減に歸らんか。えゝ、放せ、客が有ると云ふのに奈何するのか。」

「ぢや私は此に待つて居ますから。」

「知らん！　もう放せと言つたら。」

用捨もあらず宮は捻倒されて、落花の狼籍と起き敢へぬ間に貫一は出行く。

續編の終り夢幻的な舞臺が一場面出てゐる。有名な夢の場がある。これは現實の描寫ではなくて、貫一の潛在的意識、又は人間的良心を夢に假托して表現しようとしたもので、それだけに又文章も幽婉である。舞踊劇かレヴイユかと思はれるやうな圖案である。

家の内には己と老婢との外に、今客も在らざるに、女の泣く聲、詬（のゝし）る聲の聞ゆるは甚だ謂無し、我或は夢むるにあらずやと疑ひつゝ、貫一は枕せる頭を擡げて耳を澄せり。

其聲は急に噪しく、相爭ふ氣勢さへして、はた〱と紙門を犇かすは、愈よ怪しと夜着排却けて起ち行かんとする時ばつさり紙門の倒るゝと齊しく二人の女の姿は貫一が目前に轉び出でぬ。苛まれしと見ゆる方の髮は浮藻の如く亂れて、着たるコオトは雫するばかり雨に濡れたり。其人は起上り樣に男の顏を見て、嬉しや、可懷しやと心も空なる氣色。

「貫一さん！」と匐（は）ひ寄らんとするを、薄色魚子の羽織着て、夜會結に爲たる後姿の女に躍り被つて引据れば、

「あれ、貫、貫一さん！」

拯（すくひ）を求むる其聲に、貫一は身も消入るやうに覺えたり。彼は念頭を去らざりし宮ならずや。七生まで其願は聽かじと郤けたる滿枝の、我の辛さを彼に移して、先の程より打ちも詬りもしたり

けんを、猶慊らで我が前に責むる乎と、貫一は怺へかねて顫ひ居たり。滿枝は縱まに宮を捉へて些も動かせず、徐に貫一を見返りて、

「間さん、貴方のお大事の戀人と云ふのは是で御座いませう。」

頸髪取つて宮が面を引立てゝ、

「此女で御座いませう。」

「貫一さん、私は悔しう御座んす。此人は貴方の奥さんですか。」

「私奥さんなら奈何したのですか。」

「貫一さん！」

彼は足擦して叫びぬ。滿枝は直ちに推伏せて、

「えゝ、聒しい！　貫一さんは其處に一人居たら澤山ではありませんか。貴方より私が間さんには言ふ事が有るのですから、少し靜にして聽いてお出なさい。

間さん、私想ふのですね、究竟恁云ふ女が貴方に腐れ付いて居ればこそ、甚麽に申しても私の言は取上げては下さらんので御座いませう。貴方は那樣に未練がお有り遊ばしても、元此女は貴方を棄てゝ、餘所へ嫁に入つて了つたやうな、實に畜生にも劣つた薄情者なのでは御座いませんか――私善く存じて居ますわ。貴方も餘り男らしくなくてお在なさる。それは如何にお可愛いの

か存じませんけれど、一旦愛相を盡して逃げて行つた女を、いつまでも思込んで遲々して被居るとは、まあ何たる不見識な事でせう！　貴方はそれでも男子です乎。私なら這麼女は一息に刺殺して了ふのです。」

宮は跂返さんと爲しが、又抑へられて聲も立てず。

「間さん、貴方、私の申上げた事をば、やあ道ならぬの、不義のと、實に立派な口上を有仰いましたでは御座いませんか。其程義のお堅い貴方なら、何爲這麼淫亂の人非人を阿容活けてお置き遊ばすのですか。それでは私への口上に對しても、貴方男子の一分が立たんで御座いませう。以爲成敗は遊ばしません。さあ、私決してもう二度と貴女には何も申しませんから、貴方も此女を見事に成敗遊ばしまし。然もなければ、私も立ちませんです。

間さん、奈何遊ばしたので御座いますね、早く何とか遊ばして、貴方も男子の一分をお立てなさらんければ濟まん所では御座いませんか。私此で拜見致して居りますから、立派に遣つて御覽あそばせ。

卒と云ふ場で貴方の腕が鈍つても、決して爲損じの無いやうに、私好い刃物をお貸し申しませう。さあ、間さん、之をお持ち遊ばせ。」

彼の懷を出でたるは蠟塗の晃く一口の短刀なり。貫一は其の殺氣に撲れて一指をも得動かさず、

空しく眼を耀して滿枝の面を睨みたり。宮ははや氣死せる乎、推伏せられたるまゝに聲も無し。

「さあ、私恁して抑へて居りますから、吭なり胸なり、ぐつと一突に遣つてお了ひ遊ばせ。ええ、もう貴方は何を遲々して被居るのです。刀の持樣さへ御存じ無いのですか、恁して拔いて！」

と片手ながら一揮揮れば、鞘は發矢と飛散つて、電光袂を廻る白刃の影は、忽ち飜つて貫一が面上三寸の處に落來れり。

「之で突けば可いのです。」

「…………。」

「さては貴方は這麼女に未だ未練が有つて、息の根を止めるのが惜くて被居るので御座いますね。殺して了はうと思ひながら、手を下す事が出來んのですね。私代つて殺して上げませう。何の雜作も無い事。些と御覽あそばせな。」

言下に忽焉と消えし刄の光は、早くもお宮が亂髮を掠めて顯れぬ。啊呀と貫一の號ぶ時、妙くも彼は跂起きざまに突來る鋩を危く外して、

「あれ、貫一さん！」

と滿枝の手首に縋れるまゝ、一心不亂の力を極めて捩伏せ〳〵、仰樣に推重りて仆したり。

「貫、貫一さん、早く、早く此刀を取つて下さい。而して私を殺して下さい——貴方の手に掛

けて殺して下さい。私は貴方の手に掛つて死ぬのは本望です。さあ、早く殺して、私は早く死にたい。貴方の手に掛つて死にたいのですから、後生だから一思ひに殺して下さい！」

此の恐るべき危機に瀕して、貫一は謂知らず自ら異くも、敢て拯の手を藉さんと爲るにもあらで、而も見るには堪へずして、空しく悶えに悶え居たり。必死と爭へる兩箇が手中の刄は、或は高く、或は低く、右に左に閃々として、恰も一鉤の新月白く風の柳を縫ふに似たり。

「貫一さん、貴方は私を見殺になさるのですか。奈何でも此女の手に掛けて殺すのですか！私は命は惜くはないが、此女に殺されるのは悔しい！悔しい!!私は悔しい！」

彼は亂せる髮を夜叉の如く打振り〳〵、五體を揉みて、唇の血を噴きぬ。彼も殺さじ、是も傷けじと、貫一が胸は車輪の廻るが若くなれど、如何にせん、其身は内より不思議の力に緊縛せられたるやうにて、逸れど、躁れど、寸分の微揺を得ず、せめては聲を立てんと爲れば、吭は又塞りて鐵丸を啣める想。

力も今は絶々に、はや危しと宮は血聲を揚げて、

「貴方が殺して下さらなければ、私は自害して死にますから、貫一さん、此刀を取つて、私の手に持せて下さい。さ、早く、貫一さん、後生です、さ、さ、さあ取つて下さい。」

又激しく捩合ふ郤舍に、短刀は戞然と落ちて、貫一が前なる疊に突立つたり。宮は虚さず躍り

被りて、我物得つと手に爲れば、遣らじと滿枝の組付くを、推隔つる腋の下より後突に、欄も透れと刺したる急所、一聲號びて仰反る滿枝。鮮血！　兇器！　殺傷！　死體！　亂心！　重罪！

貫一は目も眩れ、心も消ゆるばかりなり。宮は犇と寄添ひて、

「もう此上は奈何で私は無い命です。お願ですから、貫一さん、貴方の手に掛けて殺して下さい。私はそれで貴方に赦された積で喜んで死にますから、貴方もどうぞ其でもう堪忍して、今迄の恨は齊して下さいまし、よう、貫一さん。私が這麼に思つて死んだ後までも、貴方が堪忍して下さらなければ、私は生替死替して七生まで貫一さんを怨みますよ。さあ、それだから私の迷はないやうに、貴方の口からお念佛を唱へて、之で一思ひに、さあ貫一さん、殺して下さい。」

朱に染みたる白刃をば貫一が手に持添へつゝ、宮は其の可懷しき拳に頻回頰擦したり。

「私は是で死んで了へば、もう二度と此世でお目に掛ることは無いのですから、せめて一遍の回向をして下さると思つて、今はの際で唯一言赦して遣ると有仰つて下さい。生きて居る内こそ甚麼にも憎くお思ひでせうけれど、死んで了へば其限、罪も恨も殘らず消えて土に成つて了ふのです。私は恁うして前非を後悔して、貴方の前で潔く命を捨てるのも、其の御詫が爲たいばかりなのですから、貫一さん、既往の事は水に流して、もう好い加減に堪忍して下さいまし。よう、貫一さん、貫さん！　今思へば、那時の不心得が實に悔しくて〳〵、私は何とも謂ひやうが無い！

貴方が涙を雫して言つて下すつた事も覺えて居ます。後來屹度思中るから、今夜の事を忘れるなとお言ひの聲も、今だに耳に付いて居るわ。私の一圖の迷とは謂ひながら何爲那時に些少でも氣が着かなかつた乎。愚な自分を責めるより外は無いけれど、死んでも這麼回復の付かない事を何で私は爲ましたらう！　貫一さん　貴方の罰が中つたわ！　私は生きて居る空が無い程、貴方の罰が中つたのだわ！　だから、もう是で堪忍して下さい、よ、貫一さん。

而して迚も此の罰の中つた軀では、今更左右と思つても、願なんぞの愜ふと云ふのは愚な事、未だ〳〵憂目を見た上に思死に死にでも爲なければ、私の業は滅しないのでせうから、此世に未練は澤山有るけれど、私は早く死んで、此の苦難を埋めて了つて、而して早く元の淨い軀に生れ替つて來たいのです。然う爲たら、私は今度の世には、甚麼艱難辛苦を爲ても屹度貴方に添遂げて、此胸に一杯思つて居る事も悉皆善く聽いて戴き、又此世で爲遺した事も其時は十分に爲てお目に掛けて、必ず貴方にも悦ばれ、自分も嬉しい思を爲て、此上も無い樂い一生を送る氣です。今度の世には、貫一さん、私は決して那麼不心得は爲ませんから、貴方も私の事を忘れずに居て下さい。可うございますか！　屹度忘れずに居て下さいよ。

人は最期の一念で生を引くと云ふから、私は此事ばかり思窮めて死にます。貫一さん、此通だから堪忍して！」

聲震はせて縋ると見れば、宮は男の膝の上なる鋩目掛けて岸破と伏したり。
「や、行つたな！」
貫一が胸は劈(つんざ)けて始て此聲を出せるなり。
「貫一さん！」
無殘やな、振仰ぐ宮が喉は血に塗れて、刄の半を貫けるなり。彼は其手を放たで苦しき眼を睜きつゝ、男の顏を視んと爲るを、貫一は氣も漫に引抱へて、
「これ宮、貴樣は、まあ是は何事だ！」
大事の刄を拔取らんと爲れど、一念凝りて些も弛(ゆる)めぬ女の力。
「之を放せ、よ、之を放さんか。さあ、放せと言ふに、えゝ、何爲放さんのだ。」
「貫、貫一さん。」
「おゝ、何だ。」
「私は嬉しい。もう……もう思遺す事は無い。堪忍して下すつたのですね。」
「まあ、此手を放せ。」
「放さない！　私は是で安心して死ぬのです。貫一さん、あゝ、もう氣が遠く成つて來たから早く、早く、赦すと言つて聞せて下さい。赦すと、赦すと言つて！」

血は滾々と溢す流れて、末期の影は次第に黯く逼れる氣色。貫一は見るにも堪へず心亂れて、
「これ、宮、確乎しろよ。」
「あい。」
「赦したぞ！　もう赦した、もう堪……堪……堪忍……した！」
「貫一さん！」
「宮！」
「嬉しい！　私は嬉しい！」
貫一は唯胸も張裂けぬ可く覺えて、言は出でず、抱き緊めたる宮が顔をば紛り下つる熱湯の涙に浸して、其の冷たき唇を貪り吮ひぬ。宮は男の唾を口移に辛くも喉を潤して、
「そんなら貫一さん、私は、吁、苦しいから、もう是で一思ひに……。」
と力を出して剳らんと爲るを、緊と抑へて貫一は、
「待て、待て〱！　左も右も此手を放せ。」
「いゝえ、止めずに、」
「待てと言ふに。」
「早く死にたい！」

漸く刀を撥放せば、宮は忽ち身を囘して、躱けつ轉びつ座敷の外に脫れ出づるを、

「宮、何處へ行く！」

遣らじと伸べし腕は逮ばず、苛つて起ちし貫一は唯一攫と躍り掛れば、生憎㶚枝が死骸に躓き、一間許投げられたる其處の敷居に膝頭を碎けんばかり強く打れて、蹈りしまゝに起きも得ず、身を竦めて呻きながらも、

「宮待て！　言ふことが有るから待て！　豐、豐！　豐は居ないか。早く追掛けて宮を留めろ！」

呼べど號べど、宮は返らず、老婢は居らず、貫一は阿修羅の如く憤りて起ちしが、又仆れぬ。仆れしを漸く起囘りて、忙々しく四下を眗せど、はや宮の影は在らず。其の步々に委せし血は苧環の絲を曳きたるやうに長く連りて、疊より緣に、緣より庭に、庭より外に何處まで、彼は重傷を負ひて行くならん。

礬石を曳くより苦しく貫一は膝の疼痛を怺へ〳〵て、左にも右にも塀外に蹣ひ出づれば、宮は未だ遠くも行かず、有明の月冷かに夜は水の若く白みて、ほの〴〵と狹霧罩めたる大路の寂として物の影無き邊を、唯獨り覺束無げに走れるなり。

「宮！　待て」

呼べば谺は返せども、雲は幽にして、彼は應へず。齒咬を作して貫一は後を追ひぬ。

固より間は幾許も有らざるに、急所の血を出せる女の足取、引捉ふるに何程の事有らん、と侮りしに相違して、彼は始の如く走るに引易へ、此方は漸く息疲るゝに及べども、距離は竟に依然として近く能はず。這は口惜し、と貫一は滿身の力を勵し、僵るゝならば僵れよと無二無三に走りたり。宮は猶脱るゝほどに、帶は忽ち颯と釋けて脚に絡ふを、右に左に踢拂ひつゝ、跌きては進み、行きては踉き、彼もはや力は竭きたりと見えながら、如何に爲ん、其處に伏して復起きざる時、躬も終に及ばずして此處に絶入せんと思へば、貫一は今に當りて纔に聲を揚ぐるの術を餘すのみ。

「宮」と奮つて呼びしかど、憫むべし、其聲は苦しき喘の如き者なりき。我と吾肉を啖はんと想ふばかりに躁れども、貫一は旣に聲を立つべき力をさへ失へるなり。さては効無き己に憤を作して益す休まず狂呼すれば、彼の吭は終に破れて、汨然として一涌の鮮紅を嘔出せり。

心悔みて覺えず倒れんとする耳元に、松風驀然と吹起りて、吾に復れば、眼前の御壕端。只看る、宮は行き〳〵て生茂る柳の暗きに分入りたる、入水の覺悟に極れり、と貫一は必死の聲を搾りて連に呼べば、咳入り咳入り數口の咯血、斑爛として地に委ちたり。何思ひけん、宮は千條の緑の陰より、其色よりは稍白き面を露して、追來る人を熟と見たりしが、竟に疲れて起きも得ざる貫一の、唯手を抗げて遙に留むるを、免し給へと伏拜みて、衝と茂の中に隱れたり。

彼は己の死ぬべきを忘れて又起てり。駈寄る岸の柳を潜りて、水は深き乎、宮は何處に、と葎の露に踏滑る身を危くも淵に臨めば、轣轆と瀉ぐ早瀬の水は、駭く浪の體を盡し、亂るゝ流の文を捲いて、眼下に幾箇の怪しき大石、夫の鰲背を聚めて丘の如く、其勢を拒がんと爲れど、觸るれば拂ひ、當れば飜り、長波の邁く所滔々として破らざる爲き奮迅の力は、兩岸も爲に震ひ、坤軸も爲に轟き、蹈居る土も今にや崩れなんと疑ふ處、衣袂の雨濃に灑ぎ、鬢髮の風轉た急なり。あな凄まじ、と貫一は身毛も彌竪ちて、縋れる枝を放ちかねつゝ、看れば叢の底に秋蛇の行くに似たる徑有りて、幾と逆落に懸崖を下るべし。危き哉と差覗けば、茅葛の頻に動きて、小笹棘に見えつ隱れつ段々と辿り行くは、求むる宮なり。

其死を止めんの一念より他あらぬ貫一なれば、恁と見るより心も空に、足は地を踏む遑もあらず、唯遲れじと思ふばかりよ、谿間の嵐の誘ふに委せて、驀直に身を墮せり。

或は摧けて死ぬべかりしを、恙無きこそ天の佑と、彼は數步の内に宮を追ひしが、流に浸れる巖を涉りて、既に渦卷く瀧津瀬に生憎！　花は散りかゝるを、

「宮！」

と後に呼ぶ聲殘りて、前には人の影も在らず。

咄嗟の遑を天に叫び、地に號き、流に悶え、巖に狂へる貫一は、血走る眼に水を射て、此處や

彼處と戀しき水屑を覓むれば、正しく浮木芥の類とも見えざる物の、十間計彼方を揉みに揉んで、波間隱に推流さるゝは、人ならず哉、宮なる乎と瞳を定むる折しもあれ、水勢其處に一段急なり、在りける影は弦を放れし箭飛を作して、行方も知らずと胸潰るれば、忽ち遠く浮き出でたり。

嬉しやと貫一は、道無き道の木を攀ぢ、崖を傳ひ、或は下りて水を踰え、石を蹈み、巖を廻り、心地死ぬべく踉蹌として近き見れば、綠樹陰愁ひ、潺湲聲咽びて、淺瀨に繫れる宮が軀よ！

貫一は唯其上に泣伏したり。

吁、宮は生前に於て纔に一刻の前なる生前に於て、此情の熱き一滴を幾許かは忝なみけん。今や千行垂ると雖も効無き涙は、徒に無心の死顏に濺ぎて宮の魂は知らざるなり。

貫一の悲は窮りぬ。

「宮、貴樣は死……死……死んだのか。自殺を爲るさへ可哀なのに、此の淺ましい姿は奈何だ！刄に貫き、水に溺れ、貴樣は是で苦しくはなかつた乎。可愛い奴め、思迫めたなあ！

宮、貴樣は自殺を爲た上身を投げたのは、一つの死では慊ずに、二つ命を捨てた氣乎。然う思つて俺は不敏だ！

甚麼事が有らうとも、貴樣に對する那の恨は決して忘れんと誓つたのだ。誓つたけれど、此の無殘な死狀を見ては、罪も恨も皆消えた！ 赦したぞ、宮！ 俺は心の底から赦したぞ！

今はの際に赦したと、俺が一言云つたらば、那の苦しい息の下から嬉しいと言つたが、宮、貴様は俺に赦されるのが那様に嬉しいの乎。好く後悔した！　立派な悔悟だぞ!!　餘り立派で、貫一は恥入つた！　宮、俺は面目無い！　是迄の精神とは知らずに見殺に爲たのは殘念だつた！　俺が過だ！　宮、赦してくれよ！　可いか、宮、可いか。

嗚呼死んで了つたのだ!!」

貫一は彼の死の餘りに酷く、餘りに潔きを見て、不貞の血は既に盡く沃がれ、舊惡の膚は全く洗れて、殘れる者は、悔の爲に、誠の爲に、已の爲に捨てたる亡骸の、實に憐みても憐むべく、悲みても猶及ばざる思の、今は唯極めて切なる有るのみ。

夫の烈々たる怨念の跡無く消ゆると與に、一旦涸れにし愛慕の情は又泉の涌くらんやうに起りて、其胸に漲りぬ。苦しからず哉、人亡き後の愛慕は、何の思か之に似る者あらん。彼はなかなか生ける人にこそ如何なる恨をも繫くるの忍び易さを今ぞ知るなる。

貫一は腸斷ち涙連りて、我を我とも覺ゆる能はず。

「宮、貴樣に手向けるのは、俺の此の胸の中だ。之で成佛してくれ、よ。此世の事は是迄だ。其代り今度の世には、貴樣の言つた通り、必ず夫婦に成つて、百歲までも添、添、添遂げるぞ！　忘れるな、宮。俺も忘れん！　貴樣も屹度覺えて居ろよ！」

氷の如き宮が手を取り、犇と握りて、永く眠れる面を覗かんと爲れば、涙急にして文色も分かず、推重りて、怜しやと身を悶えつゝ少時泣いたり。

「然し、宮、貴樣は立派な者だ。一び罪は犯しても、恁うして悔悟して自殺を爲たのは、實に見上げた精神だ。然うなけりや成らん、天晴だぞ。それでこそ始て人間たるの面目が立つたのだ。然るに、此の貫一は奈何か！　一端男と生れながら、高が一婦の愛を失つたが爲に、志を挫いて一生を誤り、餓鬼の如き振舞を爲て恥とも思はず、非道を働いて暴利を貪るの外は何も知らん。其財は何に成るの乎、何の爲に那樣事を爲るの乎。

凡そ人と謂ふ者には、人として必ず盡すべき道が有る。己と云ふ者の外に人の道と云ふ者が有るのだ。俺は其の道を盡して居る乎、盡さうと爲て居る乎。思つた女と添ふ事が出來ん、唯其丈の事に失望して了つて、其の失望の爲に、苟くも男と生れた一生を抛たうと云ふのだ。人たるの効は何處に在る、人たる道は奈何したの乎。

噫、誤つた！

宮、貴樣が俺に對して悔悟するならば、俺は人たるの道に對して悔悟しなけりや濟まん軀だ。貴樣が恁うして立派に悔悟したのを見て、俺は實に愧入りも爲りや、可羨しくもある。當初貴樣に棄てられた爲に、恁云ふ墮落をした貫一ならば、貴樣の悔悟と共に俺も速かに心を悛めて、人

たるの道に負ふ所の此罪を贖はなけりや成らん譯だ。

嗟乎、然し、何に就けても苦しい世の中だ！

人間の道は道、義務は義務、樂は又樂で、其も無けりや立たん。俺も鴫澤に居て宮を對手に勉强して居つた時分は、此の人世と云ふ者は唯面白い夢のやうに考へて居た。

那が浮世なの乎、是が浮世なの乎。

爾來今日迄の六年間、人らしい思を爲た日は唯の一日でも無かつた。それで何が賴で俺は活きて居たの乎。死を決する勇氣が無いので活きて居たやうなものだ！　活きて居たのではない、死損つてゐたのだ！

鰐淵は焚死に、宮は自殺した。俺は何爲るの乎。俺の此の感情の强いのでは、又向來宮の此の死顏が始終目に着いて、一生悲しい思を爲なければ成らんのだらう。して見りや、今迄よりは一層苦を受けるのは知れて居る。其中で俺は活きて居て何を爲るの乎。

人たるの道を盡す？　人たるの行を爲る？　あゝ、懲い、懲い！　人として居ればこそ那樣義務も有る人でなくさへあれば何も要らんのだ。自殺して命を捨てるのは、一の罪惡だと謂ふ。或は罪惡かも知れん。けれども、茫々然と呼吸して居るばかりで、世間に對しては何等の益する所も無く、自身に取つては其が苦痛であるとしたら、自殺も一種の身始末だ。增して、俺が今死ね

ば、忽ち何十人の人が助り、何百人の人が懽ぶか知れん。

俺も一箇の女故に身を誤つた其餘が、盜人家業の高利貸とまで墮落して、是でやみ／＼死んで了ふのは、餘り無念とは思ふけれど、當初に出損つたのが一生の不覺、那が抑も不運の貫一の軀は、最一遍鍛直して出て來るより外爲方が無い。此世の無念は其時霽す！」

然しも遣る方無く悲めりし貫一は、其悲を立ろに拔くべき術を今覺れり。看々涙の頰の乾ける邊に、異しく昂れる氣有りて靑く輝きぬ。

「宮、待つて居ろ、俺も死ぬぞ！ 貴樣の死んでくれたのが餘り嬉しいから、さあ、貫一の命も貴樣に遣る！ 來世で二人が夫婦に成る、是が結納だと思つて、幾久しく受けてくれ。貴樣も定めて本望だらう、俺も不足は少しも無いぞ。」

然らば往きて汝の陷りし淵に沈まん。沈まば諸共と、彼は宮が屍を引起して背に負へば、其の輕きこと一片の紙に等し。怪しと見返れば、更に怪し！ 芳芬鼻を撲ちて、一朶の白百合大さ人面の若きが、滿開の葩を垂れて肩に懸れり。

不思議に愕くと爲れば目覺めぬ。覺むれば曉の夢なり。

つぎは續々金色夜叉で有名な鹽原の場面である。以上續編の終りの夢の場で、貫一とお宮の愛の復活

が仄めかされお宮の罪が赦されることになつてゐるのであるが、それは夢の世界のことで、彼はその曉の夢が覺めてから、不思議な衝動を感ずるのであるが、現實の世界では彼の心は、そこまで妥協するまでにはなつてない。併しその夢以來頑な彼の氣持ちが次第に軟ぎつつあることは事實で、鹽原では心中しやうとしてゐる、或商店員と新橋の藝者とを、大金を出して救つたりしてゐるのである。

この心中の一場面は、本篇の本筋からいへば、一寸側（わき）へそれた挿話である。エピソードとしては描寫が少し丁寧過ぎるやうで、獨立した一つの小説のやうになつてゐるが、作者の考へでは、貫一の心境の推移を語るよすがとする積りであつたであらう。鹽原へゆく途中の敍述で、作者は彼の心境を書いてゐる。鹽原へいつたのは高利の大口の申込みがあつたので、少し探索する筋があつた爲である。

彼は強ち（あながち）に死を避けず、又生を厭（いと）ふにもあらざれど、兩ながら其の値無きを、私に屑（いさぎよ）しと爲ざるなり、當面（たうめん）の苦は彼に死を勸め、半生の悔は恥を責めて假さず。苦を抜かんが爲に、我は値無き死を辭せざるべき乎、過を償（つぐな）はんが爲に、我は樂まざる生を忍ぶべき乎。碌々の生は易し、死は則ち難し。碌々の死は易し、生は則ち難し。我は悔いて人と成るべきか、死して其愚を全うすべき乎。

貫一は活を求めて得ず、死を覓めて得ず、居れば立つを念ひ、立てば臥すを想ひ、臥せば行くを懷（おも）ひ、寐（い）ぬれば覺め、覺むれば思ひて、夜もあらず、日もあらず、人もあらず、世もあらで、

惟憂ひ惑へる已一箇の措所なき可煩しきに惱亂せり。

續いて鹽原の敍景が名文だから少しぬくことにする。

車は駛せ、景は移り、境は轉じ、客は改まれど、貫一は易らざる其の悒鬱を抱きて、遣る方無さ五時間の獨に倦み憊れつゝ、始て西那須野の驛に下車せり。

直ちに西北に向ひて、今尙茫々たる古の那須野原に入れば、天は濶く、地は遐に、唯平蕪の迷ひ、斷雲の飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原は其處ぞと見えて、行くほどに路は窮らず、漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に到れば、人家の盡る處に淙々の響有りて、之に架れるを入勝橋と爲す。

輙ち橋を渡りて僅に行けば、日光冥く、山厚く疊み、嵐氣冷に谿深く陷りて、幾回せる葛折の、後には密樹に聲々の鳥呼び、前には幽草歩々の花を發き、逾よ躋れば、遙に木隱の音のみ聞えし流の水上は淺く露れて、驚破や、斯に空山の雷白光を放ちて頹れ落ちたる乎と凄じかり。道の右は山を劉りて長碧と成し、石幽に蘇碧うして、幾條とも白絲を亂し懸けたる細瀑小瀑の珊々として濺げるは、嶺上の松の調も、定て此緒よりやと見捨て難し。

車を驅りて白羽坂を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑を嶠みて、山中の景は始めて奇なり。之より行きて道有れば水有り、水有れば必ず橋有り、全溪にして三十橋。山有れば巖有り、巖有れば必ず瀑存り、全嶺にして七十瀑。地有れば泉有り、泉有れば必ず熱有り、全村にして四十五湯、猶數ふれば十二勝、十六名所、七不思議、誰か一々探り得べき。

抑も鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峰の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流に泝る片岨の、四里に岐れ、十一里に亘りて、到る處巉巖の水を夾まざる無きは、宛然青銅の薬研に璃瑠末を碎くに似たり。先づ大網の湯を過れば、根本山、魚止瀧、兒ケ淵、左靭の險は古りて、白雲洞は朗に、布瀧、龍ケ鼻、材木石、五色石、船岩なんどゝ眺行けば、鳥井戸、前山の翠衣に染みて、福渡の里に入るなり。

途すがら前面の崖の處々に躑躅の殘り、山藤の懸れるが、甚だ興有りと目留まれば、又此邊殊に谿淺く、水澄みて、大いなる古鏡の沈める如く、深く濖へる岸樹は陰々として眠るに似たり。

彼の逆卷く波に分け入りし宮が、息絶えて浮び出でたりし其處の景色に、似たりとも酷だ似たる岸の布置、茂の狀況、乃至は漾ふる水の文も、透徹る底の岩面も、廣さの程も、位置も、趣も、子細に看來れば逾よ差はず。貫一は覺えず踏止りぬ。

彼は眦を決きて寒慄せり。

この塩原の景色をみてゐると、貫一がさきの朝方の夢でみた場所と、それがよく似てゐて、お宮が飛び込んだ流れなども、まざまざとそこに彷彿して來る。彼は畑下の「清琴樓」といふ宿へ着いてお湯に入ると、一寸容子の好い一人の男が入浴してゐる。どうも東京者らしい。彼は人目を憚るやうに、始終隅つこの方へ縮こまつてゐる。それでその男のことを女中に聞くと、「何でも昨日あたりお連れ様がお出の筈でございましたが、お出がございませんでした。それを大層お待ちになつて、御飯も召食らずに鬱いでいらつしやいましたが、先程停車場まで樣子を見がてら電報をかけにゆくと有仰いましてお出ましになつたのでございます。」すると貫一は、

「うむ、それは心配だらう。能く有る事だ。然し、飯も食はずに氣を揉んで居るとは、何云ふ件なのかな。――年寄か、婦でゞもあるか。」すると女中が、

「如何で御座いますか。」

「お前知らんのか。」

「私存じません。」

彼は覺えず小首を傾けるので、

「旦那も大相御心配ぢや御座いませんか。」
「然云ふ事を聞くと、俺も氣になるのだ」
「ぢや旦那も餘程苦勞性の方ですね。」
「それぢやお連樣が入しつて見て、お年寄か、お友達なら宜しう御座いますけれど、儞も、ねえ貴方、お美しい方か何かだつた日には、それこそ旦那は大變で御座いますね。」
「奈何大變なのか。」
「又御心配ぢや御座いませんか。全體旦那がお一人で被入ると云ふお心懸が惡いので御座いますもの、それは爲方が御座いません。」
婢は故とらしう高笑しつ。
「成程、是は恐入つた。今度から善く心得て置く事だ。」
「今度なんて有仰らずに、旦那も明日あたり電信でお呼寄になつたら如何で御座います。」
「五十四になる老婢を呼んだつて、お前、始らんぢやないか。」
「まあ、旦那は那麽好い事を言つて被居る。其の老婢さんの方でないのをお呼びなさいましな。」
「氣の毒だが、内には其限より居ないのだ。」

といふやうな會話があつたあと、女中はお給仕をすませて出ていつたが、やがて別室のあのお客の待つてゐる女が來たから、早く來てみろといつて知らせに來る。女中の注進によつて貫一が表梯子のあたりにゆくと、男女の影が欄に表はれる。作者は男女の風俗を敍して、

鍔廣なる藍鼠の中折帽を前斜に冠れる男は、例の面を見せざらんと爲れど、彼客なり。引連れたる女は、二十歳を二つ三つも越したる可し、銀杏返を引約めて、本甲蒔繪の挿櫛根深に、大粒の淡色瑪瑙に金脚の後簪、堆朱彫の玉根掛をして、鬢の一髮をも亂さず、極めて快く結ひ做したり。葡萄茶の細格子の縞御召に勝色裏の袷を着て、羽織は小紋縮緬の一紋、阿蘭陀模様の七絲の袱紗帶に金鎖子の繊きを引入れて、嬌かしき友禪染の襦袢の袖して口元を拭ひつゝ、四季袋の紐短かに挈げたるが、弗と此方を見向ける素顏の色蒼く、口の紅も點さで、較や裏寂くも花の咲過ぎたらんやうの蕭衰を帶びたれど、美目の盼たる色香尚濃にして、漫ろ人に染むばかりなり。

といふ風に描いてゐる。扮裝の描寫はこの作者のどの作品にも附きもので、却々凝つたものである。その時代の風俗を知ることも出來るのである。

この男女の愚痴を言つたり悲んだり、悅んだり、どうかかうか二人一緒に死ねることになつたのが嬉しいといつて、ひそひそと話をしてゐる。さざめ言が、寢ねがての貫一の枕元へ切々と傳つて來る。果

ては男は默つて、女が啜り泣きしてゐる樣子で、その話ごゑが綿々としていつまでも盡きない。そして夜が明けてしまう。

その翌日も二人は熱いのに垂れ籠めて、夕方になつて了ふ。ランプを細くしたその座敷がひつそりとして來る。すると夜半頃に二人は床を離れる。死裝束をして、盃をくみ交して、死うとする刹那に貫一が部屋へ飛び込んで來るのである。この場面がまるで名優の芝居を見るやうだから、ほんの數行だけぬいてみる。

「おまへの酌で飲むのも……今夜限だ。」

「狹山さん、私は這麼に苦勞を爲て置きながら、到頭一日でも……貴方と一處に成れずに、藝者風情で死んで了ふのが……悔しい、私は！」

聞くも苦しと、男は一息に湯呑の半を呷りて、

「さあ、お靜。」

女は何氣無く受けながら、思へば、別の盃乎と、手に取るからに胸潰れて、

「狹山さん、私は今更お禮を言ふと云ふのも、異な者だけれど、貴方は長い月日の間、私のやうな這麼不束者の我儘者を、能くも愛相を盡かさずに、深切に、世話をして下すつた。私は今迄口には出さなかつたけれど、心の內ぢや、狹山さん、嬉いなんぞと謂ふのは通り越し

て、實に難有いと思つて居ました。其の御禮を爲たいにも、知つて居る通の阿母さんが在るばかりに、唯然う思ふばかりで、奈何と云ふ事も出來ず、本當に可耻いほど行屆かないだらけで、これぢや餘り濟まないから、一日も早く所帶でも持つやうに成つて、然したら一度に此の恩返しを爲ませうと、私は、其ばかりを樂に、出來ない辛抱も爲て居たんだけれど、もう、今と成つちや何も彼も水……水……水の……泡。

つい心易立から、淺々お禮も言はずに居たけれど、狹山さん、私の心は、然うだつたの。もう是限で、貴方も……私も……土に成つて了へば、又とお目には掛れ、ないんだから、せめては、今改めて、狹山さん、私はお禮を申します。」

男は身をも搾らるゝばかりに怺へかねたる涙を出せり。

「もう那、那、那樣事……言つて……くれるな！　冥路の障だ。兩箇が一處に死なれりや、それで不足は無いとして、外の事なんぞは念はずに、お靜、お互に喜んで死なうよ。」

「私は喜んで居ますとも。嬉いんですとも。嬉くなくて奈何しませう。此のお酒も、祝つて私は飲みます。」

涙諸共飲干して。

「あなた、一つお酌して下さいな。」

注げば又叩りて、其の餘せるを男に差せば、受けて納めて、手を把りて、顔見合せて、抱緊めて、惜めば逾よ盡せぬ名殘を、奈何にせばやと思惑へる互の心は、唯それなりに息も絕えよと祈る可かめり。

男は抱ける女の耳の恰も唇に觸るゝ時、現ともなく聲誘はれて、

「お靜、覺悟は可いか。」

「可いわ、狹山さん。」

「可けりや……。」

「不如もう早く。」

狹山は直に枕の下なる袱紗包の紙入を取上げて、內より出せる一包の粉劑こそ、正に兩箇が絕命の刄に易ふる者なりけれ。女は二つの茶碗を置並ぶれば、玉の如き眞白の末は封を拔きて、男の手より其內に頒たれぬ。

「さあ、其酒を取つてくれ。お前のには俺が酌をするから、俺のにはお前が。」

「あゝ可うござんす。」

雨は此時漸く霽れて、軒の玉水絕々に、怪禽鳴過る者兩三聲にして、跡松風の音颯々たり。

狹山は旋て銚子を取りて、一箇の茶碗に酒を澆げば、お靜は目を閉ぢ、合掌して、聞えぬほど

の忍音に、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

代りて酌する彼の想は、吾手男の胸元に刺違ふる銑を押當つるにも似たる苦しさに、自から洩出づる聲も打震ひて、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無……阿彌陀……南無阿彌……陀……佛、南無……。」

と兩箇は心も消入らんとする時、俄に屋鳴震動して、百雷一處に墮ちたる響に、男は顚れ、女は叫びて、前後不覺の夢歟現の人影は、乍ち顯れて燈火の前に在り。

「貴下方は、怪しからん事を！　可けませんぞ。」

それから貫一が兎に角事情を聞いたうへで力にならうといふので、自分は麴町のもので間貫一といふ辯護士であると、信用させるために名乘りをあげる。男と女は交る交るに切迫つまつた身の上話をする。この男は相當辻褄の合つた、しつかりした性格の持主で、かういつた苦しい破滅に陷るには少し健全である。女は立たうとする間際に、兼ねて見受けをしやうといつて執拗く附け纏つてゐる富山唯繼が放さないので、額に盃かなにかを投げつけて、逃げて來たのである。それで來るのが遲くなつた譯である。新橋柏屋の藝者愛子といふこの女も、心中するにしては少し明く出來てゐる。それにこの段取りが、非常にしつくりした、行き屆いたもので、餘韻に乏しい憾みがないとはいへないが、それは其の時代の藝

者と遊蕩兒の氣分でもあらう。兎に角描寫は眞に迫つてゐる。以下貫一と二人の談話をぬいでみる。

「何からお話し申して宜しいやら……。」

「いや、其の、何ですな、貴下方は添ふに添れんから死ぬと有仰る——何爲添れんのですか。」

「はい、實は私の、恥を申しませんければ解りませんが、主人の金を大分遣ひ込みましたので御座います。」

「はあ、御主人持ですか。」

「然やうで御座います、私は南傳馬町の幸菱と申します紙問屋の支配人を致して居りまして。狹山元輔と申しまする。又是は新橋に勤を致して居りまする者で、柏屋の愛子と申しまする。」

名宣られし女は、消えも遣らで居たりし人陰の闇きより僅に躙り出でゝ、面伏にも貫一が前に會釋しつ。

「はあ、成程。」

「然る所、昨今是に身請の客が附きまして、」

「あゝ、身請の？　成程。」

「否でも其方へ參らんければ成りませんやうな次第。又私は其の引負の爲に、主人から告訴致

されまして、活きて居りますれば、其筋の手に掛りますので、如何にとも致方が御座いませんゆゑ、無分別とは知りつゝも、つい突迫めまして、面目次第も御座いません。」

彼等は其の無分別を慙ぢたりとよりは、此の死失ひし見苦しさを、天にも地にも曝しかねて、俯しも仰ぎも得ざる項を竦め、尙も爲ん方無さの目を閉ぢたり。

「はゝあ。然うすると爰に金さへ有れば、奈何にか成るのでせう！　貴方の費消だつて、其の金額を辨償して、宜しく御主人に詫びたら、無論内濟に成る事です。婦人の方は、先方で請出すと云ふのなら此方でも請出す迄の事、而して、貴方の引負に若干許の額に成るのですか。」

「三千圓ほど。」

「三千圓。それから、身請の金は？」

狹山は女を顧みて、二言三言小聲に語合ひたりしが、

「何や彼やで八百圓ぐらゐは要りますので。」

「三千八百圓、それだけ有つたら、貴下方は死なずに濟むのですな。」

打算し來れば、眞に彼等の命こそ、一人前一千九百圓に過ぎざるなれ。

「それぢや死ぬのは充らんですよ！　三千や四千の金なら、隨分そこらに滾つて居やうと思ふ。就ては何とか御心配して上げたいと考へるのですが、先づ左に右貴下方の身の上を一番悉くお話

し下さらんか。」
恁る際には如何ばかり嬉しき人の言ならんよ。彼は其の僞と眞とを思ふに遑らずして、遣る方も無き憂身の憂きを、翼くば跡も留めず語りて竭さんと、弱りし心は雨の柳の、漸く風に搖れたる勇を作して、

「はい、ついに一面識も御座いません私共、殊に痴情の果に箇樣な不始末を爲出しました、何ともはや申しやうも無い爛死蛇に、段々と御深切のお心遣、却つて恥入りまして、實に面目次第も御座いません。

折角の御言で御座いますから、思召に甘えまして、一通りお話致しますで御座いますが、何から何迄皆恥で、人樣の前では幾と申上げ兼ねますので御座います。

實は、只今申上げました三千圓の費消と申しますのは、究竟遊蕩を致しました爲に、店の金に手を着けました所、始の内は奈何なり融通も利きましたので、其が病付に成つて、段々と無理を致しまして、長い間に憒々穴を開けましたのが、積り積つて大分に成りましたので御座います。然る處、もう八方塞つて遣繰は付きませず、いよいよ主人には知れますので、苦紛れに相場に手を出したのが怪我の元で、ちよろりと取られますと、さあ其だけ穴が大きく成りましたものですから、遂よ爲方御座いません、今度は奈何か、今度は奈何かで、もう然う成つては私も死物狂で、

無理の中から無理を致して、續くだけ遣りました處が、到頭逐倒されて了ひまして、三千圓と申上げました費消も、半分以上は其に注込みましたので御座います。

然し、是だけの事で御座いますれば、主人も從來の勤勞に免じて、又奈何にも勘辨は致してくれましたので御座います。現に此の一條が發覺致しまして、主人の前に呼付けられました節、此度の事は格別を以つて、赦し難い所も赦して遣ると、箇樣に申してはくれましたので。」

「成程……」

「と申すのには、少し又仔細が御座いますので。それは、主人の家内の姪に當ります者が、内に引取つて御座いまして、之を私に妻せやうと云ふ意衷で、前々から其話は有りましたので御座いますが、どうも私は氣が向きませんもので、何と就かずに段々言延して御座いましたのを、決然奈何かと云ふ手詰の談に相成りましたので。究竟、費消は赦して遣るから、其者を家内に持つて、と箇樣に主人は申すので御座います、」

「大きに。」

「其處には又千百事情が御座いまして、私の身に致しますと、其の緣談は實に斷るにも辭りかねる義理に成つて居りますので、其を不承知だなど〻吾儘を申しては、なか〳〵濟む譯の者ではないので御座います。」

「あゝ、然うなのですか。」
「そこへ持つて参つて、此度の不都合で御座います、其さへ大目に見てくれやうと云ふので御座いますから、全で仇をば恩で返してくれますやうな、申分の無い主人の所計。其を乖きましては、私は罰が中りますので御座います。然うとは存じながら、猶且私の手前勝手で、如何にとも其氣に成れませんので、已むを得ず縁談の事は拒絶を申しましたので御座います。」
「うむ、成程。」
「其が爲に主人は非常な立腹で、然う吾儘(わがまゝ)を言ふのなら、費消(つかひこみ)を償へ、其が出來ずば告訴する。然うしては貴樣の躰に一生の疵が附く事だから、思反して主人の指圖に從へと、中に人まで入れて、未だ〴〵申してくれましたのを、何處までも私は剛情を張通して了つたので御座います。」
「吁！　其は貴方が惡いな。」
「はい、もう私の善い所は一つでも有るのぢや御座いません。其事(そのこと)に就きまして、主人に書置も致しましたやうな次第で、既(すで)に覺悟(かくご)を極めました際まで、心懸と申すのは、唯其ばかりなので御座いました。で又其の最中に是の方の身請騒が起りましたので。」
「成程(なるほど)！」
「是の母親と申すのは養母で御座いまして、私も毎々話を聞いて居りますが、隨分それは非道

な強慾な者で御座います。まあ悉く申上げれば、長いお話も御座いますが、是も娘と申すのは名のみで、年季で置いた抱も同樣の取扱を致して、爲て遣る事は爲ないのが德、稼げるだけ稼がせないのは損だと云つたやうな了簡で、長い間無理な勤を爲せまして、散散に搾り取つたので御座います。

で、私の有る事も知つては居りましたが、近頃私が追々廻らなく成つて參つた所から、さあ聒しく言出しまして、每日のやうに切れろ〳〵で責め拔いて居ります際に、今の身請の客が附いたので御座います。丁度去年の正月頃から來出した客で、下谷に富山銀行といふのが御座います、他の取締役で、」

「えゝ!?　何……何……何ですか!」

「御承知で御座いますか、那の富山唯繼と云ふ……。」

「富山?　唯繼!」

其の面色、其の聲音!　彼は言下に皷怒して、其名に躍り被らんとする勢を示せば、愛子は駭き、狹山は懼れて、何事とも知らず狼狽へたり。貫一は轟く胸を推鎭めても、仍ほ眼色の燃ゆるが如きを兩箇が顏に忙しく注ぎて、

「其の富山唯繼が身請の客ですか。」

「はい、然やうで御座いますが、貴方は御存じで被在いますので？」
「知つて居ます！　好く……知つて居ます！」
狭山の打惑ふ傍に、女は密に驚く聲を放てり。
「那奴が身請の？」
「はい、然やうなんで御座います。」
問はるゝ愛子は、會釋して、
「で、貴方は彼に退かされるのを嫌つたのですな。」
「はい。」
「然すると、去年の始から貴方は他の世話に成つて居つたのですか。」
「私は那麽人の世話なんぞには成りは致しません！」
「はあ？　然ですか。世話に成つて居たのぢやないのですか。」
「いゝえ、貴方。唯お座敷で始終呼れますばかりで。」
「あゝ、然ですか！　それぢや旦那に取つて居つたと云ふ譯ぢやないのですか。」
女は聞くも穢はしと、有繋謂ふには謂れぬ尻目遣して、
「私には、然云ふ事が出來ませんので、今迄ついにお客なんぞを取つた事は、全然無いんで御

座います。」

「あゝ、然ですか！　うむ、成程……成程な……解りました、好く解りました。」

狹山は俯き居たり。

「それでは恁云ふのですな、貴方は勤を爲て居つても、外の客には出ずに、斯人一箇を守つて――然ですね、」

「さやうです。」

「而して、餘所の身請を辭つて――富山唯繼を振つたのだ！　然ですな。」

「はい。」

倏忽に瞳を凝せる貫一は、愛子の面を熟視して止まざりしか、旋て其眼の中に浮びて、輝くと見れば、霑ひて出づるものあり。

「嗚呼……感心しました！　實に立派な者です！　貴方は命を捨てゝも……斯人と……添ひたいのですか！」

結局二人は貫一に救はれて、彼の家に引き取られることになるのである。

ここで金色夜叉は未完成のままで切れてゐるのであるが、最後にお宮の手紙が出てゐるから、それを

揭げて金色夜叉の解説を終ることにしやう。これが三十五年四月となつてゐる。

惜くもなき命は有り候ものにて、はや其より七日に相成候へども、猶日毎に心地苦しく相成候やうに覺え候のみにて、今以つて此世を去らず候へば、未練の程の御つもらせも然ぞかしと、口惜くも御耻しう存上參らせ候。御前樣には追々暑に向ひ候へば、いつも夏まけにて御惱み被成候事とて、此頃は如何に御暮し被遊候やと、一入御案じ申上參らせ候。

私事人々の手前も有之候故、儀ばかりに醫者にも掛り候へども、もとより藥などは飲みも致さず、皆打捨て申候。御存じの此疾は決して書物の中には載せて在るまじく存候を、醫者は譯無くヒステリイと申候。是もヒステリイと申候外は無きかは不存申候へども、自分には廣き世間に比無き病の外の病とも思居り候ものを、さやうに有觸れたる名を附けられ候は、身に取りて誠に誠に無念に御座候。

晝の中は頭重く、胸閉ぢ、氣疲劇しく、何を致候も太儀にて、別けて人に會ひ候が懲く、誰にも一切口を利き不申、唯獨り引籠り居り候て、空く時の經ち候中に、此命の絶えず些づゝ弱り候て、最期に近く相成候が自から知れ候やうにも覺え申候。

夜に入り候ては又氣分變り、胸の內俄に冱々と相成、なか／＼眠り居り候空は無之、かゝる折

に人は如何やうの事を考へ候ものと思召被成候や、又其人私に候はゞ何と可有之候や、今更申上候迄にも御座候はねば、何卒宜しく御判じ被遊度、夜一夜其事のみ思續け候て、毎夜寐もせず明しまゐらせ候。

然りながら、何程思續け候とても、水を覓めて逾よ焰に燃かれ候に等しき苦艱の募り候のみにて、いつ此責を免るゝともなく存へ候は、孱弱き女の身には餘に〳〵難忍き事に御座候。猶々此のやうの苦しき思を致候て、惜むに足らぬ命の早く形付き不申るやうにも候はゞ、いつそ自害致候てなりと、潔く相果て候が、迥に愈と存付き候へば、萬一の場合には、然やうの事にも可致と、覺悟極めまゐらせ候。

さま〴〵に諦め申候へども、此の一事は迚も思絶ち難く候へば、私相果て候迄には是非々々一度、如何に致候ても推して御目もじ相願ひ可申と、此頃は唯其事のみ一心に考居り申候。昔より信仰厚き人達は、現に神佛の御姿をも拜み候やうに申候へば、私とても此の一念の力ならば、決して愜はぬ願にも無御座と存参らせ候。

昨日は見舞がてらに本宅の御母様參られ候。是は一つは唯繼事近頃不機嫌にて、とかく內を外に遊びあるき居り候處、兩三日前の新聞に善からぬ噂出で候より、心配の餘樣子見に參られ候次

第にて、其事に就き私へ懇々の意見にて、唯繼の放蕩致候は、畢竟内のおもしろからぬ故と、日頃の事一々誰が告げ候にや、可恥しき迄に皆知れ候て、此後は何分心を用ゐくれ候やうにと被申候。私事共節一思ひに不法の事を申掛け、愛相を盡され候やうに致し、離縁の沙汰にも相成候はゞ、誠に此上無き幸と存付き候へども、此姑と申候人は、評判の心掛善き御方にて、殊に私をば娘のやうに思ひ、日頃厚き情は海山にも喩へ難きほどに候へば、なかなか辭を返し候段にては無之。心弱しとは思ひながら、涙の零れ候ばかりにて、無據身の不束をも詫び申候次第に御座候。

此命御前樣に捨て候ものに無御座候はゞ、外には此人の爲に捨て申可と存候。此の御方を母とし、御前樣を夫と致候て暮し候事も叶ひ候はゞ、私は土間に寐ね、薦を絡ひ候ても、其樂(そのたのしみ)は然ぞやと、常に及ばぬ事を戀しく思居りまゐらせ候。私事相果て候はゞ、他人にて眞に悲みくれ候は、此世に此の御方一人に御座あるべく、第一然やうの人を欺き、然やうの情を餘所に致候私は、如何なる罰を受け候事かと、悲く〳〵存候に、はや淺ましき死樣は知れたる事に候へば、外に私の願(ねがひ)の障(さはり)とも相成不申やと、始終心に懸り居り申候。

思へば、人の申候ほど死ぬる事は可恐しきものに無御座候。私は今が今此儘に息引取り候はゞ、何よりの仕合と存參らせ候。唯後に遺り候親達の歎を思ひ、又我身生れ効も無く此世の緣薄く、かやうに今在る形も直に消えて、此筆、此硯、此指環、此燈も此居宅も、此夜も此夏も、此の蚊

の聲も、四圍の物は皆永く殘り候に、私獨り亡きものに相成候て、人には草花の枯れたるほどにも思はれ候はぬ儚さなどを考へ候へば、返す返す情無く相成候て、心ならぬ未練も出で申候。

尾崎紅葉評傳

前置き

この研究では先生といふ敬語を暫く一切抜くことにしておかうと思つたが、矢張始末が惡いので、先生としておく。しかし師弟としての立場から離れて見たいと思ふ。その點は緣故の人人に御宥恕を願ひたい。勿論、師弟としての個人的な心持を忘れてゐる譯ではない。紅葉研究と言つても、僅か三十七年の生活で、藝術家として是から人生觀照の目も開き、人間としての自覺も出て來ようと云ふ時に亡くなつたので、その短い生涯には大して記錄すべきことのあらう筈がない。勿論それにしても驚くべき大人ぶつた人であつたと同時に、時代の殘して行つた偉大な作家であつたために痕迹は一般的に可也大きい。勿論生一本の小說家で前後類例がないほどの才分に惠まれてゐたし、努力も惜しまなかつたと思ふ。その點文壇の偉大な存在である。

何にしても先生を論ずる材料は少いと言つてゐゝ。自分は生立ちから始めて十餘年間の作家生活について、概觀を述べ、それから徐ろに作品に入らうと思ふ。これを述べるに當つて、松

原至文氏の「明治文豪傳の內尾崎紅葉」に負ふところ最も多いことを明かにしておきたい。

生立ち

尾崎德太郎（後に紅葉）は實に慶應二年十二月の誕生で、芝中門前で産湯をつかつたのである。三歲で母に訣れ、四歲のとき神明町なる母方の祖父母（荒木氏）の許に引取られ、懇切嚴格なる祖父に育てられた。（筆者などはこの祖父をよく知つてゐるが、門弟などに對して誠に慈愛の深い老體であつた）純然たる神明ッ兒であつたが、荒木氏は多分士族であつたらうから、强ち下町ッ兒ともいへない氣分はあつた。實父は彫刻の名人で、當時のデカダンであつたらしいが、紅葉にも藝術家としては何等か遺傳はあつたものと見ていゝかも知れないが、育親が几帳面な荒木氏であつたため、人としては實に常識圓滿な普通道德の實踐家であつた。洒落氣滿々たるものであつたことは無論で、それが先生の藝術の殆んど重なる要素であつたと言つても可いくらゐであるが、實際生活にかけては實に堅氣な江戸ッ兒の典型であつたと言つて可からう。田舍ものの自分などは、この洒落氣澤山の先生の面には餘り觸れてもゐないし、興味もなかつたけれど、先生も「我樂多文庫」時代の樂天的な戲作者肌の氣分は、後年に至つて次第に無くなつて來たのである。

明治六年の七月七歲で寺子屋へ入つたが、師匠といふのが久我氏であつた。先生は幼時からウ

キットに富んでゐた。文才も豐かであつた。神童とさへ言はれたさうである。腕白ではあつたが臆病で且つ性格が几帳面であつた。十歳前後には友達を集めて新聞ごつこなどして遊んだといふが、それが二つ折のもので、荒木氏がその當時購讀してゐた讀賣新聞も亦二つ折だつたと云ふ。先生は後に讀賣新聞の記者となり、また小説を受持つて（後には小説專門で、出社はしなかつた）生涯の傑作は殆んど讀賣新聞の讀みものであつた。讀賣新聞への入社は、多分饗庭篁村氏の後ではないかと思ふが、入社の初めは雜報も偶には書いたものと見て可からう。その證據には筆者が博文館の編輯にゐる頃、先生は社の歸りとみえて、小倉の袴に薩摩絣の書生羽織、手に小汚い鞄を提げて、鬖髮も蓬々として、「伽羅枕」や「不言不語」などの婉美で洒落た作品を書く人とは受取れないくらゐ荒いところがあつた。勿論その時の印象で平常を律することは出來ないけれど、兎に角その頃のあの汚い新聞社の編輯室には相應はしいものであつたかも知れない。容貌は異常で、目は大きく、口元は締まり、色は淺黑く、四肢は暢び〳〵して、藝術的結社の頭領として、明治新文壇の鬪將として、實に覇氣滿々たる概があつた。自分は今東光氏が何處かにちよいと先生に似た面差をしてゐるので、懷しく思ふことがあるが、それのもつと線の大きい雄壯なものと見てい〻。勿論大變違つてはゐるが、それでゐながらちよつと似てゐるのである。

十三歳の時、田安御門外の中學に入り、在學二年にして、愛宕下仙臺屋敷の幕府の儒岡鹿門氏

に就いて漢學を修め、傍らまた明治十五年から三田英學塾に通つた。先生の文章の地が大體漢文であるのも、その爲である

明治十七年には大學の豫備門の試驗に登第し、四年間そこに通つたが、その頃から藝術欲求が鬱勃として禁ずることができなかつたらしい。同志六七人と計つて文友會なるものを起し、先生は緣山と號して詩文を作つた。緣山は誕生地芝の三緣山に因んだもので、後の雅號紅葉は紅葉山から出てゐる。次ぎに凸々會といふのがあつて、それは詩文よりも運動遠足が主であつた。先生は可也な腕白で、運動が大好きであつたやうである。

我樂多文庫の發行とその運命

硯友社といふ藝術的結社の機關として、我樂多文庫の發行されたのは、實に十八年の五月で、紅葉山人時に歲わづかに十九歲であつた。

先生自身の談話として國木田獨步氏の「紅葉山人」なる評傳に記されたものに、左の如き數章がある。曰く、

その頃世間に持囃された讀みものは春のや君の書生氣質、南翠君の社會小說、それから篁村翁の讀賣新聞における輕妙な短篇であつた。それらを見て山田美妙とよく話し合つたことです

が、此分なら一二年内には此方も打つて出て一合戰してみよう。末には天下を……などといふ大氣焔もあつたのです。

ところへ石橋思案が來て、唯かうしてゐても詰らんから、修行のため雜誌を拵へては何うかといふのです。で、會員組織にして、同志の文章を募らうといふので、山田、石橋と三人手分けして會員を募ると學友其他で二十五人も得ました。今日になつてみると、會員の變遷は驚くべきもので、死亡、行方不明、音信不通等で、知れてゐる分では機械輸入の商會にゐるもの一、地方判事一、法學士一、工學士二、地方病院長一、生命保険會社員一、鐵道驛長一、商館の番頭が二、漁業家建築家で米國にゐる者二、大阪と横濱とで銀行員二、三州の在で樹を植ゑてゐるのが一、中學教員が一、某省の屬官が二、石炭賣込が一、等々。

それについて獨歩氏はこんな事を言つてゐる。曰く、「果して然らば、運命の神の指揮如何によつては何々中學校は其教授に尾崎德太郎を得たかも知れない。東海道何驛の驛長に文學好きの尾崎某を得たかも知れない。要するに當時大學豫備門にゐた一青年尾崎は、天職として一生を詩神に獻ぐべく決心して文壇に上つたのではないらしい、しかし運命の神に謝す！　爾來二十餘年、兎も角餘輩は紅葉山人を得た。我明治の文壇は洋裝文學の泰斗を得た。そして幸ひに横濱商館の番頭に尾崎德太郎なる何處の馬骨とも知らない姓名を見出さないで濟んだ。紅葉山人！　彼の名

の今日何ぞ隆々たる！　露伴と竝稱されて、政界の伊隈、劇界の團菊、文界の紅露といふ、何人も兎角の異議を挾むことの出來ない大立者の紅葉山人！　余輩は彼の大成功を祝する。」云々。

しかし藝術家の出現は大抵かうしたものである。混沌たる明治文學の初期に於ては、特にさうである。夏目漱石氏も「ホトトギス」に「我輩は猫である」を書き初めなかつたら、一大學教授で終つたであらう。天才詩人露伴も亦、其の前身は北海道あたりの郵便局員であつたとか聞いてゐる。

硯友社の起り、我樂多文庫の發刊等については、樣々の話が傳はつてゐるが、末梢的のことで、筆者の地方などにもさう云ふ企てはあつたのである。たゞ當時の硯友社の氣分を覗ふために、硯友社戲則といふのを掲げてみよう。

一、戲則は規則の洒落にして、國音驥足に通ず。驥足は笑名抄（これで和名抄とよむのサ）に馬の足とあり、これは初の中こそ馬の足でも本社の舞臺で腕を磨けば、つまり千兩々々といふ價値が出るとは、ハテ深い意味ね。

二、本社は男女老少粋不粋、水にすむ船頭、花をうる老爺、生きとしいけるものの會員たることを許すなり。但し自惚生醉の御客樣は御入會堅く御斷申上候。

三、本社は毎月一回、我樂多文庫を刊行す。これは賣買禁制の品なれば、錢かねづくではとん

と自由になりませぬ。むかしの名妓によくある奴也。

四、會員は毎月金拾錢を納むべし、と云ふと他人がましいが、矢張り例の京傳流サ。

五、文庫は三門に種類を別け、第一門を小說とし、心織筆耕と名け、第二門を戲文狂歌俳句新體詩などとし、千紫萬紅と名け、第三門を五三桐の飛花落葉（デェブ落洒るノ）と名け、狂句端唄都々逸落謎とす。どれもこれもとかく御氣に入るの門なり。

六、おやしきでは不義をきつい御法度とす。本社にては燒直しが大の禁物なり、それもコンガリ狐色なら編輯方が方寸の中にあります。

七、第六の戲則を破り、至つて腹の黑裝束が、折々忍びこむときは、編輯方がすかさず曲者待てと引戾しても、當身をくらつて取逃し、ウスドロの鳴物で紙上へあらはるゝことなきにあらず、方々御油斷めさるな。右の條々肝に銘じ、掌へかき付、舐めて置くべき者也。

これは勿論紅葉先生の筆で、洒落にしても幼稚なものだが、鼻うごめかして得意滿面の惡戲な樣子が目に見えるやうである。

硯友社は、初め先生と山田美妙齋氏、石橋思案氏などが發頭らしいが、美妙氏は先生よりも年長で、學校でも二年ほど先輩である。幼時隣合せで、竹馬の友であつたのが、後しばらく相逢ふ機會なく、大學豫備門で再び相見た時には、實に手を取つて互に泣かんばかりの喜びであつたと

いふのであるが、後美妙氏は硯友社をぬけて金港堂へ入り、「都の花」を發刊して、やゝ口語體に近い言文一致で、清新な小說や韻文を盛んに發表して、その頃の文壇では實に花々しいスタートを切つてゐたものである。筆者の記憶するところによれば、當時の文壇では、坪内逍遙とか、二葉亭四迷とか嵯峨の屋御室とか外國文學の影響を多分に受けた人を除いて、獨步氏の所謂洋裝文學（變な名だが）その實日本文學では、美妙氏の作品などは文獻上看脫すべからざるものである。しかも西洋文學の影響は、むしろ紅葉先生などよりか深く多くて、今から見ては頷かれる詩的内容をもつたものも少くないのである。のみならず、初めは可也奇矯で、獨りよがりではあつたけれど、思ひ切つた言文一致で小說を書いたものは恐らく美妙氏が先驅で、その文學的功績に至つては、紅葉先生の下ではないと思ふものである。この美妙氏が奇禍を負つて、中途挫折し、世間から忘れられ、最初の訂盟者であり、後の競爭者であつた紅葉先生の盛名とは比較にならぬ敗殘の晩年を送つたのは、個人としての何等かの缺陷があつたのかもしれないけれど、藝術家としての運命は確かに不幸である。筆者はこれを社會的歷史的不公平と思ふと同時に、美妙氏の才分が本當に裕かに暢びなかつたことを惜しむものである。紅葉先生も亦友情として同感であつたのではないだらうか。この二人の交友の事については、筆者も何等知るところはない。

さて我樂多文庫は其後益々隆盛で、一時は每號三千部を刷り、月二回發行で、一部の定價が三

錢であつたが、初めは名々鞄のなかに詰込んで、學校の休憩時間などに、大聲に呼び歩いたりした。先生の風采はといふと、紫ズボンと綽名された、柳原仕入れの染返しの紺ヘルのズボン、日向へ出ると紫色してゐるのを穿き、日蔭町物の茶羅紗の羊羹色になつた、ぼて〳〵重い外套を引かけ、「現金でなくちや可かんよ」などと呼んで歩いたといふ話である。それが遂に三千部を發刊するやうになつたのである。當時の執筆者は美妙齋、思案外史、丸岡九華、嚴谷漣山人、それに新加入の川上眉山人。

しかし幾許もなく、明治二十一年八月美妙氏が同社を脫退して、金港堂の聘に應じて當時創作雜誌の唯一の女王「都の花」を發行してから、本格的な營業雜誌でもなかつた「我樂多文庫」は俄かに光を失ひ、後二十二年二月終刊の悲運に遭遇した。爾來吉岡書店の「文庫」が其の後を繼ぎ柳浪、眉山、水蔭、乙羽が執筆、寒月や露伴なども寄稿した。

それから「小文學」「江戶紫」など、興亡常なき有樣で、二十四年に至つた譯である。

そこで先生は何うして大學を止したか。勿論、文學熱に浮かされたためであつたらうが、初め廻覽雜誌風のものであつた「我樂多文庫」が賣品となつたとき、編輯員として先生も署名してゐたところから、學校の注意を受けた。先生は文學雜誌だから可からうと考へたが、何彼と不快なこともあつて、一時は煩悶してゐたが、到頭文科に入つて二年目に斷然退學してしまつた。

吉岡書店が「新著百種」を發刊した時、先生は創刊號に「色懺悔」と云ふ有名な美文もどきの作品を載せてゐる。ちやうど美妙氏が「夏木立」を發表して、名を馳せた後なので、先生も「色懺悔」の一篇には隨分力瘤を入れたと云ふ話である。美妙氏の先驅的言文一致とはちがつて、先生のは雅俗折衷であつた。三馬や也有や西鶴なぞから出た新文體で、實に凝つたものであるが、まだ小說といふほどのものではなかつたかと思はれる。しかし其の文名は一時に高く、二十三年十二月、まだ在學中であつたに拘はらず、讀賣新聞から禮を厚うして招聘された。爾來先生の作品は大抵讀賣新聞に載ることになつたが、人氣作家として海內に文名を播したのも、一つはさうした舞臺を得たからでもあらうし、多數の讀者を前において、努力精進したためでもある。

春陽堂主和田鷹城氏が最近まで連綿續いた「新小說」を發刊するに方り、須藤南翠、森田思軒、饗庭篁村など、當時一流の大家三名の名を以つて先生と小波氏へ寄稿を賴んで來た。和田氏との親密な關係はこれから始まつたものと見て可からうと思ふが、筆者が先生に聞いたところでは和田氏は紅葉といふ雅號に感服せず、美妙齋とか何んとかいつた、もつと豪さうな號がいゝと言つたといふのである。

「色懺悔」について、「巴波川」と云ふのが、これは好個の短篇小說である。「拈華微笑」、「此ぬし」なども、瀟洒な好短篇であるが、「夏痩」、「二人女房」などになると、もう本格的な立派

な大作である。二十四年「伽羅枕」と云ふ物語風の作品が紙上に連載されるに及んでは、その麗筆忽ち滿都の子女を魅し、「夏小袖」「三人妻」等續いて、又江湖に喧傳されるに至つた。

「三人妻」、「不言不語」、「冷熱」、「隣の女」、「青葡萄」、「八重欅」など、今でも其の名は一般子女の耳に懷しい響を與へるであらう。その中には飜案ものもあるが、先生の腕にかゝると斧鑿の迹は少しも見えないで、渾然珠の如き日本好みの藝術品となつてしまふのである。

有名な「多情多恨」は明治三十年の作で、「我家の小說は米の飯なり」と云ふ抱負をもつて書かれたもので、先生はその頃は漸く三十を越したばかりだと思はれるが、絢爛の境を通りこして、平淡の味を欲するに至つたものと見てよからうし、これを大きく言へば、人生味といふものが、漸く出て來たのだと言ふことも出來よう。それ故この作品は先生の製作品のなかでは、尤も自然なもので、艷麗な文章の衒ひは先づないと言つて可い。

「多情多恨」で人間の日常生活を描き、平淡の境に入つた作者が、何うした動機でか、一代の傑作とうたはるゝ「金色夜叉」と云ふ大きな山に取りかゝつたのは、頗る注目に値ひする。筆者は聊かその時の狀況を知つてゐるが、慌忙しい師走の巷に黑い夜叉や紅い火焰を描いた立看板が配置されたのは、恐らく新聞小說の宣傳としては未曾有のことではなかつたらうか。何にしても物凄い勢ひであつた。そして「金色夜叉」の掲載されたのは、三十一年の一月からだつたかと思

ふ。

先生としては大きな結構と主題のある作品で、人生觀といへば人生觀、社會觀といへば社會觀のやうなものが、筋の運びと、その心理描寫と經緯を成して、到るところに披瀝されてゐる。恐ろしく理窟つぽいところもあつて、常識哲學とも言はるべきであらうが、文體は和漢洋を折衷したもので、「多情多恨」でのろ〳〵田圃道を拾つてゐたものが、忽ち高い山嶽を攀ぢはじめ、深林大澤を跋渉するの概がある。

しかし「金色夜叉」は先生の一面の代表作ではあらうが、意圖と態度から言つて、決して先生の本領であつたとは言へないであらう。藝術品として優秀なものは、むしろ「むき玉子」、「おぼろ舟」、「紫」、「青葡萄」などスケッチ風の小品や短篇であつた。先生もさうした意氣なものが好きであつたので、西鶴やモーパッサンが氣に入つてゐたのも、その爲である。あの頃の文壇、殊に年の若い先生が、何の程度に西鶴やモーパッサンを理解したかは、一つは時代の問題でなくてはならないが、しかし筆者の記憶するところによれば、その頃連りにライトタッチといふ事が先生の口にされた。これはモーパッサンの作風から來たことであつたらうと思ふが、先生も一種のスタイリストであると見て可い以上、人生の觸れ方が輕くていゝくらゐの程度のものであつたらうと想像される。先生のところへは上田敏氏などが來てゐた。千葉鑛藏氏も遊びに見えてゐた。

田山花袋氏は千紫萬紅時代から、執筆者の一人であつたやうに聞いてゐる。先生はシャロットブレームあたりの通俗小説を、餘り上手でない發音で讀んでゐられたが、以上數氏から外國文學のことは聞いてゐられたやうに思ふ。モーパッサンは正しく上田氏の輸入で、ライトタッチと云ふ言葉も其邊から出たのではなかつたか。勿論筆者が初めて拜謁したときにはヂッケンスの話なども出たほどで、英文學については、時代相當の知識はあつたものと見て可い。晩年病床に就いてゐられた頃、枕頭にハウプトマンの「寂しき人々」やオストロフスキイの「嵐」などがあつたのを、筆者は借りて來て讀んだことを記憶してゐるが、それらは千葉鑛藏氏が寄せられたものであつた。

「金色夜叉」のやうな長篇は、勿論先生が試みた最初のものであるので、あの一篇をもつて先生の本質を論ずるのは間違つたことかも知れないし、若しも四十五十乃至西洋の大家のやうに七十八十までの壽を保たれたならば、體驗も加はり、人生觀も深まり、偉大な作品が出來たかも知れないが、短い生涯を通じての上では、決して得意の作とはいへない。先生も亦「金色夜叉」執筆中屢それを口にされた。

先生の晩年は健康も衰へてゐたし、藝術についても煩悶があつた。想なしとか、淺薄だとかいふ批評もあつたので、「金色夜叉」を執筆しながら、それから後の藝術家としての態度や何かに

ついて、可なり苦しまれたことと思ふが「金色夜叉」がざつと六年もかゝつて、あれだけの量であつたことを想ふと、苦吟であつたことは想像に難くない。人氣と比較して、社の待遇がそれほどでもないといふところに、先生も少し自重の態度を取つたことも、筆者は今から想像し得るのであるが、それにしても長篇小說の筋を作るのは、先生に取つては餘り樂な仕事でなかつたことは判る。

この事は作品批評に譲るとして、筆者の知つてゐる先生の性行の片鱗を示さう。

先づ何よりも先生は文字を弄くることが大好きであつた。文章を捻くることが畢生の道樂であつた。俳句なぞに凝つたのも、その流儀から來てゐるので、來客も多かつたし、座談も好きであつたけれど、先づ終日机にへばりついて何か彼か字を弄くつてゐたものと言つて可い。自分が先生を或種のスタイリストといふのも其處から來てゐるので、一作一作ごとに何かしら目先の變つた文體を試みようとしたものであるが、文章に凝り性であつたことは言ふまでもなく、俳句もなかなか遲吟であつた。字體にも亦ずゐぶん苦心したものだが、本の裝幀とか口繪とかに至つても、總て自分の好みで獨特の工夫を凝らすことに腐心したものである。で、机の前に胡坐を組んで何か彼かひねくつてゐられたが、健啖も亦有名なもので、若いにしては又非常なお茶呑みであつた。酒は一二杯で眞赤になつて、直ぐ横になつてしまふ。座談は殊に面白い方で、諧謔洒落が口をつ

いて出るのであるが、決して輕薄ではなかつた。

生活は實にきちんとしたもので、物質に對しては殊に、ルーズなところが少しもなかつた。これは收入が澤山なかつたからでもあらうし、夫人の心掛が好かつたからでもあらうが、自體先生の物質觀には堅實なところがあつた。人の面倒を見るのにも、平日の用意がいゝからで、人氣作家が陷り易い生活の破綻などは見られなかつた。これが亦濫作をしない先生の性癖と合致したもので、すら／＼と書き流せば流せないこともないのであるが、自重してといふよりは、道樂氣の凝り性がそれをさせなかつたのである。「此ぬし」は一夜漬のものだといふことを聞いてゐる、「男心」なども、先生にしては珍しく書き流しのものらしい、水の流るゝやうな文章であるところを見ると、生來文才に惠まれた質で、文章だけでは決して遲筆ではなかつたのである。たゞ物を疎かにしない氣質が、先生を凝り性にしてしまつたのである。

先生には人間性に對する議論とか、人生についての談話とかいふやうなものはなかつたし、重い江戸ツ兒趣味に基いた人情美とか意氣とか云ふものが、いつも話の味をつけてゐたものだが、口を開けば乃ち文章であつたのである。俳句がまた非常に好きで、運座に出ないと機嫌が惡かつた。自分達はよく簞笥町の塾で、夜おそく上の先生の家からおりて來る先生を迎へて、一室に圍欒して、徹宵氣焰で明したこともあるが、屢自分達だけで運座が開かれた。

硯友社員がおしまひまで友情で固つてゐたのは、先生の愛黨心、結束力といふやうなものが與つて力があつたが、しかし親分氣質の黨派心がまた崇りを成して、世間から咀はれたことも少くなかつたし、快からず思つた人もないとは言へなかつた。眉山氏などは多分さうだつたらうと思ふが、友情といふことになると、何處までも親分肌の先生は、何うかすると好い意味でのイゴイストであつたと言つて可からう。忌憚なく言へばお山の大將でありすぎる場合もあつたのであるが、それは寧ろ先生の目下に對する愛の深さから來てゐるし、また江戸ツ兒風の時代的氣質の現はれでもある。

先生は何か個人雜誌か同人雜誌のやうなものを出すことが、一つの道樂で、その道樂は生涯を通じて終始してゐる。文藪といふパンフレットは晩年のもので、小品と俳句とを載せ、先生は小西増太郎氏の譯にかゝる「アンナカレニナ」を抄略し文飾して、ほんの少しづつ載せてゐたが、筆者にも文章を微せられたのに對して、何うした氣持だつたか、元來無性な筆者のこととて今回はお間に合せかねるといふ慇懃な手紙を出したところ、それが先生の逆鱗に觸れたものとみえて、朱でもつて筆者の文句に、數個所嘲罵の言辭を挿入して突返されたので、早速ちよつとした小品を差出したことを覺えてゐる。

筆者は上來略々紅葉山人の爲人を印象的に敍述したつもりであるが、書けば書くことは未だ澤山あるのである。しかし共等は餘りにも個人的のことで、書いても書かなくとも、紅葉研究には大した影響のないことばかりである。たとへばその日常生活のうへでは、先生はひどく食味通のやうに言はれてゐる。勿論一代の通人だけあつて食道樂であつたには違ひないが、今から見るとそれもさう範圍の廣いものだとは思へない。知識はあつたらうし、各方面の食味にも通じてゐられたらうけれど、今日の一流どころの流行作家に比べれば、寧ろ質素であつたと言つて可い。家庭の食膳なぞも、夫人が煮ものがうまかつたし、先生も口喧ましい方ではあつたらうが、牛肉のロースなんかが好い方ではなかつたらうかと思はれる。これは先生の經濟から割出しても當然のことで、先生には養育の恩ある荒木老人夫妻がゐられたし、お子さんは四人あつたし、玄關子も二人くらゐゐたし、交友の範圍も廣く、しかも家政はきちんとして、少しもルーズなところがなかつた。でもなかつたら、文章に凝つてゐるなんてことは迚も出來ないことで、先生が常住不斷机の前に坐つて文章か俳句か字かを捻くつてゐると同時に、亂作をしなかつたと云ふことや、大家の體面を保ち、人の世話をしたと云ふことは、先生の經濟的生活が引締つてゐたからである。

これは一半また東京の堅氣な家庭に育つた夫人の内助にもよるので、夫人は筆者が知つてゐる範圍では、紅葉先生を良人に持つたといふ幸福を十分に感謝してゐられたせゐもあらうが、曾て着飾つて劇場や寄席などへ行かれたことはなかつたのである。一年の享樂は九段の招魂社の祭を見に行くくらゐのものではなかつたらうか。大作家の夫人としては甚だ趣味がなさすぎると言へばそれまでだし、先生は餘りに家庭に納まりすぎたとも言へるのであらうが、藝術家としての生活を崩さなかつたことは、短い生涯にしては決して少いとは言へないあれだけの作品を殘し得た所以であらう。先生の「讀賣」から受取る俸給は好い時で百圓くらゐのものだつたと思はれる。その他に雜誌へ書くものや、單行本の收入はあつたとしても、生活は餘り餘裕のあるものではなかつたので、先生も不滿はありながら物質は諦めてゐたのである。貧富について社會觀のやうな感慨を筆者は先生に聽いたことがある。その頃先生は安田一家の人と交際してゐられたので、自然さう言つた社會相が反映したものであらう。「金色夜叉」の主題となつてゐるところの概念もさう言つた種類のものである。趣味性は高く洗練されたものでなかつたにしても、江戸ツ兒肌の庶民的氣分から來る通人肌のところがあつたので、先生も金がほしかつたに違ひないのである。家庭にをさまつて、道樂に俳句や何かを捻くつてゐたのは、それが先生の本質的のものであつたし、本來道德觀念の比較的厚い人だつただけに、藝術家の矜を傷つけることは敢てしなかつたし、富

貴を羨みはしなかつたけれど、もう少し何とか門戸を張りたいくらゐの考はあつたに違ひない。道樂は文章や俳句のほかに、撞球、弓、狩獵、寫眞なぞもあつたが、弓が巧かつたほかは、都て無器用で、寫眞も狩獵も殆んど問題にならなかつたやうでなる。

先生には殊に訪問客が多くて、座談が巧かつたから、客のお尻が自然長くなつた。晩年は殊にさうで、苦吟の「金色夜叉」が書けなかつたのも、もつと深い藝術上の惱みがあつたからではあるが、又藝術家の先生の生活とはさう深い交渉のない各方面の訪問客が餘りに多かつたことも、累を成してゐた。

さて愈作品批評に入るのだが、實を言ふと筆者は餘り讀んでゐない。誰のものもさうで、先生のものは寧ろ讀んだ方であるが、それでもいくらも讀んでゐない。紅葉研究を引受けたとき一應全集に目を通すつもりで、用意したのであつたが、讀んで通俗的興味のないこともないし、話術の巧いのには熟々感服させられるが、何う考へても私など野暮な人間の肌に合はないところがあつて、全部通して讀む氣にはなれない。これは先生が江戸文學の繼承者であるといふのが恐らく最も適當な批評であらうかと思はれるところから來てゐるので、獨步氏の言ふやうに成程洋裝文學といふことにも一應領かれる點もあるけれど、先生の本領は何といつても江戸文學の脈を傳へてゐるところにある。世界は勿論明治である。人物も明治時代の空氣を呼吸してゐる人間である。

道徳觀念や社會觀といつたやうなものも、又その時代のものである。しかもそれらは總て外國文學の洗練を受けない以前のもので、通俗的な人情と世俗的な道德理念といつたやうなものの上を流れてゐる。先生にはヒユモアの才が多分にあつたが、そのヒユモアも江戸傳來の洒落が明治化されたやうな種類のもので、その洒落の才分が作品の隨處に横溢して、一般讀者の興味を唆るところのあつたのは言ふまでもない。

ずつと初期のもので、「色懺悔」が先生の出世作といつて可いのであらう。これは山田美妙が「都の花」によつて斬新な言文一致で、作品の名は忘れたが、兎に角形式の全く新しい續きものを書き出した。ちよつと後のことで、文章はずゐぶん捻つたものであるが、まだ小說といふほどの內容形體を具へるに到らないもので、言つて見れば文章のための文章といつた形のものである。一種の情緒はあるけれど、頗る甘い道樂氣の多いものである。これから見ると、「新色懺悔」は、ずつと進步したもので、若い西鶴といつたやうな、先生なりの人生に觸れたところがある。

筆者は先生が小說家といふよりか、むしろ一種のスケツチライタアではないかと思つたこともあるが、これは「金色夜叉」に晩年の六星霜を苦しんだといふことから來てゐるので、その他に長篇はあつても、結構のあるものが少いやうに思つたからであるが、しかし必ずしもさうではない。「おぼろ舟」、「安知ピリン」、「青葡萄」といつたやうな傑れた小品もあるが、又「二人女房」

や、「三人妻」のやうな最も話の面白い小説もある。「伽羅枕」は長篇としては初期のもので、これは先生の作家としての才分の豐かなことを裏書したもので、先生の理想と言つては少し大業かも知れないが、兎に角江戸ツ兒の心意氣といつたやうなものを、佐太夫といふ一人の遊女によつて、幽艶の才筆で浮彫にして見せてゐる。文飾が餘り絢爛なために却つて眞實味を缺いてゐるところもあるが、作風が寫實とは言ふものの、外國文學の影響を受けた、所謂リアリズムの寫實とはちがつて、こゝにも先生の享けて來た江戸文學風の、一種日本的想念とでもいふやうな觀念が糢糊として、その文章の綾の間に漾つてゐる。佐太夫が遊女になる動機にはドラマチカルなものがあつて、これをもつと近代風に飜譯することも不可能ではないし、遊女としての佐太夫の心意氣などにも藝術的要素は多分にある。この心意氣は、武士階級の武士道、つまり大和魂といつたやうなものの、較々大衆的になつたもので、デカダン式に混濁し靡爛したところのあるのは勿論で、先生はこれを相當氣品のある文章で、藝術家の同感をもつて書いてゐるので、必ずしも大衆文藝には墮してゐない、作家としての天分のほどが十分覗はれるのである。人間の運命を取扱つたものは、先生の作品には外には澤山はない。この「伽羅枕」と「金色夜叉」と二つくらゐのものであらう。その點でもこの作品は先生の仕事としては、他の作品よりも有意義なものではないかと思はれるが、藝術品としての香氣は「金色夜叉」よりも寧ろ「伽羅枕」の方が高いんではな

いだらうか。尤も先生は大の話好きで、場面場面の場景を、少し冗漫ではないかと思はれるほど、長々と描寫することが得手であつて――といふよりも其が西洋文學の影響を受けてゐない證據で、默阿彌の狂言などにもこれと同じだれ氣味がある。尤も「伽羅枕」はむしろその缺點の少い方であらう。「隣の女」とか「三人妻」と云ふやうなものには、最もそれが多い。これは先生が話術が餘り上手に過ぎるからで、調子に乘つて委曲を悉しすぎる結果、面白くは讀ませるが深みをなくする憾みがある。「伽羅枕」は初期の作品だけに、話術はさう達者ではない。むしろ餘情に富んでゐる方である。

筆者は今度三つばかり讀んで見た。「夏瘦」、「むき玉子」、それに「三人妻」である。これは第二期のもので、先生の才華の最も爛熟した時期のものかと思はれる。これと同系のものは「二人女房」、「おぼろ舟」などで、やはり同期のものかと思はれる。この期間のこの種類の作品は、恐らく先生の作家的生活の高調を樂しんだ時で、戯作賑があると同時に、得意になつて書いてゐると云ふ風がある。その後段に感ずるやうになつた藝術家の煩悶といつたやうなものが、少しもその影を落してゐない。勿論總てが純粹な客觀描寫で、しかも寫實の筆が「伽羅枕」時代の想念にかゝつたものを擺脫し來つて、別に紅葉一流の常識哲學、常識道德といつたやうな、堅固な批判性を具へて來ながら一層リアリスチツクに事相人物が明瞭になつて來てゐる。

一體先生の作品には、この常識道德の分子が非常に多い。その說法が到るところに出てゐる。筆者などもよくそれを聽いたものであるが、その說法が獨特のヒュモア或ひは洒落と織り交ざつてゐるので、嚴肅味を缺くと同時に、愛嬌が加はつて來る。道德的說法は大抵處世的のもので、經濟觀念なぞもそれから出發してゐた。一體先生は人情ぶかい方で、どの作を見ても同情があふれてゐる。センチメンタリストに陷らないのは、都會人的洒落があつたからで、この第二期時代には、殊に先生の人情美に對する讚美が出てゐると同時に、洒落氣分が多いのである。

「夏痩」は純然たる人情話である。圓朝の作品なぞに比べて逈かにロマンチックな分子が少いと同時に、逈かに寫實的であるが、しかも人情話といふ點では大同小異のもののやうである。たゞ濃艶な才華と、通人風な豐富な知識が、極彩色に人間を塗りあげ、涙を江戶ツ兒風な洒落で緩和してゐる點が、先生が一般の人氣を呼んだ所以で、書くことの巧さに至つては類が少い。

以上の諸作は大抵西鶴風の形式文章に型どつたもので、雅俗折衷といふのであらうが、年が若いせゐもあつたらうし、江戶の戲作の脈を享け繼いでゐたので、西鶴のやうな廣い人生の背景がない。勿論大陸の藝術のやうに、その描くところの事件なり人生が、大自然や宇宙の悠久性を背景としたものでもない。自然主義以前のものは大抵さうで、客觀描寫といつても、極常識的な自然さと必然性とを具備してゐるだけである。

それにしても書くことの何と云ふ巧さであらう。そして又通人的な何といふ豐富な知識であらう。「三人妻」に至つて、先生は心持よくそれを傾けつくしてゐる。

以上の作品には甘い人情が蜜のやうに滴つてゐる。普通一般の婦女子に受けるやうな話ばかりである。悲劇的な深刻味は藥にしたくもない。生きることの悩みなどは何處を捜してもない。勿論戀愛の悩みなぞは到るところに出てゐるし、貧乏人の苦しみもないことはないが、それらは皆通人的な物の見方と洒落とに撫でそやされて、見るから美しい怡しいものになつてゐる。

「夏痩」には在來の日本婦人の最も悦ぶ、日本人的忍從以上の犧牲的精神が顯現されてゐる。これらは近代風に考へれば、最も東洋的な惡どすい利己的な道德觀のやうにも考へられるのであるが、主人公の美代の性格や心理には少しもさうした心理の影がない。美代は曾て奉公した主家の令孃、淫奔なゆかり子のために愛する良人を偷まれて、人間の最も美しい犧牲を發揮し、その不義の子供まで引取つて育てるといふに至つては、やゝ舊劇風の二番目ものの甘い人情に陷りすぎて、センチメンタルすぎる厭味があるのであるが、美代の性格が駘蕩たる春風のやうなものなので、格別賢婦らしい意識もなしに、いと易々とさうした道德を實行してゐる。そして其が奇蹟のやうに、何の破綻も淀みもなく、すら〳〵と實現され、ひどく目出度い結果になつてゐる。美代の爲てゐることは何といつても洒落氣の多い江戸ツ兒である。男で苦勞しぬいて來た、商賣人

あがりか何かでなければ出來ない藝當である。美代はそれにしては餘りに無邪氣にその一大事を、する〳〵と容易く仕遂げてゐる。。筆者が巧みな人情話だといふのはその點である。

一つこの作品に特異な點は、最後の四五行に現はれた作者の道德若しくは意氣である。

その後震策は勤直にして、美代は貞實にして、不義の娘震子は健康なり。當年十四五の男子が嫁ほしき時節にはこの子年頃なれば、うかと色に引かれて之を娶りたまふな。不義の土に貞操の花咲かず、震子の性質心許なければ誰も用心あるべし。(士族蓮田震策長女震子)、幾度も肝に銘じ忘れたまふべからず。これは不義の子なり。震子は不義の子なり。

先生の面目は以上の數行に躍如としてゐる。

「むき玉子」はこれと殆んど材料こそ違へ、人情の描かれた人情美と話術の巧妙さに於て、文章の豐麗な點に於て、姉妹篇とも言つていゝ作風である。しかも淫蕩なる令孃と男との戀愛があるだけ、「夏痩」の方に事件的の深みがあるが、これは畫家とモデルとの幼々しい愛を、先生一流の巧妙な描寫で、極めて自然に表現したものである。文章もさう大して彫琢の迹を留めてゐないが、この戀愛描寫の段取りの巧みなことは、驚くに堪へたものである。

「三人妻」は以上二篇に比べると、題材を花柳界に取つたものでもあり、筋や人物も複雜多樣であるだけに、先づ長篇小說といつて可い。筆者は前篇だけ讀んだのである。描寫の筆の濃艶で

精緻且つ自由なことは、以上二篇の比ではない。誠にこれは先生の作家としての手腕を傾倒したものではなからうかと思はれると同時に、他の二篇の人情美を謳つてゐるに反して、これは爛れた享樂世界の繪卷物である。これは又紅葉山人の通人としての一面を最も自由に發揮したもので、艶つぽい點と、遊蕩生活のテクニックに通じてゐる點に於て、眞に一代の才人たる先生の代表作たるに恥ぢないものであらう。この作品では先生はたしかに遊蕩文學、耽美主義的藝術家の要素を生れながら如何に多分にもつてゐるかを證據立てるに十分である。勿論これにも先生一流の道徳說法やそれに基づいた社會觀が皆無だとは言はないけれど、以上二作から見ると、遙かに戲作氣分の勝つたものである。今作品の年代を詳かにしないが、恐らく是は二期といつても大分前のものではないだらうか。その筆の爛熟した點と、結構の大きな點に於ては以上二作よりも寧ろ作家的天分の豐かさを力强く語るものであらうが、戲作氣分の多いことから見ると、或ひは前のことかとも思ふ。これは年表を見れば直ぐわかることであるが、しかも作品としては「伽羅枕」と伯仲のあひだにある傑作ではないだらうか。讀んで面白いことは、今の大衆文藝家などの遙かに及ばないところである。勿論作品の內容から言へば、全篇を讀まないから解らないけれど、これを今日の標準で藝術品と呼ぶには餘りに放漫なもので、單にそれが放埒な享樂世界の繪卷物であるがためばかりではなく、又その人物が殆んど人間らしい何等の陰影をもたない、極めて低級な

當時の請負師とか藝者とか遊蕩兒のやうなものであるがためばかりでなく、作品動機が戲作者風の道樂から來てゐると看るより外ない。娯樂的讀みものとしては、文字を解するものに取つて上等の讀みものであらうが、內容は可なり粗漫なものである。柳橋藝者の意氣を見せた面白いところを一節ぬいておく。

卑しき言分なれど、我は十年來曾て土器色の紅裏に肌觸れしことなく、小紋の星直しを引張りしこと無く、新しく染むる時は薄色にして、後を濃くして二度の勤めの襲ねを身に着けしこともあらず。此等は圓助應來の雪見藝者の苦し紛れの內證なり。些細の事なれど、雀の羽色は鶯に似るべくもあらず。鷹は穗を啄まざる理にして、彼等とは一樣にはならぬ柳屋の才藏樣は、心から外見まで自然と柳橋藝妓に出來たる正銘物。かゝる御方を色に持つこそ、男と生れたるものゝ此上無き冥加と三拜して、寢るにも此方へ足を向けず、我尊像を掛地にして、朝夕御酒に王子酒、供物には鰻鱺の蒲燒を供へ、逢はぬ日も在ますがごとく事ふべきに、本戀といふこと知らぬ男め、我を日本に幾人も散亂にある女か何ぞのやうに思ひ、鯛くひつけたる口に鰯の級の摘喰ひして旨がる天の邪鬼、冥利を知らぬ奴に才藏さまの難有味を知らせて遣るべし。

言草が先生一流の理窟である。この意氣の高い才藏といふ藝者のきりゝとしたところは、しかし、其の口の割には出てゐない。それがひどく善人に出來てゐるところに、藝術家としての先生

が、如何に溫和な人情家だかといふことが解るのである。

尙、後編は讀まないが、その中に劇場の描寫がある。此の種の描寫としては上乘のものであると思ふから一節をぬいておく。

幕間に二人の立つを見るより、男はつと身を起し、疾足に跡を慕ひて茶屋を見屆け、軈て物案じ顏にて歸りけるが、眼色も尋常ならず、心の落着かぬ輕躁に、火のつかぬ卷莨を銜へて、人無き鶉も可懷しく待つに程なく、どろ〳〵と雪嵐の音凄く聞ゆる頃、二人は紺の中形の浴衣に衣更へて、見るから涼しげに打扮ち、茶屋の女房を始め、五六人の男女に送られて入來りぬ。彼男は幕の開きかゝるにも關はず、また升を飛出して、假花道の口より鶉の椅子を窺ひて、霎時佇むを制せられ、階子を昇りて三階の運動場に、銘酒賣る店の椅子に腰かけ、欲しくもなき葡萄酒を一杯取りて、卷紙硯箱を借り、四邊に人のあらぬを幸ひに、假名にて細く認め、引結ひて手の中に藏るゝほどの文にして袂に入れ、此幕は見ぬ氣にて悠々酒を飮み、後は氷ラムネ、胸のすくはずの水も痞へて、半分にして立ちぬ。場所へは還らず、柝の音を餘所に聞きて、例の如く思ある方を望み、折々は舞臺を覗きて、此幕の長さを待遠なる顏色。

以上諸作は元祿風の雅俗折衷體であるが、「三人妻」は殊に西鶴風である。

先生の言文一致は何の作が初めてだか、筆者は今記憶してゐないが、生涯に文體の幾變遷して

ゐることは明かである。「多情多恨」あたりでは、大分それが調つて來てゐるけれど、「隣の女」の文章などは、先生にしては餘り上出來ではない。兎角文語が口語とこなれ合つてゐない。

「多情多恨」は恐らく先生一代の傑作でもあらうか、以上諸作のやうなストーリイ風の、若しくはロマンチツクな色彩から脱して、日常生活を取扱つてゐる。以上が江戸文學の繼承なら「多情多恨」はたしかに現代（當時の）生活の描寫である。人間を描くにも、單にその輪廓や一般的人情に止まらず、個性的なものに心理描寫を試みてゐる。これは確かに先生の進歩である。しかしこゝでも深刻であるべき悲劇が往々にして洒落と諧謔のために、擽りの喜劇となつてゐる。先生をヒユモリストと看れば、それも結構である。多少先生もそれを自覺してゐたのか、モリエルの飜案を試みたものもある。「夏小袖」、「八重襷」がそれである。

之は勿論先生が直接譯したものではない。誰かの譯したものを、紅葉流に燒直した物である。西洋からもつて來たものは、尙その他にも澤山ある。「隣の女」はモーパッサンのやうに記憶してゐるが、分明でない。飜案であることだけは間違がない。「寒牡丹」もさうである。「冷熱」がデカメロンの燒直しであることは勿論だが、「寒牡丹」は兎に角、「冷熱」も「隣の女」も甚だ脂の乘らないもので、文章も生硬だと思ふ。

「多情多恨」には粉本がある。それは英國か米國の通俗小說から來てゐる。筆者はその原作を

先生の家からもつて來て見たことがある。

更に筆者の知るかぎりでは、「金色夜叉」も或ひはその主題は外國の作品から來たものではないかと思ふのである。今詳しく覺えてゐないが、確かに其からヒントを得たらしいものを、同じ先生が讀んだものの中に讀んだことがある。これは勿論ヒントだけである。

「多情多恨」は先生が「我家の小說は米の飯なり」と自負しただけあつて、平々淡々のうちに、愛妻を失つた若い男の悲しみと孤獨の寂しさのうちに、亡妻の妹や、葉山の親友夫婦の家庭との交渉などを、先生にしては紛飾のない寫生文式の筆で敍したものであるが、詩味の乏しくないものである。尤も先生の第三期の作品が、殊に常識的な處世哲學のやうなものの多いことであるが、「多情多恨」にもそれが多いけれど、この作品はヒューモアをもつて優つてゐるもので、その底に一味の感傷が流れてゐる。戲作風のところは先づないと言つて可い。テーマも新しくて氣がきいてゐる。鷲見が段々葉山の細君に愛を感じて行くところも自然である。

作中の副主人公葉山は紅葉先生自身の畫像といつても可いくらゐ、先生の友情や、洒落や家庭觀や、處世哲學が出てゐる。それは俗世間を知つてゐるといふだけのもので、常識の範圍を出ないのであるが、それなりに可なり條理立つたものであるから、先生の或時の座談と思つて左に摘出する。

尤も人間と云ふ奴は弱いもので、世帶を持つた日には、から意氣他は無いものさね。幾許才子だのと頤を撫でても、それは阿爺のソツプを啜つてゐる時分の太平樂で、痛と挫折を挈げて親睦會を抜けて歸ると、貴方また差配が來ましたよ、などゝ脅迫されるやうな始末ぢや、萎縮ずには居られないよ。何と云つたつて、獨身の內のやうな氣散は無いのさ。割前で蕎麥を食つて、歸りがけに一寸その時計を貸し給へ、などゝ云ふ鹽梅に物事が手輕に行きません。……夫婦の間は魚と水との如しさ。君などは別して睦じかつたから、穴と鰻との如しだつたよ。亭主は動き廻るから魚だ、內君は澄してゐるから水だらう。その魚を求めるのだよ、……と言ふと、何だか私が酷く細君に恐入つてゐて、君が常住來るのを細君が陰で可厭な顏でも爲る所から、その禁厭に些と胡麻を摺つて置いてくれ、と賴むやうに聞えるけれど、那樣不見識なのぢやないよ……。

しかし何と言つても此の作は少し理詰めで、先生が家庭人として、次弟に眞面目に、道德的になつて來たことが覗へるのである。冗長の嫌ひはあるが、先生の轉機を示すに十分である。

「金色夜叉」は最後の作で、勿論先生の傑作の一つである。

「多情多恨」は言ふ迄もなく、その他の作も、長篇小說らしい結構のものは少い。敍說が細く丁寧なので相當に長くなつてはゐるやうなものの、質から言つて短篇小說といふべきものが多い

のであるが、「金色夜叉」に至つて、先生は初めてヤマの多い小説に取りかゝつたのである。筆者はこの作を全部讀んではゐないが、新聞の讀みものとしては、筋立の極めて面白い、場面の變化の多い、先づ成功したものと言はなければならない。しかも、此の作にはモデルがある。先頃、小波氏が「金色夜叉の眞相」と題して、發表されたところによると、小波氏の色女であつたところの紅葉館の××といふ女が、或る實業家に靡いたので、友人の紅葉先生が、友人を裏切つたのを憤慨して、紅葉館の玄關先で、その人を足蹴にしたとか云ふ、それが作品では、熱海になつてゐるのださうである。勿論、熱海の場面が、最も熱が乘つてゐるし、芝居にしても、最も前受けのするところであるが、筆者などには、何となく厭味であるのは、實感すぎるからではないだらうか。

先生が文章に凝つたことは、「金色夜叉」が其の最もひどいもので、この文體を案ずるだけでも可なり苦しんだものである。一作毎に、スタイルをかへるのが先生の味噌で、文章が何よりも大事だつたのである。「金色夜叉」は、歐文脈のやうなものが、多少入つてゐるが、言文一致に進んだ先生が、更にこの怪奇な文章へ行つたのは、やゝ「多情多恨」の平淡味に興を失つたからではないだらうか。最も結構にふさはしいものとなると、最も力強い文章を選ばなければならなかつたのである。

この「金色夜叉」は漱石氏の「吾輩は猫である」と、或る部分は同時代であつたと思ふが、ずゐぶん時代の違つたものであるといはなければならない。

先生の身邊小說といふべきものに「青葡萄」といふ事實の記錄のやうな寫實的な作品がある。これは「多情多恨」などよりも前のものかと思はれるが、先生と風葉、春葉兩氏の關係、後進に對する温かい心遣ひなどが、實によく出てゐる。しかしそれよりも興味のあるのは、その頃の文學青年に對する先生の憤慨で、それにも先生の喧ましい道德家であつたことが覗へるので左に錄しておく。

凡そ天下に小癪に障るものは、近來後進と稱へる修業中の小說家である。彼等の禮を心得ぬことは山猿より甚しい。一面識もないのに卒業と刺を通じて……何處へでもお世話を願ひたい——驚かざるを得ぬ、呆れざるを得ぬ。……是等は未だ可い。二度でも三度でも斧正を辱うして、何か恁か世間に紹介してもらつて、覺束なくも獨步が出來るやうになる。さあその御無沙汰、近火があらうが、それから十日經たうが顏を出すでもない。……然し未だ可い、現在立派に門下生と稱して、草稿も持つてくれば、亘いお世話にもなつてゐながら、陰へ廻ると、先生を同輩に遇つて、其名を呼捨にしたり、（あれが）などゝ云ふ代名詞を用ゐたりして其人物を貶し其文章を罵るのである。

尾崎紅葉年譜

慶應三年十二月十六日　江戸芝仲門前に生る。父は谷齋といひ、秀れた彫刻家、早く母に別れ祖母の手によつて同じ神明町に育つ。小學校ののち三田英學塾に學ぶ。幼よりして聰慧文才はその天稟である。

明治十六年　神田一橋の大學豫備門に入る。

明治十八年　山田美妙、石橋思案、丸岡九華氏等と共に「硯友社」を興しその機關紙「我樂多文庫」の第一編に處女作「江島土産貝屛風」を與す。

明治二十一年　同じ「我樂多文庫」に風流京人形を寄稿、この時より文名次第に揚る。

明治二十二年　「二人比丘尼色懺悔」を吉岡書籍店より發行、これ單行本として最初のもの、同年十二月高田早苗氏の紹介にて讀賣新聞社に入社。

明治二十三年　「拈華微笑」民友社より國民の友の新年號附錄に、「戀の蛻」を文藝倶樂部に夫々揭載。

明治二十四年　「伽羅枕」「二人女」「おぼろ舟」「むき玉子」等を讀賣新聞に連載、同年十月樺島菊子と結婚す。

明治二十五年　「三人妻」「夏小袖」を讀賣新聞に連載。

明治二十六年　同じく讀賣新聞に「三筋の髮」「戀の病」を連載。

明治二十八年 「不言不語」「むらさき」を讀賣新聞に連載。

明治二十九年 「多情多恨」「浮木丸」「青葡萄」等を讀賣新聞に連載。

明治三十年 「金色夜叉」前篇を讀賣新聞に連載。新小説に「銀」を與す。

明治三十二年 「金色夜叉」中・後篇を讀賣新聞に載す。この頃より建康勝れず胃腸を病む。

明治三十四年 「仇浪」を俳諧文庫掲載、この頃より病重く、讀賣新聞の「金色夜叉」は暫々休載された。

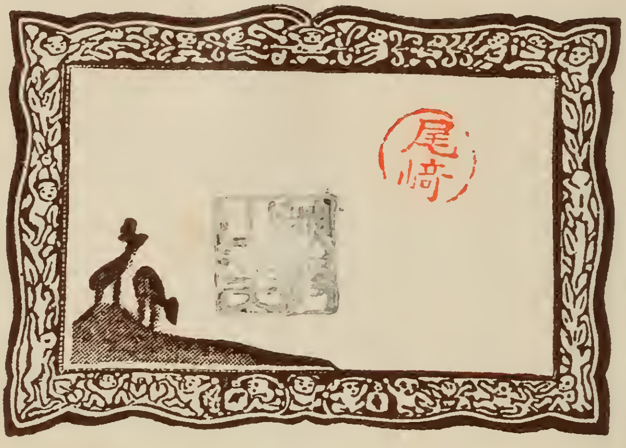
明治三十五年 讀賣新聞を辭し、十月二六新聞に入つたが健康以然として恢復せず。

明治三十六年 「金色夜叉」新續篇を新小說に、「煙霞療養」を讀賣新聞に掲載。この頃より病勢いよいよ募り、大學病院にて入澤博士により、胃癌と診斷さる。同年十月三十日遂に死去、享年三十七歲。

三笠書房編輯部編

尾崎紅葉讀本

讀本現代日本文學 1



豫約一冊一圓五十錢

昭和十一年七月五日印刷
昭和十一年七月十日發行

著者　尾崎紅葉
編著者　德田秋聲
發行者　竹内富子
東京市神田區神保町三ノ六
發行所　三笠書房
東京市神田區神保町三ノ六
電話九段四〇一三番
振替東京二二〇九六番
印刷所　堀内印刷所
東京神田三崎町二ノ一二